

二度手間っていう
なっ！

祐弘千尋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

代田葵が露天商から購入したのは魔法のランプだつた!?
葵はランプの魔人に「魔法が使いたい」と願つたのだが、
連れてこられた先は遊戯王の世界!?それ魔法違いだよ!
基本的に不定期にのんびり更新していきます。
よろしくお願ひします。

2012/9/1 20:30 (改訂)

主人公の会話文を標準語にしました。

目 次

1. 始まりつていうなつ！	—	12	1	1. イエロー最強つていうなつ！	164
2. お受験つていうなつ！	—	23	1	2. オカマとおっさんつていうなつ！	186
3. アンティつていうなつ！	—	58	46	3. ある日森の中つていうなつ！	227
4. 覗き魔つていうなつ！	—	58	46	4. 道場破りつていうなつ！	253
5. 試験つていうなつ！	—	58	46	5. 追跡者と爆発つていうなつ！	207
6. 初めてのタッグつていうなつ！	—	74	—	6. 吸血鬼と闇のゲームつていうなつ！	—
7. ビッグバンつていうな！	—	95	—	7. 貧乏学生つていうなつ！	306
8. 船上のデュエリストつていうなつ！	—	130	15	8. 閨夜の巨人つていうなつ！	326
9. 閨夜の巨人つていうなつ！	—	150	16	9. 乙女の火傷つていうなつ！	—
10. 乙女の火傷つていうなつ！	—	—	—	10. イエロー最強つていうなつ！	—

1
8.

労働修行つて いうなつ！

|

348

1. 始まりつて いうなつ！

ここに古ぼけた“いかにも”なアラビア風のランプがある。これは掘り出し物を求めてフリーマーケットをぶらぶらしていたところ、春先ということで花粉症なのかマスクとサングラスをつけていた人から、

「お兄さん、安くしどくよ」

といわれ、面白半分で買つてしまつたのだ。

：300円だったのに特に問題がある訳でもないが。

さて、この“いかにも”なランプ、買つたは良いがこのご時世に光源が不足している訳でもなく、しかも少し汚れている。置物にするにも微妙ということもあつて捨てるかどうか悩んでいるのだが、一度ぐらい使おうと思い、とりあえず汚れを落とすことにした。ひとまずは眼鏡拭きでこするとするか：

キユツキユツキユーツとな

するとどうだろう、ランプの先から紫色の煙がもくもくと…
もくもくと…

「これは窓を開けるべきなのだろうか、空気より重いようだから煙が床に溜まつていいのが不安を煽る。喫煙禁止の学生アパートなので、窓を開けたらそれはそれで怒られる気がする。ひとまず袋に入れよう、そして明日捨てよう。

『お待ちくだされ、もうすぐ出られますので』

何か聞こえた気がするが、隣室や上下階の音が漏れることなんてよくある話だ。友人同士で盛り上がり上がっていたり、恋人を連れ込んでお盛んだつたり、毎夜のように安眠を妨害してくれる。

軽く気分が滅入つてきたが、袋だつたな。台所の棚からゴミ袋を取つてこないと、いい加減に煙が鬱陶しい。香りは嫌いじやないが、見た目が毒々しい。

『よつ、ほつ、お待たせいたしました』

袋を持つて戻ってきた俺が見たのは、

奇妙な帽子と棒を持ち、胡散臭い笑みを浮かべた筋肉がむきむきなヒゲの男だつた。ただし皮膚は紫色で下半身は煙なうえ、ランプとつながつてているらしい。

「えつと…どちら様？」

『どうもはじめまして、某、こういうものです。どうぞよろしく』

「あ、これはどうもご丁寧に」

思わず正座をして両手で受け取つてしまつた。

ひとまず名刺に軽く目を通して…

「どんな願いもお任せあれ！ 魔人派遣のジーニー社」

「魔法部ランプ課 シハーブ＝サイード＝バークリ」

よし、見なかつたことにしよう。

『それではご主人様、願いをおつしやつて下さい。某が叶えてさしあげましよう』

「いえ、間に合つてるので、お引き取りください」

新聞屋しかり、宗教団体しかり、こういう手合ははさつさとお帰り願いたい。更に言うならば可愛い女の子に言われるならまだしも、紫肌の男にご主人様と言われて喜ぶ趣味はない。

『そんなん無体な！生まれてただの一度もお呼びいただけず、ようやく呼び出していただけたというのに！』

悲壮な表情を浮かべて嘆く紫男。このまま放置するのも面倒な気配がふんふんするし、簡単な願いを言つて帰つてもらおう。だがその前に確認すべきことがある。

「もし願いを叶えていただきとして、対価などは必要なのでしょうか？」

『いえ、そういったものは必要ありません。魔人はご主人様に絶対服従ですので、好きなだけ願いをおつしやつていただいても結構です』

よし、言質は取つた。ちなみにボイスレコーダーを起動してある。人外：自称魔人らしい：相手にこういうものが有効かどうかは不明だが、保険はあるにこしたことはない。

「えっと…それじゃあお部屋の模様替えの力仕事をお願ひします」

『申し訳ございません。某は実体を持っておりませんので、物に触ることはできないのでござります』

その弾けんばかりの筋肉はなんのための筋肉なのだろうか。さつき名刺渡された気がするんだが、アレは例外なのかも知れない。ひとまず、一つ確認を取ることにした。
「何が出来るんですか？」

もう少しオブラーートに包めばよかつたかも知れない。紫男がうなだれてしまつた。
心無しか空氣も重くなつてしまつた。

『某は下位の魔人ですので魔力も強くなく、かといつて知識も豊富という訳ではございません。せいぜいお話相手になる程度でしようか』

それなら何故最初に願いを叶える等と豪語したのか聞きたくなつたが、きつと様式美なのだろう。オカルト相手に深く考えてはいけない。

「魔法とかあるんですねえ。出来るなら魔法を使つたり魔物を召喚したりしたいもんですよ。ハハハ…」

乾いた笑いしか出せなかつたが、紫男の表情が突如輝きに満ちあふれだした。なんだ
といふんだ気持ち悪い。

『魔法を！使いたいのでござりますね！』

『ずずいと寄つてくる紫男。とりあえず近すぎるので離れて欲しい。香木の匂いが
強すぎて鼻が曲がりそうだ。』

『承知いたしました！その願い、叶えてさしあげます！』

どうやら魔法を教えてくれるらしい。最近の科学も大概魔法のようなことができる
が黙つておこう。上機嫌になつてはやく帰つてくれると嬉しい。

『それでは早速、§☆・%□†』

なにやら呪文を唱え始める紫男。全く聞き取れないし、選択肢を失敗したような気が
する。動いて大惨事というのも嫌だし、大人しくしておこう。しかし急すぎやしないだ
ろうか。

『ハアツ！』

すると辺りの景色が歪み、目の前が暗くなつてきた。

「さて、煙の中に倒れ込んだら窒息する気が…」

その咳きを最後に、俺は意識を手放した。

「知らない天井：でもないな」

知らない天井どころか自室の天井であるため、当然といえば当然の発言をしてしまつた。おかしな夢をみたと思いつつも、ひとまず起きてそこで違和感に気付く。

確かに自室なのだ。だが俺は今大学生でアパートに下宿して生活している。何が言いたいかというと、実家の自室だつたのである。

「葵一、いつまで寝てるのー？」

台所方面から母の声がする。早急に起きてリビングに行かねばなるまい。もしかしたら大学に合格してからが全て夢である可能性も捨てきれない。少なくとも実家では母は絶対があるので、ここで惰眠を貪つてお叱りを受けるのは嫌だ。

「おはよう」

挨拶というのは大切だ。それを言わなかつたがために、朝ご飯がなくなることもあるぐらい大切だ。何度も言おう、我が家では母は絶対である。

「はい、おはよう。そうだ、葵宛に封筒が届いてたわよ」

席に着くと母から青いA4封筒を渡された。しかも中が詰まつているのか、結構重たい。中身が気にはなるものの、ひとまず横において先に朝食を食べてしまうことにした。

「いただきます」

挨拶というのは…えつ、もういい？：今俺はどこから電波を受信したのであろうか。もつとも実家にいると近所の子どもの声が聞こえることが多いので、あまり気にしていないのだが。

「…ちそうさまでした」

食器を台所に運び、封筒を持って自室に戻る。

部屋を出る時には気付かなかつたが、アタツシユケースが机の上に置いてあつた。実は正しい発音だとアタツシエケースなのだが、一般的にアタツシユケースと呼ばれるのでアタツシユケースということにする。

それよりも今は封筒の中身を確認しなければ。光に透かしても中身はわからない。あれこれ眺めていると、裏面に送り主が書いてあつた。

〔デュエルアカデミア〕

思わず一度見してしまつた。どうやら本氣で〔デュエルアカデミア〕と呼ばれる場所から届いたらしい。俺の記憶ではアニメに登場する架空の教育機関であるはずなのだが、そんなところから一体何が届いたというのだろう。

：受験票だつた。写真が貼つてあり、試験日程と試験会場も書いてある。

試験会場は童実野町ですか。そうですか。他にも入つていた学園案内等でなんとなく状況は把握したが、とりあえず極力見ないようにしていたランプに聞くとするか。

キュツキュツキューッとな

するとランプの先から紫色の煙が…って実家で煙を出したらまずいじゃないか。と思つたが、煙が垂れ流しになることはなく、すぐさま魔人の形を取つた。

『おはようございます。ご主人様』

見た目が紫肌のヒゲ男：確かに名前はシハーブ…にご主人様と呼ばれるのはなんとも嫌な気分だが、それよりも確認すべきことがある。

「俺の思つていたのと何か状況が違う気がするんだが、これはどういうことだ」

初対面のときこそ遠慮して丁寧な口調だったが、最早遠慮なんてしない。確かに願いはいつたが、これではある意味誘拐だ。…自宅に誘拐されるというのも変な話だが。

『何をおっしゃいます。ご主人様が魔法を使いたいとおっしゃつたので、魔法の使える世界にお連れしたのですよ』

「いや、『遊戯王』の世界でどう魔法を使えって言うんだよ」

そうなのである。デュエルアカデミアが実在する。しかも学園案内には海馬コード・ボレーシヨンや、インダストリアル・イリュージョン社との関わりにも触れられている。

悪戯と考えることも出来たが、今もリビングのテレビから聞こえる社長の高笑いや新聞の番組欄にある「プロデュエル中継」など、悪戯にしては手が込みすぎている。

『それはですか、デュエルディスクをアタッシユケースから取つてみてくださいませ』

アタツシユケースの中身はデュエルディスクだつたらしい。それを装着し、セットされていたデッキから《レッドボーション》を取り出した。しかしこのデッキ、最初期のカードしか入つていらないんだが。

『それでは、それをデュエルディスクにセットして発動してくださいませ』

：それはもしかしてサイコデュエリストのアレなんだろうか。たしかにデイバインとかは《サイコソード》を自分に装備とかしてたけどさ。確かに遊戯王は　“魔法”をつかつたり　“魔物を召喚”して戦うんだが、それを実体化させて相手にけしかけるわけじゃないからね？精霊界とかはそれをやつてたけどさ…：

「…魔法カード《レッドボーション》発動」

すると手元にイラストそのままの真つ赤な液体の入つたガラス瓶が現れた。とりあえず飲んでみたが、さっぱりした味で意外に美味しい。LPが回復したのかどうかは定かではないが、心無しか身体が軽くなつた気がする。飲み終わつた後の瓶は、いつの間にか消えていた。

『はい、無事に成功したようですね』

だがしかし、俺は魔法を使いたいと言つたが、決して遊戯王の世界や5年程度とはいえ時間逆行なんて希望した覚えはない。むしろ魔法と召喚で遊戯王にこじつけるのは、いくらなんでも無理矢理すぎるだろう。確かにOCGは友人とそこそこの遊びはし

ていたが、決してガチという程ではない。「ガチは大会だけでいいよ」という集団だつたしな。

『さて、それでは少々お話をいたしますと…』

シハーブの言い方がやたら回りくどい上に仰々しかつたので要約すると、

- ・ 魔法を使えるようにするために、創作物を基とした下位世界に降りた。
- ・ この世界の“代田葵”に成り代わる形になつた。
- ・ 俺は上位世界の生物であるため、余剰分の力がカードに還元された。
- ・ 還元された力を行使することで、サイコデュエリストまがいのことができるようになつた。

ということだそうだ。しかし、どうしたものか：

この世界の“代田葵”に成り代わつたということで、性格などの違和感があるのでは、と考えたがそれはほほないらしい。元の世界に戻れないといつても両親はいるし、確認した所友人達も変わりなく過ごしているようだ。とはいえた高校や大学でできた友人とは出会つていないので、こちらに関しては諦めた方が賢明だろう。

それはともかくとしてサイコデュエリストになつたところで、力の使い道がほとんど思い浮かばないんだが…堂々と能力を使う訳にもいかないしな。《モウヤンのカレー》

でも食べていれば良いだろうのか？これの使い道も考えてみるか。

本当にどうしたものかね。カードは一応全種類あるといつていたからデッキは好きなように編集できるし、のんびり考えてみるか。

2. お受験つていうなつ！

やつてきました童実野町、待つていろデュエルアカデミア！

あの後、デュエルアカデミアを受験するかどうか考えてみたが、やはりこの世界ではデュエルが強ければ有利な点が多くあるようだつた。そりやデュエルで世界が回つてるもんな。そうと決まれば、わざわざ受験料を無駄にする必要はない。

しかし未だにこの世界に落とされたのは解せない。確かに“魔法を使つたり、魔物を召喚する”けど、それで“遊戯王”というのは何か違うだろう…その辺りについてはカードリストを確認していく知つたことだが、シハーブは《ランプの魔人》というカードの精霊らしく、ランプの中を見せてもらうとそのカードが入つていた。きつとそれが関連しているのだろう。

そもそも何故精霊のカードがあつちの世界に流れてきていたのかは分からぬが、恐らくこれからも分かることはないのであろう。それに興味もない。

それと、山積みのアタツシユケースにはまさに“全て”的カードが入つていた。三幻神や社長の嫁や三幻魔、トゥーンやナンバーズもおかまい無しに入つていたので、それらはもちろん自重して、シンクロやエクシーズも世界の法則が捻曲がる気がするので同

様に自重することにした。原作効果のカードとOCG効果のカードの両方がリストにあつたが、それは適当に使い分けて行くとしよう。

とりあえずはあつちでも使っていたお気に入りの奴らを適当に使つて頑張つてみることにしよう。アニメでは5D図Sの回想シーンでしか出てこないとはいえ、この時代ならちようどいいはずだしな。

初めて来た場所なので受験会場が分からぬかも知れないと思つたのだが、そんなことはなかつた。何故なら大量の受験生が会場目指して歩いており、それについていけばどうやつても迷いようがないのだ。

受験会場に到着し、受験票を見せて筆記試験会場に移動する。筆記試験に合格しない限り実技試験を受けることも出来ないはずなんだが…確かに実技は100番台が1組目だつたか？この会場だけでどう見ても500人近くいるんだが…倍率が気になる所だ。

さて、問題を見てみよう。

：第一問

『青眼の白龍』の種族、属性、攻撃力、守備力、攻撃名を答えよ。＊この問題に答えられなければ即不合格とする。

：どうやら社長が不合格者量産の原因だつたようだ。社長しか持つてないカードな

んだから、ステータスの全てを知らない人もいるだろう。何せこの世界には何故か遊戲王W i k i のようなものはないので、知っているカードは見たことのあるカードか噂で聞いたカードという程度である。尤も、社長の嫁は決闘者王国やバトルシティの再放送も時々やっているのでかなり有名ではあるのだが⋮でも攻撃名つて個人個人で違うんじやなかつたか?まあいいけど。

問題は一問一点の100点満点だつたようで、一応回答欄は全て埋めはした。筆記試験の合格発表は一時間後に掲示するとのこと。いや、早過ぎるだろう。採点員はどれだけ優秀なんだ。それとも機械で読み取りなのか?記述式なのに?

⋮などと考えている間に、採点が終わつたらしい。予定より15分早いなんて、KC社の仕事つぶりは尋常じやないな。

張り出された結果を見ると⋮7位か。思いのほか上位に食い込んだようなので、実技も妥当にいけばラーティエローかな?オシリスレッドだと複数人で一部屋みたいだから、ラーティエローのほうが嬉しいんだけど。ラツキーセブンだなんて縁起もいいし、なんとなく嬉しい。

そして名前も張り出されるおかげで分かつたのだが、時間軸は遊戯王GXで間違いないようだ。1番に三沢大地、110番に遊城十代、119番に丸藤翔を発見した。アニ

メは一応見ていたし、なんとなく話の筋道は覚えている。これは中々愉快な学生生活を送れそうだ。

さて、ホテルに戻つてデツキ調整かな。

今日は実技試験だが：会場の海馬ランドは目立つため非常に分かりやすい。しかも道行く人に聞いたとしても全員知っている場所だから、迷う隙がない。迷つたら困るんだが。

受付を済ませてデュエルを観戦しているんだが：『天空の聖域』をフィールドで使つているのに、天使族が召喚される様子が全くないという状況はどういうことなんだ。あ、受験生が負けた。114番はリタイアつと。

そうこう待つてゐる内に俺の番だな。負けるつもりはないが少し緊張してきた。ちなみにシハーブは、鞄の中で待機してもらつてゐる。そもそもデツキに入れるようなカードでもないため、ランプのなかに置きつ放しというのが正しいが。

「受験番号7番、代田葵です。よろしくお願ひします」

「決闘〈デュエル〉！」

葵 LP 4000

試験官 LP 4000

「先攻は受験生である君に譲ろう」

試験だからって随分優しいな。それにしてもやっぱり先攻後攻は言つたもの勝ちだつたのか。これからは積極的にならぬといけないのだろうか。

「ありがとうございます。ドロー、俺は『デュアル・サモナー』を攻撃表示で召喚！ カードを一枚伏せてターンを終了」

『デュアル・サモナー』 ATK／1500

「私のターン、ドロー。私は『怒れる類人猿』を攻撃表示で召喚！」

『怒れる類人猿』 ATK／2000

でた、下級1900ラインの敵！ 下級の刺し合いだとほぼデメリット無しモンスター

！

「バトルだ。『怒れる類人猿』で『デュアル・サモナー』を攻撃！ バーサークナックル！」

向かい合う召喚師と猿。猿の先制攻撃で吹き飛んで倒れ伏す召喚師。ドラミングを始める猿。なんか青い奴らに笑われている気がする。俺も少し笑つた。それにしても攻撃名は言わなきやいけないんだな。どうしよう、何も考えてなかつた。

『デュアル・サモナー』は一ターンに一度、戦闘によつて破壊されません

「だがダメージは受けてもらおう」

『怒れる類人猿』 ATK／2000

《デュアル・サモナー》 ATK／1500

葵 LP 4000→3500

「ふむ。私はこのままターンを終了する」

伏せカードは無しか。手札に伏せるカードがないのか、それとも入試デュエルだから手を抜いるのだろうか。どちらにせよこつちとしては都合がいいので、気にしないでおこう。

「エンドフェイズ時に《デュアル・サモナー》の効果発動！ライフを500ポイント払つて、《デュアル・サモナー》をリリ：生け贊に、手札からデュアルモンスター《ヘルカイザー・ドラゴン》をアドバ：生け贊召喚！」

《ヘルカイザー・ドラゴン》 ATK2400

葵 LP 3500→3000

マスタールールに慣れていたのでついつい用語を間違えそうになるが、この時代ではまだ生け贊召喚なのだ。そうこう思つている間にサモナーが消えて、その奇抜な格好の基となつたであろう雄大なドラゴンが現れた。ドラゴンのままだと格好いいのに、コスプレにすると残念だよなあ……

「俺のターン、ドロー。《ヘルカイザー・ドラゴン》を再度召喚！」

召喚の魔力を注がれた《ヘルカイザー・ドラゴン》が光り輝き、その雄々しさに磨き

がかかる。：それにしても、さつきから上に居る青い制服の人の目線が超痛いんだけど。興味ないフリしてちらちら見てるのバレバレだから。もしかしてアレがカイザーか？

「わざわざ召喚権を消費するなど、二度手間でしか「うつさい！二度手間言うな！」すまない…」

おつと、ついカツとなつて試験官に暴言をはいてしまった。だがな、通常モンスターとして扱われるってのは便利なんだぞ！

「更にリバースカードオープン。罠カード『デュアル・ブースター』を発動！このカードを装備し、『ヘルカイザー・ドラゴン』の攻撃力が700上升します」

フィールドに発電機のようなものが現れ、『ヘルカイザー・ドラゴン』に力を供給する。OCGでは『スープルヴィス』の陰に隠れてしまったカードなので、対戦で使われたのを見たことがない。自分も相手もこいつをわざわざ破壊するような状況は見当たらぬいし、二つ目の効果とか使うことはほとんどないだろう。

『ヘルカイザー・ドラゴン』ATK／2400→3100

「攻撃力が3000を超えただと！」

いや、そんなに驚くことじやない氣がするのは俺だけだろうか？上級モンスターで裝備魔法使ってようやく3000を上回つたってだけなのだが。だからカイザー（仮）は

そんなに目を輝かせるな。隣の人：多分明日香さん：が引いてるから。

「ヘルカイザー・ドラゴン」で《怒れる類人猿》を攻撃！ カイザーバースト！』

《ヘルカイザー・ドラゴン》の口からの光線で消し飛ぶ猿。そして天高く咆哮する《ヘルカイザー・ドラゴン》。ふと気になつたのだが、こいつ実体化してないよな？ そんなことしてたら会場が大惨事になつてしまふのだが：

「くっ」

《ヘルカイザー・ドラゴン》 ATK／3100

《怒れる類人猿》 ATK／2000

試験官 LP 4000→2900

「さらに、再度召喚された《ヘルカイザー・ドラゴン》は、一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる！」

「なんだと！」

一いちいちリアクションの大きい人だな：まあこつちもテンションが上がつてきたから、人のことは言えないんだけどね。ソリッドヴィジョンを使ったデュエルはなかなか新鮮で楽しいなあ。：ソリッドヴィジョンだよな？ ここで試験官が消し炭になつたりしたら笑えんぞ。

《ヘルカイザー・ドラゴン》で直接攻撃《ダイレクトアタック》！ カイザーバースト、第

二打アー!

「うわああ!」

《ヘルカイザー・ドラゴン》 ATK／3100

試験官 LP 2900→0

ふう、上手くいった。そして試験官が消し炭にならなくてよかつた。どうやら実体化させようと思つて召喚しなければ、実体化はしないらしい。それなら安心してデュエルできるな。

「ありがとうございました」

「お疲れさま。観客席に戻つてよろしい」

1ショットキルを成功させたためか、観客席はざわついている。なんといつても初期ライフ4000つて一瞬で溶けるからなあ。それこそリクルーターでも、三回直接攻撃すれば終わつてしまふ。8000でも大差ないと言つてしまえばそこまでだが、やはり4000は少ない。

ひとまず観戦にもどるとしよう。三沢のデュエルがちようど終わつたところか。しかし試験官の使つていた【超防御デッキ】つてどうやつて勝つつもりなのか：《ウエポン・エンジ》でも使うのか？

『むむ、精霊の気配を感じますぞ』

ランプをこすつてもいいのにシハーブが出てきた。というかお前精霊の気配とか分かるんだな。ついでに周りの人たちは：…どうやらシハーブが見える人はいなさそう。シハーブの目線の先を追うと水色髪の少年とメツシユの入った茶髪の少年が話している所だった。

「多分、あれが遊城十代つてことだろ。ちようど今来たみたいだしな」

『ほうほう、あれが主人公というわけですな。某、年甲斐もなくワクワクしてきました』
朗らかに笑っている所悪いが、シハーブの見た目でワクワクされても気味が悪い。とりあえずあつちの“主人公の愉快な仲間たち”と合流して、主人公の記念すべき初デュエルと一緒に観戦するか。

「こんにちわ、筆記1位の三沢大地くん。隣いいかな？」

「そういう君は、さつき1ショットキルを成功させた受験番号7番くんだね。隣は空席だから座るのは構わないよ」

「なんだ、見ていたのか。俺は代田葵。葵で構わない。それじや遠慮なく座させてもらおう」

つつがなく挨拶も終わり、十代とクロノス教諭のデュエルを観戦する。翔？ そういえば居たみたいだけど、食い入るように十代の様子を見ているから俺に気付いているかど

うかも怪しい。

「ガツチャ！ 楽しいデュエルだつたぜ！ 先生！」

三沢と意見交換しながら十代のデュエルを見ていたのだが、アニメと同じく使用デッキは【E・HERO】で、精霊も『ハネクリボー』だつたので安心した。

しかし派手なデュエルだつた。俺のときはフィールド魔法とか使わなかつたし、あんな派手なエフェクトもほとんど出なかつた分、より興奮するというものだ。：周りの興奮は十代がクロノス教諭を倒したことによるものばかりだが、アニメで知つていたのは別にしても、あちらでは8000のライフが一瞬で溶けるなんてよくあることだつたので、あまり驚いていない。

そういうえばこの世界の人々はカード知識が随分ちぐはぐな気がする。解説していた三沢は筆記一位だし、やつぱり知つている人は知つているものなのだろうか…そのわりには先生が知らないというのが解せない。

まあいいや。お腹も空いたし、帰るとするか。

3. アンティつていうなつ！

あの後合格通知と共にラーアイエローの制服が郵送され、無事に合格したことがわかつた。というよりも、アレで合格出来ていなかつたらおかしいと思う。

さてKC社のヘリに乗つてデュエルアカデミアにやつてきたのだが、早くも逃げたくなつてきた。何故ならこの島には活火山があるのだ。何かの拍子に噴火した日には、アカデミアは全滅だろう。何て恐ろしい島なんだ…！

入学式も滯りなく終わり、夜には歓迎会も行われるそうだ。ラーアイエローならご飯にめざしと味噌汁ついでに沢庵、なんてことにはならないだろうから、中々楽しみである。

『むむ、精霊の気配』

そう言つてシハーブが振り向いた先を見てみると、十代が翔や三沢と何か話しているところだつた。おや、十代がこちらをみて変な顔をしている。

『見つかつてしまつたようですな』

やつぱりお前のせいか。まあちようどいい、この際だし知り合いになつておくか。トラブルにも巻き込まれそつだが、主人公がいるなら多少のトラブルならなんとかなるだろう。

「よう三沢、この間ぶり。それで君は、クロノス教諭を倒したヒーロー君：だつたかな？」

あの入試デュエルで十代はすっかり有名人である。有名人といつても「クロノス教諭を倒した新入生がいるらしい」という程度の噂ではあるが、少なくともあのデュエルを見ていた人の記憶には深く刻まれているようだ。

「おう！俺は遊城十代。十代って呼んでくれ！ つと、お前は？」

快活な声と人懐っこいような顔、悪い奴じやないというのは分かるけど、一緒に喋つてたら疲れそうな感じがする。しかしこの時点ではまだギリギリ精霊は見えてないのだろうか？

「自己紹介が遅れてしまなかつた。俺は代田葵。俺のことも葵で構わない」

『某は従者のシハーブと申します。以後お見知り置きを』

まあ、『従者』で間違つてはいないのだが、すぐ違和感がある。ほとんどこいつの押し売りだし、やつたこともこの世界に飛ばした以外は精霊の探知ぐらいしかしてないし。それと多分お前の自己紹介は聞こえていない。

「葵とシハーブだな！ よろしく！ …つてあれ？」

「十代君、シハーブって誰のこと？」

どうやら声だけは聞こえていたようだ。ここは知らぬ存ぜぬを通した方がいいのだ

ろうか。どうせ十代以外には見えも聞こえもしてないだろうし。

「ところで葵、さつきお前と一緒に誰かいなかつたか？ なんか紫色のおっさんみたいのが一瞬見えたんだけど…」

紫色のおっさんって言つちやつたよ、こいつやつぱり見えるだろ。シハーブはおっさんって言われて少し落ち込んでいるようだ。どうみても若くはないんだから、「お兄さん」は諦めた方が良いだろう。

「紫色のおっさん：服の色ならまだしも、そんな肌の人間がいたら怖いだろ？」

とりあえずごまかす事にした。まあはつきりと精霊が見えるようになつたらすぐにバレるんだけど、大した事じやないしな。

「そつかあ、見間違いかなあ…」

「何か良くわからないが、これから三年間よろしく。それじやあ俺は寮で荷物を整理するとしてよう」

「僕もこれで失敬するよ。そうそう、君たちの寮は向こうだよ」

特に話題もないし、結局寮にいくことにした。三沢と話しているうちにデュエル理論やデュエル哲学の話になつた。とはいえば聞いた事が無かつたので適当に相槌を打つていたのだが、興味があると思つたようで今度本を貸してくれるそうだ。暇つぶしにはなりそудし、少し楽しみだ。

寮の自室で荷物を整理し終わり、歓迎会までは時間があるようだつたので適当に校舎を散策することにした。さすがに授業の時に迷子になつたら洒落にならない。今なら迷子になつても問題ない…しかしここはどこだ。

『ご主人様、ちょっとよろしいですか？』

シハーブはランプをこそつてもいないというのに、しようと現れるようになつた。カードの精霊だとバレたからか？一応肩掛け鞄にランプはいれているし、本体もランプのなかに入れたままだから出てくること自体は不思議ではないのだが。

『あちらから人の声が聞こえるのでござります』

たまには役に立つ、それがシハーブだ。シハーブが指差す先にあるのは決闘場のようだ。中に居るのが誰かはわからないが、迷子である可能性は低いだろう。

これで歓迎会までに無事に寮へ帰れる可能性が高くなつた。とりあえず中に居たブルー生徒の二人組に話しかけることにしよう。

「ちょっと質問なんだけど、ここはどこなのか教えてもらつてもいいだろうか？」

「ここはオベリスクブルー専用決闘場だ！　ライエロードときが入つていい場所じやない！」

眼鏡をかけたブルー生徒にいきなり怒られてしまつた。勝手に入つた俺が悪いのだ

が、それにも関わらず顔を見るなり怒鳴るのはいかがな物かと思う。非常にイラライラしてい
る彼を見る限り、ここはあの台詞をいう場面に違いない。

「…乳酸菌摂ってるう？」

「貴様ふざけていいのか！」

今のは完全に俺が悪かつた。乳酸菌には高血圧を抑制する効果もあるのだが、そこまでメジヤーな話でもない。イラライラに効果があると一般的に知られているのはカルシウムだが、カルシウムが欠乏して神経伝達物質に影響がある頃には骨がボロボロだ。それをいかに説明したものか…

「まあ落ち着いてくれ。キミは何やらイラライラが収まらんみたいだし、もしかしたら食
生活に乱れがあるのかと思つたんだ。確かにイラライラに効果がある物としては、乳酸菌
はマイナーかもしれない。しかし免疫力を高めてヒスタミンを「貴様は何の話ををしてい
る!？」何つて、出会い頭に怒鳴る程イラライラしているキミに、健康的な食生活ができる
ようにアドバイスをしようと思つただけなのだが…」

『ご』主人様、論点がずれております。道を聞くのではなかつたのですか?』

うつかりと話がそれてしまつた。あまり怒らせると、帰り道を聞くに聞けなくなつてしまふ。もうすでに手遅れな空氣もただよつてゐるが、ひとまず外に出れさせすればなんとか寮に帰れるはずだ。

「おーっ、すげー！」

「これ最新設備の決闘場だよ！ 音響設備も体感システムもニューバージョンだ！ いいなあ、こんなところでデュエルやつてみたいなあ」

そんなことを考えていると十代と翔がやつてきた。顔見知りが来たなら話は早い。さつさと外に案内してもらつて、歓迎会にいきたい。樺山教諭が寮長ならカレー・パーティーの可能性も捨てきれないが、それはそれで楽しみだ。そんなことを考えながら二人に話しかけようとしたが、先ほどのブルー生徒たちに絡まれて身動きが取れないようだ。

「万丈目さん！ こいつクロノス教諭に勝つた110番ですよ！」

どうやらこいつらは万丈目の取り巻きだつたらしい。十代たちが来るつてことはそういうことだとは分かっていたが、客席に目を向けていなかつたこともあつてまつたく気がつかなかつた。今まさに空気な俺がいうのもおかしな話だが。

「ビーコワイヤエット。諸君、はしゃぐな」

しかし、この頃の万丈目は尖つてるなあ：髪はそれ以降も尖り続けてるけど、性格の悪さが表情にじみ出てる。これがおジャ万丈目になるのか：人間つて変わるものだなあ。それはそうとして、あの髪型はどうやってセットしているのだろう。

そんなくだらないことを考えている間に、十代と万丈目の間で好戦的な雰囲気が漂い

今にも二人がデュエルを始めかねないその時、

「あなたたち、何してるので。そろそろ寮で歓迎会が始まる時間よ」

ちょうど俺の来た方向から明日香さんがやつってきた。そして逃げるようになつていく万丈目一行。それにしてももうそんな時間が、道理でお腹が空くわけだ。とりあえずそろそろ十代たちに話しかけないと、帰り道が分からぬままである。

「十代、さつきぶりだな」

「葵！ どうしてここに？」

「お散歩、のつもりだつたんだけどね」

流石に「迷子だからです」なんて言うのも恥ずかしいので適当に「まかす。元は散歩のようなものだから間違つてはいはないはずだ。

「あら、あなた…入試デュエルで『ヘルカイザー・ドラゴン』を使ってたわよね」

「ああ、代田葵だ。よろしく。…大はしゃぎだつた人の隣にいなかつたか？」

隣に居たカイザーの影響もあつて、俺の印象は『ヘルカイザー・ドラゴン』だけだったようである。確かにさつさと終わらせたから使つたカードも少ないので、あまり嬉しくはない。会場がざわついたのは、『カイザー』と名のつくモンスターを使つたからだつたのかもしれない。

「天上院明日香よ。明日香でいいわ。いつもの亮はあんな感じじゃないんだけどね…」

「いつもあんなにハイテンションだつたら、それはそれで人生楽しそうだけどな」
 お互い苦笑いのままである。その後十代と翔もそれぞれ自己紹介だけ簡潔にすませ、
 そろそろ歓迎会ということもあり解散となつた。外に出ても十代たちは普通に走つて
 いたのだが、もしかしてレッド寮まで走つたのだろうか…その体力の一割でも分けて欲
 しいものだ。

無事に歓迎会に間に合い、樺山教諭の挨拶もそこそこになかなか豪勢な食事がふるま
 われた。これでさえ胃にずつしりとくるのに、オベリスクブルーはこれ以上だというの
 だから驚きである。個人的にはもう少し質素な方が落ち着くのだが、それはこれから
 食事に期待しよう。

そして情報端末、通称PDAを確認すると、万丈目と一緒にいた眼鏡からアンティ
 ルールの決闘を申し込むといった内容のメールがあつた。入学初日から面倒ごとに関
 わるのは正直勘弁願いたいのだが、降り掛かる火の粉は払わなければならないだろう。
 …ということで、さくつとアカデミアに通報しておいた。眼鏡くんの名前は分からな
 かつたが、メールをそのまま転送したので問題ないだろう。

『ご主人様はやることがせせこましいですか？』
 「やかましい。デュエルをしたら記録が残つてしまふんだし、それで勝つても負けても

校則違反の現行犯で退学なんてこともあり得るんだぞ？　しかもアンティでカードをもらおうにも、好きなカードを使えるから旨味が欠片程もない」おつと、同じく喧嘩を売られているであろう十代にも伝えてやらないと、あいつらまで捕まってしまうな。先ほどからPDAに電話をかけているがつながらないし…しかたない、メールだけうつて寝るとするか。

翌日、PDAを確認すると新着メールが二件あった。

一件は十代からであり、結局万丈目とデュエルをしたがそれが中途半端に終わつたことが書いてあつた。これはまあいい、原作通りに進んだということなので何ら問題ない。問題はもう一つのメールだ。

こちらはアガデミアからの通達で、アンティデュエル実行未遂で取巻太陽…昨日の眼鏡君の名前らしい…に対して今日の放課後に制裁デュエルを行う旨が書いてあり、その対戦相手として俺が指名されたということだつた。

…意味が分からぬ。制裁デュエルが行われるのはこの短期間でさつそく校則違反をしようとした見せしめという意味で理解できるが、問題はその対戦相手が俺である意味だ。普通に考えたらブルー生の制裁にイエロー生を使うのは逆ではなかろうか。

名目としては「互いに遺恨を残さないため、解決策として制裁デュエルの相手を当事

者である代田葵とする」とあつたが、恐らくは「ブルーがイエローに負ける事などありえない」ので、イエロー生を当て罰則を回避する」という目論みがあるのだろう。ついでに生徒なら経費もかからないという実情もあるかもしれない。

眼鏡の処遇に関しては、俺が勝った場合は未遂であるため反省レポートを書き、眼鏡が勝った場合は未遂のためなかつたことに対するとの事だつた。ちなみに俺が勝った場合は報酬としてドローパン引換券一ヶ月分を進呈するとメールの最後に書いてあつた。

『（ご）主人様の負けた場合のペナルティはどうなつているのでしょうか？』

「俺はなにも違反をしてないし、十代みたいに目を付けられるような事した記憶も無い。ペナルティを与える理由がないだろ」

そもそも入学一週間以内に…むしろ入学前から教師に目を付けられている十代がおかしいのだ。さて、放課後まで真面目に授業を受けてるかな。

そしてあつという間に放課後になつてしまつた。

会場にのんびりやつてくるとギヤラリーが多いこと多いこと、少なくとも一年年ぐらいいの人数はいそうだ。ざつと見た限りブルー生はニヤニヤとこちらを見下ろしており、イエロー生は眞面目な顔をしてこちらを見ている。レッド生は…とりあえず楽しそうだ。

「せいぜい恥をさらすんだな！」

「いや、これキミの制裁だからな？」

「う、うるさい！ それもこれも貴様が余計なことをしたせいだ！」

「これより、取巻くんの制裁デュエルを始めます。両者、準備が良ければ始めるよう」
「どうやら立ち会いは樺山教諭のようだ。俺の寮長だからなのか、それとも暇な人が他に居なかつたのか。もちろん問題が有る訳ではないので気にはしない。

「こつちは問題ない」

「ふん、いくぞ！」

「決闘！」

取巻 L P 4 0 0 0

葵 L P 4 0 0 0

「俺のターン！ ドロー！」

この眼鏡こと取巻という男は、アニメではデュエルをしていた描写が無かつたはずだ。むしろ名前さえ出てきた記憶がない。

「フィールド魔法『山』を発動！」

：聞き間違いだろかと思ったのだがもちろんそんなことはなく、最も短い名前のカードの一つが発動されて周囲を山が囲っていく。OCGではそこそこ弱体化をして

いるため、これは原作効果を期待せざるをえない。

「そして《グランド・ドラゴン》を攻撃表示だ！《山》の効果で攻守が200ポイントアップ！」

《グランド・ドラゴン》ATK／2000→2200

原作効果では対応種族の攻守が1・3倍上昇する効果なのだが、攻撃力で考えた場合《一族の結束》の上昇量を超えるために元の攻撃力が2700以上必要である。それを考えるとちょっとアリかな、と期待していたのだが…残念だ。

「さらにカードを1枚伏せてターン終了だ！」

「俺のターン、ドロー」

「永続魔法《金剛真力》発動。相手フイールドにしかモンスターがおらん時、ターンに1度手札からレベル4以下のデュアルモンスターを1体特殊召喚できる。手札から《インフィニティ・ダーク》を特殊召喚」

《インフィニティ・ダーク》ATK／1500

闇を纏つた漆黒のヒーロー、という表現がぴったりのモンスターである。戦士族にも見えなくはないが、悪魔族なんだよな。少なくとも儀式召喚される某ハンバーガーよりは戦士にみえる。なぜあいつは悪魔族では無いんだろう…

「そして《インフィニティ・ダーク》を再度召喚！」

再度召喚により鈍い灰色だつた紋様が白く輝く。見るからに悪のヒーローが正義の心に目覚めて、仲間になつたかのような輝き方だ。『ネクロダークマン』や『ダーク・ブライトマン』辺りの隣に置いておけばE・HEROと見間違えるかもしねれない。「再度召喚したところで、見た目以外何も変わつてないじやないか！二度手間の割にあつてないんじやないか？」

「二度手間つていうなつ！『インフィニティ・ダーク』で『グランド・ドラゴン』に攻撃！」

「挑発されて攻撃力で劣るモンスターで攻撃するなんて、所詮はラーアイエロードだな。迎撃しろ！『グランド・ドラゴン』！」

「残念だが、ここで『インフィニティ・ダーク』の効果が発動する。このカードは攻撃宣言時に、相手の表側表示モンスター1体の表示形式を変更できる。この効果で『グランド・ドラゴン』を守備表示に変更！」

漆黒のヒーローは一息で巨竜との間合いを詰め、その頸の下に身体を潜り込ませて全身をバネにしたアッパー・カットをかました。そして着地と同時に左足を軸にしてむきだしとなつた腹部目掛けて回し蹴りを叩き込んだ…一体どこで効果を使つたんだろう。もしかしてアッパー・カットだつたのだろうか。

『インフィニティ・ダーク』 ATK／1500

『グランド・ドラゴン』ATK／2200→DEF／300

「馬鹿な！『グランド・ドラゴン』が破壊されるなんて！」

先ほどの立ち回りはさておき、こいつの効果は地味に便利なんだよな。高攻撃力低守備力のモンスターが蔓延していた環境では、再度召喚さえできれば単体で帝やダムドを除去出来るのだ。：ほんどの場合、返しのターンに除去されてしまうのはご愛嬌だろう。

「カードを一枚セットして、ターンを終了」

「くつ、ドロー！『軍隊竜』を守備表示で召喚して、ターンエンド！」

『軍隊竜』DEF／800→1000

リクルーターか：表側表示で召喚してくれたおかげで『インフィニティ・ダーク』の効果を使つて攻撃表示に変えるが、後続はそうはいかない。今回はダメージを期待できそうにはないな。

「俺のターン、ドロー。『幸運の笛吹き』を攻撃表示で召喚してバトルだ。『インフィニティ・ダーク』で『軍隊竜』に攻撃、そして効果発動！『軍隊竜』を攻撃表示に変更する！」

今度は竜人二体一組のモンスターなのでどうするのかと思つていたら、漆黒のヒーローは高く跳躍した後、捻りを加えながら防御姿勢を取つていた二体の竜人の真後ろに

着地した。そして振り向き立ち上がった竜人の片方を肘鉄で吹き飛ばし、残つた方をサマーソルトで打ち上げていた。そして中空で爆散する竜人。だからお前はいつ効果を使つていいんだ。

『インフィニティ・ダーク』 ATK／1500

『軍隊竜』 DEF／1000→ATK／900

取巻 LP 4000→3400

「この、ラーアイエローの癖に生意気なつ！『軍隊竜』が戦闘によつて破壊され墓地に送られた時、デツキから『軍隊竜』を特殊召喚する！」

『軍隊竜』 DEF／800→1000

「それじやあ『幸運の笛吹き』で『軍隊竜』に攻撃だ」

先ほどからどこの特撮だと言わんばかりに大立ち回りをする『インフィニティ・ダーク』とは打つて変わつて、『幸運の笛吹き』の方はそのまま笛を吹いただけであつた。そしてブルー女子の方向にウインクをする。

途端にわき上がる黄色い声、ひつそりと破裂する竜人、あざとい笑顔で手を振るショタ天使、顔を赤らめて鼻息が荒い女子もいた。ついでに男子の何名かも鼻息が荒かつたが、見なかつたことにした。なんだこの混沌とした状況…

『幸運の笛吹き』 ATK／1500

『軍隊竜』 DEF／1000

「まだだつ！『軍隊竜』が戦闘によつて破壊され墓地に送られた時、デツキから『軍隊竜』を特殊召喚する！」

『軍隊竜』 DEF／800→1000

「俺はそのままターンエンド」

「くそっ！ ドロー！ ふふ、ふははは！ こいつを待つてたんだ！ 『エレメント・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！」

『エレメント・ドラゴン』 ATK1500→1700

うお、エレメントモンスターが出てくるとは思わなかつた。今のフィールドだと得られる効果は風だけだが、今の状況で一番得て欲しくない効果でもある。流石にどのモンスターに属性が対応しているかは覚えていないが、この状況を歓迎するからには風には対応していると考えていいだろう。

「手札から『竜の秘宝』を『エレメント・ドラゴン』に装備！ これで攻守が更に300ポイントアップする！」

『エレメント・ドラゴン』 ATK1700→2000

初期の装備魔法だと…!? 古いカードが弱いとは言わないが、いくら何でもそのカードの採用は想像していなかつた。ロマンというやつなのだろうか。それでもオベリス

クブルーになれたことがすごいと思う。

「さらに手札から魔法カード《スタンピング・クラッシュ》を発動！ この効果でお前の伏せカードを破壊して500ポイントのダメージだ！」

「どうせ破壊されるなら、カウンター罠発動！ 《ヴィクトタイム・カウンター》！ デュアルモンスター1体を裏守備表示にして魔法カードの発動を無効にして破壊する！ 《インフィニティ・ダーク》を裏守備にして《スタンピング・クラッシュ》を無効にする！」

「守備表示にしても無駄だ！ 永続罠《竜の逆鱗》発動！ 自分フィールドのドラゴン族は貫通効果を得る！」

初ターンから何を伏せてているのかと思つたら、攻撃に使うために伏せていたのか。再度召喚したことを考えるともつたが、念のために守備の高い《インフィニティ・ダーク》を選んで正解だった。《笛吹き》の守備はわずか500なので、1500もの貫通ダメージを受けてしまうところだった。

「そして手札から魔法カード《火竜の火炎弾》発動！ このカードには相手ライフに800のダメージを与える効果と、フィールド上の守備力800以下のモンスター1体を破壊する効果からどちらか選択して発動する。二つ目の効果を選択する。消え去れ！ 《幸運の笛吹き》！」

全く正解ではなかつた。それどころか一転して大ピンチだ。ショタ天使の破壊に対

して主に女子からは大ブーイングが巻き起こっているが、眼鏡くんは気にしてた様子も無い。もしかしたら一気に優位になつた自分に酔つていて、気付いていない可能性もある。

『軍隊竜』を攻撃表示に変更してバトルだ！『エレメント・ドラゴン』で『インフィニティ・ダーク』を攻撃！ エレメントバースト！』

攻撃の時には大立ち回りを披露してくれた『インフィニティ・ダーク』だつたが、守備のときは防御の構えのまま火球に焼き払われてしまつた。

『エレメント・ドラゴン』 ATK2000
『インフィニティ・ダーク』 DEF1200

葵 LP4000→3200

「このモンスターはフィールド上に特定の属性のモンスターが存在するときに新たな効果を得るのさ！ 今は風属性の『軍隊竜』が場に存在する。よつて相手モンスターを破壊した場合、もう一度続けて攻撃できるんだよ。いけえ！『エレメント・ドラゴン』！」

直接攻撃だ！」

体感システム付きのソリッドヴィジョンで直接攻撃を受けるのは初めてなので、どうなるのか不安に思いながら身構える。赤い竜の火球をもろにうけると同時に高温に晒されたような感覚と衝撃が通り抜ける感覚があり、思わず苦悶の声が漏れてしまつた。

主人公達がやたらオーバーリアクションかと思つたら、わりとそうでもなかつたのか。

《エレメント・ドラゴン》 ATK2000

葵 LP3200→1200

「くたばれ！《軍隊竜》で直接攻撃！」

流石は軍隊という名がついているだけあって、2体まつたく同時にこちらに走つてくる竜人はそのまますれ違い様に斬りつけてきた。斬られた箇所が熱を持つたかのような感覚と共に衝撃を受ける。たしかに痛みもなくすぐに衝撃も引くが、リアクションがらいはとつてしまふだろう。

《軍隊竜》 ATK／900

葵 LP1200→300

「ははつ虫の息じやないか！ やはりラーメン工房はこの程度なんだな、ターン終了」

「勝つたつむりになるにはまだ早いと思うぞ、ドロー！」

引いたカードを確認すると、思わず口角がつり上がるのを止められなかつた。モンスター処理だけなら元の手札でも充分だつたが、これならこのターンで決めることができそうだ。

「相手の場にしかモンスターが存在しないので《金剛真力》の効果を発動、手札から《巨人ゴーグル》を特殊召喚！」

『巨人ゴーグル』ATK／1500

「墓地に通常モンスターが2体以上存在するとき、手札から『樹海の射手』を特殊召喚できる」

『樹海の射手』ATK／1400

「『巨人ゴーグル』を生け贋に、現れろ！『ヘルカイザー・ドラゴン』！こいつはドラゴン族やから『山』の効果を受ける」

『ヘルカイザー・ドラゴン』ATK／2400→2600

先ほど引いたのはこのカードである。『樹海の射手』で適当にサーチしようかとも思っていたのだが、そうした場合ライフを削りきれそうになかったのでちょうどよかつた。

「そいつは入試デュエルのときのモンスター！だが炎属性モンスターが場に存在する時、『エレメント・ドラゴン』の攻撃力は500ポイントアップだ！」

『エレメント・ドラゴン』ATK／2000→2500

ワンキルの立役者だけあって、このモンスターの印象は強かつたようだ。：ブルー生徒の方向から非常に熱い視線を感じるが、気にしないようにしよう。

「さらに、墓地の通常モンスターが3体のみのとき、通常モンスター扱いの『巨人ゴーグル』と『幸運の笛吹き』の2体を除外して『紅蓮魔闘士』を手札から特殊召喚！」

『紅蓮魔闘士』ATK／2100

『紅蓮魔闘士』の効果発動！ 墓地からレベル4以下通常モンスターを1体特殊召喚することができる。蘇れ！ 『インフィニティ・ダーク』！」

『インフィニティ・ダーク』ATK／1500

蒼鎧の戦士が剣を地面に突き刺すと眼前の地面が割れ、中から漆黒のヒーローがマントをはためかせて現れた。構図が『ヒーロー・ブラスト』にしかみえないのだが、お前E・HEROの仲間入りする気満々だろ。お前は悪魔族なんだからE-HEROで諦める。

「一気にモンスターを4体も並べただと!?」

「バトル、『ヘルカイザー・ドラゴン』で『エレメント・ドラゴン』に攻撃！ カイザー・バースト！」

『ヘルカイザー・ドラゴン』の光線に抵抗するために火球を吐き出した『エレメント・ドラゴン』だったが、火球もろとも消し飛ばされてしまった。

『ヘルカイザー・ドラゴン』ATK／2600

『エレメント・ドラゴン』ATK／2500

取巻LP3400→3300

「次！ 『紅蓮魔闘士』で『軍隊竜』に攻撃！」

蒼鎧の戦士は氣だるそうな目でこちらをちらりとみて、独特な剣で一閃するだけで二体まとめて両断していた。殺氣をバラまいているようにみえるイラストなのだが、面倒臭がりなのかもしれない。

『紅蓮魔闘士』 ATK／2100

『軍隊竜』 ATK／900

取巻 LP 3300→2100

『樹海の射手』で直接攻撃！

「ぐああつ！」

心臓目掛けて一直線に放たれた矢をうけ、左胸を押さえる眼鏡。ソリッドヴィジョンとはいえ、心臓に矢が刺さったように見えたらそりや胸を押さえもするだろう。

『樹海の射手』 ATK／1400

取巻 LP 2100→700

「トドメツ！『インフィニティ・ダーク』で直接攻撃！」

最後は漆黒のヒーローがマントをはためかせながら空高く跳躍し、先ほど矢を受けていた心臓へと飛び蹴りを叩き込んだ。どこまでもヒーロー路線を外すつもりは無いようだ。別に良いんだけどさ。

『インフィニティ・ダーク』 ATK／1500

取巻 LP700→0

「勝者、代田葵！取巻くんは反省レポートの提出をお願いします」

「馬鹿な、ラーアイエロー相手にこんなこと、ありえない！」

眼鏡くんは呆然としている。別に降格になつたわけでも、ましてや退学になつたわけでもないので単純に格下の寮に負けたのがショックなのだろう。

「さて、代田くんは勝つたご褒美にドローパン引換券を預かっています。期限は特にありませんので栄養バランスを考えて、食べすぎには気をつけて下さいね」

「そうですね、気をつけます」

そう言いながら引換券を渡され、思わず苦笑してしまつた。総菜パンばかりの食事はたしかに健康によくない。もしかしたら樺山教諭が立ち会いになつた理由は、寮生の体調管理が理由だったのかもしれない。

「これにて制裁デュエルを終了します。もちろん明日も授業がありますので、寝坊などしないように。それでは解散」

解散の合図で生徒がぞろぞろと会場から出て行く。

俺も部屋に戻るとするか。小腹も空いたし、購買によつてドローパンでも食べよう。樺山教諭のアドバイス通り、食べ過ぎないために一個だけにしどくかな。

4. 覗き魔つていうなつ！

デュエルアカデミアが、デュエルエリート養成学校であり授業は単位制のため、選ぶ授業にはある程度自由はあるが、それでも必修の授業はある。そして中高一貫校であるため、もちろん体育の授業は必修だ。カードゲームと何の関係があるのかわからないが、『健全な精神は健全な肉体に宿る』とでもいいたいのだろうか？

しかもこの学校、無駄なまでに設備に力が入っている。

体育館と思っていたらガラス張りのドームで、しかも無駄に大きなモニター付き。きっとデュエル中継とかのためだと思うのだが、それでもこれだけで幾らかかっているのか分かつた物ではない。

今日の授業はオリエンテーションということで、現在ドッジボールの真っ最中だ。しかし三沢は運動神経がいいようで、息一つ乱していない…むしろ狙われていないようにも見える。

「この角度、この力で投げれば当たる！」
お、また一人退場になつた。しかし当てられた生徒は、まるで俺が投げたボールがお

かしな軌道で飛んできたかのような表情をしてるな。俺が取ったボールをそのまま三沢に渡して、投げてもらつただけなんだが：

結局こちらのワンサイドゲームのまま、体育の時間が終了した。周りの連中がこちらを異様な物を見るかのような目でみてくるのは、気のせいだと思つておこう。

今日の授業はこの体育で終わりだし、部屋に戻つたら三沢に借りた本でも読むとするか。確かホオジロ・ジンベ工著「水産資源を使つた華麗なる戦略論」だつたな。水属性デュエリスト御用達の名著らしいので、今後の参考にじっくり読ませてもらおう。

風呂をさつさと済ませて部屋に戻ると、十代からメールが来ていたようだ。

「翔がさらわれた！ 女子寮にいるらしい！ 手を貸してくれ！」

少し思考が停止してしまつたのも仕方が無いと思う。

なんというか、もう放つておいていいんじゃないかな？ 場所は分かつてるんだし、

十代がなんとかするだろうし。こんな夜中に女子寮に行くとか勘弁願いたい。

『ご主人様、十代殿が待ちぼうけとなつてしまふと、翔殿の身が危なくなるのではないでしようか』

大丈夫だと思うんだけどなあ：仕方ない、俺も向かうか。

距離としてはこつちの方が多いし、のんびり歩いて行こう。

「葵！ 来てくれたんだな！」

「呼び出しておいて来ないと思つていたのか？ 帰つた方がいいならそうするぞ」

そつちから呼び出しておいて、まつたくもつて呼び出され甲斐のない奴だ。

許可がでたら本当に帰つてしまおうか。ちょうど眠気もやつてきた頃合いだし。

「わりいわりい、とりあえず、このボートに乗つてくれ！」

「もちろん、十代が漕いでくれるんだよな？」

「え、お、おう！」

なんでも言つてみる物だな。シハーブが何やら拗ねたような顔をしているが、そもそもこいつは物体に干渉できるのか？…あ、俺がディスクで召喚すれば出来る可能性はあつたのか。面倒なことになりそうだからしないけど。

「兄貴い～…」

おや、もう着いたのか。さすが十代、体力は有り余っていたようだ。俺が漕いだとしたらこんなに速くは着かなかつただろう。陸をみると、翔がお繩についており、ブルー女子に確保されていた。

…もしかすると翔にとつてはご褒美かもしれないと思つてしまふあたり、俺のモチベーションの低さが伺えるというものだ。

「翔、これはどういうことなんだよ」

「それが、話せば長いような、長くないような」

「こいつがね、女子寮のお風呂を覗いたのよ！」

よし、帰ろう。本当の覗きでも、ただのヒステリーでも、面倒な展開しか見えない。しかもこの状況、俺まで覗き魔の仲間扱いをされかねない。そんなことは断固お断りだ。デュエル馬鹿の十代はそんなことに興味がないだろうし、エロガツパは翔だけで充分だ。

「覗いてないって！」

「それが学校にバレたら、きっと退学ですわ」

れつきとした犯罪だしな。仮に退学にならなくとも、クラスで噂が流れている時点で自主的に退学しても不思議ではない。

「あなたたち、私たちとデュエルしない？ もし私達に勝つたら、風呂場覗きの件は大目に見てあげるわ」

「だから覗いてないって言つてるのに！」

「なんだかよくわかんないけど、まあいいや。そのデュエル、受けて立つぜ！」

「え、俺も頭数に入っているのか？」

ついでに俺たちも共犯扱いで道連れにするつもりなのだろうか。　：十代は悪目立

ちをしている節はあるが、俺は完全に巻き添えを喰つた形だろう。それとも先日の眼鏡くんへの制裁デュエルで、ブルー全体から敵認定されたのだろうか。

「あら、イエローなのに自信がないのかしら」

「俺は十代に巻き添え喰わされただけだしなあ……大した事ないみたいだし、こんなくだらない事でやる気は起きないな」

「なんですってえ！ 明日香さん、こいつは私がやります！」
え、今なんの地雷踏んだの？

一度陸に上がり、3対3の格好でデュエルディスクを構える。

目の前には茶髪のブルー女子、名前はなんだつたか……ジユンコかモモ工であることは確実なんだが。

「私のこと、大した事ないなんて言つてくれた落とし前はつけてもらうわよ！」

そういうことか。翔が覗き疑惑で捕まつた事が大した事ないって言つたのを、この茶髪さんが大した事ないって言つたと思われてしまつたのか。

「そういう意味じゃなかつたんだけどなあ……そりいえば名乗つてなかつたけど、俺は代田葵。君は？」

「枕田ジユンコよ！ 覚えときなさい！」

ジユンコの方だつたか。後々忘れると怒られそうなので、しつかり覚えておく事にしよう。敵意をむき出しにされながらも、つつがなく自己紹介も終わつた所で…

「決闘！」

「私の先攻、ドロー！ 手札の『ハーピイ・クイーン』を墓地に捨てて、『ハーピイの狩り場』を手札に加えるわ！」

なるほど、「ハーピイ」か。こつちはサポートカードを使えないと辛いし、相性が良いとは言えない相手だな。

「さらに、『ハーピイ・レディ2』を攻撃表示で召喚して、『ハーピイの狩り場』を発動！ この効果で鳥獣族モンスターの攻撃力が200ポイント上昇するわ。ターン終了よ」
 『ハーピイ・レディ2』 ATK／1300→1500

「俺のターン、ドロー。『デュアル・サモナー』を攻撃表示で召喚。そのままバトル、『デュアル・サモナー』で『ハーピイ・レディ2』を攻撃」

『ハーピイの狩り場』の効果で『ハーピイ・レディ2』の攻撃力は1500だから残念だけど相打ちね」

『デュアル・サモナー』 ATK／1500
 『ハーピイ・レディ2』 ATK／1500

「そうだな。残念ながら『デュアル・サモナー』は一ターンに一度戦闘破壊されないから、

『レディ2』が一方的に破壊されるだけだな』

召喚師が杖からオレンジ色のビームのようなものをハーピイに向けて発射し、それに打ち抜かれたハーピイはそのまま消滅した。前回猿に殴り飛ばされた奴と同じに見えない。

「カードを2枚伏せて、ターンを終了」

「くつ、やるわね：私のターン、ドロー！ よし！ 『ハーピイ・レディ1』を攻撃表示で召喚！ 効果により風属性モンスターの攻撃力が300ポイントアップ！ さらに、『ハーピイの狩り場』の効果で攻撃力が200ポイントアップ！」

『ハーピイ・レディ1』ATK／1300→1800

「さらに、『ハーピイの狩り場』の効果を発動！ アンタの伏せカードを1枚破壊するわ！」

ハーピイの起こした強風によつて、伏せていたカードの一枚が破壊される。：破壊されたのは『血の代償』か。『デュアル・サモナー』がいるからまだ大丈夫だろう。

「いくわよ！ 『ハーピイ・レディ1』で『デュアル・サモナー』に攻撃！ スクラッチ・クラッシユ！」

召喚師がハーピイのかぎ爪で切り裂くように蹴られ、うずくまる。やっぱり猿にやられた奴と同一人物だったようだ。頬が紅潮しているのは気のせいだと思っておこう。

「さつきも言つたけど、『デュアル・サモナー』は一ターンに一度戦闘によつては破壊されないぞ」

「それでもダメージは受けてもらうわ」

『ハイペイ・レディ1』 ATK／1800

『デュアル・サモナー』 ATK／1500

葵 LP4000→3700

「私はカードを一枚伏せてターンエンド！」

「エンドフェイズ時に『デュアル・サモナー』の効果発動。ライフを500ポイント払つて、手札からデュアルモンスター『巨人ゴーグル』を攻撃表示で召喚しておこう」

『巨人ゴーグル』 ATK／1500

葵 LP3700→3200

「俺のターン、ドロー。『巨人ゴーグル』を再度召喚！」

赤いゴーグルを装着した岩肌の巨人の身体が輝き、岩でできた筋肉が隆起する。

獰猛な笑顔を浮かべ、敵を威圧しているようだ。色んなカードの下位互換とか言われる割に、なかなか格好いいじゃないか。

「わざわざモンスターを召喚し直すなんて、ただの二度手間じやない。アンタ何馬鹿なの？」

「二度手間っていうなっ！ 意味もなしにそんなことをするわけがないだろ！ 再度召喚された《巨人ゴーグル》の元々の攻撃力は2100になる！」

《巨人ゴーグル》ATK／1500→2100

「バトル、《巨人ゴーグル》で《レディ1》に攻撃！ ゴーグルナックル！」

巨体に似合わない俊敏な動きで距離を詰め、風切り音を鳴らしながら巨人が拳をハイヒーに突き刺した。お前岩石じやなかつたのかよ。

《巨人ゴーグル》ATK／2100

《ハイペイ・レディ1》ATK／1800

ジ YunコLP4000→3700

「さらに、《デュアル・サモナー》で直接攻撃！」

「くう！ この程度！」

《デュアル・サモナー》ATK／1500

ジ YunコLP3700→2200

「これでターン終了」

「やつてくれたわね！ 私のターン、ドロー！」

やつてくれたも何も、デュエルなんだからそうしなきや仕方ないだろうに。

《ハイペイズペット仔竜》を攻撃表示で召喚！ さらに、手札を1枚すべて罠発動！ 《ヒ

ステリック・パーティ》！ 墓地のハーピイ3体を特殊召喚するわ！ これでアンタのモンスターを全滅させれば私の勝ちよ！」

《ハーピイズペット仔竜》 ATK／1200

これはなかなか凶悪な状況だな。《ペット仔竜》の効果が全部有効になれば、このままライフを消し飛ばされることは目に見えている。

「チエーンしてリバースカードオープン！ 速攻魔法、《デュアルスパーク》！ レベル4デュアルモンスターの《巨人ゴーグル》をコストにして、《ヒステリック・パーティ》破壊！ そして1枚ドロー！」

「な、なんてことすんのよ！ せつかくのコンボが台無しじやない！」

こちらとしても負ける気はさらさらないので、抗議は完全に無視する。そもそもデュエルではよくあることだし、知ったことではない。

「うう…私はこれでターン終了よ」

「俺のターンだな、ドロー。：お、魔法カード《思い出のブランコ》発動。墓地から《巨人ゴーグル》を攻撃表示で特殊召喚、そして再度召喚」

《巨人ゴーグル》 ATK／1500→2100

「バトル！ 《サモナー》で《ペット仔竜》を攻撃！」

《デュアルサモナー》 ATK／1500

『ハイ・バイズペット仔童』 ATK／1200

ジ Yunコ LP 2200→1900

「続いて『巨人ゴーグル』で直接攻撃！ やつちまえつ！ ゴーグルナツクル！」

テンションに任せて技名を叫べるようになつた俺は、立派に遊戯王世界の住民になつてゐる氣がする。しかし女子にいかつい巨人をけしかける絵面を見る限り、こちらが悪者に見えなくもない。

「キヤアアツ！」

『巨人ゴーグル』 ATK／2100

ジ Yunコ LP 1900→0

何はともあれこれで勝利だ。どうやら決着は俺が一番遅かつたらしく、十代はワクワクした目で、翔は喜びに溢れた目でこちらを見ていた。もしかして翔は負けていて、一勝一敗という状況だつたんだろうか。

それぞれが乗つていたボートを岸に戻し、俺と翔が十代のボートに乗り込む。男三人が同じボートに乗ると流石に少し狭いな。

「約束通り、翔は連れて帰るぜ」

「どうぞ、約束は守るわ。今日のことは黙つてあげる」

「ふん、まぐれで勝つたからといって、良い気にならない事ね！」

ジュンコが明らかに敵意満々である。ブルー生と戦うのは二度目だが、どうしてこうも寮の上下意識が強いんだろうか。良い気になるも何も、騒宣すると翔の覗き疑惑と一緒に俺の共犯疑惑も浮上しそうなので絶対にしないが。

「よして、ジュンコ。負けは負けよ、見苦しい事はしないでね」

流石明日香さん男前。その潔さを分けて欲しいぐらいだ。

そして帰りも十代にボートを漕いでもらつた。唯一負けたと思われる翔に漕がせようかとも思つたが、十代が漕いだ方が早く帰れるので文句はない。

借りた本を読むには時間も遅いし、帰つたらさつさと寝ることにしよう。

5. 試験つていうなつ！

このアカデミアには月一テストというシステムがあり、実技、筆記共に各寮で競い、成績次第で昇格も降格もあるということだ。基本的に授業中に勉強していれば筆記で困る事は無いと思うが、アカデミアのテストなんて入試しか知らないのでどういった問題が出るのか不安は残る。

寮がかわっても授業内容が変わる訳ではないので、筆記試験は全員同じ教室で行われる。寮ごとに座る場所が決まっている訳でもなく、机の距離も非常に近い。：つまりその気になれば成績下位の生徒がカンニングしやすいような席取りもできるということだが、そんなことをすれば監督の先生方にバレるだろう。

それなりに早く来たのだがそれでも四割程度席が埋まっており、特に入り口付近は試験後いち早く外に出ようともくろむ生徒達によつて完全に席が埋まっていた。適当に空いている前の辺りに座り、試験開始までゆっくり待つことにしよう。

試験開始からしばらくして、とくに問題も無く回答欄を埋める事が出来た。授業の復

習を兼ねている分、むしろ入試問題の方が難しかつたぐらいだ。さりげなく周りの様子を確認した所、そうでもないようだが。

「勉強のしすぎで居眠りなんかしてちや意味ねえぞ、こら」

「あ、兄貴!？」

もう開始30分以上も経つてゐるにもかかわらず、十代が悪びれた様子も無く入室してきたようだ。そして試験中に話しかけるとは迷惑な奴だ。席が遠いから心配はないだろうが、頼むからこっちにまで話しかけないで欲しい物だ。

「うるさいぞオシリスレッド、静かにしろ！　テストを受ける気がないなら出ていけ！」

「冗談じやねえぞ、せつかくきたんだぜ。帰つてたまるか」

万丈目と十代が口論をしてゐるが、どう考へても万丈目の主張のほうが正論である。ただし自分も叫んでゐるので、お前が言うな、とも思つてしまふ。そつちを向いたらカニニングを疑われかねないので見るに見れないが、気になつて仕方が無い。

「遊戯十代くん、はやく問題用紙を取りにこいにやん、もう時間がないにやー」「はーい」

これでやつと静かになりそうだな。まだ40分近く時間は余つてゐるが、一通り問題は埋め終わつて見直しもすんだし、普段使いに役立ちそうなカードでも考へながらのんびり待つてるかな。

「これで筆記テストは終了だ。なお、実技テストは午後2時から体育館で行います」筆記試験が終わり、生徒が一斉に走り出した。入り口付近に陣取っていた生徒が多いのは気付いていたが、これだけ必死だと恐怖さえも感じてしまう。ああはなりたくないものだ。

「起きろ、二人とも。筆記テストはとつぐに終了しているぞ」

面倒見の良い三沢が十代と翔の二人を起こしているが、二人とも机に突つ伏していて何度も肩を揺さぶつてもうめくだけだ。

「そうだと、試験中に居眠りしてたら先生の心証も悪くなるんだし、ちゃんと起きていたほうがいい」

「葵も寝ていただろう……」

「流石にちゃんと一通り埋めて、見直してからだけどな」

考え方をしていただけなので起きてはいたのだが、カンニングを疑われないように目を閉じていたのは事実なので素直に認めておく。考えた結果、アカデミアは自然豊かなので夏場に『虫除けバリアーカー』を使うことだけは決まった。

「やつちまつた、何のために勉強したんだか……」

「気にすんな、午後の実技テストが本番よ」

ようやく二人が起きたようだ。翔は弾かれるように勢い良く、十代はのつそりとした動きで顔を上げており、二人の筆記試験に向かう心がけの違いがよくわかる。

「あれ、皆は？」

「もう昼飯か？」

まだ11時を過ぎたばかりなので、十代達の疑問も尤もである。今からイエロー寮の食堂までのんびり歩いても15分になる前には到着できる。レッド寮に限つてはもう少し時間がかかるだろうが、ほとんどのレッド生は購買を利用するので昼食には早いだろう。

「購買部さ。なんせ、昼休みに新しいカードが大量入荷することになつてるからな」

「え、ええー！ カードの大量入荷!?」

「皆、午後の実技テストに向けて、デッキを補強しようと買いに行つたんだよ。」

あれはすごい光景だった。我先にと前にいる人を押しのけながら購買に走る生徒達、ブルーからレッドまでのほぼ全員がそんな勢いで出口に殺到する地獄絵図。端の席に座ついたら間違いなく巻き込まれていただろう。

「み、三沢くんは？」

「僕は今のデッキを信頼している。新しいカードなんか必要ない。」

「あ、葵くんは?」

「新しいカードがあつたとしても、調整する時間が足りない。今回はバスだな」さすがに全種類のカードを持っているなんて言えないし、何より今さら争奪戦に突っ込んでいく元気がない。

「あ、兄貴は?」

「俺は…興味ある!どんなカードがあんのか見たくってしようがねえ!行こうぜ!翔!」

「うん!」

そして二人とも走り去つてしまつた。寝起きとは思えないフットワークの軽さが羨ましい限りだ。

「それじやあちよつと早いけど、食堂でお昼にしてくるかな。購買いかないなら、一緒にどうだ?」

「そうだな。購買に人が集中している今なら食堂も空いているだろう」

やはり新カードの大量入荷に興味が無かつた人間は稀だつたようで、食堂はガラガラと言つてもいい状態だつた。試験日ということで一人して今日のオススメであるカツカレーを食べて験を担ぎ、午後の実技に備えて調整するため解散となつた。

実技試験も終盤、十代の見事な勝利でラーアイエロー昇格が決定して周りは大盛り上がりだが、試験はまだ続いている。実技試験は同じ寮同士で行われるということで、俺の相手は我らがイエロー主席の三沢大地：

「よ、よよよ、よろしく」

：ではなく、本当に高校生なのか疑わしい程に背の小さいイエロー生だった。名前は確か小原とかいったか。

同じラーアイエローだが、あまり面識はない。俺の交友関係が非常に狭いとかそんなわけではなく、彼がいつも大柄な生徒：たしか大原という名前：とつるんでいるため、話しかける機会がないのだ。

『ご主人様は三沢殿や遊城殿とおられないときは、大概一人で過ごしておられると記憶していますが』

「おいやめろ。入学からおよそ一ヶ月経つたにも関わらず、マトモに話したイエロー生が三沢以外にいないという事実をバラすんじやない。

「よろしく、それじゃ始めようか」

「決闘（デュエル）！」

「俺の先攻。ドロー」

今回の試験では先攻後攻は決闘場についた順とのことだったので、遠慮なく先攻を取

らせてもらう。普段が言つた者勝ちなので、あらかじめ決められているのは正直ありがたい。

「《サンライズ・ガードナー》を攻撃表示で召喚。カードを一枚伏せて、ターン終了」
《サンライズ・ガードナー》 ATK／1500

太陽を背に受け、黄金に光り輝く戦士が現れた：決して溝の口発の真っ赤なアレではない。

「俺のターン、ドロー。《猛進する剣角獣》を召喚して手札から《攻撃》封じ》を発動！
《サンライズ・ガードナー》を守備表示に変更する！」

《サンライズ・ガードナー》 ATK／1500→DEF／500

《『攻撃』封じ》とは、なんて渋いカードを使いやがるんだ：《山》や《ドラゴンの秘宝》が現役であつたこともあるし、この世界のパック事情が気になる所だ。

「《猛進する剣角獣》で《サンライズ・ガードナー》に攻撃！」

「リバースカードオープン、速攻魔法《スペシャル・デュアル・サモン》発動。これで《サンライズ・ガードナー》を再度召喚状態にし、元々の守備力が2300となる」

《サンライズ・ガードナー》 DEF／500→2300

「て、手札から速攻魔法《月の書》発動！《サンライズ・ガードナー》を裏守備表示に変更する！」

せつかく再度召喚した『サンライズ・ガードナー』だつたが、裏守備にされてしまつては再度召喚前の状態に戻つてしまふ。『サンライズ・ガードナー』はあつけなく角に貫かれてしまつた。

『猛進する剣角獸』 ATK／1400

『サンライズ・ガードナー』 DEF／500

葵 LP4000→3100

「カードを一枚伏せて、ターン終了するよ」

まさか『月の書』をつかつてまで破壊しにくるとは…それとも戦闘ダメージを嫌つたのだろうか。どちらにしろ予想外だつた。ついでにいうと攻撃名を言わなくて良いのも意外だつた。

「俺のターン、ドロー」

わざわざ『攻撃』封じを使つたことを考へると、小原は貫通ダメージを狙つていくデッキのようだ。そして困つた事に下級デュアルは守備力が低く、最大値で『炎妖蝶 ウィルプス』の1500、しかも初期デュアルに至つては守備力500のモンスターばつかりだ。

『シャドウ・ダイバー』を召喚

『シャドウ・ダイバー』 ATK／1500

フードを目深に被つた男がフィールドに現れ、心無しか周りが暗くなつた。
男は微動だにしないが、その影は不気味にうごめいている。

「バトル、《猛進する剣角獣》に攻撃！」

《シャドウ・ダイバー》ATK／1500

《猛進する剣角獣》ATK／1400

小原LP4000→3900

俺から伸びた影から悪魔が浮き出て、鋭い爪で剣角獣を切り裂いた。

名前から考えて影が本体だとは思つていたが、召喚した時に出てきたフードの奴は一本なんだつたんだ…

「カードを一枚セットして、ターン終了」

「くそつ、俺のターン、ドロー。…よし！ スタンバイフェイズにリバースカードオーパン！ 《邪悪な儀式》を発動！ フィールド上の全てのモンスターの表示形式を入れ替える！」

《シャドウ・ダイバー》ATK／1500→DEF／500

何をセットしているのかと思つたら、またもや渋いカードを…しかし貫通狙いのデッキ相手に低守備力を晒しているこの状況には、嫌な予感を抱かざるを得ない。

「さらに俺は、《俊足のギラザウルス》の効果を発動して、手札から特殊召喚！ その効

果によりキミは墓地のモンスターを一体特殊召喚できるよ」

「それだつたら遠慮なく、《サンライズ・ガードナー》を攻撃表示で特殊召喚させてもらおう」

《サンライズ・ガードナー》ATK／1500

ギラザウルスということは生け贅召喚でもするつもりなのだろう。現時点では恐竜族で固まつていて貫通狙いということは、ここで出てくるのは恐らく…

「《ギラザウルス》を生け贅に、《暗黒ドリケラトプス》を召喚！」

やつぱりそいつか！ 贯通持ちな上に守備力が初期の下級デュアルの攻撃力と同じ1500という、こちらからすれば中々厄介なモンスターだ。

「さらに手札から《死者蘇生》を発動！ 墓地から《猛進する剣角獣》を特殊召喚してバトル！ 《猛進する剣角獣》で《シャドウ・ダイバー》に攻撃！」

こつちにきたらどうしようかとおもつたが、どうやら攻撃先はフードの男のほうであるらしい。フードの男は影の悪魔を盾にしたようだが、先ほどの仕返しとばかりに突進してきたサイによつて悪魔もろとも角で貫かれてしまつた。

《猛進する剣角獣》ATK／1400

《シャドウ・ダイバー》DEF／500

葵 LP3100→2200

「《暗黒ドリケラトプラス》で《サンライズ・ガードナー》に攻撃！」

サイズが違った過ぎるせいか、抵抗もできずに怪鳥に蹴散らされる《サンライズ・ガードナー》。抵抗できなかつた理由の一つとして、再度召喚したときの守備力ですら敵わないからか棒立ちだつたせいもあると思う。諦めつぶりが潔いほどだ。

《暗黒ドリケラトプラス》ATK／2400

《サンライズ・ガードナー》ATK／1500

葵LP2200→1500

「俺はこれでターン終了！」

状況を確認する。相手はほぼ初期ライフで場に攻撃力2400と1400の貫通持ちモンスター、一方こちらはライフが半分を切つた上に場にはたつた1枚の伏せカードあるだけ。

「俺のターン、ドロー！」

先程の表現だとこちらが圧倒的不利にも見えるが、相手には手札と墓地発動力カードは無く、こちらには豊富な手札がある。それでもどうしようもない時もあるが、今回はそういうではないようだ。

「手札の《樹海の射手》の効果を発動！ 墓地に通常モンスターが二体以上存在する時、このカードを手札から特殊召喚できる！ そして《樹海の射手》を生け贋に、《魔族召喚

『魔族召喚師』を召喚!』

『魔族召喚師』ATK／2400

冥界の魔王ハデスを彷彿とさせる悪魔の召喚師があらわれた：見た目が明らかに悪魔族だが、こいつはれつきとした魔法使い族だ。

「さらに手札から装備魔法『スペルヴイス』を『魔族召喚師』に装備する。『スペルヴイス』を装備したデュアルモンスターは再度召喚状態となる！」

「え、わざわざ装備しなきやいけないなんて二度手間…」

「二度手間っていうな！」

「ひつ！ ゴ、ごめんなさい…」

まつたく、今回はせつかく召喚権を使わずに再度召喚したというのに、これでも二度手間というのか、まつたくもってけしからん！

「再度召喚された『魔族召喚師』の効果を発動！ 手札もしくは墓地から悪魔族モンスターを一体特殊召喚できる！ 蘇れ『シャドウ・ダイバー』！」

『シャドウ・ダイバー』ATK／1500

悪魔の召喚師が髑髏のついた杖を一振りすると、青い魔法陣が現れ、そこからロープの男が再び現れた。さて、これでフィールドは整つた。

「バトル！ 『シャドウ・ダイバー』で『猛進する剣角獣』を攻撃！ リツピング・フロム・

シャドウ!」

『シャドウ・ダイバー』ATK／1500

『猛進する剣角獣』ATK／1400

小原LP3900→3800

「続いて、『魔族召喚師』で『暗黒ドリケラトプラス』を攻撃！ スペル・オブ・ハデス！」
「む、迎え撃て！ 『暗黒ドリケラトプラス』！」

『魔族召喚師』ATK／2400

『暗黒ドリケラトプラス』ATK／2400

『魔族召喚師』がフィールドを離れたことにより、『魔族召喚師』の効果で特殊召喚された『シャドウ・ダイバー』は破壊される

これでお互いにモンスターはいなくなつた。しかし、これで終わりではない。むしろここからが本番だ。

『スペルヴィス』の効果発動！ 表側表示のこのカードが墓地に送られた時、墓地の通常モンスターを一体特殊召喚する！ 『魔族召喚師』を特殊召喚！

『スペルヴィス』は数あるデュアルサポートカードの中で非常に強力なカードだ。即座に再度召喚状態にする効果ももちろん強力だが、この蘇生効果はさらに恐ろしい。なにせ強制効果であるため、タイミングを逃さないのだ。

おかげでこのように追撃につかつたりもできる。

『魔族召喚師』でプレイヤーに直接攻撃！ もう一丁！ スペル・オブ・ハデス！』

《魔族召喚師》 ATK／2400

小原 LP 3800→1400

「リバースカードオーブン！ 《正統なる血統》！ 墓地から通常モンスター扱いの《シャドウ・ダイバー》を攻撃表示で特殊召喚！ そしてプレイヤーに直接攻撃！ トドメのリッピング・フロム・シャドウ！」

「うわあああ」

《シャドウ・ダイバー》 ATK／1500

小原 LP 1400→0

「葵！」

「十代が駆け寄ってきた。俺としては少し余韻に浸りたかったのだが、この騒がしい男にとつては関係ないようだ。」

「十代、遅ればせながらだけど、昇格おめでとう」

「おう、サンキュー！ 葵もいいデュエルだつたぜ！」

「そりや俺も負けてられないからな。十代と三沢もだけど、翔も勝つてたみたいだしな」

入学試験の筆記で二位以下に圧倒的点差をつけての堂々の主席であり、実技でも知識を活かした臨機応変な戦術を使いこなす三沢は、ブルー生にも引けを取らないほどの実力者だ。勝つのは当然とも言えるだろう。

一方翔は「と、今の所は自分のカードのテキストすら読んでいない時があるなど、正直なぜそれでアカデミアに合格できたのかと思うことも多々有るが、アカデミアで名高いカイザーの弟である。ポテンシャルは充分だといえるだろう。」この言い方をすると翔は確実に拗ねるので、間違つても口には出さないが。

「そうだ、祝勝会って言うにはささやかだが、ドローパンでよかつたら奢ろうか。ついでだし三沢と翔も一緒に」

ちようど一ヶ月分の引換券があることだし、こちらとしてもちよどいい。それも毎日3個以上も食べるようく計算してあつたのか、100枚も封筒に入つていたせいにまだ半分どころか1/4も使えていない。

「おお、ラッキー！　じゃあ俺は翔を探してくるぜ！」

その後二人と合流し、祝勝会という名目でドローパンを食べながら大いに盛り上がった。十代はどうがらしパンを美味しそうにたべており、翔はキムチパンで泣きそうになっていた。三沢はトマトパン、俺はにんじんパンだった。

試験直後に全員が赤いパンというのは赤点を連想させて翔が嘆いていたが、他のメン

バーは一切気にしていなかつた。むしろ翔以外は好みのパンが引けて、これなら絶対に大丈夫と言うぐらいである。

：余談だが、イエローに昇格したはずの十代は「赤が好き」という理由でオシリスレッドに残ることを決めたらしい。おかげで余計にブルーやイエローの生徒達から白い目で見られることになつたのだが、仕方が無いと思う。

6. 初めてのタッグっていうなっ！

試験からしばらくして、十代と翔が退学の危機らしい。

唐突すぎてしばらく思考が停止してしまったのだが、どうやら十代、翔が立ち入り禁止の廃寮を探検したことがアカデミアにばれて、十代と翔が組んで制裁タッグデュエルを受ける事となつたらしい。

先日夜中にシハーブが『闇の力を感じますぞ！』と喚いていたのだが、タイタンが闇に飲まれたことだつたのか。生若本ボイスは是非聞きたかつたが、流石に夜中の怪談や廃寮探検には招かれなかつたようだ。

それはさておき、【ビーコロイド】と【E・HERO】ではシナジーがほぼ無いに等しい。そこで明日に迫つたタッグデュエルの練習をしようということになつたのだが、名も知らぬレッド生と明日香さんではタッグの釣り合いが取れず練習にならなかつたそつだ。

そこにたまたま通りかかつた俺なら、イエローでもそれなりに実力があつて明日香さんと組んでも問題なさそうなので協力して欲しい、ということだつた。
「事情は理解したんだが、タッグ用の調整とかした方がいいんじゃないかな？」

なにせ今のデツキはシリーズモンスター以外のデュアルとサポートをあるだけ突つ込んだハイランダー構成である。…正直なところ、使いにくいくことこの上ない。これを期にデツキをテーマごとに分割してもいいかもしないな。

『それならば、最初からデツキを分ければよろしかつたのでは?』

それをいうな。元の世界でも【デュアル】は使つてたけど、《ヘルカイザー・ドラゴン》持つてなかつたし使つてみたかつたんだよ。それだけなら【炎デュアル】や【フロフレデュアル】にしてもよかつたけど、全種類使えると来たらいつそロマンあふれるオールスターにしたくなるだろう。

『ご主人様は時折、自分から手間がかかる方向へと進むことがありますな』

「ん?なんか変な声が聞こえるんだな」

「ああ、シハーブって言つて、葵の従者:だつけ?」

あ、もうはつきりと見えるようになつたのか。これ以上はごまかせそうにないし、十代には紹介しておくか。

「あつてるぞ、”ランプの魔人”のシハーブだ。一応俺に仕えている…らしい。シハーブ、俺や十代以外にも姿見せる事つてできるか?」

『ふむ、そうですな…フンッ!…これでどうですか?』

シハーブが気合いを入れたようだが、元から見えてる俺としては見た目に変化はみ

られない。強いて言うなら若干香木の香りが立ちこめたぐらいだろうか。

「キヤツ！あ、葵の後ろにうつすらと紫色の人間が…」

「ヒイ！お、お化け？！」

「む、紫のお化けなんだな…」

一応成功のようだ。しかし半透明に見えているようで、お化けだなんだと言われていた。俺は最近慣れてきたが、肌が紫な上に顔もけつこうクドいので、インパクトが大きいのだろう。

「怖いみたいだし、やめておくか」

『…そのようですな』

シハーブがしよぼくれているが、翔が俺から地味に距離を取ろうとしているのに気付いた。よく考えたら俺が何かに取り憑かれているように見えるのか…実際似たような物だが。

「ああ、それでデツキの話だけど、どうしよう？」

「今からイエロー寮に戻つて調整してもらうんじや時間もかかるし、そのままでいいんじやないかしら。葵がやつた時みたいに生徒が相手なら、似た状況になると思うしね」まつたくもつて正論である。原作通りならば相手は迷宮兄弟だとは思うのだが、イエロー寮に行つて戻つてくる頃には夕飯の時間となつてしまつていてるだろう。それでは

結局練習出来ずに意味が無くなってしまう。

「了解、それならお言葉に甘えて、このままでやらせてもらおう」「よっしゃあ！ 行くぜ！」

タッグデュエルルール

ライフは共通で8000

最初のターンは全員攻撃できない。

味方プレイヤーも相手として対象指定ができる。

パートナーのカードをコストとして使用できるが、攻撃宣言や効果の発動はできな
い。

その他ルールは感覚で

「「「デュエル！」」」

「先攻はもらつたあ！ 僕のターン、ドロー！」

十代がしつと先攻を持つてつたな。まあいいけどさ。

『《フェザーマン》を攻撃表示で召喚！ カードを一枚伏せてターンを終了だ』
《フェザーマン》ATK／1000

「次は私のターンね、ドロー！」

どうするかとか何も決めてないはずなのに、またもや当然のように先攻をもつていかれてしまった。別段問題は無いのだが、せめて一言断りを入れてもらえると嬉しかった。

「私は『ブレード・スケーター』を攻撃表示で召喚！ カードを2枚セットしてターンを終了よ」

『ブレード・スケーター』 ATK／1400

「僕のターン、ドロー！ 『ジャイロイド』を守備表示で召喚して、ターン終了だよ」

『ジャイロイド』 DEF／1000

「俺のターンだな、ドロー。『フェデライザー』を守備表示で召喚。カードを2枚セットしてターンを終了！」

『フェデライザー』 DEF／1100

さて、これで場が一巡りしてそれぞれのモンスターが出そろった形だ。十代と明日香さんが攻撃、翔と俺が守備というのが性格が出ていてる気がしなくもない。

「俺のターン！ ドロー！ よし、このターンから攻撃できるんだよな。俺は手札から『融合』を発動！ 手札の『バーストレディ』と場の『フェザーマン』を融合！ 『E.H E.R.O フレイム・ウイングマン』を融合召喚！」

『フレイムウイニングマン』 ATK／2100

さつそく十代のフェイバリットカードの登場だ。しかし十代とは初デュエルなんだ
が、開始2ターンで素引きの融合つてすごいな…これが主人公補正という奴なのだろう
か。

「バトルだ！《フレイム・ウイングマン》で《ブレード・スケーター》に攻撃！ フレイ
ムシユート！」

「買カード発動！《ドゥーブルパッセ》！ この効果で《フレイムウイングマン》の攻撃
を直接攻撃にして、《ブレード・スケーター》で十代に直接攻撃！」

《フレイムウイングマン》 ATK／2100

明日香・葵 LP 8000→5900

《ブレード・スケーター》 ATK／1400

十代・翔 LP 8000→6600

融合素材のためにライフを省みない気持ちは分かるが、何故そのカードをセレクトし
たのか？そして何故十代はそんなに嬉しそうなのか。

「流石にそう簡単にやらしちゃくれねえか。俺は《フレンドツグ》を守備表示で召喚し
て、ターン終了！」

《フレンドツグ》 DEF／1200

「私のターン！ ドロー！ 私は《融合》を発動！手札の《エトワール・サイバー》と場

の『ブレード・スケーター』を融合! 『サイバー・ブレイダー』を融合召喚!』

『サイバー・ブレイダー』ATK/2100

「行くわよ十代! 『サイバー・ブレイダー』で『フレイム・ウイングマン』に攻撃! 『サイバー・ブレイダー』は相手フィールド上のモンスターが2体のとき、攻撃力が倍になる!」

『サイバー・ブレイダー』ATK/2100→4200

二人ともどうしてそんなにさくさくと融合できるのだろう。それと懸念していたことだが、『サイバー・ブレイダー』の効果は対象プレイヤーとの一対一で計算されるようだ。翔と十代の二人分のフィールドで計算すると思っていたのだが、相手という括りだと味方である俺も合わせてしまふ可能性があるからだろうか?

「くつ、罠発動! 『ヒーローバリア』! 『サイバー・ブレイダー』の攻撃を無効にする!』

「そう、なら私はこのままターン終了よ。」

「僕のターン、ドロー!」

二人だけでかなり白熱しているので、もうタッグデュエルでなくとも良いと思つていたのは俺だけだったようだ。

「僕は『パトロイド』を攻撃表示で召喚! そして効果を発動して、明日香さんのセツトカードを1枚見せてもらうよ!」

『パトロイド』ATK／1200

「私のセットカードは『ホーリーライフバリア』よ」

「おお、翔が『パトロイド』の効果を発動している…ちゃんと学習したんだな。それにしても、さつきの攻撃をそのカードで防御するのではダメだったのだろうか。」

『ホーリーライフバリア』は「相手から受ける全てのダメージを0にする」としか書いていないためわかりにくいが、実はモンスターの戦闘破壊も防ぐことができる。それともアニメ効果では破壊されるのだろうか。

「なら僕は『パトロイド』で葵くんの『フェデライザー』を攻撃！ シグナルアタック！」

『パトロイド』ATK／1200

『フェデライザー』DEF／1100

「戦闘によつて破壊されたことで『フェデライザー』の効果発動、デッキからデュアルモンスターを墓地に送り、1枚ドローする」

ここで間違つたカードを墓地に送つてもデュエルディスクが自動識別してエラーを吐き出すため、カード名は宣言しなくとも墓地に落とせる。公開情報とはなんだつたのか。演出の都合上原作にはよくあることだし、こちらとしても好都合だから気にしないようにする。

「僕はターン終了だよ！」

「俺のターン、ドロー。《シャドウ・ダイバー》を攻撃表示で召喚。そして《パトロイド》を攻撃」

例によつて俺の影から出てきて、《パトロイド》を切り裂いてから帰つていく悪魔。フィールドにいるフードの男はいつたい何者なのだろうか。

《シャドウ・ダイバー》ATK／1500

《パトロイド》ATK／1300

十代・翔LP6600→6400

「さらにカードを1枚伏せてターンを終了」

「俺のターン！ ドロー！ 《フレイムウイングマン》で《シャドウ・ダイバー》に攻撃！

フレイムシユート！」

「リバースカードオーブン、《デュアル・ブースター》！ 《シャドウ・ダイバー》に装備して攻撃力を700上升する。返り討ちだ」

「うげつ」

フィールドに発電機のようなものが現れ、俺の影にいた悪魔に力を供給する。悪魔は《フレイムウイングマン》を切り裂いたあと影に戻つたが、悪魔の部分が白く光つており全く隠れることができていない。それでいいのだろうか。

《フレイムウイングマン》ATK／2100

《シャドウ・ダイバー》ATK／1500→2200

十代・翔 LP6400→6300

「俺はカードを1枚伏せてターンを終了だ」

「私のターン、ドロー！《サイバー・ブレイダー》で十代の《フレンドツグ》に攻撃！」

《サイバー・ブレイダー》は地面をあたかもスケートリンクかのように滑つて移動し、そのまま《フレンドツグ》を蹴り飛ばした。動物虐待という単語が頭をよぎったが、お互いモンスターなのでそうではないはずだ。

《サイバー・ブレイダー》ATK／2100

《フレンドツグ》DEF／1200

「くつ《フレンドツグ》の効果発動！墓地の《融合》と《フェザーマン》を手札に加え るぜ！さらに《ヒーロー・シグナル》を発動して、デッキの《クレイマン》を守備表示で特殊召喚だ！」

《クレイマン》DEF／2000

「私はこのままターンエンドよ」

「僕のターン、ドロー！手札から《融合》を発動！手札の《スチームロイド》とファイ ルドの《ジャイロイド》を融合！《スチームジャイロイド》を攻撃表示で召喚！」

《スチームジャイロイド》ATK／2200

：「これは俺も融合しなければならない流れなのだろうか。だが融合が手札に無いし、融合主体というわけでもない。素材はいくらもあるのだが：」

「《スチームジャイロイド》で明日香さんの《サイバー・ブレイダー》に攻撃！」
《サイバー・ブレイダー》は相手がコントロールするモンスターが1体のみの時、戦闘によつては破壊されないわ。パ・ド・ドウ！」

「それでもダメージは受けてもらうつす！」

《サイバー・ブレイダー》煙に巻かれていたが、突進は受け流したようで滑りながら後退してきた。

《スチームジャイロイド》ATK／2200
《サイバー・ブレイダー》ATK／2100

明日香・葵 L.P. 5900→5800

「カードを1枚伏せて、ターン終了！」

「俺のターン、ドロー。《シャドウ・ダイバー》を再度召喚する」

「お、出たな、葵の再度召喚！ どんな効果を見せてくれるんだ？」

「ういえば対戦相手からこんなにワクワクした目で見られたのは初めてだ。

「二度手間」といわれてそれに突っ込むのが定番になつてきたので、なんとなく調子が狂う。

「再度召喚した《シャドウ・ダイバー》の効果発動、自分フィールド上の闇属性レベル4以下のモンスター1体はこのターン相手に直接攻撃することができる！」

「そんな！」

《シャドウ・ダイバー》で十代に直接攻撃！』

俺の影に潜ったはずの悪魔は、十代の影を白く光らせながら勢い良く飛び出した。そのままニヤリと笑つて腕を振り下ろして攻撃し、今度は十代の影に潜ったと思えば俺の影に戻つてきただようで、俺の影が白く光っていた。

《シャドウ・ダイバー》ATK／2200

十代・翔LP 6300→4100

「ライフ逆転だな。カードを1枚伏せてターンを終了」
「へへっ、ワクワクしてきたぜ。俺のターン！ ドロー！」

「俺は、《融合》発動！ 手札の《スパークマン》と場の《クレイマン》を融合！ 《E.H E.R.O サンダージャイアント》を融合召喚！ そして効果発動！ 元々の攻撃力がこのカード以下のモンスターを1体破壊するぜ！ 俺が破壊するのは明日香の《サイバー・ブレイダー》だ！ 行け、サンダージャイアント！ ヴエイパー・スパーク！」

そういえばアニメの初期は手札コストが無い代わりに、召喚時効果だつたな。
OCG効果だつたとしても1ターンに1度の制限があるので全滅させられることは

なかつたが、次の十代のターンで酷い目にあうことは想像に難くない。

「《サンダージャイアント》で明日香に直接攻撃！ ボルティック・サンダー！」
「リバースカードオープン《ホーリーライフバリアー》！」 手札を一枚捨ててこのターン
の破壊とダメージは無効になるわ！」

明日香さんめがけて雷が放たれたが、白いバリアがそれを防いでいた。

雷が迫つてくるのに怯むどころか、瞬き一つしない明日香さんは男前だと思う。

「ちえ。俺はカードを一枚伏せて、ターンエンド」

「それじゃあ私のターンね。ドロー！ 私は《サイバー・チュチュ》を召喚！ このモン
スターはこのカード以下の攻撃力を持つモンスターがいなければ直接攻撃ができるわ
！ 《サイバー・チュチュ》で十代に直接攻撃！」

効果による直接攻撃なので十代でも翔でもよかつたのだろうが、二人揃つて十代を
狙つてしまふのは親しみやすいからだろう。そういうことにしておく。

《サイバー・チュチュ》 ATK／1000

十代・翔 LP 4100↓3100

「私はカードを1枚伏せてターン終了よ」

「僕のターン、ドロー！ 《スチームジャイロイド》で葵くんの《シャドウ・ダイバー》に
攻撃！」

相打ち覚悟で翔が攻撃してくるようだ。流石に2200の直接攻撃は脅威といふことだろう。

「おつと、攻撃宣言時にリバースカードオープン、『正統なる血統』。これで墓地の通常モンスターを1体蘇生させてもらうぞ」

「構うもんか！　いけえ！　ハリケーンスマーカー！」

「迎撃だな、リツピング・フロム・シャドウ！」

『スチームジャイロイド』ATK／2200

『シャドウ・ダイバー』ATK／2200

白く光る悪魔が『スチームジャイロイド』を攻撃を加えるが、『スチームジャイロイド』は止まらずにそのままフードの男に突撃する。

土煙が晴れるとそこに立っていたのは、高潔さを示すかのような純白に燃えるような

紅をあしらつた全身甲冑の騎士だつた。

『フェニックス・ギア・フリード』ATK／2800

「ここで最上級モンスターだつて！」

「そんなモンスターいつの間に：そうか、『フェデライザー』か！」

「正解、さらに『デュアル・ブースター』の効果で既に再度召喚状態になつてゐるぞ」

まさかこの効果を使うことがあると思わなかつた。このカードが破壊される頃には、

すでに再度召喚しているにしろ、殲滅されているにしろ、再度召喚されていないデュアルモンスターが存在しないことの方が多いので、この効果を使う機会というのはあまりないのだ。

「うう、僕は『サイクロイド』を守備表示で召喚してターンを終了するつす…」

『サイクロイド』DEF／1000

「よしきた俺のターン、ドロー！『竜影魚レイ・ブロント』を攻撃表示で召喚！そしてバトルだ！『フェニックス・ギア・フリード』で『サンダージャイアント』を攻撃！フェニックス・スラッシュ！」

十代・翔 LP 3100→2700

「『竜影魚レイ・ブロント』で十代に直接攻撃！」

「罠カード『ヒーロースピリツツ』！ヒーローが戦闘によつて破壊されたバトルフェイズ中に発動出来る！相手モンスターからの戦闘ダメージを0にする！」

「追撃ならずか。カードを1枚伏せてターンを終了する」

「俺のターン！ドロー！『バブルマン』を召喚！自分フィールド上に他のカードが無い時、カードを2枚ドロー！：よし、『強欲な壺』を発動！さらに2枚ドロー！」

『バブルマン』ATK／800

「出た強欲な泡男！」原作効果のこいつは、手札の枚数に関係なくフィールドのカード

さえなければドロー効果を使える。流石に特殊召喚効果は手札1枚の時限定だが、十代に手札補充をさせる危険性を考えるとそんな場合じゃない。

「おつと、ここで『フェニックス・ギア・フリード』の効果が発動する。相手が魔法カードを使った場合、墓地の『デュアルモンスター』を一体場に特殊召喚することができる。『シャドウ・ダイバー』を攻撃表示で蘇生!」

『シャドウ・ダイバー』ATK／1500

不死鳥の騎士が剣を掲げると、騎士の隣に炎の渦巻きが現れて中からフードの男が降り立ち、そして悪魔がひよいつと俺の影から顔をだした。相変わらず悪魔とフードの男の関係性がよくわからないが、今は考えないようにしよう。

「そんな！ モンスター蘇生効果だつて!?」

「そんな効果を持つてたのか！ クゥ、燃えるぜ！ 俺はさらに『天使の施し』を発動！ 3枚ドローして、手札から2枚墓地に捨てる」

「さらに手札から魔法カード『オーオーバーソウル』！ 『スパークマン』を特殊召喚！ そして『融合』発動！ 場の『スパークマン』と『バブルマン』、さらに手札の『フェザーマン』を融合！ 『E・HERO テンペスター』を融合召喚！」

『E・HERO テンペスター』ATK／2800

「おつと、残念ながらそいつには退場してもらおう。リバースカードオープン、『デュア

ルスパーク》！《シャドウ・ダイバー》を生け贋に、《テンペスター》を破壊して一枚ドロー！

「まだまだあ！俺は通常魔法《二重召喚》を発動！これでこのターン俺はもう一度通常召喚することができる！」

「そして手札から《ホープ・オブ・ファイフス》を発動！墓地の《フェザーマン》、《バーストレディ》、《クレイマン》、《スパークマン》、《バブルマン》をデッキに戻して、俺の手札、フィールドに他のカードが存在しない時、デッキから3枚ドローする！」

まだドローソースを持つていたことに驚きを隠せない。しかも《二重召喚》を先に使うことで手札を使い切って追加ドローまでする始末だ。

「だけど魔法カードを発動したから《フェニックス・ギア・フリード》の効果発動だ。《シャドウ・ダイバー》を攻撃表示で特殊召喚！」

《シャドウ・ダイバー》ATK／1500

「よし、《E－エマージェンシーコール》を発動！《バブルマン》手札に加えて、そのまま攻撃表示で召喚だ！カードを2枚ドローするぜ！」

《バブルマン》ATK／800

こいつ、1ターンの間に何枚ドローするつもりなんだろうか。それさつき戻したカードをしつかりサーチして再利用する辺り、いつも清々しい程のドロー運だ。

「手札から『ミラクルフェュージョン』を発動！ 墓地の『ワイルドマン』と『エッジマン』を除外して融合！」

「そんなカードいつの間に…つて二枚も捨てていたし、『天使の施し』だよな。」「おう！ 『E・HERO ワイルドジャギーマン』を融合召喚！」

『E・HERO ワイルドジャギーマン』ATK／2600

「しつかし凄まじいラッシュをかけてきたな…それでも『ワイルドジャギーマン』じゃ、『フェニックス・ギア・フリード』には届かないな」

たかが200の差だが、されど200の差である。『ワイルドジャギーマン』にはパンプアップ効果はないし、『フェニックス・ギア・フリード』にデメリット効果があるわけでもない。それぞれの効果ではこの差は覆されない。

「へへっ焦るなって、お楽しみはこれからさ！」 魔法カード『H—ヒートハート』を発動

！ エンドフェイズまで『ワイルドジャギーマン』の攻撃力を500ポイントアップして、守備モンスターを攻撃した時その守備力を上回った分だけ相手にダメージを与える！

「うわあ…これで『フェニックス・ギア・フリード』が突破されることが決定した。伏せてある『フォース・リリース』じやせいぜいダメージ軽減が限界だし、明日香さんの伏せカードに期待せざるをえないんだが…どうなるんだろう。」

「さらに、『R—ライトジャステイス』を発動！俺のフィールド上に存在するE・HEROの数だけ魔法・罠を破壊するぜ！俺のE・HEROは2体！明日香と葵の伏せカードを破壊だ！」

「ここで伏せ除去だと!? リバースカードオープൺ！『フォース・リリース』！この効果でフィールド上のデュアルモンスターは全て再度召喚状態となり、『竜影魚レイ・ブロント』の攻撃力は2300となる！」

『竜影魚レイ・ブロント』 ATK／1500→2300

ちなみに明日香さんの伏せは『攻撃の無力化』だった。この状況で除去されたのは非常に痛いが、こればっかりはどうしようもない。計算上は総攻撃されてもまだ残る訳だし、明日香さんのターンに期待しよう。

「そして、『ヒーローフラッシュ!!』発動！墓地の『H』『E』『R』『O』の4枚を除外して、デッキから『フェザーマン』を特殊召喚するぜ！そしてこのターン、E・HEROの通常モンスターは直接攻撃することができる！」

驚異的なドロー運を持つ十代が『E』を使つた時点で実は予想が付いていたことだが、本当にやりやがった。しかし後半の効果はこちらのモンスターが全滅するので、蛇足になつてしまつたな。

「行くぜ、バトル！『ワイルドジャギーマン』は相手の全てのモンスターに攻撃する事が

できる！ いつけえ！ インフィニティ・エッジ・スライサー！」

『ワイルドジャギーマン』 ATK／3100

『フェニックス・ギア・フリード』 ATK／2800

『竜影魚レイ・ブロント』 ATK／2300

『シャドウ・ダイバー』 ATK／1500

『サイバー・チュチュ』 ATK／1000

明日香・葵 LP 5800→5500→4700→3100→1000

「トドメだ！ 『フェザーマン』で直接攻撃！ フェザー・ブレイク！」

明日香・葵 LP 1000→0

「ガツチャ！ 楽しいデュエルだつたぜ！」

「二人ともありがとうっす」

緊張がなくなったように爽やかな笑顔でお礼を言う二人。十代に関しては最初から緊張もなにも無かつたように思うが、翔は肩の力がいい具合に抜けていた。

「私も当事者なんだから当たり前じやない」

「そうだな、感謝するんだつたら当日勝つてくれたらしいさ」

「俺は手伝うことはできないけど、応援してるとんだな」

十代なら多少足を引っ張られたところで逆に絶好調になるだけだと思うので、それほど心配はしていない。

「そろそろ寮で夕食の時間だし、俺はそろそろ寮に戻らせてもらおう」
「おう！ ジャあな！」

制裁デュエル当日、十代と翔は迷宮兄弟に勝利して無事に退学を免れることができた。しかしながら罰は罰ということで、結局反省レポートを書くことになつていた。鮫島校長は公正な人物のようで、明日香さんにも密かにその課題が出ていたらしい。授業中にぐつたりしている面々を見て、起こさずにそつとしておくことにした。

7・ビツグバンつていうな！

レッドとイエローによる野球の交流試合、8回裏ツーアウトで迎えた俺の打順。ピツチャ一は遊城十代、登板してからは驚異的な速球で多くの三振を奪っている。俺もここまで回さっぱり打てず、今もツーストライクまで追いつめられてしまった。

「へへっ、また三振をもらうぜ！」

「仕方がない、十代は右投げだよな？ 俺も右利きだから右打席に入っていたが：スイッチ、ここからは左打席だ」

「何！」

「俺はどつちの打席でも感覚に差はないからな。終盤だし、遠慮はなしだ」

「面白え！ 行くぜ葵！」

「来い！ 十代！」

十代の性格を反映するように、ストライクゾーンに向けてまっすぐ投げられた白球。

予想通りのコース、予想通りの速度、それに合わせて勢いよく振られたはずのバットはそのまま空を切り、ミットからは軽快な音が響いた。

「ストライク！ バツターアウト！ チエンジ！」

感覚が変わらないといったのは本当である。どちらにしても打てないため、感覚も何もあつたものじやないとも言う。結局この回も点が取れず、レッドチームに3点リードされたまま9回表を迎えることとなつた。

「かつとばせー！ 十代！」

そして現在2アウト1、2塁のピンチで十代の打順が回つてきてしまつた。レッド生の応援が体育館に響く。ピッチャーとしてもバッターとしても優秀な十代は、この状況ではまさしくヒーローになれるだろう。

「よし！ まかせとけ、ここで一発打てば、1点、2点、3点追加で一気に決まりだぜ！」

こちらのピッチャーは疲れもあつて、制球が甘くなつてしまつてている。こんなときにはピッチャーをできる奴が他にいれば、そんな益体もないことを考えていると今までこの場にいなかつた男の声が聞こえた。

「その試合待つたあ！」

ラーアイエロー学年主席こと、三沢大地だ。ほとんどの生徒が気付かずにそのまま試合を始めてしまつたのだが、ここまで遅れるとは思わなかつたので先に始めて正解だつたのかもしれない。一体何故こんな大遅刻になつてしまつたのだろう。

「遅れてすいません、ついデツキ構築論に夢中になつてしまつて」

そんな理由で授業を大幅に遅刻しても許されるのは、ここがデュエルアカデミアだか

らだろう。このピンチの状況でこの男の登場は非常に心強い。レッドの英雄たる十代に対抗できるのは、イエローの豪傑たる三沢を置いて他にはいないだろう。

「ピッチャーベースだ！」

「ついに出てきたな、三沢！　しかしそ前の球もあそこに叩き込んでやる！」

「いや、俺の球は打たれはしない」

「お前一人称変えたのか。確かに初めてあった時は一人称が僕だった気がするんだが、熱くなっているせいだろうか。それとも入学二ヶ月経とうかというこの時期に高校デビューという奴だろうか。」

「君の攻略法はすでに計算済みだからだ。」

先ほど来たばかりなのに、いつの間に攻略法を計算していたのか非常に気になる。三沢のことだから伊達や醉狂ではないだろうし、瞬算というやつかもしれない。

「行くぞ、方程式バージョン1！」

三沢の投げた球は大きくぶれ、いくつにも分裂したような軌道を描きながらミットに収まつた。明らかに人間が投げられないような球を投げた三沢もすごいが、取りこぼさなかつたキヤツチャーもすごいと思う。

そのまま十代を空振り三振に討ち取られ、見事ピンチを凌ぎきつた。そして迎えた9回裏、イエローチームの攻撃。初めの二人が三振に討ち取られてしまつたのだが、そこか

ら十代が四球を連発してこれで満塁である。

一体何故かと思つたが、すぐにその理由に思い至つた。

「借りはきつちり返さないと行けないからな。三沢！ 今度こそお前を討ち取つてやる！」

つまりそういうことだ。わざわざ満墨のピンチを作り出してまですることなのかなは微妙な所だつたが、負けず嫌いな十代としては先ほど三振に討ち取られたりベンジを果たしたいようだ。

「それもできないことだな。キミを打ち崩す方程式ももうすでに出来ている。俺はその数式に乗つ取り、お前を叩くまでのこと。そして、負けたお前は俺の言いなりとなれ！」しつとペナルティを追加しているが、誰も気にした様子がない。デュエルにしろなんにしろ勝負事にペナルティや景品をつけたがる奴らが集まっているので、そういうものが当たり前という感覚なのかもしない。

一勝負だ！

「こい、一番！」

「行くぞ二番！ 嘰らえ！ 俺がヒーローだ！」

う。三沢の振るつたバットが十代の豪速球に直撃し、打球は脇の用具室へと吸い込まれ

て：誰かに当たつたようだ。跳び箱などが滅茶苦茶になつてしまつてゐる。

「あの、すみませーん」

十代と翔が駆け寄つた先にいたのは、クロノス教諭だつたようだ。左目にボールがめり込んでいるようにも見えるが、十代達に怒鳴つてゐるのを見る限り問題はなさそうだ。

「すみませーん、打つたのは俺なんですー」

「シニヨール三沢、シニヨール三沢といえば成績ダントツの生徒ナノーネ、万丈目の変わりに使える力モーーネ」

駆け寄つてきた三沢を見た途端、クロノス教諭が何やらぶつぶつと言い始めたがよく聞こえない。しかしあれだけ動き回つてもボールが落ちないだなんて、やはりめり込んでいるのかもしれない。

「あの、治療費俺持ちですか」

保健室を利用するなら治療費も何もないだろうが、もしもボールがめり込んでいるのなら島の外にある病院に搬送される可能性もある。

「ノンノンノン、優秀な生徒には寛容なのはこの学園デース。そのかわり…」

その言い方から察するに、ぶつけたのが優秀でない生徒だつたら治療費を請求していたようだ。そのかわり条件があるようだが、ちょっとした手伝いでもさせられるのかも

しない。気になるのでそつと聞くことに集中する。

「あ、お前達には関係ないノーネ！ シツシツシツ、さしすせシツー！」

聞き耳を立てようとしていたが、クロノス教諭に気付かれてしまったようだ。犬歯をむき出しにして唸るクロノス教諭に、十代と翔も一緒に追い出されてしまった。

三沢とクロノス教諭の話が終わつた後、イエロー寮に向かつて歩いている。十代には三沢に負けた罰ゲームということで、やつてもらいたいことがあるらしい。ついでに俺と翔も手伝つて欲しいということだが、いつたい何をするのだろうか。

「三沢つて野球上手いんだな」

「結局兄貴こてんぱんつすもんね」

「ふつ、秘訣はコレさ」

そういうつて三沢が見せたのは数式がびつしりと書いてあるバット・アカデミアの備品を勝手に持ち出したあげく、油性ペン落書きするとはなかなかの度胸だ。暗算では難しい計算だということはわかるのだが、他に書くものはなかつたのだろうか。

「俺が投げた球もすべて計算で編み出された配球だつたつてわけさ」

「へえ、そんなことができるのか」

「で、僕たちの罰ゲームってなに？」

「まあ、俺の部屋にはいってくれよ」

本の貸し借りなどは教室で行っているため初めて三沢の部屋に入つたが、計算式が壁中どころか天井にまで埋め尽くされている。天井や高い所にある式は、部屋の隅にある脚立を使って書いたのだろう。

「おれが思いつくままに書き留めた数式さ」

シュレッディングガーの猫、アボガド口の分子説、風が吹けば桶屋が儲かる確率式と次々と紹介されるが、初めの二つはまだしも最後の式に関しては証明をするために使用したデータは、いつたいどこから引用されたのかが非常に気になる。

「この星々の、ビッグバンの手伝いをしてもらいたい！」

これはもしや『ビッグバン・シユート』の出番なのだろうか。冗談でもそんな考えが浮かんだあたり、この世界に順応してきたのかもしれない。

「「これぞ！ ビッグバンだ！」」

他の三人が元気に叫んでいる通り、現在ビッグバンの真っ最中である。やつてていることは要するにペンキ塗りなのだが、部屋全体をやるには一人では手が足りなかつたので十代や俺に手伝いをさせることにしたようだ。

「始まりじやなくて終わりだから、むしろビッグクランチだけどな」

「まあ細かいことはいいじゃないか」

もちろん樺山教諭には許可をとつてあるそうだし、安全性を考えて塗料も水性のものをつかつてているのだが、いかんせん素人なので塗り方にムラがある。業者を呼んでやつてもらつた方がよかつたのではないだろうか。三沢がそれでいいなら構わないのだが。

ちよつとした事故によりペンキのかけ合いになつてしまつたが、おおむね問題なく塗装は完了した。共同浴場でそれぞれ汚れを落とし、全員揃つてイエロー寮の食堂に来ていた。

「わりーな！ 三沢！ 罰のはずだつたのにごちそうにまでなつてしまつて」「すごいごちそうつすよ！」

「それじやあじやんじやん喰つてくれ。いくらでもごちそうするぜ」「こんなもの誕生日にも出してもらつたことねえ！」

オシリスレッドの二人が食事に目を輝かせていて、ラーアイエローではその気になれば月一ぐらいでは食べることができるレベルの物だ。オベリスクブルーの食事をした日なんかには、驚きすぎて卒倒するんじゃないだろうか。

「そういえば、さつきクロノス教諭と何話してたの？」

「ああ、寮の入れ替えテストのことさ」

「部屋も綺麗にしたつてことは！」

「三沢、お前！」

「お前がレツド降格だつたらアカデミアに抗議ものだし、ブルー昇格か。おめでとう」「まだ、そうと決まつたわけじゃ」

しかしあの部屋は三沢が使う物とばかり思つていたのだが、ブルーから落ちてくる奴が踏んだり蹴つたりだな。ブルー寮から落ちてきて新しく入ることになつた部屋がペンキ塗りたてで、しかも素人仕事でかなり塗りムラがある。

「そうでしょ、そうでしょ！」

「入試のときだつて抜群に強かつたもんな！ オベリスクブルーに入るのは当然だぜ！
よかつたなー三沢！」

「よかつたよかつた」

ひとしきり喜んでから再び料理にがつつく十代と翔。

結局三沢は天井も床もペンキで塗りたくつたせいで寝る場所がなく、俺の部屋にもベッドをもう一つ運び込むスペースどころか予備の布団もないということでレツド寮の十代の部屋で布団を敷いて寝ることにしたらしい。

会場と時間は教えてもらつたので、明日はもちろん見物にいくつもりである。しかし三沢が昇格試験と聞いて、何かが頭に引っかかるのだが一体なんだつたか。

三沢より先に会場についてしまったのだが、そこにいたのはクロノス教諭と万丈目だつた。どうやら三沢の相手は万丈目だつたらしい。そこでようやく万丈目がアカデミアを放逐される話があつたことに思い至る。

「何故シニヨールがここにいるんでスーノ?」

周りに他の生徒もいないことから、ほとんど周知されていなかつたようだ。そんな状況で関係のない生徒がふらふらやつてきたら、疑問に思つて当然だろう。

とはいっても、特に後ろめたいこともないので正直に話することにする。

「三沢君が入れ替えテストを行うと聞いたので、見学に来たのですがまずかつたでしょうか」

「イイーエ、別に構いませんー！」

「ふん、せいぜい俺の華麗なデュエルをその目に刻み付けるといい。この万丈目準様の華麗なデュエルをな！」

許可も降りたことだし、間近で見るにしよう。観客席まで回つて座つていた方がいいだろうか。それならば足も疲れないし、ソリッドヴィジョンに巻き込まれないし、いい考えかもしれない。

待ち始めてからそれなりの時間が経ち、ようやく三沢がやつてきた。

十代や翔も一緒だが、記憶が正しければカードが海に捨てられる事件があつたはずだ。誰も濡れていないということは、回収はしていないみたいである。

「遅いーノネ、シニヨール三沢」

「とっくに尻尾を巻いて逃げ出したのかと思つたよ」

万丈目が人の悪そうな笑みを浮かべて、一段高い所から三人を見下ろしている。何とかと煙は高い所が好きという言葉がふと頭をよぎつたが、それを言つてしまふと観客席にいる俺はもつと高い所にいるので墓穴を掘ることになるだろう。

「それじやあ三沢の寮の入れ替えの相手つて…そうか、三沢のカードを捨てたのはお前か！」

「何の言いがかりだ十代、どうしておれが」

「本当にいいがかりかしら？」

「明日香、カイザー亮」

「私見てしまつたの、万丈目くんあなたが今朝海岸にカードを捨てた所を…やつぱり気になつて事情を聞きにきたけど」

「汚いぞ万丈目！やつぱりお前が！」

明日香さんが来た理由はよくわかつたが、カイザーは何故ここにいるんだろう。

明日香さんの付き添いだろうか。教室全体を見渡しているので、何かを探しているの

かもしだれない。

「黙れ！俺は自分のカードを捨てたんだ。それとも、そのカードに名前でも書いてあつたのか？」

「万丈目！」

あまり関係のない話だが、友人にカードの裏にペンで名前を書いてスリーブに入れていた奴がいた。こうすれば盗まれても安心だと豪語していたが、結局盗まれてしまつたら取り返すことは難しいこと上に売れなくなるため、結局すぐにやめたらしい。

「俺を泥棒呼ばわりした責任は取つてもらうぞ」

「いかがでしよう、このデュエルで負けた方が退学になるというのは」

「むちやくちやだ！ キーカードをなくした三沢のデッキは！」

「いや、そのデュエル、受けて立つ！」

退学なんて条件をあつさり受けるのがすごいな。負ければ高校中退という人生のリスクを背負うというのに一切の躊躇がないのは、負けることがないという自信の現れだろうか。

「心配をかけて悪かつたな、十代。捨てられたデッキは、調整用に使う寄せ集めのデッキ！ 俺の本当のデッキはここにある！ 見ろ！ 俺の知恵と魂をこめた6つのデッキを！」

そういうと三沢は制服の前を大きく開き、中のベストを見せつけた。ランボーよりも春先の変態が想像されてしまうのは、光の結社編での衝撃のせいだろう。

「風！ 疾きこと風のごとく！ 水！ 静かなること水のごとく！ 火！ 侵掠すること火のごとく！ 地！ 動かざること地のごとく！ 閻！ 悪の闇に光さす！」

三沢屈指の名シーンだけに、こちらに背を向けているのが残念だ。それにしても風林火山をモチーフにしているのは分かるが、闇と光だけやつつけな気がしてならない。

「む、6つのデツキだと!? そんなこけおどし、この俺の恨みの炎で焼き尽くしてやるわ！」

「ふ、決まった。お前を倒すデツキはこれだ！」

月一試験で十代とデュエルした時の万丈目のデツキが【VWXZY】だつたのを見ていたはずなのだが、それを一切考慮せずに台詞だけでデツキを決めてよかつたのだろうか。

「セツトアップ！ これがこけおどしのデツキなのかどうか、すぐにわかるぜ！ 万丈目！」

「来い、三沢！」
「デュエル！」

三沢の『ウォーターライアント』が『炎獄魔人ヘル・バーナー』ごと万丈目を洗い流してデュエルが終了した。これが計算通りというのなら、もはや未来予知の域だ。

「万丈目、お前はデュエリストとして」

「うるさい、お前が偶然水属性デッキを選んだために、俺は！」

「違うな、偶然なんかじやない。お前が教えてくれたんだ・・・デュエルの前に」

しかし今回の万丈目のデッキは、名前に地獄を連想させる単語があるカードという以外の共通点を見いだせないデッキである。むしろ『ウォーターライアント』が刺さつたことが驚きだ。

「つまり、デュエルの前からこの勝負は決まっていた。そして万丈目、海に捨てられていたカードは間違なく俺の物だ」

「何故分かる」

「それはこいつにメモしちまつたからだよ、数式を…これが証拠だ、こんな落書きのあるカードは世界につた一枚だけだろうからな。万丈目！ カードを大切にできないものは、デュエリストとして失格だぞ！」

カードに落書きをするお前には言われたくなかつただろう。それと気になつたこととしては、落書きしたカードはデュエルディスクに読み取られるのだろうか。後で三沢に聞いてみよう。

「シニヨール三沢、ユーのオベリスクブルーの編入を認めるノーネ」

「いえ、そのお誘いはお断りします」

「おう、何故ナノーネ」

「俺は、オベリスクブルーに入るなら、この学園でナンバーワンになつた時と、入学式のときに決めたんです」

俺たちの学年では万丈目がブルー男子最強のはずなので、名目上はナンバーワンを名乗つてもいいと思うのだが三沢はそれでは満足できないようだ。

「十代、オベリスクブルーに入るるのはお前を倒してからだ」

「よし、今すぐデュエルをやろうぜ！ 俺も、お前と戦いたくてうずうずしてたところさ」

むしろ十代は戦いたくてうずうずしていない時間が短いと思うのだが、戦いたい相手が決まっているのはあまりないことかもしれない。

「残念だが、今は駄目だ」

「え？ なんでだよ」

「ここにあるデツキはまだ完成していない。この6つのデツキはお前の【E・HERO】デツキを研究するための試作デツキに過ぎない」

「試作デツキ？」

「し、試作のデツキだと、俺は、そんなものに俺は負けたのか」

素直に【E・HERO】を構築してみた方がよっぽど研究になると思うのだが、それだとその構築を前提にして動いてしまうということで、あんな回りくどい研究の仕方をしているのかもしれない。

「多分、新しく塗つた部屋の壁が数式で埋め尽くされる頃にはできるだろう。お前の

【E・HERO】デツキを破る、俺の七番目のデツキが！」

「俺をまかすデツキだと？　おもしれえ！　そのときこそお前と勝負だ！」

「来い二番！」

「いくぞ、一番くん！」

二人がめらめらと燃えているのがわかる。それにしても数式を壁紙に直接書き込むのは、樺山教諭に注意されないのでだろうか。部屋替えがあつた時の手間が明らかに大きいと思うのだが、どうなんだろう。

「このままデーハ、誇り高きオベリスクブルーの生徒が減つてしまうノーネ」

クロノス教諭がまた何かつぶやいていたが、距離が遠いこともあつてあまり聞き取れなかつた。何やら嫌な予感がするので、今のうちにひつそりと退場したほうがいいかもしない。

「シニヨール代田、オベリスクブルー編入試験に挑戦するつもりはおありでスーノ？」

「え、あ、はい」

急にこちらに話題が振られて思わず返事をしてしまった。万丈目以外はこちらを見ており、驚いた顔をしているがやはり誰一人として気付いていなかつたようだ。座つていたのが十代達の後ろ方向だったというのも原因だろう。

「え、葵くん、いたの？」

「ずっといた！」

翔にしつれつと酷いことを言われた。誰もこちら向いてなかつたから、まつたく気付かれていなかつただけだ。決して空気になつたのではないと信じたい。そういうのは三沢の役目のはずだ。

「せつかくなノーデ、ワタシが直々に相手をするノーネ」

「いえ、ここは俺にやらせてください！」

カイザーがすごい勢いで食いついてきた。明日香さんを始め、周りにいる面々が少々引いている。理由は：恐らく『ヘルカイザー・ドラゴン』だと思われる。それ以外の理由はさっぱり思いつかない。

「わ、わかつたノーネ。それでーは、シニヨール代田とカイザーの試合を始めるノーネ」

観客席から決闘場まで降り、カイザーと向かい合う。

「入試デュエルで君を見て、一度デュエルをしたかつたんだ」

「学園最強のあなたに言われるなんて、光栄ですね」

「目は全然そう言つてはいないがな。俺を倒す気満々じやないか」

どうやらカイザーフィルターを通してみると、俺はやる気に満ちあふれたデュエリストのようだ。光栄と思つていはないのは事実だが、面倒な展開になつたというのが本音である。

「それではいくぞ！」

「デュエル！」

「先攻は譲ろう」

サイバーリー流でその台詞はずるいと思うのだが、譲られて遠慮するのもおかしな話だ。ここは先攻なら罠を張れると考えよう。：召喚反応のカードは入つていないので、大したことはできないのだが。

「ドロー。《サンライズ・ガードナー》を守備表示で召喚して、カードを2枚伏せる。ターン終了」

《サンライズ・ガードナー》DEF／500

今伏せたのは《スペシャル・デュアル・サモン》と《二重の落とし穴》だ。《サイバー！ドラゴン》來ても再度召喚すれば攻撃を防げるし、融合体で戦闘破壊されても《二重の

落とし穴》でまとめて潰せるのでなんとかなるだろう。

「俺のターン、ドロー。相手フィールドにのみモンスターが存在する時、俺は手札から《サイバー・ドラゴン》を攻撃表示で特殊召喚！」

《サイバー・ドラゴン》ATK／2100

やはり初手で握っていたか。下級アタッカーをことごとく粉碎するカードとして、長らくエースカードの座に君臨し続けた凶悪モンスター。自身が直接殴るだけでなく、機械族メタとしての働きや圧倒的パワーを持つ融合体、さらには手軽な星5モンスターのため、シンクロやエクシーズなどに使用されることで現在も活躍する姿を見ることができる。

「そして、魔法カード《エヴォリューション・バースト》を発動。相手フィールドのカード1枚を破壊する。俺はこの効果で《サンライズ・ガードナー》を破壊する」

再度召喚すれば耐えられる攻撃、そう判断したのであろう戦士は衝撃に備えて構えていたが、これは戦闘ではなく効果破壊だ。そのため機械の龍から吐き出された光線であつさり消し飛んでしまった。

「さらに《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚する。このモンスターはフィールド上に存在する限り、《サイバー・ドラゴン》として扱う」

《エヴォリューション・バースト》の効果で、このターン《サイバー・ドラゴン》は攻

撃することができない。それはこの《プロト・サイバー・ドラゴン》も同じはずだ。：
ここで《融合》が飛んできたら後攻ワンキルされてしまうのだが。

「手札から《フォトン・ジエネレーター・ユニット》を発動！ フィールド上の《サイバー・ドラゴン》2体を生け贅に、デッキから《サイバー・レーザー・ドラゴン》を攻撃表示で特殊召喚！」

《サイバー・レーザー・ドラゴン》 ATK／2400
「いくぞ、《サイバー・レーザー・ドラゴン》で直接攻撃！ エヴァオリューション・レーザーショット！」

機械で作られた龍の尾が開き、そこに光が収束する。そして強い光を感じると胸に熱を感じた。きっと心臓がレーザーで貫かれたのだろう。体感システムだつたので緩和されていたのだろうが、これが闇のデュエルだつたら即死しそうなものだ。

《サイバー・レーザー・ドラゴン》 ATK／2400

葵 LP4000→1600

「俺はカードを2枚伏せてターン終了」

初ターンから手札使い切るなんて大胆だな：こちらの伏せは無警戒なのだろうか。
それともこちらの魔法・罠が、デュアルモンスターに依存していることを知っているの
だろうか。前者ならまだしも、後者なら圧倒的に不利だ。

「俺のターン、ドロー」

うつかりしたら次のターンでそのまま負けかねないため、伏せが怖くても動くしかない。

「永続魔法《金剛真力》発動！ 相手フィールド上にのみモンスターが存在する時、手札からレベル4以下のデュアルモンスターを1体特殊召喚できる。その効果で手札から《未来サムライ》を特殊召喚！」

《未来サムライ》 ATK／1600

そこには青白い袴を着た侍が、凛としてたたずんでいた。未来的な侍だからか袴の下に着ているのは小袖ではなく機械的なインナーであり、腕にも機械的なサポートーと思われるものを着ている。

「そして、《未来サムライ》を再度召喚！」

身体の各所に付けられたケーブルが宙に浮き、ゴーグル型のディスプレイや帯の部分に取り付けられたモニターに文字がせわしなく表示される。持っていた刀の光が緑色から紫色に変わり、袴が真っ白に染まつた。

「《未来サムライ》の効果発動！ 墓地の《サンライズ・ガードナー》を除外し、表側表示のモンスター1体を破壊する！ 対象は《サイバー・レーザー・ドラゴン》だ！ 紫電一閃！」

侍が居合いの構えを取り、一瞬で距離を詰めるとそのまま跳躍し、一刀のもとに斬り捨てた。侍が着地すると同時に爆発する《サイバー・レーザー・ドラゴン》。

「未来サムライ」でカイザーに直接攻撃！ 来世斬！」

「リバースカードオープン！ 『リビングデッドの呼び声』！ 僕は墓地から復活させるのは《サイバー・ドラゴン》！」

《サイバー・ドラゴン》 ATK／2100

カイザーに直接攻撃を行おうと走り出した侍であつたが、突如目の前に現れた《サイバー・ドラゴン》を前に後退せざるを得なくなつた。

「攻撃を中断してメインフェイズ2に移行。カードを1枚伏せてターン終了」

「俺のターン、ドロー。バトル、《サイバー・ドラゴン》で『未来サムライ』を攻撃！ エヴァオリューション・バースト！」

《サイバー・ドラゴン》が吐き出した光線を斬ろうと刀を振るつた侍であつたが、徐々に押し返され、そのまま吹き飛ばされてしまつた。

《サイバー・ドラゴン》 ATK／2100

葵 LP1600→1100

「リバースカードオープン！ 『二重の落とし穴』！ 再度召喚されたデュアルモンスター

が戦闘によつて破壊された時、相手フィールド上のモンスター全てを破壊する！」

地震のような揺れがあり、《サイバー・ドラゴン》の足下が割れる。このまま落ちてくれれば反撃の目は充分ある。むしろそのまま削りきる勢いなのだが、果たしてどうなる。

「カウンター罠《トラップ・ジャマー》！ 罠の発動を無効にして破壊する！」

揺れが治まり、割れた地面も元に戻っていく。流石はアニメでも十代に負けたことがないカイザー、やはりそう上手くはいかないようだ。

「カードを一枚伏せ、ターン終了」

手札温存とかそういうものはないらしい。伏せが《融合》なんてブラフを張らていな限り、次ターン《サイバー・ツイン・ドラゴン》に殴り倒されるという悲劇は回避できたとも思うのだが。

「俺のターン、ドロー！ 《金剛真力》の効果発動！ 手札から《デュアル・ソルジャー》

を守備表示で特殊召喚！ さらに再度召喚してターン終了」

《デュアル・ソルジャー》 DEF／300

少年とも言うべき小さな体躯の人物が現れた。緑色の服で目以外を完全に隠しているため、戦士というよりも忍者にも見える。守備表示であるため、両腕をクロスして防御姿勢をとっている。

「俺のターン、《強欲な壺》を発動し、カードを2枚ドロー」

困ったときの壺とはよく言った物で、これで手札は2枚だ。正直普通の対戦ならそこまで怖くもないのだが、対戦相手がカイザーであり、場に《サイバー・ドラゴン》がいる状況で手札が2枚とくれば嫌な予感しかしない。

「そして、《融合》を発動！ 手札と場の《サイバー・ドラゴン》を融合し、《サイバー・ツイン・ドラゴン》を召喚！」

《サイバー・ツイン・ドラゴン》 ATK／2800

ダメージソースとしては《サイバー・エンド・ドラゴン》より強いと噂をされる《サイバー・ツイン・ドラゴン》が出てきた。この攻撃力で二回攻撃、しかもこれで《パワー・ボンド》や《リミッター解除》をすればダメージ合計が簡単に1万の大台に乗ることもある、パワーカードだ。

「バトル！ 《サイバー・ツイン・ドラゴン》で《デュアル・ソルジャー》を攻撃！ エヴオリューション・ツイン・バースト、第一打ア！」

《デュアル・ソルジャー》は1ターンに1度戦闘によつては破壊されない！

二つ頭の機械龍が忍者少年に向けて光線を吐くが、身軽な動きで光線をかわしておまけとばかりにプロペラ付きのダーツのような物を地面に投げつけた。

《デュアル・ソルジャー》の効果発動！ このカードが戦闘を行う場合、ダメージ計算

後にデッキからレベル4以下のデュアルモンスターを1体特殊召喚できる！ 『デュアル・ランサー』を守備表示で特殊召喚！』

『デュアル・ランサー』DEF／1400

プロペラ付きのダーツがあつた場所から光が立ち上がり、三叉に別れた突撃槍を両手に持つた魚人が現れた。色合い等が少しカサゴっぽくもみえるが、顔つきは精悍である。

「厄介な効果だな、ならばもう一度『デュアル・ソルジャー』に攻撃！ エヴオリューション・ツイン・バースト、第二打ア！」

『デュアル・ソルジャー』の効果は戦闘で破壊されても発動する！ 『炎妖蝶ウイルプス』を守備表示で特殊召喚！』

『炎妖蝶ウイルpus』DEF／1500

二度目は避けられなかつたようで忍者少年は撃ち落とされてしまつたが、落ちたプロペラダーツのあつた場所からは光が立ち上がり、炎のような紅色をした蝶が飛び立つた。

「なら俺はこれでターンを終了しよう」

「俺のターン、ドロー！」

せつかくデュアルモンスターが展開されたのだし、このチャンスを活かさない手はない

い。ラッシュをかけることができれば、充分ライフを削りきることもできるだろう。

「いくぞ、《炎妖蝶ウイルプス》を再度召喚！」

再度召喚すると同時に燃え上がる蝶。火の粉なのか鱗粉なのかは分からぬが、紅く光つて幻想的な光景だ。

《炎妖蝶ウイルプス》の効果発動！ このカードを生け贋に捧げることで、墓地のデュアルモンスター1体を再度召喚された状態で特殊召喚する！ 僕が呼び戻すのは《未来サムライ》！」

《未来サムライ》ATK／1600

燃え上がる蝶が地面にとまると一際強い炎が立ち上がり、中から白い袴の侍が現れた。そして手に持つていた刀を振ると、先ほどまで侍を覆っていた炎が消え、小さな火の粉が舞うのみとなつた。

《未来サムライ》の効果発動！ 墓地の《デュアル・ソルジャー》を除外し、《サイバー・ツイン・ドラゴン》を破壊する！ 紫電一閃！』

「リバースカードオープン《融合解除》！ 《サイバー・ツイン・ドラゴン》の融合を解除して、墓地の《サイバー・ドラゴン》2体を守備表示で特殊召喚する！」

《サイバー・ドラゴン》DEF／1600

逃げられた。あらかじめ《融合解除》を伏せて、次のターンに《融合》というのは予

想外だつた。カイザーは『強欲な壺』で引き入れていたので予想できるはずもないのが、してやられたという気持ちが大きい。それでもやれるだけはやつてしまおう。

『デュアル・ランサー』を攻撃表示にしてバトル！『デュアル・ランサー』で『サイバー！ドラゴン』を攻撃！

『デュアル・ランサー』 ATK／1800

『サイバー・ドラゴン』 DEF／1600

「まだまだっ！ 手札から速攻魔法『デュアルスパーク』を発動！ 『デュアル・ランサー』を生け贅にささげ、もう片方の『サイバー・ドラゴン』も破壊！ そしてカードを1枚ドローする」

『デュアル・ランサー』が光り輝き、宙を泳いで『サイバー・ドラゴン』に突撃していく。『サイバー・ドラゴン』を貫いた後は、そのまま自分も爆発に飲み込まれて消えていつてしまつた。

「そして『未来サムライ』でカイザーに直接攻撃！ 来世斬！」

侍は袈裟切りでカイザーを切り裂くと、そのまま反転してもう一度斬りつけた。

『未来サムライ』 ATK／1600

亮LP 4000→2400

「さらに、リバースカードオープン！『正統なる血統』発動！『デュアル・ランサー』を

蘇生して直接攻撃!』

再び現れた『デュアル・ランサー』が右腕で三段突きをして戻ってきた。どうでもいいことだがそのもう片方の槍は使わないのだろうか。

『デュアル・ランサー』 ATK／1800

亮LP2400→600

「ターン終了!」

一気に残りライフを1000以下まで追いつめた。このまま押せば勝ててしまうのではないか、とそんな希望が芽生える。

「俺のターン、ドロー!」

ドローしたカードをみたカイザーは、かすかに笑ったような気がした。

「俺は、『貪欲な壺』を発動! 墓地の『サイバー・ドラゴン』2体と、『プロト・サイバー・ドラゴン』、『サイバー・レーザー・ドラゴン』、『サイバー・ツイン・ドラゴン』をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロー!」

ここでまたドローカードか:手痛い反撃をもらう可能性が濃厚になつてきた。手札2枚で何ができる、と虚勢を張ることはできない。学園最強がこの状況を打開するのに、手札が2枚もあれば充分だろう。

「俺は、装備魔法『未来融合—フューチャー・フュージョン』を発動! デッキから『サ

イバー・ドラゴン》3体を墓地に送り、《サイバー・エンド・ドラゴン》を特殊召喚する！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK／4000

そういえばアニメ版の未来融合は、即時に出てくる装備魔法だつた。途中から永続魔法の方に変わつていていたから忘れていたが、この状況で《サイバー・エンド・ドラゴン》なんて洒落にならない。

「ただし、特殊召喚したターンには攻撃できず、このカードを生け贋に捧げることもできない」

すぐに攻撃できないのはデメリットかもしれないが、攻击力4000の貫通持ちがポンとでてくるのは心臓に悪い。次のターンに《未来サムライ》で除去できるのならば怖くはないのだが、そんなに甘くはないだろう。

「《アーマード・サイバーン》を召喚し、《サイバー・エンド・ドラゴン》に装備する」

突如カイザーの後ろから飛來したものが：鳥か？ 飛行機か？ いや、機械の竜だ！
：《サイバー・エンド・ドラゴン》にドッキングし、その砲台をこちらに向けている。

「装備カードとなつた《アーマード・サイバーン》の効果発動！ 装備モンスターの攻撃力を1000下げることで、相手フィールド上のカードを一枚破壊する！ 《未来サムライ》を破壊だ！ ジャッジメント・キャノン！」

『サイバー・エンド・ドラゴン』ATK／40000→3000

砲台に光が収束し、侍目掛けて勢いよく放たれた。侍は咄嗟の反応もできずに砲台から放たれた光線に貫かれ、そのまま地に伏して消え去った。

『デュアル・ランサー』も破壊させてもらうぞ。ジャッジメント・キヤノン、第二打ア！」

『サイバー・エンド・ドラゴン』ATK／30000→2000

再び放たれた光線が魚人を貫き、そのまま侍と同じく地に伏して消え去った。これで俺の場は『金剛真力』しか残っていない。

「ターン終了だ」

『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃力は半分になつたとはい、その威圧感はすさまじい。皇帝の二つ名が付いた、学園最強の男の切り札。それが今こちらを蹂躪せんと、その威容を見せつけている。

「俺のターン、ドロー！」

さて『アーマード・サイバーン』に…いや、『サイバー・エンド・ドラゴン』に随分と場を荒らされたが、今引いたカードがあれば状況を一転させることができる。ここで譲るつもりはない。

『金剛真力』の効果発動！手札から『インフィニティ・ダーク』を特殊召喚！そして

『インフィニティ・ダーク』を生け贋に、『ヘルカイザー・ドラゴン』を召喚！

『ヘルカイザー・ドラゴン』ATK／2400

「来たか、『ヘルカイザー・ドラゴン』！」

カイザーが興奮したまなざしをおくる先にいるのは、青い鱗を持つ雄大なドラゴンだつた。大きさこそ『サイバー・エンド・ドラゴン』よりはわずかに小さいものの、その雄々しさは決して負けてはいない。

「行くぞ！　『ヘルカイザー・ドラゴン』で『サイバー・エンド・ドラゴン』に攻撃！　カイザーバースト！」

『ヘルカイザー・ドラゴン』が吐き出した光線は『サイバー・エンド・ドラゴン』の放つた光線によつて狙いがそれ、ドッキングしていた『アーマード・サイバーン』に当たつた。

『ヘルカイザー・ドラゴン』ATK／2400

『サイバー・エンド・ドラゴン』ATK／2000

亮LP600→200

「くつ、だが装備モンスターが破壊される時、『アーマード・サイバーン』を代わりに破壊する」

『サイバー・エンド・ドラゴン』に装着されていた『アーマード・サイバーン』が煙を

上げて破壊される。

「そして『アーマード・サイバーン』が装備から解除されたことで、『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃力は元に戻る！」

『サイバー・エンド・ドラゴン』ATK／20000→4000

「まだだ！　メインフェイズ2、手札から魔法カード『思い出のブランコ』を発動！　墓地から『未来サムライ』を蘇生する！」

『未来サムライ』ATK／1600

「そして、リバースカードオーブン！　『スペシャル・デュアル・サモン』！　『未来サムライ』を再度召喚状態にして効果発動！　墓地の『インフィニティ・ダーク』を除外し、『サイバー・エンド・ドラゴン』を破壊する！　紫電一閃！」

刀に紫色の光を纏わせ、『未来サムライ』は『サイバー・エンド・ドラゴン』に接近する。『サイバー・エンド・ドラゴン』の吐く光線のことごとくを回避し、首を一本ずつ切り落とすことで、ついに『サイバー・エンド・ドラゴン』を破壊することに成功した。

「これで、ターン終了！　『スペシャル・デュアル・サモン』の効果で『未来サムライ』は手札に戻る」

相手はフイールドはおろか手札にすら何もなく、吹けば飛ぶようなライフでしかない。一方こちらは、ライフは少々心もとのものの『ヘルカイザー・ドラゴン』がその

雄姿を見せており、更には手札に『未来サムライ』という保険がある。

「俺のターン、ドロー！」

このドロー、このターンさえ凌げば勝てる。そんな確信があるのだが、このターンの敗北が頭をよぎつた。先ほどのターン、倒しきれなかつたことで逆転される。そんな想像が思考を埋め尽くす。

『死者蘇生』を発動！ 俺が蘇生するのは当然『サイバー・エンド・ドラゴン』！

やはりか、そんな感想だけが出てきた。残念ながら一歩及ばなかつたようだ。最初は気の進まないデュエルだつたのだが、気付けばムキになつていた。俺は自分が思つていたより負けず嫌いだつたようだ。これだからデュエルはやめられない。

『サイバー・エンド・ドラゴン』で『ヘルカイザー・ドラゴン』に攻撃！ エターナル・エヴァリューション・バーストオ！

再び現れた三ツ首の機械竜。その口から発射された光線は『ヘルカイザー・ドラゴン』ごと俺を飲み込み、視界が白く染まつていつた。

『サイバー・エンド・ドラゴン』ATK／4000

『ヘルカイザー・ドラゴン』ATK／2400

葵LP1100→0

「ありがとうございました」

「いいデユエルだつた。よければまたデユエルしよう」

「ええ、次は負けません」

「次も勝たせてもらうさ」

握手する手に力をこめながら、表情を変えずに言い合う。どうやらカイザーも相当な負けず嫌いのようだ。

「シニヨール代田、素晴らしいデユエルだつたノーネ。これなら、文句無しにオベリスクブルーへの編入を認めるノーネ」

そういうえばそんな話だつたな。すっかり忘れていた。ラーア工ローの方が性に合つてゐる気がするので、そのままでもいいのだが……

「ようこそ代田葵、オベリスクブルーは君を歓迎する」

「葵、すつげーな！ 次は俺とデユエルしようぜ！」

「葵くん、おめでとうっす」

「これからはブルー同士、お互い頑張りましよう」

「そうか、葵に先を越されてしまつたか。すぐに追いついてやるから待つてろよ」

すっかりこの話を受けるような流れになつてゐる。十代や三沢のように昇格を断るようなことができるはずもなく、そのままオベリスクブルーへの昇格が決定して解散と

なつた。

ちなみにクロノス教諭に聞いた所、部屋から遠くなるので推奨はされないが、イエロー食堂で食べることは問題ないらしい。これからも時々イエロー食堂で食事ができるのは嬉しい限りだ。さて、さつさと荷物をまとめてしまおう。

8. 船上のデュエリストっていうなつ！

十代に聞いた所、寮入れ替えデュエルの翌日、万丈目が定期船に乗つて島を出たことが確認されたらしい。万丈目は退学するという約束を律儀に守り、アカデミアを出たようだ。

その他にもジュンコが猿に攫われたり、動物実験の阻止をしたりと色々あつたらしいが、わりとどうでもいいので割愛する。とりあえずその日の授業ノートだけは貸しておいた。

さてそろそろ冬休みに入るわけだが、高寺オカルトブラザーズを名乗る連中に勧誘をされた。どうやらカードの精霊について研究しているらしく、近々実験を行うので見に来ないか、ということだった。

：もちろん、そんな新興宗教のようなものに行くつもりはない。記憶が正しければサイコショッカーの生け贋にされるだろうし、そんな危ない場所に好んで突つ込むつもりはない。

冬休みになつたためフェリーに乗つて地元に帰ることにしたのだが、黒いコートを着

た何かがいた。透けたり発光したりを繰り返しているのに、人間ということはあるまい。

『精霊がおりますな。存在が少々不安定なようですが』

「シハーブ、あれは何の精霊か分かるか?』

餅は餅屋というと少し違うかもしないが、シハーブも精霊であるため俺よりは詳しいだろう。人型というだけでもかなりの種類があるため、一々絞り込むのも面倒だ。『ふうむ……見た所、『人造人間サイコショツカー』ではないですか。あの肌の色や、見えているスコープを見る限りは間違いないかと』

そこはせめて雰囲気や気配で察して欲しかったところだ。確かにカードは二次元だが、実体化しているなら当然三次元になる。そのためパツと見せられても分かりにくいのだが、なんだか悔しい。

しかし『サイコショツカー』か。さつき高寺と思われる奴が走つて逃げていくのが見えたし、高寺の実験の結果だろう。それにしても先ほどからこちらを見ているような気がするのだが、俺も逃げるべきだろうか。

「おい、そこのお前」

あー、あー、聞こえない、などと言つて『まかせればいいのだが、そんな手が通じるとも思えない。高寺を追いかけずにわざわざ話しかけてくるのだから、俺に何かしら

用事があるのだろう。

「何でしようか」

「我が生け贊となれ」

「断る」

自分でも驚くほどの即答である。とはいえたまには自殺願望なんて欠片もないのに、当然の返答もある。

「お前からは今まで見た中で最も強いパワー、波動を感じる。我が三体目の生け贊としてふさわしい」

なるほど、そういうことか。余剰分がカードになつたとはいえたまには元々この世界の人間じゃないので強い力がある…らしい。追い返したい所だがここはフェリーの上、『ファイヤー・ボール』のようなカードを使うのはまずいだろう。

「シハーブ、あいつを追い返すにはどうすればいいと思う?」

『某にお任せくださいませ』

そういうとシハーブは拳をぶつけ、身体全体をむくむくと巨大化させていく。フェリーの天井に頭をこすりつけながら『サイコショッカー』を見下ろしている様は、まさしく魔人と言えるだろう。

「ほう、『ランプの魔人』ごときが闘おうというのか」

巨大化したとはいって、攻撃力差が1000もあるのは変わらない。それとも《巨大化》で攻撃力が倍とか、そういう事なのだろうか。

『確かに某は《ランプの魔人》ですがな。しかしこれでもジーニー社に務める身、そんじよそこらの魔人と一緒にしていただいては困りますぞ』

お前確か俺に初めて呼び出されたとか言つてなかつたか。ジーニー社がエリート集團でも、お前明らかに落ちこぼれているだろ。流石に敵がいる手前、口には出さないけれども。

「ならば試してやろう！　ついてこい！」

《サイコショツカー》がフェリーから飛び降り、森へ向かつて走り出す。そして動く事なく、それを見送るシハーブ：ん？

「追わないのかよ」

『命令とあらば迫いますが、その必要はありますかな？』

確かに必要性は皆無だ。俺の命令は《サイコショツカー》を追い返すことであつて、倒す必要もないそもそも闘う必要すらない。しかも《サイコショツカー》が降りて森に消えた頃には、フェリーの乗船口も閉じられて発進する所だつた。

「謀つたなああああ！」

森の方から何やら叫び声が聞こえるが、少なくともこちらに来られないようなら問題

ない。出遅れてしまつたが、席を確保するとしよう。荷物が置ける場所があればいいのだが。

結局室内はほぼ埋まっていたので、甲板の人のいない辺りに座る事にした。どうせ他に聞く人もいないし、仮に近くに人が来てもエンジンと波の音でうるさくて聞こえないだろう。ちょうどいい機会ということで、気になつた事をシハーブに聞いてみる事にした。

「そういうえば気になつた事があるんだが、聞いてもいいか?」

『なんなりと』

『《サイコショッカー》なのに生け贋が三体つてどういうことだよ』

放送時に誰しもが疑問に持つたであろうことだが、《サイコショッカー》は上級モンスターであり通常召喚するならば一体の生け贋で足る。それなのにあの《サイコショッカー》は三体の生け贋を所望したのだ。

『確証はありませんが、恐らくあの者が媒介無しに出現しようとしたからでしょうな』
「媒介? お前のランプの中身みたいなものか?」

『その通りでござります』

ランプの中に《ランプの魔人》のカードがあることは確認している。シハーブ曰く、

カードの精霊はカードという形で己を安定化させているらしい。それをせずに精霊界から出現しようと思うと、大変な労力が必要なのだとか。

「ん？ 三幻神でも宝玉獣でも、ペガサスがたつた一枚だけ作り出したカードなんだろう？ 精霊がカードになるつていうんだつたらおかしくないか？」

『いえ、何らおかしいことではありますんぞ。精霊が現世に出現する際、存在をカード化させる場合と、元々あるカードに存在を移す場合、この二通りがあるのです』

恐らく、三幻魔やネオスは前者で三幻神や宝玉獣は後者ということだろう。《幻魔の扉》のように、力の一部だけをカード化することもあるらしい。俺のカードもその例に当てはまるそうだ。流石は遊戯王の世界、カードとオカルトが密接に関わっている。

「俺のカードに神のカードとか混じってたんだが、つまるところあれは神自身じゃない、と」

『あれはあくまでご主人様の力をそのような形に納めただけですからな。単体で闘つたとしたら勝ち目はございませんが、物量に任せればあるいは』

自分の力が思いのほかとんでもないんだが、これが異世界チートという奴なのだろうか。デュエリストになるよりも、裏家業の人間になるほうが向いている能力という気がしてならない。

「そんなどんでもない力、よく制御できたな」

さつきの『サイコショッカー』もそうだが、社長の嫁や三幻神も明らかにお前より格上だぞ。魔法や罠にしても、凶悪な効果のカードがいくつもある。むしろこの世界に移動した際、何かしら騒ぎになつても不思議じやないのだが。

『某はこちらの世界の精霊ではありませんからな。あちらに比べて相対的に力は増しておりますので、だだ漏れになつてているだけの力を制御する程度ならば問題はございません』

神に近い力も制御できる『ランプの魔人』……なんというか、とんでもない話である。それでもすごそうに見えないのは、シハーブがそれなりに残念なところを見続けているからだろうか。

「ちなみにシハーブはあっちの世界だとどの程度になるんだ? 物に触れないのは知つてるけど」

『あちらではカードの精霊など雑多な霊と同じ扱いですな』

あちらの世界ではカードという物から精霊が発生したのに対し、この世界では精霊がカードという枠に納められている状態という点が大きく違うということらしいが、どちらにせよオカルトだ。

「ん? その言い草だと、あつちはそういうオカルトだらけって聞こえるんだが

『それはもちろん、魔人同士で会社を起こすぐらいには多くおりましたぞ。魔人の他に

も妖精や幽霊、強いモノになりますと神と呼ばれる存在も数多く存在しておりました』衝撃の新事実、あちらの世界もオカルト天国だつたらしい。カードの精霊どころか、神様が実在していたことに驚いた。

「それがこつちだと神様とやりあえるほどの力を制御できるんだから、こつちとあつちじや随分差があるんだな」

『今のあるならば、並の上級モンスター程度なら対処できるでしょうな。そんな機会はそういうなさそうですが』

つい先ほどあつたばかりとはいえ、そんな機会そうあつてたまるか。精霊界に喧嘩しないく理由もないし、面倒ごことになるのはゴメンだ。

「あら、そこにいらっしゃるのは代田さんではありませんの？」

モモ工がこちらに歩いてきた。どうやら同じフェリーだつたようだ。さすがにこのうるさい状態で距離もあるので、シハーブとの会話は聞かれていないと思う。

「たしかキミはモモ工さんだつたか。何か用か？」

「お見かけしたので、ちょっとデュエルでもいかがかと思いまして」

フェリーが港に着くまではそれなりに時間がかかるので、ちょうどいい暇つぶしになるだろう。モモ工が話しかけてきたのは意外だが、あつちはあつちで暇だつたのかもしれない。

「この辺はテーブルもないし、デュエルディスクのほうがいいだろ」

「そうですわね、それにテーブルがあつてもカードが飛ばされてしまいそうですね」

お互いにデュエルディスクを構えて向かいあう。船の上といつても、天気もいいしそれなりに大きなフェリーなので揺れはほとんどない。あるとしたらエンジンの揺れぐらいだろうか。そのため、それなりに安心してデュエルを行う事ができる。

「『デュエル!』」

「先攻は私がいただきますわ、ドロー」

まあ今回はレディファーストと思つておこう。しかし今更だが今は冬休みだと言うのに、モモ工は相変わらずのノースリーブにミニスカートだ：アカデミアは女子用の冬制服を作つた方がいいとおもう。ついでに男子の夏制服も。

「『デス・ウォンバット』を攻撃表示で召喚しますわ」

《デス・ウォンバット》ATK／1600

ウォンバットとはオーストラリアなどに生息する動物で、鼻が平たく手足の短いが特徴だろうか。日本ではあまり親しみのない獣だが、そんなことはどうでもいい。

「さらに、永続魔法《黒蛇病》を発動ですわ！ このカードは自分のスタンバイフェイズ毎にお互いに200ポイントのダメージを与え、さらにダメージは毎ターン倍になつて

いきますの。さらにカードを1枚ふせて、ターンを終了しますわ』

『『デス・ウォンバット』の効果は、コントローラーへの効果ダメージを0にするというもの。つまりモモエはこちらに一方的にダメージを与えることができるのだ。

「俺のターン、ドロー。『デュアル・サモナー』を攻撃表示で召喚、カードを1枚伏せてターンを終了』

『『デュアル・サモナー』ATK／1500

本当なら『『デス・ウォンバット』を倒したかつたところだが、手札の下級モンスターの攻撃力が1500以下ばかりなので仕方がない。

「私のターン、ドローですわ。『黒蛇病』の効果でお互いに200ポイントのダメージですが、私は『『デス・ウォンバット』の効果で私へのダメージを無効にしますわ！』

お互いの手に黒い蛇のような痣が現れ、わずかにその範囲を伸ばして手首に到達した。また足首にも同様の痣が出てきたようだ。まだあまり痛くはないが、おそらくターンが経過するにつれてその範囲も痛みもましていくことだろう。

葵 LP 4000→3800

『『ダークゼブラ』を召喚してバトルですわ！　『ダークゼブラ』で『デュアル・サモナー』に攻撃しますわ』

どのあたりがダークなのかよくわからないシマウマに蹴飛ばされる召喚師。普通そ

れだけで身体中の骨が折れてもおかしくないのだが、なんとか耐えきったようだ。

『ダークゼブラ』ATK／1800

『デュアル・サモナー』ATK／1500

葵 LP 3800→3500

「『デュアル・サモナー』は1ターンに1度戦闘破壊されない」

「そうですわね、それなら『デス・ウォンバット』で『デュアル・サモナー』に攻撃ですわ！」

そしてこれまでのあたりがデスなのかよくわからないウォンバットに突進された。召喚師。今度は耐えきれなかつたようで、派手に倒れ込んでそのまま消滅してしまつた。

『デス・ウォンバット』ATK／1600
『デュアル・サモナー』ATK／1500

葵 LP 3500→3400

「このままターンエンドですわ」

「俺のターン、ドロー。お、いい所に『エナジー・ブレイブ』を攻撃表示で召喚！」

『エナジー・ブレイブ』ATK／1700

黄金色の肌に青い服、耳や爪が尖つており、おまけに角まで生えている。鬼かなにか

の親戚かもしない。身体の各所からバチバチと放電して、威嚇しているようだ。

「バトル！　『エナジー・ブレイブ』で『デス・ウォンバット』に攻撃！」

「罠発動ですか！　『グラヴィティ・バインド－超重力の網－』！　これでレベル4以上のモンスターは攻撃を行うことができませんの」

当然防御カードは入っていると思ったが、『デス・ウォンバット』を除去し損ねたのは辛いな。『エナジー・ブレイブ』のレベルは4なので当然攻撃できないし、レベル3以下のモンスターで攻撃力1600を超えるモンスターはいない。効果破壊を狙つっていくしかなさそうだな。

「ならこのままターンを終了する」

「私のターン、ドローしますわ。そしてスタンバイフェイズ、『黒蛇病』の効果で200ポイントの倍、400ポイントのダメージですわ！」

手首にあつた黒い蛇の痣が肩に向けてその範囲を伸ばし、肘との半ばまで到達したようだ。まだ問題ない程度の痛みだが、バーンダメージとしては次から問題になつてくるだろう。

葵 LP3400→3000

「そして、カードを1枚伏せてターンを終了しますわ」

やつぱり動かないか。むしろ動けないというか、動く必要もない方が正しいだろう

な。

「俺のターン、ドロー。《サンライズ・ガードナー》を攻撃表示で召喚！ そして、罠カード《デュアル・ブースター》を発動して装備！ 攻撃力を700上昇させる！」

《サンライズ・ガードナー》 ATK／1500→2200

召喚された途端に発電機から力を供給される光の戦士…決して光の国からやつてきた戦士ではない：それはさておき、《サンライズ・ガードナー》は下級デュアルでは珍しいレベル3のモンスターだ。つまり今なら殴り倒せる。

《サンライズ・ガードナー》で《デス・ウォンバット》に攻撃！」

「罠カードですわ！ 《安全地帯》ですの！ これで《デス・ウォンバット》は相手の効果の対象にならず、戦闘および効果では破壊されませんわ！」

なんでそんな新しいカード持ってるんだこいつは…確かにこっちの世界とあっちの世界じや流通しているカードの時代などが違うみたいだが、まさかZEXAL直前のパックに収録されていたカードが流通しているとは思わなかつた。

「それでも戦闘ダメージは受けてもらう」

白く輝いた戦士がウォンバット目掛けてラリアットをかまそうとするが、流石に背の高さが違ひ過ぎるのでかすることもなく衝撃波だけがモモ工を襲つた。

確かにその高さなら安全地帯とも言えなくはないのだろうが、《サンライズ・ガード

ナード」が蹴り技をすれば済む話ではないのだろうか。

《サンライズ・ガードナー》ATK／2200

《デス・ウォンバット》ATK／1600

モモエ LP 40000→3400

「俺はこのままターン終了」

「私のターン、ドローですわ。そしてスタンバイフェイズ、《黒蛇病》の効果で400ポイントのさらに倍、800ポイントのダメージですわ！」

袖に隠れているが黒い蛇の痣が肘まで到達したようで、絞められるような痛みがあった。ズボンに隠れて見えないが、脚も同様に膝まで浸食しているようで、四匹の蛇に四肢を絞められているようだ。

そして次のターンには1600のダメージ、回復手段を持つていないのでさらにその次のターンにはライフが消し飛ぶ事は避けられない。

葵 LP 30000→2200

「そして《デス・ウォンバット》と《ダークゼブラ》を守備表示にしてターン終了ですわ」

《デス・ウォンバット》ATK／1600→DEF／300

《ダークゼブラ》ATK／1800→DEF／400

「俺のターン、ドロー！」

ん？たしかこいつの処理はあのカードと同じはず、ということはつまり…

『サンライズ・カードナー』で『ダークゼブラ』に攻撃！』

シマウマに向けて走つていった光の戦士は、鎧とほぼ同化している盾で殴りつけた。相手は足をたたんで伏せの体勢なのに、なんでこいつは蹴り技を使わないのだろうか。

『サンライズ・ガードナー』 ATK2200

『ダークゼブラ』 DEF／400

「そしてモンスターを1体セットして、ターンを終了する。」

「あら、裏守備表示ですの？ 別にこちらから攻撃するわけでもありませんのに」

「こっちにも事情があるからな」

「そうですの、それでは私のターン、ドローですわ。そして『黒蛇病』の効果で800ポイントの倍、1600ポイントのダメージですわ！」

黒い蛇の痣が肩まで到達したらしく、蛇に噛まれたような痛みが肩を貫いた。太ももの辺りも噛まれているようで、痛みが順番にくるというのもまた嫌らしい。

葵 LP2200→600

「ここでカードを1枚セットしてターンを終了しますわ」

「俺のターン、ドロー。俺は『マジック・スライム』を反転召喚し、再度召喚する！」

『マジック・スライム』 ATK／700

青いゲルが地面から隆起し、鏡のように周りの景色を映し出した。ぷるぷると左右に揺れる動作がなかなかに可愛らしい。おそらくそう言つたとしても共感されることはないだろうが。

「これが最終ターンになるでしょに、そんな二度手間なことをしてよろしいんですの？」

「二度手間っていうなつ！」

何故かこの台詞も久しぶりな気がする。最近は授業でデュエルする相手がブルーばかりなので、ほぼ毎回言つているはずなのだ…：

「手札から、魔法カード『歯獲装置』を発動！ 互いに自分の場のモンスター1体を選択し、コントロールを入れ替える！ このとき俺は通常モンスターしか選択できないので、『サンライズ・ガードナー』を選択する」

「ちょ、ちょっと待つて欲しいですわ。私の場にいるモンスターは『安全地帯』の効果で対象にとられない『デス・ウォンバット』しかないので、不発になるんじやありますの？」

この場合実際は空撃ちのため発動不可だが、発動されているのを見たためか不発になると思ったようだ。そう思いたかつたという事もあるかもしれない。

「残念ながら対象を取る効果ではないからな。問題なく発動されるし、もちろん『デス・

ウォンバット》も効果を受ける」

そう、《強制転移》とこのカードは対象を取る効果ではないのだ。そのため《魂を削る死靈》も自壊せず、《安全地帯》の影響も受けない。さすがに魔法効果を受けないカードやコントロール変更ができないカードにはどうしようもないが、それでも対象をとらないう奪取カードは便利である。

「さて、《デス・ウォンバット》をいただくとしよう」

「で、ですが私のライフは3400ポイントありますわ！ 次のターンに代田さんの《マジック・ライム》を攻撃すれば私の勝ちですわ！」

攻撃力2200の《サンライズ・ガードナー》と攻撃力700の《マジック・ライム》の差は1500、俺のライフはたった600なのでそう考えるのも自然だろう。ただし、《マジック・ライム》の効果さえなければ、だが。

「なら《マジック・ライム》で《サンライズ・ガードナー》を攻撃！」

「自爆特攻するつもりですの!?」

「再度召喚した《マジック・ライム》の効果により、このカードが戦闘することによつて受ける戦闘ダメージは相手が受ける。マジカルリフレクト！」

《マジック・ライム》がぶるぶると身体を振るわせてモモ工の姿形を取つた。すこし金属的な光沢がみえるが、色もモモ工に似せてているようだ。一度こちらを向いて手を

振ったと思いきや、モモ工にも手を振っている。

『サンライズ・ガードナー』のボディーブローが当たり『マジック・スライム』が弾けたが、それと同じくしてモモ工が腹部を押させていた。どうやら攻撃された場所と同じ場所にダメージが通っているようだ。

『マジック・スライム』ATK／700

『サンライズ・ガードナー』ATK／2200

モモ工 LP 3400 → 1900

「さて、ターン終了」

「私のターン、ドローですわ……」

「スタンバイフェイズ、『黒蛇病』の効果で互いに1600ポイントの倍、3200ポイントのダメージだが、俺は『デス・ウォンバット』の効果でダメージを受けない」

「キヤアアアア」

モモ工の方は今まで痣は手にしか浮かんでいなかつたのだが、爆発的に範囲が広がり、腕にも脚にも見える範囲には黒い蛇が巻き付いているような状態になつていた。そして首にも蛇は広がり、痛みのせいかモモ工はへたり込んでしまつた。

モモ工 LP 1900 → 0

「ソリッドヴィジョンだから問題ないとは思うけど、大丈夫か?」
 「ええ、問題ありませんわ」

さすがにへたり込んでしまったのは心配だったのでモモ工の方に駆けつけたのだが、やはり問題はなかつたらしい。なんでも自分で『黒蛇病』の効果を受けたのは初めてらしく、それも5回目の効果はかなりの痛みがあつたらしい。

闇のゲームではなくあくまで体感システムなので痛みも緩和されているし、意識が飛んだり後遺症が残つたりはしないが、それでも痛い物は痛い。モモ工の場合、すこしちざとらしいところがある気もしなくはないが。

「それで、お手を貸しましょうか?」

「三沢さんや万丈目さんのようなイケメンなら似合うと思いますが、代田さんにはちよつと似合いませんわね」

そう言つてモモ工は自力で立ち上がつた。わざと演技がかつた言い方をしたのだが、なかなか手厳しい返しである。一つだけ反論するならば、万丈目は上から目線で要求するほうが似合つていると思う。

モモ工は流石に外が寒かつたらしく、室内に戻る事にしたらしい。温帯とはいえ12月の海の上が暖かいはずはない。俺は一応コートを羽織つてゐるが、モモ工は制服のままなのでなおさら寒いだろう。

その後は暇つぶしに三沢から借りた、牛尾システムズ出版「詰めデュエル大全」を読み解いていくことにした。実際に警備会社で使用されていたという詰めデュエルを解きながら、フェリーにゆられて実家に帰宅したのであった。

9. 閨夜の巨人っていうなつ！

冬休みも終わり、アカデミアでは今日も健全かつ健康的に授業が行われている。多少どころでなくクラスごとの格差があるアカデミアが健全かどうかは、この際気にしないようにする。

「なあ葵、聞きてー事があるんだけど」

休み時間に教室で三沢から借りた本を読んでいると、十代が唐突に質問してきた。こいつの聞いたような事というと、課題の期限あたりだろうか。今週は普段より難易度が高い課題だから、余裕を持つて取り組まないと期限を破りかねない。

「なんだ十代、”～した時、できる”と”～した場合、できる”の違いについてのレポートの期限は明日だぞ」

「げつ、マジで…それもヤバいんだけど、そつちじやなくて、葵はフイアンセって何かわかるか？」

一体こいつは何を言っているんだと思つて事情を聞くと、先日明日香さんのフイアンセの座を賭けたデュエルに勝利したのはいいが、肝心のフイアンセの意味が分からなかつたそうだ。

その時いた人たちに聞いても、意味を教えてもらえたかったという。十代にくつついでいた翔を見ると、思いつきり目をそらされた。説明したくないからってはぐらかしやがつたな。

「なるほど、そういうことか」

下手に嘘をついても信じてしまうだろうし、間違った事を言つてしまつてもそのまま明日香さんに突撃しかねない。それならばキチンと正しい意味で、嘘のないように説明してやらねばならないだろう。

「ファインセつていうのは、最も幸福な時間および最も不幸な時間を共有するパートナーとなる契約をした異性同士のことだ。この契約は通常は好ましい異性と結ばれる物であり、一般的には契約の証として指輪を交換する事が多い。時折当人達の意志を無視して取り交わされる事もあるが、少なくとも現在においてはそれを破棄する事も可能だ。しかし破棄することによるデメリットも少なからずあるので、ファインセの契約をするなら気をつけた方がいいだろうな」

一言で言えば婚約者とか許嫁で済むのだが、もしかしたらそれも知らない可能性がある。流石に結婚の意味ぐらいは知っているだろうし、指輪を交換と言つておいたので意味は通じたはずだ。

「あー、うー、えー、つまり！　ライバルつてことだな！」

「までまでまで、どうしてそうなった」

「だつてよ、一番幸せな時間と一番不幸な時間を共有するってことは、デュエルするつてことだろ？ 指輪とかそういうのは初めて知つたけど、明日香なら相手として不足はないぜ！」

だめだこのデュエル馬鹿、はやくなんとかしないと……この誤解を解くのも面倒だが、解かずに放置しているとそれはそれで騒動の予感しかしない。そしてこの間違つた認識を与えたのが俺だということがバレたら恐ろしい目に合う、そんな予感がする。

「いや、ファインセっていうのはそういうことじゃなくて」

追加で説明しようと口を開いた途端、チャイムが鳴つてしまつた。十代たちも急いで席に戻つていく。タイミングがいいのやら悪いのやら……

「……十代がそれでいいならいいけどさ」

十代の説得はすっぱりと諦める事にした。時間をあけてからまた話しても、泥沼になる気がしたからだ。例えばファインセとは結婚しなければならないと言つたら、巡り巡つて結婚できる相手としかライバルになれないとも思いかねない。

十代はデュエルに関しては理解力も記憶力も抜群なのだが、興味のない事柄に関してはすぐに忘れる。きつとファインセの意味もあまり記憶には残らないだろうし、きつと何も問題は起こらないだろう。そう信じたい。

放課後、ブルー寮をふらふらしていると妙な噂を聞いた。夜になると、闇夜の巨人デュエリストなるものが現れ、外を出歩くブルー生徒を狙っているのだという。

そういえばアニメでそんな話もあつたな。記憶が正しければ、十代がクロノス教諭の依頼で犯人探しをして無事に解決するはずだ。仮にダメでもブルー生徒には特に親しい奴もないから、まったく心は傷まない。

俺としては外に出なければ関係のない話なので放つておけば良い。そのはずなのが、俺は今ブルー寮近くの森の中を歩いていた。とっくに日も暮れて、夕飯の時間も終わっている：夕飯を食べてから来たので当然ではあるが。

「シハーブ、見つかったか？」

『はい、ご案内いたします』

シハーブに案内された先は、森の少し開けたところだつた。そこでは大量のブルー制服を上半身に巻き付けて人相を隠した大男と、劣勢となつていよいよ負ける寸前のブルー生徒がデュエルをしていた。

「う、うわああああ！」

などと言つている間にブルー生徒が負け、近づいてきた大男を恐れるように叫び声をあげた。きっとアンティルールに従つて、レアカードを奪おうとしているのだろう。そ

れを許したら、なんのためにここまで来たのか分からぬ。

「そこまでだ、闇夜の巨人デュエリスト」

デュエルディスクを展開しながら大男に近づく。ブルー生徒はこれ幸いと逃げていつたが、そんなことはどうでもいい。ついでに十代達が走つて近づいてくるが、これもどうでもいい。

「葵!? 何してるんだ!?

「十代か、ちょっとコイツに用事があつてな。お前は?」

「俺達はクロノス先生にいわれて、レポート提出の代わりに闇夜の巨人デュエリストを探してたんだ」

「そうか、だがこれは俺たちでなんとかしなきやいけない問題だ。下がつていてくれ」
大男もデュエルディスクを構え、準備は万端なようだ。ならば始めるとしようか。

「デュエル!」

「俺の先攻、ドロー。俺は『ジャイアント・オーラ』を召喚してターンを終了する」

『ジャイアント・オーラ』 ATK / 2200

骨を持つた大鬼が現れる。攻撃力は高いが守備力は0であり、しかも攻撃すると次のターン終了時まで守備表示になつてしまふモンスターだ。同系統のモンスターも多々

いるが、闇属性・悪魔族なので『魔のデツキ破壊ウイルス』と『悪夢再び』に対応している点は優秀だろう。

「俺の先攻、ドロー。手札から永続魔法『金剛真力』を発動、手札から『インフィニティ・ダーク』を特殊召喚し、再度召喚する」

『インフィニティ・ダーク』ATK／1500

漆黒の衣装を身にまとい、全身の紋様を白く輝かせたヒーローが現れた。ヒーローと表現したが、HEROカテゴリーではなく普通の悪魔族である。十代が俺もHEROを使っているのかと大騒ぎしており、漆黒のヒーローは満足そうに頷いている。だからお前はHEROじゃないだろう。

「そんな二度手間召喚、怖くはないぞ」

「二度手間つていうなっ！『インフィニティ・ダーク』で『ジャイアント・オーク』に攻撃！」

漆黒のヒーローが大鬼に向かって走り出す。翔が攻撃力の低いモンスターで攻撃だなんてなどと言っているが、もちろん無意味に自爆特攻させようとしているわけではない。

『インフィニティ・ダーク』の攻撃宣言時、相手の表側表示モンスター1体の表示形式を変更できる。『ジャイアント・オーカー』を守備表示にする

『ジャイアント・オーク』ATK／2200→DEF／0

走り出した漆黒のヒーローはそのまま飛び上がり、すれ違ひ様に右足を鎌のようにして大鬼の首に引っ掛けた。そのままの勢いで地面に蹴り倒し、空中で捻りを加えてオークの腹部を踏み抜いた。オークを撃破したのはいいが、相変わらず攻撃の一部なのか効果を使つたのかがよく分からぬ。

オークが撃破されたときの余波で、大男がぐるぐる巻きにしていたブルーの制服が吹き飛んでいく。顔を隠していたものが一切なくなり、闇夜の巨人デュエリストの正体があらわになつた。

「やつぱり大原か。小原もいるよな、隠れてないで出てこい」

ラーアイエローの大原である。そして木の上から小原が降りて來た。身体が大きいが心持ちが優しくて気が弱い大原と、身体は小さいがプライドが強い癖にアガリ症な小原、ラーアイエローの凸凹コンビである。

「なんで俺たちつて分かつたんだ」

小原が憮然として聞いてくるが、アニメで知つていたとは言えない。そうでなくとも噂の端々にわかりやすいところは多かつたので、二人の詰めが甘いということだろう。「大原ほどデカい生徒はそうそういないからな。ブルーの奴らに聞いてみたら、小さいイエロー生が近くにいたって証言もあつたな。それで思い当たつて三沢や樺山教諭に

聞いてみたら、案の定お前らが夜な夜な外出してるって言つてたぞ」

指摘すると小原が苦々しい顔をし、大原がわたわたと慌てている。その他にも決闘場の使用申請を見ると、被害にあったブルー生徒は三日以内に小原とデュエルをしている。ちなみに大原を覆っていたブルー制服は、購買で買ったようだ。変な所で生真面目な奴らだ。

「今の俺はオベリスクブルーだが、ラーアイエローには愛着があるからな。元ラーアイエローとして、ケジメをつけさせてもらうぞ」

「うるさい！ どうせ俺たちの事を見下してるんだろ！」

「どうだろうな。カードを一枚伏せてターンを終了する」

正直なことを言うと、プライドばかり大きいという点ではこいつもそちらのブルー生徒と大差ないと思つていて。見下すか見下されるかの違いはあるが、緊張さえしなければ実力も大差ない。

「俺のターン、ドロー！ 『五分ゴブリン』の効果発動！ 手札の戦士族モンスターを墓地に送つて、攻撃表示で特殊召喚する！ 2体の『五分ゴブリン』を攻撃表示で特殊召喚！」

『五分ゴブリン』 ATK／500

手札をそれぞれ1枚ずつ捨てて、『五分ゴブリン』が特殊召喚された。大原とは授業で

何度かデュエルしたことがあるが、そのときは毎回守備表示にしていたことを思い出した。だからどうというわけではないのだが。

「《キングゴブリン》を攻撃表示で召喚！ 《キングゴブリン》の攻撃力と守備力はフィールド上の他の悪魔族の数×1000ポイントになる！」

《キングゴブリン》 ATK／0→3000

小さな冠を頭に乗せ、豪華な服をきた緑の小鬼がフィールドに登場した。そして来ていたマントが広がり、裏に《五分ゴブリン》2体と《インフィニティ・ダーク》の姿が浮かび上がった。

「いくぞ、バトル！ 《キングゴブリン》で《インフィニティ・ダーク》に攻撃！」

襲いかかってきた小鬼の王に対し、漆黒のヒーローは構えたものの具体的な防御をすることなく破壊された。お偉いさんの子どもとの接待という言葉が頭に浮かんだが、気にしない事にしよう。

《キングゴブリン》 ATK／3000

《インフィニティ・ダーク》 ATK／1500

葵 LP 4000→2500

「さらに、2体の《五分ゴブリン》で直接攻撃！」

「リバースカードオープン、《正統なる血統》！ 墓地の《インフィニティ・ダーク》を

特殊召喚！」

《インフィニティ・ダーク》ATK／1500

突然現れた漆黒のヒーローに小鬼たちがたじろぎ、逃げ帰っていく。これで追撃を防ぐ事ができた。はしゃいで声援を送る十代に向かつて親指を立てているが、気にしないでおこう。

「くそつ、これでターン終了だ！」

「俺のターン、ドロー。《インフィニティ・ダーク》を生け贅に、《ヴァリュアブル・アーマー》を召喚！」

《ヴァリュアブル・アーマー》ATK／2350

現れたのは、黄土色のカマキリだった。ただし生け贅になつた漆黒のヒーローよりも幾分か大きいうえに、鎌や脚などの皮膚のところどころが岩の様に硬いように見えるのだが。

ついでに《インフィニティ・ダーク》が生け贅となつてフィールドから悪魔族が減つたことで、マントの裏に浮かびあがつていた姿も消えて《キングゴブリン》の攻撃力が下がつた。

《キングゴブリン》ATK／3000→2000

「そして《スーパールヴィス》を《ヴァリュアブル・アーマー》に装備し、再度召喚状態に

する

「そのカードはつ……」

最初の月一試験の時に『スープルヴィス』を小原相手に使い、それが決め手の一つとなつたので小原としては苦い思い出のカードなのだろう。ついでに先ほどつかつた『正統なる血統』も決め手の一つだつた。

「だが自分フィールド上に他の悪魔族モンスターがいるとき、『キングゴブリン』を攻撃対象にはできない！」

「そうか、『ヴァリュアブル・アーマー』で『五分ゴブリン』に攻撃、デスシックル！巨大なカマキリが一跳びで小鬼達の目の前に降り立つ。たしかカマキリは飛ぶのも跳ぶのもあまり得意ではないはずなのだが、バッタのようになつてている脚のおかげだろう。そしてそのまま鎌の一振りで小鬼の頭を刈り落とした。

『ヴァリュアブル・アーマー』ATK／2350

『五分ゴブリン』ATK／500

大原LP4000→2150

「そして、再度召喚した『ヴァリュアブル・アーマー』の効果だ。このモンスターは相手フィールドの全てのモンスターに1回ずつ攻撃することができる」

「そんなっ！」

「続いて《ヴァリュアブル・アーマー》でもう片方の《五分ゴブリン》に攻撃！ デスシックル、第二閃！」

またも鎌の一振りで小鬼の頭が刈り落とされた。しかしカマキリの興味は既にそちらではなく、無機質な瞳で豪華な服の小鬼を見下ろしていた。配下を失つた小鬼の王は、おびえているように見える。

《ヴァリュアブル・アーマー》ATK／2350

《五分ゴブリン》ATK／500

大原LP2150→300

「最後だ、《ヴァリュアブル・アーマー》で《キングゴブリン》に攻撃！ デスシックル、第三閃！」

カマキリは命令を待ちわびていたかの様な速度で鎌を振り下ろした。鎌はまっすぐ小鬼の王に振り下ろされ、冠も服もまとめて両断されていた。

《ヴァリュアブル・アーマー》ATK／2350

《キングゴブリン》ATK／2000→0

大原LP300→0

「くそつ、俺たちをアカデミアに突き出すのか？」

小原がこちらを睨みつけながら聞いてくる。大原のほうは観念したようにうなだれて地面に座り込んでいた。

「そのことだが：十代、すまないが今回はレアカードをキチンと返却することで手打ちにしてやつてくれるのか。頼む、この通りだ」

十代に深く頭を下げる。十代はレポートの代わりに犯人探しをしていると言つていた。ならばそれを手伝つてもいいし、食堂でおごつても、欲しいカードがあるならそれを渡しても良い。俺のカードを渡せるのかどうかは知らないが、それならそれで探すまでだ。

「お前……」

小原が呆然として俺を見ている。オベリスクブルー相手にアンテイルールをしかけたということが露見すれば、下手すれば退学になるかもしれない。あまり親しい仲とはいえないが、ライエローの仲間だつたのだ。仲間が退学になるのは嫌だつた。「何言つてんだ。結局闇夜の巨人デュエリストなんていなかつたんだし、俺達はこれで帰るぜ。いくぞ、翔、隼人！」

「ま、まつてよ兄貴い！」

「ま、待つて欲しいんだな！」

十代は俺が思つていたより、ずっと粹な男だつたようだ。対価を要求するでもなく、

文句を言うでもなく、何も見なかつたことにして去つていつた。レポートを提出していないのは自業自得だが、それでもチャンスを捨ててまでこちらのわがままを聞いてくれたのだ。本当に頭が上がらない。

小原達に向き直る。二人ともバツの悪そうな表情をしており、目線が泳いでこちらと合わない。

「二人とも、わかつてゐるよな」

「ああ、奪つたカードはちゃんと返すよ」

「代田君、ありがとう」

「礼なら十代に言つてやつてくれ、すつとぼけるだらうけどな」

二人からカードを受け取つた後、被害者が寝てゐる間に『シャドウ・ダイバー』で部屋の中から鍵を開けてもらつて侵入し、机の上におくなどしてカードを返していつた。

翌日、自分たちのリアカードが戻つてきたと大喜びの生徒達を確認することができた。十代のレポートを手伝いたいのは山々だつたが、十代がクロノス教諭に監視されたのでそれは叶わないようだ。しかたないしドローパンと飲み物を買つて差し入れしよう、そう思い購買に向かうのであつた。

10. 乙女の火傷つていうなつ！

今朝の全校集会で近々ノース校との友好デュエルがあると連絡があつた。去年の代表はカイザーだつたようだが、今年の代表はまだ決まっていないようだ。俺に関係のある話だけは思つていないので半ば聞き流していたが、一部生徒は代表の座を得るために意気込んでいるようだ。

話は少しそれで、少し前に大山平という男がオベリスクブルーに復学してきた。ドローの真髄を極めるべく一年間山ごもりをしていたとのたまつていたが、新手のジョーカーだろうか。この世界ならあり得そうなのが怖いのだが。

この大山平だが、彼は代表を目指して意気込む一部生徒ではなく自分のドローを極めたいそうだ。ドローを極めるとということがどういうことかイマイチよくわからないが、彼曰く黄金の卵パンの連続ドロー記録を塗り替えたいらしい。

これはアカデミアの飼う黄金の鶏が日に一個だけ産むという黄金の卵を具に使つたドローパンであり、ドロー運が強いものだけが引き当てる事ができるといわれている。そしてこの黄金パンを引く奴はかなり限られており、俺の知り合いではチートドローに定評のある十代、一年女子最強と名高い明日香さん、そして先ほど紹介した山ごもり

の大山平、その三人だけだ。

ちなみに連続ドロー記録を持つてているのは十代で、20連続ドローを達成したことがあるらしい。半月以上の確に黄金の卵パンをドローし続けるのは至難の業、と自称ドローの権威である大山平は語る。

そして何故そんなことを言つてているのかというと、今俺は購買部により、大山と共にドローパンのカートの前に立つているからだ。…正確には昼休みの開始と同時にこの男に拉致され、ドローパンをドローする事を強制されている。

「どうした葵！　俺に遠慮せずにドローするんだ！」

「いや、俺はイエロー食堂に」

「そうだぜ葵！　お前のドローを見せてくれ！」

いつの間にか現れた十代に主張を遮られてしまった。…今日はイエロー食堂に突撃してカレーを食べるつもりだつたんだが、これでは諦めざるを得ない。最近はブルー制服で行つても睨まれないと嘆くべきなのかな。

「俺のターン、ドロー」

開封すると、中身はコロッケパンであつた。今日も安定して好きなパンをドローすることができた。ドローパンでネタとしか思えないようなパンを引いた事がないのは、運がいいのかネタにならないと嘆くべきなのか。

「気迫が足りないぞ、葵！ よし、見本を見せてやる！」

「おつ、なら俺も参加させてもらうぜ！」

「しようがないわね、私も参加しようかしら」

ドロー馬鹿二人の他に、いつの間にか明日香さんも加わっていた。明日香さんには一体何がしようがないのか教えて欲しい。

「「俺（私）のターン、ドロー！！」」

三人がものすごい気迫を込めてドローする。そして三人同時に開封し、かじりつく。そして間を置いて十代がガツツポーズをし、残り二人が崩れ落ちる。一体なんなんだお前ら。

「へへっ、黄金の卵パンゲットだぜ！ 今日は俺の勝ちみたいだな！」

「くう、フオアグラパンだつたか…！」

「マジメロンパンを引かされるなんて、やるわね十代」

外れみたいなリアクションだけど、お前らの大好物だろうが。二個目以降に当てたときは大喜びするくせに、なんで最初は卵パンじゃないと全て外れみたいなリアクションなんだよ。十代について来た翔を見てみろ、大嫌いなめざしパンを引いて泣きそうじゃないか。

ちなみに昼休みにこうしてドロー馬鹿達が集まるのは、最近では週に五日以上：つま

り授業のある日は毎日こんな感じである。そして俺は三回に二回は強制的に参加させられている。こうしてアカデミアの昼休みは騒がしくすぎていくのであつた。

放課後になつてカイザーに借りていた本を返しに部屋を訪れたわけだが、中から物音がする。3年の方が先に授業が終わつていたのだろうか。足音でわかるためノックは不要ないと言わわれているので、そのまま部屋に入ることにする。

扉を開けると、帽子を目深に被つた背の小さなレッド生がカイザーのデツキを頬擦りしていた。…えつ、何コレ、どういう状況？ 追つかけ？ 男の？ 腐った人たちが狂喜する展開なの？ うわつ、関わりたくない：

「あつ」

こちらに気付いたレッド生は一瞬固まつたが、すぐに逃げ出そうとした。関わり合いになりたくないが、逃がす訳にも行かない。幸いにも不審者は部屋の隅にいたので、普通に回り込んでデュエルディスクを展開する。

「逃がすか！ デュエルで拘束させてもらうぞ！」

『ご主人様も随分デュエル脳になつてきましたな』

捕まえるための手段として咄嗟にデュエルを選んでしまうのは、いよいよ末期な気がしてならない。一応《聖なる鎖》などのカードを実体化して使うために懐に仕舞つてあ

るので、いざというときはこれらで捕縛するしかない。

「ちつ、仕方ない」

どうやらレッド生の方も応じてくれるようだ。流石にデュエルディスクにワイヤーを仕込んだりはしていないので普通に逃げようとする可能性も考えていたのだが、この世界の人たちはノリが良くて助かる。

「『デュエル!』」

「ボクのターン! ドロー! 『恋する乙女』を召喚! ターン終了!」

《恋する乙女》 ATK/400

ソリッドヴィジョンで現れたのはリボンのついたカチューシャを付けた栗色の髪の乙女だった。何やら少女漫画チックな光がそこら中を飛び交っていて、思わず目を細めてしまうぐらいに眩しい。

それにしても《恋する乙女》ってことは、この不審者はレイだったのか。カイザーのデッキに頬擦りする光景が衝撃的すぎて頭から抜けてしまっていた。

「俺のターン、ドロー。《デュアル・サモナー》を召喚し、ターンを終了する。」

《デュアル・サモナー》 ATK/1500

「攻撃してこないのか」

レイが意外そうに驚いているが、《恋する乙女》と関連カードの効果はアニメオリカの

中ではそれなりに有名なのでよく覚えている。そもそも《デュアル・サモナー》はサポートのために召喚したので、わざわざ攻撃する必要はない。

「ボクのターン、ドロー！ カードを2枚伏せてターンを終了する」

「ならエンドフェイズ時、ライフを500払つて手札から《デュアル・ソルジャー》を召喚させてもらう」

葵 L P 4 0 0 0 → 3 5 0 0

《デュアル・ソルジャー》 ATK / 500

「俺のターン、ドロー。《デュアル・ソルジャー》を再度召喚してバトル《恋する乙女》に攻撃」

《デュアル・ソルジャー》がプロペラダーツを投げつけるが、《恋する乙女》の足下に着弾しただけで傷は負わせていないようだつた。《デュアル・ソルジャー》がほつと胸を撫で下ろしている理由を聞かせてもらいたい。

《デュアル・ソルジャー》 ATK / 500

《恋する乙女》 ATK / 400

レイ L P 4 0 0 0 → 3 9 0 0

「そんな二度手間なことをしても、《恋する乙女》は攻撃表示でいる限り戦闘では破壊されないよ！」

「二度手間っていうなっ！ 再度召喚された『デュアル・ソルジャー』が戦闘を行った時 デッキからレベル4以下のデュアルモンスターを1体特殊召喚する！ 『エヴォルテクター シュバリエ』を特殊召喚！」

『エヴォルテクター シュバリエ』 ATK／1900

プロペラダーツのあつた場所から赤い甲冑の騎士が現れ、距離を取るように飛び退いた。非常に重そうな格好なのに、よくもあんなに俊敏な動きができるものだ。

『恋する乙女』のもう1つのモンスター効果、『恋する乙女』を攻撃したモンスターに乙女カウンターを1つ乗せる！』

『恋する乙女』の手からハートマークが飛び出し、『デュアル・ソルジャー』の顔に当たる。『デュアル・ソルジャー』は何をされたか分からぬようにきよろきよろとしているが、左胸にはハートマークが1つ付いていた。

「さらに、『デュアル・サモナー』で『恋する乙女』に攻撃！」

召喚師から放たれた橙色の光線が『恋する乙女』の足下に着弾し、その衝撃で『恋する乙女』とレイにダメージを与えた。いつもなら相手を貫くのだが、今回は余波で攻撃しているのは乙女補正なのだろうか。

『デュアル・サモナー』 ATK／1500

『恋する乙女』 ATK／400

レイ LP 3900→2800

「《デュアル・サモナー》にも乙女カウンターが乗ったよ！」

レイがそう言うや否や、キラキラとした桃色空間が展開される。先ほど攻撃した召喚師が《恋する乙女》に駆け寄り、目線を合わせるように身体をかがめる。

『お嬢さん、大丈夫かい？』

『大丈夫、だつて私たちが闘うのは宿命だから…』

『可憐だ…！』

なにやら桃色空間で茶番が行われたが、召喚師の左胸にも《デュアル・ソルジャー》と同様のハートマークが1つ付いていた。騙されるな《デュアル・サモナー》、そいつは平気で二股や三股をかける気満々だぞ。

「そして《エヴァルテクター シュバリエ》で《恋する乙女》を攻撃！」

赤い甲冑の騎士が炎のような斬撃をとばしたが、これも《恋する乙女》の足下に着弾していた。そしてへたり込んでしまった《恋する乙女》を一瞥し、勢いよく頭を振る甲冑の騎士：例によつて左胸にはハートマークが1つ付いていた。

《エヴァルテクター シュバリエ》 ATK／1900

《恋する乙女》 ATK／400

レイ LP 2800→1300

「ターン終了」

「僕のターン、ドロー！ 手札から装備魔法《キューピッド・キス》を《恋する乙女》に装備！」

ハートの矢を持った金髪の天使が《恋する乙女》の周りを飛び、その頬にキスをした。ステータスには変化がないが、これで乙女カウンターが効力を發揮することになる。

「バトルよ！ 《デュアル・サモナー》に攻撃！」

「一途な思い！」

《恋する乙女》が召喚されたときのようにキラキラとしたエフェクトが周りを覆うと、足下が花畠となり《恋する乙女》が召喚師に向けて走り出す。走るといつても、ゆつたりとした走り方で攻撃するには心もとない。

『《デュアル・サモナー》さん、私の一途な思いを受け止めて〜』

召喚師が軽く避けると、《恋する乙女》はそのままこけてしまった。そのまま《恋する乙女》はうずくまつてしまふと泣き出してしまい、《デュアル・サモナー》がおろおろしている。

『恋する乙女』ATK／400

『デュアル・サモナー』ATK／1500

レイLP1300→200

『ひ、酷い、酷いわ！』

『そ、そんなつもりじゃ』

召喚師が何やら弁解していると、《恋する乙女》が召喚師にむけて投げキツスを放つた。ハートマークが顔に当たり、召喚師の身体から桃色のオーラが立ち上がる。

『私の言うこと、聞いてくれるわよね?』

『もちろんだとも!』

『じゃあ、《デュアル・ソルジャー》を攻撃して』

『君のためなら喜んで!』

そう言つて《デュアル・ソルジャー》を嬉々として攻撃してくる召喚師。《恋する乙女》に攻撃するときは足下への攻撃だったのに、今回はきつちり身体を貫いているというのはどういう了見だ。

《デュアル・サモナー》ATK／1500

《デュアル・ソルジャー》ATK／500

葵 LP 3500→2500

「乙女カウンターの乗つているモンスターを攻撃し、逆にダメージを負つたら、装備魔法《キューピッド・キス》が発動、そのモンスターをコントロールできる!」

この効果があるため、初ターンは攻撃しなかつたのだ。先ほどのターンも、もう一体ぐらい召喚してそのまま倒せる状況まで待つべきだつたかもしれないが、やつてしまつ

た物は仕方がない。

「再度召喚した《デュアル・ソルジャー》は1ターンに1度戦闘によつては破壊されない。そして戦闘を行つたので効果発動！ 《シャドウ・ダイバー》を特殊召喚！」

《シャドウ・ダイバー》ATK／1500

桃色空間には似つかわしくない黒法師が現れ、俺の影からは悪魔が立ち上がる。フードを目深に被つた黒法師からは表情を伺うことはできないが、悪魔のほうはニタニタと笑つている。

「手札から装備魔法《ハッピーマリッジ》を《恋する乙女》に装備！ 《デュアル・サンダー》の分、《恋する乙女》の攻撃力がアップする！」

先ほどから桃色空間が解除されないまま、ウエディングドレス姿になる《恋する乙女》。召喚師の隣で嬉しそうに微笑んでいるが、召喚師が腕を組もうと伸ばした手をはたき落としていたのは見なかつたふりをすべきなのだろうか。

《恋する乙女》ATK／400→1900

「女の子は恋をすれば強くなる、不可能なんてないの！ ターン終了！」

レイはテンションが上がつてきたようで、帽子を脱ぎ去り素顔があらわになつた。お前変装してなくていいのか。デッキテーマでバレバレとはいえ、自分から証拠をさらけだしているのはまずいだろう。

「俺のターン、ドロー！　『シャドウ・ダイバー』を再度召喚して効果発動！　自分フィールド上の闇属性レベル4以下のモンスター1体はこのターン相手に直接攻撃することができる！　『シャドウ・ダイバー』で直接攻撃！　リツピング・フロム・シャドウ！」

「罠発動！　『ホーリージャベリン』！」　相手の攻撃宣言時に、そのモンスターの攻撃力分だけライフを回復する！」

俺の影に潜り込んだ悪魔がレイの影から現れ、奇襲をかけようとする。しかし途中で白い槍に阻まれ、攻撃がレイまで届くことはなかつた。攻撃を阻止された悪魔は、渋々といつた様子で俺の影まで戻ってきた。

レイ LP 200 → 1700 → 200

「『エヴォルテクター シュバリエ』で『デュアル・サモナー』を攻撃！」

「永続罠『ディフェンス・メイデン』！」　自分フィールド上のモンスターを攻撃されたとき、攻撃対象を『恋する乙女』に変更するよ！」

召喚師をかばうように騎士の前に立ちはだかる『恋する乙女』。騎士は一步後ずさると、意を決したように剣を振り下ろし：見事に切腹を果たしていた。お前西洋騎士どうう、そういうのは『未来サムライ』にでもやらせろよ。

『エヴォルテクター シュバリエ』 ATK／1900

『恋する乙女』 ATK／1900

「《デュアル・ソルジャー》を守備表示に変更して、ターン終了だ」

《デュアル・ソルジャー》 ATK／500→DEF／300

「僕のターン、ドロー！ バトル！ 《恋する乙女》で《シャドウ・ダイバー》を攻撃！ 一途な思い！」

『《シャドウ・ダイバー》さん、私の思いを受け止めて～』

そんなことを言いながら、こんどは黒法師の目の前で転んでしまった。そして投げられたブーケが黒法師にぶつかり、爆発。影の悪魔もそのまま消えてしまった。ずいぶん過激な愛情表現だ。

《恋する乙女》 ATK／1900

《シャドウ・ダイバー》 ATK／1500

葵 LP2500→2100

「《デュアル・ソルジャー》は守備表示になつちやつてるし、僕はこのままターンエンド」「俺のターン、ドロー！ 《デュアル・ソルジャー》を生け贋に、《灼熱王バイロン》を召喚！ そして、《スペシャル・デュアル・サモン》を発動！ 《灼熱王バイロン》を再度召喚状態にする！」

《灼熱王バイロン》 ATK／1500

炎が地面から噴出し、大男の形となつていく。そして再度召喚の魔力を注がれた炎は

更にその勢いを増し、炎の色も徐々に白に近づいていく。ソリッドヴィジョンなので熱気までは感じないが、心無しか周囲の景色が揺らいでいるように見える。

「そんなことをしたって、『恋する乙女』は倒せないよ！」

「そつちの『恋する乙女』を倒す必要はない。『灼熱王パイロン』の効果発動！　1ターンに1度、相手に1000ポイントのダメージを与える！　パイロボール！」

炎の大男の前で炎が球状に収束していく。最初は拳大ほどの球体だったのが直径1mほどまで膨れあがつたところで、レイ目掛けて放たれた。火球は『恋する乙女』の横を通り過ぎ、レイは炎に包まれた。

レイ LP 200↓0

レイにデュエルで勝ったのは良いが、もちろんながら拘束力もなにもあつたものではない。しかしレイは観念したようで、大人しく床に座っていた。そしてベランダから物音がしたのでそちらをみてみると、十代が木を伝つて入ってきたようだ。お前は猿か。
「あれ？　葵、ここにレイ来てないか？　レツドに転入してきた身体が小さくて帽子かぶつてる奴なんだけど…」

「それならそこに座り込んでる奴だろうな。侵入していたから、とりあえずデュエルで拘束しておいた」

脱ぎ捨てられたまま床に転がっていた帽子をレイにかぶせてやり、十代に確認をとる。ちなみにデュエルで拘束といったことはスルーされた。

「レイって女だったのか：すまねえけど、俺に免じて放してやつてくれねえか？」
「俺としても捕まえたはいいが、どうしようかと思つていたんだ。十代が引き取つてくれるなら何の文句もないさ」

「おう、わりいな」

そういうと、十代はレイを担いでそのまま器用に木を伝つて降りていった。ひとまず散らばつていたカイザーのデッキを片付け終わると、カイザーがタイミングよく部屋に戻ってきた。

「すまない葵、遅くなつた」

「いえ、お気になさらず。それじゃあこれ、ありがとうございました。やはり汎用性が高いカードは可能性として見ておくのは大事ですね」

カイザーから借りていた本だが、中寺錦丸著「明日を迎えるにいく99%の鍵」という本である。『サイクロン』や『強欲な壺』など汎用性の高く採用されやすいカードが記されており、基礎に立ち返つてデッキや戦略を構築することの重要性について書いてあつた。

「相手の戦略を見極めたつもりでも、そう言つたカードに足下をすくわれることがある。

常に頭の隅にはおいておくべきだろう」

「そうですね。それではそろそろ失礼します」

部屋に戻るとPDAに十代から連絡があり、レイのことで晩にレッド寮の裏に来て欲しいということだった。別に拒否する理由もないのに了承し、晩まで部屋でのんびりすることにした。

そして晩になり、レッド寮裏の崖下で十代と合流した。レイは俺が来た途端に距離を取つたが、デュエルで拘束されたから警戒しているのだろうか。

「十代、待たせたか？」

「いや、俺たちも来たばかりだぜ」

十代に聞いた所、質問をしても何一つ答えることができないと言われてしまつたようだ。そして十代とレイがデュエルをすることで、丸く納めることにしたらしい。

「いや、ちょっと待て」

「なんだよ？」

「それ、何一つ解決にならないだろ」

離れた所でレイも首を振つてゐる。十代は何故俺たちが理解していないのか不思議に思つてゐるようだが、説明してもらえないと何故その結論になつたのか理解できな

い。

「デュエルじや誰も嘘はつけないからな。事情を聞く必要もなくなる」

訂正、説明されてもまったく理解できなかつた。《オネスト》が墓地にいる状況で意気揚々と光属性モンスターに攻撃し、その攻撃宣言時に《光の招集》で回収されてダメージ計算時に《オネスト》の効果で反撃されるなど、デュエルで騙された経験が大いにある俺には理解できない。そういううちにデュエルが始まるようだ。

「「デュエル！」

「ガツチヤ、面白いデュエルだつたぜ」

『バーストレディ』が恋に現を抜かす男ヒーロー共に喝を入れ、『フレイムウイングマン』に融合して『恋する乙女』を焼くことで何とか十代が勝利した。恋する乙女を焼いたという意味では俺と同じだが、真正面から攻撃した十代の方がよほど男らしいと言えるだろう。

「十代、僕は…」

「亮様…」
「そこから先は、ずっと見ていた後ろの奴に言つた方がいいだろ」

どうやらガイザーが崖上から見ていたらしい。一緒に見ていたと思われる明日香さ

んや翔、そして未だ名前を教えてもらっていないレッドの上級生…おそらく隼人…も一緒にこちらへ降りて来た。

「亮様がデュエルアカデミアに進学なさつてから、ずっと会いたくてやつとここまでやってきたの…十代とのデュエルには負けたけど、亮様への思いは誰にも負けない！乙女の一途な思いを受け止めて！」

「なんか、カイザーもたじたじだな。それにしてもすげー迫力、デュエルと同じだ」

「デュエルじやないもん…」

レイがどこかいじけたような調子で十代に抗議する。乙女心の欠片も理解していい能天気な十代の発言に反論したいが、どう言えば理解してもらえるのかが皆目見当もつかないといった所だろうか。見当がつく人間がいるとも思えないが。

「そうね、一途な思いは素敵よ。でも今あなたが言つたように、デュエルのヒーローと違つて本物の男性はウインクやキスじやだめなの。デュエルも恋も、気持ちと気持ちが繋がつて初めて実るんじやないかしら」

学年一の男前である明日香さんが、あたかも自分も乙女であるかのような台詞をのたまつてくれた。昼休みにドローパンで一喜一憂していた人物と同じに見えないのは俺だけであろうか。

「レイ、お前の気持ちは嬉しいが…今の俺にはデュエルが全てなんだ」

「亮様……」

カイザーがポケットから髪飾りを取り出し、レイに渡した。そういうえば部屋から追い出す時帽子はかぶせたが、その他に何があつたとか見てなかつたな。それでカイザーはここにきていたのか。

「レイ、故郷に帰るんだ」

「そこまですることないだろ！ 女の子だつて、オベリスクブルーの女子寮に入れてもらえれば……」

「レイはここには居られない」

十代が強く反論しようとしたが、カイザーが有無を言わせぬようにそれを遮つた。アカデミアは良くも悪くも実力主義なので性別を偽る程度なら問題はないかもしけないが、もう一つの問題は実力でもどうしようもない問題なのだ。

「レイはまだ小学5年だ」

「はあ？」

「ええー！？」

レッドの三人組が衝撃のあまり叫び声をあげた。レイはまだ小学生であり、そもそも年齢が足りていないのだ。飛び級という意味では中等部から高等部への編入措置はあるらしいが、流石に小学生を入学させるということはない。

「なんなんだよー!? 僕つてば、小学生に苦戦したのかよー!?

「ごめんね。ガツチャ、楽しいデユエルだつたよ!」

あ、十代が倒れた。

「あつはつはつは、最高だ！ これだからデユエルは楽しいんだよ！」

十代が楽しそうに笑い転げ、つられて全員が笑みを浮かべる。十代は場の空気を明るくすることにかけては天才的だと思う。そして明日の船でレイを本土まで返すということで、この夜は解散となつた。

そして翌朝、レイを見送るために港に集まつていた。レイの両親も迎えにきており、レイと一緒に船に乗つている。

「来年小学校卒業したら、またテスト受けて入学するからねー！」

レイがこちらに向かつて元気よく叫んでいる。今でさえ高等部の試験に合格できるのだから、中等部の試験を合格することはまず問題ないはずだ。むしろよっぽどヘマをしなければ、不合格になることはありえないと言える。

「だつてよ」

「そのときは、俺はもういないけどな」

カイザーがあつさりと事実を口にする。もちろんこの程度の声量では船まで届かな

いだろうし、レイもそのことは十分に分かつてゐるだろう。だからこそ本来入学できる歳になる前にアカデミアに来たことは想像に難くない。

「待つてね——！ 十代様——！」

「え、ええ!?」

レイに突然様付けされた十代が一人驚いているが、他の面々はさほど驚く訳でもなくむしろ当然という顔をしていた。今朝集まつてみたら、もう十代を意識してたもんな。邪魔するのも悪いし、帰るとするか。

「な、なんで俺なんだよ!？」

「きつと、あなたのデュエルに惚れたんでしょ」

普段ジユンコやモモエが恋愛話をしてもまつたく興味を示さないのに、今回の明日香さんはノリノリである。おマセな小学生であるレイと、フイアンセの意味も知らないほどの純粹培養な十代：確かに見ていて笑えてくる。

「後はまかせる」

「じゃあ兄貴、先に帰るね——」

「ゆつくり見送つてあげるんだな——」

「船が見えなくなるまで、見送つてあげなきやね——」

「望遠鏡もあるし、肉眼がだめでもこれならしばらくは見えるだろ——」

全員投げやりに声をかけて去つていく。俺も『古代の遠眼鏡』を十代に渡して帰ることにした。実験したときはかなり離れていても実体化していたみたいだし、デュエルディスクから外さなければ大丈夫だろ。

「待つててねー！ きつとよー！ 十代様ー！」

「ええ、あれえ？ 嘘お：」

レイのやたら元気な声と十代の力ない声を聞きながら、ブルー寮への道を歩いて帰つた。余談だが十代は律儀に『古代の遠眼鏡』で見えなくなるまで見送つたらしく、部屋に『古代の遠眼鏡』を返しにきたのは昼過ぎだつた。

11. イエロー最強っていうなっ！

授業前、クロノス教諭に呼び出された。もちろん校則違反をした記憶も、何か目を付けられるようなことをした記憶もない。：十代と仲がよかつたり、イエロー食堂に入り浸つたりしているのが原因かもしけないが。

「ノース校との交流デュエルは知っているノーネ？ カンツオニエーレ？」

「ええ、今年も代表はカイザーだと噂されていますね」

どうやらお叱りというわけではなく、交流デュエルに関係することらしい。アニメでは代表が十代になつたのは覚えているが、その経緯は正直ほとんど覚えていない。

「今回はノース校代表が1年生ということで、各寮の1年生代表でトーナメントマッチを行うノーネ。そこでシニヨール代田には我が寮代表として戦つてもらいまスー！」

「…ブルー代表なら、天上院さんのほうが適任のように思うのですが」

明日香さんは1年女子だけでなく、全学年の女子の中でも上から数えた方が早い程の実力を持つていると噂されている。ラーアイエローからのぽつと出である俺よりは適役のように感じるのだが…。

「シニヨール明日香は女子寮代表ナーネ。それに、カイザーとあれだけのデュエルが

できるシニヨールなら、必ずや本校代表となつてくれる信じていまスー！」

確かにオベリスクブルーの1年男子だけだと、かつての万丈目ほどの日立つ生徒はない。特別課程の生徒もいるらしいが、あくまで噂話なので真意は不明だ。それならばカイザーのライフを後少しのところまで削つたという実績がある俺の方がマシということなのだろう。

「わかりました」

…とは言つたものの、このトーナメントで一番弱いのは恐らく俺のではないだろうか。レッド代表になることがほぼ確定している十代とは明日香さんとのタッグマッチで敗北しており、イエロー代表になると思われる三沢にはイエロー時代に成績で勝てたためしがない。女子寮代表の明日香さんはデュエルしたことがないので何とも言えないが、間違いなく強敵である。

トーナメント表は当日に発表されるらしいが、誰と当たつてもそう簡単に勝てはしないだろう。アカデミア代表なんてどうでもいいのだが、楽しいデュエルになることは想像に難くない。

トーナメント当日、一回戦第一試合は俺と三沢のデュエルのようだ。入学からブルーになるまでは授業で対戦することも多かったのだが、ブルーとなつてからは対戦する機

会がなかつた。

「まつていたぞ、葵」

決闘場では三沢が腕を組んで待っていた。寮としてはこちらが格上のはずだが、俺が挑戦する側という扱いである。実力としては間違つてはいないとは思うが、何か釈然としないものがある。

「三沢、そういうえば授業以外でデュエルするのは初めてだな」

十代や翔は普段から寮内でデュエルをすることもあるそうだが、レツド以外の部屋は個室のため、部屋にこもつているとそう言つた機会がほとんどない。三沢も他のデュエルリストの研究で部屋にいることが多いのも一因だろう。

「そうだな、だが授業では4-1戦2-0勝1-8敗3分で俺が勝ち越している。お前への対策も万全だ。今回も勝たせてもらう」

「引き分けの原因はお前の『破壊輪』だろうが。自爆したお前の黒星で、2-1勝2-0敗で俺の勝ち越しの間違いじやないか？」

三沢とデュエルする時、お互いに下級モンスターでも攻撃力1500以上のモンスターが多いため、最後のトドメを刺す場面で『破壊輪』を使われて引き分けになりやすいのだ。

『デュエルをすれば俺の数式に間違いがないことが分かるさ。どちらが強いのかハツキ

「りさせよう」

「その案には賛成だな。負けて計算を一からやり直すといい
お互にセットポジションにつきデュエルディスクを構える。

「『デュエル!』」

「俺の先攻、ドロー! 『カーボネドン』を守備表示で召喚し、ターンを終了する」

《カーボネドン》DEF／800

炭を連想する黒いモンスターが防御姿勢であらわれた。機械族のような見た目だが、一応恐竜族らしい。機械族である《サイバー・ダイナソー》とどちらが恐竜族に近いか悩む。少なくとも《メカ・ザウルス》の方が恐竜族らしい見た目だ。

「俺のターン、ドロー。《巨人ゴーグル》を召喚してバトルだ。《巨人ゴーグル》で《カーボネドン》に攻撃!」

《カーボネドン》に巨人の拳が襲いかかり、その衝撃で身体があつさりとへし折れた。炭素は構造次第で強度や弾力性がまったく違うのだが、どうやら《カーボネドン》を構成する炭素は鉛筆の芯のような脆いものだつたようだ。

《巨人ゴーグル》ATK／1500

《カーボネドン》DEF／800

「俺はこれでターンを終了」

「俺のターン、ドロー。俺は『ハイドロゲドン』を攻撃表示で召喚する」

『ハイドロゲドン』 ATK／1600

茶色く濁った水が地面から吹き出し、平べつたい四足の恐竜へと姿を変えた。一応種族が恐竜族であるため恐竜とはいつたものの、見ようによつてはサンショウウオのような両生類にも見える。

「バトル、『ハイドロゲドン』で『巨人ゴーグル』を攻撃！ ハイドロ・ブレス」

『ハイドロゲドン』の口から吐き出た濁流を岩の巨人は真正面から受け止したが、あまりにも勢いが強かつたのか仰向けに転倒して押し流されてしまつた。

『ハイドロゲドン』 ATK／1600

『巨人ゴーグル』 ATK／1500

葵 LP4000→3900

「そして『ハイドロゲドン』の効果発動！ このモンスターが相手モンスターを破壊し墓地に送つた時、デッキから『ハイドロゲドン』を1体特殊召喚する！」

『ハイドロゲドン』 ATK／1600

そして地面から湧き出た水が再び形をかえ、先ほど現れた四足の恐竜と同じ形となつた。次から次へとわき出してくるのは、水の凝集力でも関係しているのだろうか。もしくは水素のガス密度が低く、拡散が速いからかもしれない。

「そして『ハイドロゲドン』で葵に直接攻撃！」

新たに湧き出た『ハイドロゲドン』がこちらに向けて濁流を吐き出した。ソリッドヴィジョンであり実際には濡れていないはずなのに、水を被つたような冷たさと服が肌にはりつくような不快感に思わず眉をしかめてしまう。攻撃モーションが終わるとそれもすぐになくなるのだが、苦情が来てもおかしくはないと思う。

『ハイドロゲドン』 ATK／1600

葵 LP 3900→2300

「俺はカードを一枚伏せてターン終了！」

「俺のターン、ドロー。手札から永続魔法『金剛真力』を発動。相手フィールドにのみモンスターが存在する時、手札からレベル4以下のデュアルモンスターを特殊召喚することができる。この効果で『サンライズ・ガードナー』を守備表示で特殊召喚し、そして再度召喚だ」

『サンライズ・ガードナー』 DEF／5000→2300

黄金に輝く戦士が腕をクロスし、身体を低くして構える。

「俺はこれでターンを終了する」

「いくぞ、俺のターン、ドロー！ 守りを固めたようだが、それが無駄だと教えてやろう！」

「俺は『オキシゲドン』を召喚し、さらに手札から『ボンディングーH₂O』を発動！俺の場の『ハイドロゲドン』2体と『オキシゲドン』1体、つまり水素2と酸素1を化合して『ウォータードラゴン』をデッキから特殊召喚する！」

『ウォーター・ドラゴン』ATK／2800

2体の茶色い液体の恐竜と緑色の氣体の翼竜が『ボンディングーH₂O』のカードに吸い込まれ、爆発が起きた。そのモヤが晴れた時に目の前に現れたのは、猛々しい水の龍だった。『ハイドロゲドン』とは違つて透き通るその姿は、美しくもある。

万丈目を破つたカードであり、三沢の持つ6属性デッキの内【水属性】のエースである。三沢は授業では試験用デッキという名の【スタンダード】ばかり使うので、実際に相対するのは初めてだ。

「いくぞ、『ウォーター・ドラゴン』で『サンライズ・ガードナー』を攻撃！ アクア・パニッシャー！」

必死に守りを固めていた黄金戦士であつたが、水の龍から吐き出される水流に押し流されるどころか、丸ごと包み込まれてしまつた。立ち上つた水柱のなかで破壊されたようだ。

『ウォーター・ドラゴン』ATK／2800
『サンライズ・ガードナー』DEF／2300

「俺はこれでターン終了だ」

「俺のターン、ドロー。よし、《金剛真力》の効果発動！ 手札から《エヴォルテクター・シユバリエ》を特殊召喚！ そして手札から《スペルヴィス》を《エヴォルテクター・シユバリエ》に装備し、再度召喚状態にする！」

《エヴォルテクター・シユバリエ》 ATK／1900

赤甲冑の騎士が炎を纏つて登場する。水の龍は騎士を見下ろして、かすかに笑った気がした。

「だが、《エヴォルテクター・シユバリエ》は炎属性、《ウォータードラゴン》の効果で攻撃力は0となる！」

《エヴォルテクター・シユバリエ》 ATK／1900↓0

「ならばこうするまでだ。《エヴォルテクター・シユバリエ》の効果を発動！ 自分のフィールド上に表側で存在する装備魔法1枚を墓地に送ることで、相手フィールドのカード1枚を破壊する！ 俺は《スペルヴィス》を墓地に送り、《ウォータードラゴン》を破壊する！」

赤い甲冑の騎士が鞘から剣を抜き、居合い抜きの要領で炎の斬撃を飛ばす。取るに足らないと判断したのか、水の龍は回避せずに真っ向から受け止めた。しかし斬撃が当たつた箇所から爆発し、水の龍はその姿を崩し、ただの水の塊となつた。

『エヴァルテクター シュバリエ』 ATK／0→1900

「そして、墓地に送られた『スープルヴィス』の効果発動！ このカードが墓地に送られたとき、墓地の通常モンスター1体を特殊召喚する！ 蘇れ、『巨人ゴーグル』！」

地面が隆起し、そこから岩の巨人が立ち上がる。そして己の存在を示すように、天に向けて咆哮をあげた。：2ターン目にさつくりやられたのがそんなに悔しかったのだろうか。

『巨人ゴーグル』 ATK／1500

「だが、『ウォータードラゴン』が破壊され墓地に送られた時、墓地の『ハイドロゲドン』2体と『オキシゲドン』1体を特殊召喚するぞ」

『ハイドロゲドン』 ATK／1600

『ハイドロゲドン』 ATK／1600

『オキシゲドン』 ATK／1800

水の塊に電気が走り、緑の気体と茶色の液体に分離した。気体は『オキシゲドン』に、液体は2体の『ハイドロゲドン』にそれぞれ姿を変えた。

『巨人ゴーグル』を再度召喚してバトル！『巨人ゴーグル』で『オキシゲドン』を攻撃！ ゴーグルナツクル！

巨人が岩でできた筋肉を隆起させてうなり声をあげる。そしてその巨体に似合わな

い俊敏さで《オキシゲドン》に接近し、強烈なアッパーカットをお見舞いした。《オキシゲドン》は気体のはずだが、しっかりとダメージは通つたらしく、そのまま弾けて衝撃が三沢を襲う。

《巨人ゴーブル》ATK／1500→2100

《オキシゲドン》ATK／1800

「リバースカード発動！《スピリット・バリア》！俺のフィールド上にモンスターが存在する限り、俺への戦闘ダメージは0になる！」

三沢を襲つたはずの衝撃が直前で拡散し、三沢にはダメージが与えられた様子がない。よく見てみると三沢に白いモヤのようなものがまとわりついており、それが衝撃を弾いたのだろう。モンスターが存在する限り効果を發揮するということは、あれはもしかしたら生き靈の類なのかもしれない。

「さらに、《エヴァルテクター シュバリエ》で《ハイドロゲドン》を攻撃！」

赤甲冑の騎士が《ハイドロゲドン》を叩き斬つたことで衝撃波が発生するが、それも三沢にまとわりついた白いモヤによつて弾かれてしまつた。やはりあのモヤをどうにかしない限り、ダメージは通らないようだ。

《エヴァルテクター シュバリエ》ATK／1900

《ハイドロゲドン》ATK／1600

「これでターン終了!」

「俺のターン、ドロー。いくぞ、葵! 俺は儀式魔法『リトマスの死儀式』を発動! 合計レベルが8以上になるように手札またはフイールドから生け贋に捧げる。フイールド上の『ハイドロゲドン』と手札の『ブラツド・ヴァルス』を生け贋に、『リトマスの死の剣士』を儀式召喚!」

『リトマスの死の剣士』ATK／0

祭壇に『ハイドロゲドン』と『ブラツド・ヴァルス』が吸い込まれ、雷が落ちる。突然の雷に目がくらんだが、数秒もしないうちに視力が戻ってきた。そして雷が落ちたはずの場所には、奇妙な帽子を被った仮面の剣士が佇んでいた。

『リトマスの死の剣士』は罠カードの影響を受けず、戦闘によつては破壊されない死の剣士! またフイールド上に罠カードが存在する限り、攻撃力と守備力は3000となる!』

『スピリット・バリア』から赤いオーラが構えられた剣に流れ、妖しく光る。仮面の剣士がこちらを見て不適に笑つた気がした。

『リトマスの死の剣士』ATK／0→3000

『リトマスの死の剣士』で『エヴァルテクター シュバリエ』に攻撃!』

赤甲冑の騎士は迎撃姿勢を取つていたが、仮面の剣士は華麗な動きで近づくと素早く

剣を振るつた。仮面の剣士が三沢の下まで飛び退き着地すると同時に、迎撃姿勢をとつたままの赤甲冑の騎士が爆散した。

『リトマスの死の剣士』 ATK／3000

『エヴァルテクター シュバリエ』 ATK／1900

葵 LP2300→1200

「俺はこれでターン終了だ」

それにも攻撃力が3000もあり、なおかつ戦闘破壊耐性と罠耐性があるなんて嫌がらせにしか思えない。『スピリット・バリア』を破壊すれば解決するのだろうが、それでも結局は戦闘破壊ができないので次のターンからは壁にされてしまう。

「俺のターン、ドロー！」

そうこう悩んでいると、この状況を打破するのにうつてつけのカードを引いた。耐性があるのはあくまで罠だけなので、このカードなら問題なく破壊できる。

「俺は、『未来サムライ』を攻撃表示で召喚する！」

『未来サムライ』 ATK／1600

青白い袴の侍が登場し、自分の役割を理解しているかのように居合いの構えを取つた。しかし召喚権はすでに行使したため、通常召喚での再度召喚は行うことはできない。ならばどうするかだが、答えは単純だ。

「そして、手札から速攻魔法《フォース・リリース》を発動！ この効果で俺のファイールド上のデュアルモンスター全てを再度召喚状態にする！」

地面から光が立ち上り、《未来サムライ》の袴が白く染まる。刀は鞘に納められたままだが、鞘越しにでも紫色の光が見える。心無しか侍の脚にも力が入つており、いつでもその力を発揮できることを伝えているようだつた。

「そして再度召喚された《未来サムライ》の効果発動！ 墓地のモンスター1体を除外することと相手表側表示のモンスター1体を破壊する！ 俺は墓地の《サンライズ・ガードナー》を除外し、《リトマスの死の剣士》を破壊だ！」

紫電一閃！

俺が宣言するのを待ちわびたかの様に、侍は仮面の剣士目掛けて飛び出した。仮面の剣士は両手の剣をクロスにして攻撃に備えていたが、侍は初撃でそれを弾き飛ばし、二の太刀で仮面の剣士を切り捨てた。

「これで邪魔なモンスターはいなくなつた。いくぞ！ 《未来サムライ》で直接攻撃！ 来世斬！」

仮面の剣士を切り裂いた侍は、三沢へと向けて走り出した。そしてすれ違いざまに袈裟切りをしてから、跳躍してこちらへと戻ってきた。こちらへと戻った侍は、どこか満足げに刀を鞘に納めていた。

《未来サムライ》 ATK／1600

三沢 LP 4000→2400

「さらに《巨人ゴーグル》で直接攻撃！ ゴーグルナックル！」

岩の巨人が腕を振りかぶりながら走り、三沢との距離を詰める。そして間合いに入つた所で、風切り音を喰らせながら拳を叩き込んだ。ソリッドヴィジョンだというのに三沢は派手に吹き飛び、痛みをこらえるように立ち上がった。

《巨人ゴーグル》 ATK／2100

三沢 LP 2400→300

「エンドフェイズ時、《フォース・リリース》の効果で再度召喚状態となつたデュアルモンスターは全て裏側守備表示になる。効果を受けた《未来サムライ》は裏側守備表示だ。さあ、ターンエンドだ」

全てとはいつたものの、効果発動時には《巨人ゴーグル》がすでに再度召喚状態であつたため、今回効果が適応されたのは《未来サムライ》のみである。地味に紛らわしいがここで《巨人ゴーグル》がセット状態になると攻撃にも防御にも不安を感じるので、むしろ都合がいい。

「くつ、俺のターン、ドロー！　⋮《マスマティシャン》を攻撃表示で召喚！」

《マスマティシャン》 ATK／1500

ピンクの煙が小さく破裂して現れたのは、灰色のローブを着たお爺さんだつた。杖に

はユーモラスな意匠が施されており、煙突のようにも見える。

「そして、『スマスマティシャン』を召喚した時、俺はデツキトツプのカードを一枚墓地に送る。バトルだ！『スマスマティシャン』で裏側守備表示の『未来サムライ』に攻撃！バトルカリキュラム！」

杖から数式が現れ、リバースした『未来サムライ』にガツガツとぶつかる。バトルが一気にギヤグになつた気がするが、気になら負けだろう。

『スマスマティシャン』 ATK／1500

『未来サムライ』 DEF／1200

「俺はこれでターン終了だ」

セットカードは無しか、それならばここで下級モンスターを引くことが出来れば：『クリボー』のようなカードが無い限り：俺の勝ちは決まりと言つてもいいだろう。

「俺のターン、ドロー！」

：引いたのは『スペシャル・デュアル・サモン』、再度召喚をサポートしてくれるカードだが、残りの手札は出すに出せない最上級モンスターだけだ。今は使いたくても対象がない。

「…バトル！『巨人ゴーグル』で『スマスマティシャン』を攻撃！」

巨人がロープの老人を殴り倒したが、その衝撃は『スピリット・バリア』によつて三

沢までは届かない。

『巨人ゴーグル』ATK／2100

『スマスマティシャン』ATK／1500

『スマスマティシャン』が戦闘によつて破壊され墓地に送られたことで、俺はカードを一枚ドローする』

結局このターンは三沢のライフを削ることはできなかつた。それでもあと一手、下級モンスターでなくとも『思い出のブランコ』のような蘇生カードや『闇の量産工場』のような回収カードでもいい。次のターンには引かなければ。

「次のターンこそモンスターを引いて俺が勝つ。ターンエンド」

「残念だが、既に俺の勝利の方程式は揃つている！　俺のターン、ドロー！」

一応『巨人ゴーグル』はデメリットのない下級モンスターでは倒すことができない程度の攻撃力を持つている。それを突破するならば：効果破壊だろうか。俺のライフも初期値の2割未満だし、これは危ないかもしれない。

「俺は墓地の『カーボネドン』の効果を発動する！　墓地のこのカードの上にカードが1枚送られたことで、瞬間に高い圧力を受けた炭素はダイヤモンドに変化する！　墓地の『カーボネドン』を除外し、デッキから『ダイヤモンド・ドラゴン』を特殊召喚する！」

『ダイヤモンド・ドラゴン』ATK／2100

フィールドに現れたのは眩しいほどの輝きを放つドラゴンだった。その輝きは身に纏うダイヤモンドが光を乱反射しているものであり、これほどの量のダイヤモンドは果たしてどれほどの値がつくのか：まつたく想像ができない。

「いつの間に…」

思い出してみると、『ハイドロゲドン』『ハイドロゲドン』『オキシゲドン』『ボンディング－H2O』『ウォーター・ドラゴン』『リトマスの死の儀式』『リトマスの死の剣士』『ブラッド・ウォルス』『マスマティシャン』、そしてマスマティシャンの効果で墓地に送られたカードで確かに10枚になっている。

そして『ダイヤモンド・ドラゴン』の攻撃力は、『巨人ゴーグル』と同じ2100である。それでも俺のライフは1200、追撃がなければまだ可能性はある。

「そして、俺は『白魔導士ピケル』を召喚する！」

『白魔導士ピケル』ATK／1200

召喚されたのは『スケープゴート』に描かれる『羊トーケン』の被り物をしたピンクの髪の少女だった。顔もまだまだ幼いものであり、白くゆつたりとした導衣を着ているせいか、余計に幼く見える。

「…えっ」

会場の中で思わず間の抜けた声を出したのは俺だけではないはずだ。バリバリの硬派でアイドルカード否定派であつた三沢がこんなカードをデッキに入れ、しかもこんな大衆の前で召喚するなんて驚かないはずがない。

「俺はアニメでアイドルカードがピケルであることは知っていたが、まさか召喚していくると思わなかつた。手札に他の攻撃力1200以上のモンスターがいなかつたのだろうが、それで無表情を突き通せるのはすごいと思う。」

「バトル！ 《ダイヤモンド・ドラゴン》で《巨人ゴーグル》を攻撃！ ダイヤモンドブレス！」

「えつ、あ、げ、迎撃しろ！ ゴーグルナックル！」

《ダイヤモンド・ドラゴン》の口から吐き出されたブレスはキラキラと輝いており、大量のダイヤモンドで出来ていることがわかつた。岩の巨人はそれを真っ向に受けて身体を削られながらも、《ダイヤモンド・ドラゴン》に拳を叩き込んで破壊した。しかしブレスに耐えきれなかつた巨人も破壊されてしまつた。

《ダイヤモンド・ドラゴン》ATK／2100

《巨人ゴーグル》ATK／2100

「そして、《白魔導士ピケル》で直接攻撃だ！」

《白魔導士ピケル》の持つ杖の先が白く光り、こちらへと光球が飛んでくる。そして眩

しい光に包まれて、特に痛みを感じることもなく俺のライフポイントはなくなつた。

『白魔導士ピケル』 ATK／1200

葵 LP1200→0

「勝者、三沢大地！」

本来なら歓声があがるべきタイミングなのだが、動搖が広がっているせいかざわざわとした声しか聞き取ることが出来ない。そして俺は俺で三沢になんと声をかけるべきか頭に浮かばない。しかし三沢はこちらに近づいてくる。

「葵、良いデュエルだつた」

「お、おう…」

思わずどもつてしまふ。しかしそれではあまりにも失礼なので、頭を振つて言うべき言葉を整理し、まっすぐ三沢に向き直る。

「今回は俺の完敗だつたが、今度こそお前の計算を上回つてみせる。それまではそう簡単に負けるなよ？」

そう言つて右手を拳にして前に出す。三沢も察したようで、

「ああ、だが俺の数式は完璧だ。今度も俺が勝つさ」

「言つてろ」

そう言つて互いに笑みを浮かべて拳を軽くぶつける。そして観客も衝撃から立ち直つたのか、大きな歓声があがつた。

一回戦第二試合の十代と明日香さんの試合では十代が見事なぶん回しを決めて勝利し、決勝戦では三沢が十代の『融合』を封じることに成功するも、十代はそれを物ともせずに多種多様なサポートカードを駆使して勝利を納めていた。

そして十代は栄えあるアカデミア本校代表として、ノース校との交流デュエルに出場することになった。トーナメントの後、三沢が十代に負けたことを謝つてきたが、”簡単には”負けていないから構わない、という旨を伝えると屁理屈だといいながらも笑つていた。

今回デュエルをしていて痛感したのは、魔法・罠の除去がままならないことと、やはりまつたくもつてドロー力が足りない。

魔法・罠の除去の手段を挙げるなら、『デュアルスパーク』と『エヴォルテクター シュバリエ』、あとは『ダークストーム・ドラゴン』しか無いのは流石に致命的だ。『ヴィクトイム・カウンター』は魔法の発動を無効にできるが、俺のデッキにとつては永続罠の方が厄介なことが多い。

しかしながら『玉碎指令』を入れるにはレベル2以下の通常モンスターが必要なのだが

が、このデツキでは『デュアル・ソルジャー』しかおらず、かなりの確率で腐つてしまふ。

単純な解決法としては、ハイランダーをやめて『デュアルスパーク』だけでも複数採用するのが手っ取り早いだろう。あとは変に拘らず、汎用カードの『サイクロン』などを採用することだろうか。

：デュアルモンスターの枚数をいじるとなんとなく負けた気がするので、ひとまずはサポートカードで枚数を調整しておこう。汎用カードの採用も検討に入れるとして、40枚で収まるだろうか：

それと大山にドロー力を向上させるための訓練の方法を聞いてみるとするか。さすがに十代ほどのドロー力はなくとも、せめて手札でカードが完全に腐る状況だけは回避したい。

リベンジに向けてまずはデツキを弄り直すことにし、シハーブにカード探しを手伝わせながらあーでもないこーでもないと呟き続けるのであつた。

12. オカマとおつさんつていうなつ！

日に日に生徒数が少なくなる鍊金術の授業は、今日も爆破オチだつた。そしてこの爆発音でも全く起きなかつた十代がチャイムの音でようやく目を覚ました。こいつの体内時計の正確さは驚くべきものがある。

「よし、昼飯だ！」

訂正、腹時計の正確さだつたようだ。

「ちょ、ちよつと待つてほしいんだにや、このプリント、持つていつて欲しいんだにや」

「えへ、宿題か？」

十代が不服そうな声を上げる。今までも鍊金術の授業でたまに課題がでることがあつたが、大徳寺教諭の話さえ聞いていれば難しくもないものばかりだ。つまり、話を聞かずに寝ていた十代には少々辛い。

「違うんだにや。今度の日曜日に、島に眠る遺跡を尋ねるピクニックを企画しているのにや。希望者はこぞつて、参加して欲しいんだにや」

そういうつて大徳寺教諭がプリントを配布する。定員は特に設けられていないようで、事前に用意しておくものも弁当ぐらいである。一応課外活動扱いらしいので、参加すれ

ばボーナスで出席点が付くとも書いてあつた。

単位が危ないわけでもなく、成績優秀者を狙っているわけでもないので参加する必要はあまり無いが、単純に面白そうなので行つてみることにするか。大徳寺教諭はおおらかなので、記念撮影ぐらいなら許されるだろう。

事前にちょっとした下調べもしておきたいが、この島に関することはほとんどネットに上がつてないんだよな……にせ島の名前すらわからない。アニメのときから気になつていたのだが、学校案内にも載つてなかつたしなあ。

ひとまず図書室にでも行つてみるか。：あれ、図書室つてどこだつけ。購買へ歩く道すがら、適当に誰か捕まえて聞いてみるか。

結局だれも捕まえることが出来ないまま、購買に到着した。普段なら食堂に行くのが、ドロー力を鍛えるならドローパンだと大山に言われ、最低でも一日一引を心がけるようしているのだ。山ごもりも勧められたが、俺は流石にそんなことはできない。

カゴの中身をかき分けてドローしようとした時、反対側にいた人と同じパンをドローとしたようで引っ張り合いになつてしまつた。

「貴様！ その手を離せ！ それはこの俺がドローしようとしていたんだぞ！」

反対側を見てみると、ノース校の黒い制服を着た生徒がこちらに向かつて怒鳴り散ら

してきていた。ノース校との対抗試合も終わっているので、今本校でその制服を来ているのはただ一人、万丈目準その人である。

「誰かと思えば、万丈目じやないか」

「さん、だ！ そう言う貴様は代田か」

せいぜい一回か二回程度しか会つたことが無いのに、どうやら覚えられていたらしい。大企業の御曹司ともなると、嫌でも人の顔を覚えなければならぬからだろうか。

しかしサンダーを強調するということは、よっぽどあだ名が気に入っているらしい。アニメでも散々サンダーと呼ばれているのは、あの対抗試合でのサンダーコールだけではなくこうやって自分から強調しているからなんだろうなあ。

「覚えてくれていて光榮だ。ところでサンダー、図書室がどこにあるか知らないか？」

「当然だ。しかし図書室の場所か：教えてやらんでもないが、それなりの対価を払つてもらおうか」

嫌らしくニヤリと笑う万丈目：サンダー。対価も何も、図書室の道のりぐらいなら教えてくれれば良いと思うのだが、これは遠回しに手に掴んだドローパンを要求されてしまうのだろうか。未だに放そうとしないし。

『兄貴へ、そんな意地悪しないで教えてあげればいいじゃなく』

謎の黄色い物体が空中に突如現れた。ナメクジのような目にタラコ唇、赤いパンツだ

けを履いた半裸姿というコメントし辛い姿だ。端的に言うなら不細工としかいいようがない。きつとこいつは『おジャマ・イエロー』だろう。オカマ口調なのがイラツとする。

「ええい！ 貴様は余計なことを言うんじゃない！」

羽虫を退治するように両手で『おジャマ・イエロー』をたたき落とそうとするサンダーだが、ひよいひよいと空中を動き回る『おジャマ・イエロー』にはなかなか当たらない。そうとは言つても、10回目にはたたき落とされてしまったのだが。

「ゴホン、それで、貴様はこの俺に何を差し出すんだ？」

サンダーの動きはカードの精靈が見えない人から見たら奇行にしか見えなかつたので、それを誤魔化すように大きく咳をしていたが、近くにいた生徒達から胡乱げな目でみられていた。

ちらちらと手元のドローパンに視線がいつているので、どうしてもこのドローパンを手に入れたいのだろう。普段なら新たなドローパンをドローすればいいと思つて譲るのだろうが、あいにくとドロー修行のために引いたならば結果を確認せずに譲るなんて考えられない。それならば解決方法は一つだ。

「今サンダーに差し出せるものはないな。代わりといつてはなんだが、デュエルをしないか？ 僕が勝つたら図書室の場所を教えてもらおう」

「ほう、この俺にデュエルを挑むとは、身の程知らずめ。いいだろう、ならばお前が負けたらそのドローパンを差し出せ！」

「ああ、このドローパンは勝つてから存分に味わうことにしてよう」

ドローパンのかごから離れ、レジなどの邪魔にならないスペースでデュエルディスクを構える。俺とサンダーがデュエルを始めるということで、購買にいた他の客達の何人かは見物するようだ。

『しつかしお互い賭けるものが：なんといいますか、ぱつとしませんな』

「やかましい」

「「デュエル！」

「俺のターン、ドロー！ 俺は『ドラゴンフライ』を守備表示で召喚してターン終了』

『ドラゴンフライ』DEF／900

1mは優に超えているであろうドラゴンフライ：すなわちトンボが身体を丸めて防御姿勢を取っている。トンボなら回避行動に専念したほうが撃墜を逃れやすそうなものだが、防御姿勢をとるのはプレイヤーの盾となるためだろうか。

「俺のターン、ドロー。永続魔法『金剛真力』発動！ これにより相手フィールド上にのみモンスターが存在する時、俺は1ターンに1度、手札のレベル4以下デュアルモンス

ターを特殊召喚することができる!」

初ターンから《金剛真力》を引けたのは幸先がいい。なにせ1ターン目に展開を補助できるのは《金剛真力》と《二重召喚》ぐらいしかないからだ。《二重召喚》は使い捨てだし、他のカードは墓地に依存するカードだつたり、効果の発動までタイムラグがありするので、どうしても初動が遅くなる。

：《金剛真力》も相手フィールド上にモンスターがない先攻1ターン目では効果を発揮しないため、《おろかな埋葬》を採用することを検討したほうがいいかも知れない。「俺は《金剛真力》の効果により、《シャドウ・ダイバー》を特殊召喚し、さらに再度召喚する！」そして《シャドウ・ダイバー》の効果発動！ 俺の闇属性・レベル4以下のモンスター1体はこのターン相手プレイヤーに直接攻撃することができる！」

《シャドウ・ダイバー》 ATK／1500

フードを被つた黒坊師が静かに佇む中、俺の影から白く輝いた悪魔が咆哮をあげるよう力強く立ち上がった。：立ち上がつただけで、実際に咆哮をあげたわけではない。そもそもこいつに发声器官なんてあるのだろうか。そんなことを考えていると、影の悪魔はこちらに振り向いて口角をあげた。

：細かいことは考えないほうがいいのかもしれない。

「ふん、わざわざ二度手間をしてまで《ドラゴンフライ》の効果を発動させないつもりか」

「狙いは間違つてないが、二度手間つていうなつ！」

『ドラゴンフライ』は戦闘破壊された時にデツキからモンスターを特殊召喚する効果をもつ、いわゆるリクルーターである。うかつに戦闘破壊した場合、厄介なモンスターを場に残されて次のターンに繋げられてしまうだろう。

もし手札に再度召喚状態にするカードと攻撃力1500以上の下級モンスターがあれば、まずは『ドラゴンフライ』を撃破し、特殊召喚されたモンスターがリクルーターなら無視して直接攻撃、場に残さない方が良さそうなら戦闘破壊という風に状況に応じて攻撃方法を変えることが出来たのだが……

「いくぞサンダー！　『シャドウ・ダイバー』で直接攻撃！　リッピング・フロム・シャドウ！」

悪魔は俺の影に潜り込んだかと思うと、サンダーの影から立ち上がった。照明の位置により、影はサンダーの真後ろにあるためサンダーは気付いていないようだ。

「消えただど？　ええい、どこにいった！」

サンダーが振り向くと影に潜り、サンダーが前を向いた途端にまた立ち上がる。影が白く輝いているので、サンダーが下を向けばすぐに見つかると思うのだが、辺りを見渡すサンダーはいつこうに影の様子に気付かない。

そして悪魔は背後からサンダーの目を塞いだ。

「な、なんだ!? 急に視界が、ええい、放せ!」

サンダーが背後の悪魔目掛けて殴り掛けろうとするが、悪魔はひよいひよいとサンダーの攻撃を避けている。：あいつはソリッドヴィジョン相手に何をやっているんだ。ついでにソリッドヴィジョンも何をしている。

悪魔はひとしきりはしやいで満足したのか、身体をのけぞらせてサンダーから距離を取つた。：もちろん影は繋がつているので上半身しか離れていない：そして腕を振り下ろし、鋭い爪でサンダーを切り裂いた。

『シャドウ・ダイバー』ATK／1500

サンダーLP40000→2500

「カードを1枚伏せ、ターン終了」

「俺のターン、ドロー！ 貴様の小賢しい策は無意味だつたことを教えてやろう！ 俺は『ドラゴンフライ』を生け贋に捧げ、『アームド・ドラゴンLV5』を召喚！」

『アームド・ドラゴンLV5』ATK／2400

周囲が伝説のモンスターであるレベルモンスターの出現にざわめいている。サンダーは対抗試合でもこのカードを使用し、その実力をはつきりと見せつけた。

サンダーがアカデミアを去ったときは、レッドに負けた恥知らずだの、イエローに居場所を奪われた雑魚だの、散々に言っていた。しかし伝説のカードを使いこなす実力

や、わずか3ヶ月もしないうちにノース校をまとめあげるカリスマ、それらは無視できるような物ではない。

「《アームド・ドラゴンLV5》で《シャドウ・ダイバー》を攻撃！ アームド・バスター！」

出席日数の問題でレッド寮に移籍することになったとはいえ、再びこのアカデミア本校に舞い戻ったサンダー。《アームド・ドラゴンLV5》は、その力を強調するかのように豪快に腕をまわして拳を繰り出した。フードの黒坊師は影の悪魔を盾にしたが、トゲ付きの拳に悪魔もろとも身体を貫かれてしまった。

《アームド・ドラゴンLV5》 ATK／2400
《シャドウ・ダイバー》 ATK／1500

葵 LP4000→3100

「リバースカード、オープン！ 『二重の落とし穴』！ 再度召喚されたデュアルモンスターが戦闘により破壊された時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」
「何だと！」

恐らく本体であろう黒坊師が碎け散った後、身体を貫かれた影の悪魔がドロリと溶け出したと思うと地面が大きく揺れる。溶け出した悪魔だつた液体に沿うように床が割れ、《アームド・ドラゴンLV5》はその裂け目に飲み込まれてしまつた。

「くそつ、俺はカードを一枚伏せてターン終了だ

「俺のターン、ドロー。」

相手の場が伏せ一枚だけなので攻勢に出たいのだが、手札の下級モンスターは火力が低く、《金剛真力》は発動条件を満たしていない。…先ほどの《二重の落とし穴》は少し早まつたかも知れない。

「《マジック・ライム》を攻撃表示で召喚！ そのままサンダーに直接攻撃！」

どこか金属のような光沢を持つた青いゲルが現れ、きよろきよろと辺りを見渡すように流動する。のそのそとサンダーまで近づくと、大きく身体を振るわせてサンダーの左脚：正確に言うならばその脛：にぶつかつた。

《マジック・ライム》は満足したと言わんばかりにのんびりとこちらに戻つてくるが、サンダーはうめき声をあげて脛を押さえている。…ああ、うん、そこはぶつけたら痛いよな。しかも結構鈍い音がしてたもんな。でも地味だからリアクションを取り辛いんだよな。

《マジック・ライム》 ATK／700

サンダー LP 2500→1800

「カードを一枚伏せてターン終了…サンダー、大丈夫か？」

「…これしきのこと、どうということはない。俺のターンだ、ドロー」

そうはいうが、どうみても左脚が震えている。…これはきっと指摘しないのが優しさというものだろう。

「俺は、《アームド・ドラゴンLV3》を召喚してバトルだ！《マジック・スライム》を攻撃！アームド・スマッシュ！」

《アームド・ドラゴンLV3》 ATK／1200

《マジック・スライム》 ATK／700

葵LP3100→2600

「さらに、《死者転生》を発動！手札を1枚捨て、墓地の《アームド・ドラゴンLV5》を手札に加える」

わざわざ回収するということは、1枚ずつしか投入していないのだろうか。ノース校に伝わる伝説のカードというだけあって、そもそも複数枚存在するのかどうかさえ怪しいということを考えると当然かもしれない。

「さらにカードを1枚伏せてターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

レベルモンスターと呼ばれるモンスター群は一定条件を満たすとレベルが上昇し、ステータスと効果が強化される。ならばその条件を満たす前に退場させればいい。

「《デュアル・サモナー》を攻撃表示で召喚！」

『デュアル・サモナー』ATK／1500

汎用リクルーターに対応できる攻撃力、1ターンに1度の戦闘破壊耐性、さらにはデュアルの展開補助が可能と、一体で何粒も美味しいモンスターの『デュアル・サモナー』さんである。

猿に殴られたり、コスプレ呼ばわりされたり、鳥に蹴られたり、馬に蹴られたり、ウオンバットに突撃されたり、乙女に籠絡されたのに手をつなぐことを拒否されたり、色々と酷い目に遭っている彼だがこのデツキには無くてはならない人材である。

『デュアル・サモナー』で『アームド・ドラゴンLV3』を攻撃！ カイザースペル！

召喚師の指先から発せられた橙色の光線が『アームド・ドラゴンLV3』に殺到する。この攻撃が決まつてしまえば、前のターンにサンダーが仕込んだ攻撃の準備が無駄に終わり、防御に回ることになるだろう。そうなればそのまま押さえ込んでしまうのは難しいことではない。

「罠カード発動！『攻撃の無力化』！ これで貴様のモンスターの攻撃は『アームド・ドラゴンLV3』に届かん！」

流石というべきだろうか。橙色の光線は『アームド・ドラゴンLV3』に届く前に、突如現れた渦に飲み込まれてしまった。：次のターンは『デュアル・サモナー』の戦闘破壊耐性に期待しよう。

「俺はこのままターン終了」

「そして恐怖の俺のターンが始まる！ カード、ドロー！」

「このターンに反撃が始まることが確実という点では、確かに恐怖だ。下手をしたらこのターンでライフを削りきられかねない。」

「俺のスタンバイフェイズ、《アームド・ドラゴンLV3》は《アームド・ドラゴンLV5》へとレベルアップする！」

《アームド・ドラゴンLV5》 ATK／2400

《アームド・ドラゴンLV5》への進化条件は、《アームド・ドラゴンLV3》がスタンバイフェイズにフィールド上に存在すること。初ターンにリクルーターを召喚したのは《アームド・ドラゴンLV3》をむざむざ破壊されないためだろう。

「そして《アームド・ドラゴンLV5》の恐ろしい効果を発動！ 手札のモンスターカードを1枚墓地に送ることで、その攻撃力以下の相手フィールド上のモンスター1体を破壊する！ 俺が墓地に送ったのは《闇より出でし絶望》！ よつて攻撃力2800以下の《デュアル・サモナー》を破壊だ！ デストロイド・パイル！」

《アームド・ドラゴンLV5》から発射されたそれは、トゲというにはあまりにも太く、杭と表現する方が正しいだろう。いかに《デュアル・サモナー》に戦闘破壊耐性があるといつても、効果破壊には無防備である。

『デュアル・サモナー』は杭に胴体をあつさりと貫かれ、ポリゴンと化して碎け散った。

「まだだあ！『アームド・ドラゴンLV5』で貴様に直接攻撃！アームド・バスター！』

『アームド・ドラゴンLV5』ATK／2400

葵LP2600→200

「ふん、首の皮一枚繋がつたか。ターンエンド！」

危ないところだつた…サンダーがモンスターを召喚していたらライフを削りきられてしまふところだつた。

「俺のターン、ドロー…モンスターをセットして、ターン終了だ」

「ふん、『アームド・ドラゴンLV5』の圧倒的パワーの前に手も足もでんか。俺のターン！ドロー！」

ここでモンスターを引かれてしまうと、もうどうしようもない。

「ちつ、『アームド・ドラゴンLV5』でセットモンスターに攻撃！」

『アームド・ドラゴンLV5』ATK／2400

『フェデライザー』DEF／1100

『フェデライザー』の効果発動！このカードが戦闘により破壊され墓地に送られた時、デッキからデュアルモンスター1体を墓地に送り、そしてカードを一枚ドローする

！」

「だが、このエンドフェイズ、《アームド・ドラゴンLV5》はモンスターを戦闘破壊したことで《アームド・ドラゴンLV7》にレベルアップする！」

《アームド・ドラゴンLV7》 ATK／2800

《アームド・ドラゴンLV5》から光がほとばしり、その身体をみるみる変化させていく。身体の各所から生えていたトゲは所々鋭い刃になり、肉体も格段に大きくなり、甲殻に覆われた部分は相対的に少なくなつたが力強さが強調される姿になつた。

「俺のターン…ドローー！」

《金剛真力》の効果発動！ この効果で《インフィニティ・ダーク》を特殊召喚！

《インフィニティ・ダーク》 ATK／1500

「そして墓地に通常モンスターが2体以上存在するとき、《樹上の射手》は手札から特殊召喚できる！ さらに《樹上の射手》を生け贋に、《魔族召喚師》を召喚！」

《魔族召喚師》 ATK／2400

《樹上の射手》は登場する度に生け贋になつてもらつてゐる気がするが、上級モンスターを素早く召喚するための必要な犠牲と割り切ることにする。召喚からすぐ生け贋になつた《樹上の射手》の目が恨めしげだったのは気のせいだろう。きっとそう違ひない。

「速攻魔法《フォース・リリース》発動！ 自分フィールド上のデュアルモンスター全て

を再度召喚状態にする!」

光が降り注ぎ、《インフィニティ・ダーク》と《魔族召喚師》に力を与える。モンスター達は、紋様を光らせたり、手に持つ髑髏の杖を青く輝かせたり、それぞれに力のみなぎる様子を表現してくれた。

「再度召喚された《魔族召喚師》の効果発動! 墓地の悪魔族モンスター、《シャドウ・ダイバー》を特殊召喚!」

《シャドウ・ダイバー》ATK／1500

「ふん、雑魚をどれだけ並べた所で、《アームド・ドラゴンLV7》の効果の前では無力!」

《アームド・ドラゴンLV7》の効果は《アームド・ドラゴンLV5》の効果を強力にしたものである。除去する対象が相手フィールド上の1体から、相手フィールド上に存在する表側表示のモンスター全てに広がっている。

攻撃力も、上級デュアルモンスターの最高値である2400を上回る2800という大台であり、真っ向から戦えます一方的に負けるのが目に見えている。しかし、《アームド・ドラゴンLV5》の時には無かつた弱点がある。

「バトル! 《インフィニティ・ダーク》で《アームド・ドラゴンLV7》に攻撃!」「ふん、ヤケになつたか。迎撃しろ! アームド・ヴァニツシャー!」

「それはどうかな！　再度召喚された『インフィニティ・ダーク』の効果発動！　このカードの攻撃宣言時、相手フィールド上のモンスター1体の表示形式を変更することができる！　この効果により、『アームド・ドラゴンLV7』を守備表示に変更する！」

『アームド・ドラゴンLV7』ATK／2800→DEF／1000

『アームド・ドラゴンLV7』は攻撃力が上昇した代わりに、防御が脆くなっているのだ。『アームド・ドラゴンLV5』の守備力は1700であり、もし『インフィニティ・ダーク』が効果を使つても反射ダメージでライフがなくなってしまうところだった。

「なんだと!?」

漆黒のヒーローがフィールド上を縦横無尽に駆け巡る。『アームド・ドラゴンLV7』は焦れた様子で攻撃を続けるが、避け続ける漆黒のヒーロー。そして『アームド・ドラゴンLV7』がバランスを崩した瞬間、ヒーローはその腕を駆け上がり、肩の後ろの2本の角の真ん中のトサカの下の鱗の右：ではなく、背中の甲殻に覆われていない部分目掛けて飛び蹴りを放つた。

やはり防御が薄い部分だつたのだろう。『アームド・ドラゴンLV7』は叫び声をあげてポリゴン化し、碎け散つた。毎度のことだが、『インフィニティ・ダーク』はいつ効果を發揮しているのだろう。そして紋様の発光は何か意味があるのだろうか。

『インフィニティ・ダーク』 ATK／1500

『アームド・ドラゴンLV7』DEF/1000

「そして、『魔族召喚師』でサンダーに直接攻撃！」

「そうはさせん！ 戻発動！ 『リビングデッドの呼び声』！ 僕は墓地から『アームド・ドラゴンLV5』を特殊召喚する！ 貴様の攻撃は俺には届かん！」

ここで『アームド・ドラゴンLV5』に帰還されると、『魔族召喚師』と相打ちにしても『シャドウ・ダイバー』も一緒に破壊されてしまう。そうでなくとも、サンダーのライフを削りきるには『シャドウ・ダイバー』では攻撃力が足りない。

「ならば『リビングデッドの呼び声』にチエーンして、手札から速攻魔法『デュアルスパーク』を発動！ 『シャドウ・ダイバー』を生け贋に、『リビングデッドの呼び声』を破壊する。そしてカードを一枚ドローー」

流石『デュアルサポート最高峰の万能除去カード。【デュアル】以外のデッキでもタッチ要素で入れられる有能さは伊達じやない。実質1:1交換でしつかりと仕事をこなすその姿には、惚れ惚れとしてしまうな。

「何イ!?」

「バトル続行！ 『魔族召喚師』の直接攻撃！ スペル・オブ・ハデス！」

「のわあああ！」

サンダーは青い光に包まれ、絶叫とともに吹き飛ばされた。見た感じだと、明らかに

脚力だけで跳ぶことのできる距離ではない。相変わらず体感システムは尋常じやないな。

『魔族召喚師』 ATK／2400

サンダー LP-1800↓0

「くそつ、この俺が負けた…っ！　俺のドローパンが…っ！」

サンダーが悔しそうに膝を折り、床を殴りつけている。後半の台詞がなければもつと締まつたんだけどなあ：そういうえばドローパンを巡つてデュエルしてたんだよなあ。

あとついでに図書室の場所。

「まあいい、今回は負けを認めてやろう。それで、図書室の場所だつたか」

「ああ、どうにも場所が思い出せなくてな」

一応オリエンテーションや学校案内のパンフレットで見た記憶自体はあるのだが、何階にあるのかすらろくに覚えていない。むしろこの学校の設備で覚えている場所の方が少ない。規則ならほどんど覚えているのだが：

「俺の分のドローパンをすぐに買うから待つていろ」

場所だけを教えてくれればよかつたのだが、どうやらサンダー自ら先導してくれるらしい。サンダーがドローパンを新たにドローするのを待ち、サンダーと連れ立つて図書

室まで向かつた。

道中、シハーブと《おジャマ・イエロー》の心暖まる交流があつたのだが、紫色のおっさん精霊と黄色いオカマ精霊の交流は見るに耐えないものだったので、サンダーと一緒に出来る限りそちらを見ないようにしていた。

ちなみにドローしたパンは、俺とサンダーの両方ともショコラパンだつた。デュエルするまでもなかつたか、などとサンダーは満足そうに呴いていた。カリスマ溢れるサンダーだが、案外単純な奴なのかもしけない。

13. ある日森の中つて いうなつ！

さて、今日は待ちに待つた日曜日。遺跡については場所ぐらいしか分からなかつたが、カメラの充電も終わつてゐるし、食堂で販売されている弁当も購入してある。天気予報によると今日は一日晴れ、絶好のピクニ・課外授業日和である。

そして集合場所に着くのが早すぎた俺は今、森の奥にある滝に打たれている。打たれている滝は、滝行初心者向けの勢いが弱い場所らしい。それでもまだ春というには寒いこの季節、滝に打たれるのは中々辛い物がある。

…どうしてこうなつた。

「葵、集中が乱れているぞ！ 自然と一体になるんだ！」

隣では大山が事故防止のためにこちらを見ている。この小さな滝ではそうそう起こりえないだろうが、万が一の可能性があるためか、その表情は真剣そのものである。

「よし、そろそろあがろう。長くやれば良いというものではないからな」

滝から出て、タオルで身体を拭いて服を着る。そして冷えた身体を温めるため、焚き火にあたることにした。ライターもないのでてつきり『火の粉』の出番かと思つていた

が、俺が着替えている間に大山が火をおこしていた。

「葵よ。滝に打たれると思考が澄み切って、新たな扉が見えてくると思わないか」

「残念ながら光り射す道が見えるまでには至つて無いな」

「そうか…だが葵はまだ初めての滝修行だ。きっとその内大自然と一体になつて、ドローの真髓を見極めることも出来るだろう」

そう、これはドロー改善のための修行なのである。願掛けだとかそんな生易しいものではなく、本気で修行すれば効果があるあたり、この世界はどうかしていると思わぬくもない。

「ところで大山、今何時だ？」

今いる場所は大山が山ごもりをしていた頃の拠点であり、それなりに校舎から離れた場所にある。気付いたら大山に担がれながら移動していくので、道のりどころか方角すら分からぬが、間に合うならば鍊金術の課外授業に参加したい。

「もう昼過ぎだと思うが、どうしたんだ？ 飯が無いなら分けてやるが」

鍊金術の課外授業の集合時間はとつくな過ぎて居た。遺跡観光は楽しみにしていたのだが、仕方ない。今日は大山に付き合つてもらつて一日ドロー修行に励むとしよう。

「いや、一応昼飯を買つてあるからな。でも美味そだから少し交換してくれ」

「いいぞ。もうすぐ焼けるはずだ」

大山の昼飯は、今焚き火で塩焼きにされている川魚である。魚については詳しくないので何の魚かは分からぬが、とりあえず塩焼きならまづくはならないだろう。ちなみに捕獲方法を聞いたところ、川の中からドロー：つまるところ手掴みとのことだつた。「食べ終わつてからは何をするんだ？」ここに辿り着いて滝に打たれるだけで午前が終わつてしまつたんだが

俺が知つているドロー修行は、前に教えられたドロー・パン一日一引ぐらいだ。やはり感謝の一萬ドローなんかをするのだろうか。気になる答えは、ドロー修行のために山ごもりする事一年、今やドローのスペシャリストである大山平に答えてもらおう。

「そうだな…ところで葵、修行といえば熊との勝負だよな」

「一体何の修行だよ」

俺たちはデュエリストであつて、格闘家ではないはずだ。少なくとも熊と勝負をした結果、ドローがよくなるということはないとは思うが、大山が言うからにはもしかしたらそんなこともあるのかもしれない。

「そしてちようどいいところに、あそこに熊がいる」

「いくらなんでもそんなバカな話に釣られ…クマー！」

指を指された方を見ると、そこにいたのはヘッドギアをかぶり、腕にデュエルディス

クを装着した二頭の熊だった。肩にはモモエとジュンコがそれぞれ担がれている。

「あら、代田さん。ごきげんよう」

「ああ…そちらのお連れさんは随分野性味溢れた見た目だが、二人の恋人か?」

自分でいっておいてなんだが、野性味も何もヘッドギアとデュエルディスク以外は野生の熊そのものである。しかし担がれたまま挨拶してくるなんて、こいつ以外と胆が据わってるよな…」

「そんなわけないでしょ! モモエも呑気に挨拶してる場合!」

「すまん。あまりにも美女と野獸そのものの構図だったもので驚いてしまったんだ」

「葵、確かにあの熊達はどちらも美女だが、女同士で美女と野獸は無理があるだろう。そもそも浜口くんは野獸というにはおつとりしているし、枕田くんは…」

「私たちが野獸側なの!? しかもなんで私のほうで言葉に詰まるのよ!」

残念ながら熊の美貌なんて俺には分からない。しかしそくみてみると、艶やかで手入
れが行き届いた毛、健康的に引き締まった身体、そしてつぶらな瞳。こうして特徴を並
べると、大山が美女というのも納得できる。

「そんなことはいいとして、これはどういう状況なんだ」

「そ、そんなことですつてえ!」

ジュンコが憤慨していると、熊達がやつてきた方向から突如として黒服達が現れた。

黒服達は俺たちを無視して、銃を構えて熊を取り囲む。そして黒服達の後ろからゆづくりとした歩調で背の低い壯年の男性が歩いてきた。

「ふん、あれらは私たちS A L研究所が飼育していた実験動物たちだ」

「前にも似たような事があつたとおもつたけど、またアンタ達のせいだつたのね！」

どうやらジユンコは前にもさらわれたりして いたらしい。そういうえばアニメでもS A L研究所は登場しており、なんだかんだで撤退していくと思ったのだが、この時期にはまだいたようだ。

「我々S A L研究所は、デュエルの精霊について調査するため、動物が人間よりも精霊を感じる能力に長けていることを生かし、動物に特殊な訓練と補助デバイスを用いることで、ついにデュエルアニマルの調教に成功したのだ！」

黒服達から博士と呼ばれた男が興奮気味に己の成果を語っているが、技術の無駄遣いにしか聞こえない。目的がデュエルの精霊の調査ということだが、精霊が見える人物に協力を要請したほうが：：とも思つたが、そもそも精霊を見る事の出来る人間自体めったにいないし、それを探すよりも動物を使つた方が確実か。

「それがSuper Animal Learning（スーパー アニマル ラーニング）、S A L（サル）だつたのだが、そこのガキが知つて いるように前の被検体に逃げられてしまつたのだ。そこで新しい被検体を確保し、S A Lのノウハウを生かして

新たに訓練されたこの二頭こそが、Knowledge More Animals

(ノウレッジ モア アニマルズ)、KMA (クマ)だ!』

博士が熊、もといKMAを指差しながら高笑いをあげる。しかしやつてていることは動物実験いうよりは、動物を訓練しているだけにしか聞こえない。言つてしまえば芸を仕込んだという程度だ。：：その芸がデュエルなのが実にこの世界らしいと思う。

：：そんなことよりも、デュエルの精霊を研究するという目的はどこへ行つたのか。デュエルアニマルを世間に発表すれば注目されるだろうが、研究目的を見失つては本末転倒ではないだろうか。

そして博士が説明している間、幸いにもKMAは黒服達を警戒しているのか動きを見せていながら、あちらには人質がいるためにこちらからも手が出せずに事態は膠着している。

「そんなことより早く助けてよー！」

熊に担がれ、さらには麻酔銃を向けられているという状況にジユンコが泣き言を漏らす。しかしながら二人を助けようにも、近づくことすらままならない。

『ふむ：動物は精霊を感じる力が高い、ということでしたな?』

シハーブに確認をとられるが、その情報が真実かどうかは俺に確かめようは無い。しかし何もしなければただただ無駄に時間が過ぎていくだけなので、シハーブに向かつて

頷いておく。どうせシハーブが何かやつても、他の人たちには分からぬだらうといふのも理由の一つにある。

『そこの熊達よ！　お前達が担いでいるのは某の主人の知人である！　痛い目をみたくなれば、ただちに二人を解放せよ！』

シハーブがＫＭＡに向けて声を張り上げ、モモ工達の解放を要求する。ＫＭＡはそれが理解できたのか、二人をそつと自分たちの後ろに隠すように降ろし、デュエルディスクを構えながらうなり声をあげていた。

「状況から察するに、デュエルを申し込まれてゐるみたいだな」

「なんだかよくわからんが、タツグデュエルならば俺も手を貸そう」

大山と共にデュエルディスクを展開する。タツグデュエルとということに一抹の不安を感じるが、そんなことを言つてもこれ以外に取れる手段はない。こうなればなるようになるだらう。

*タツグデュエルールはOOG準拠

『「「デュエル！」』

どうやらデュエル関連の会話はヘッドギアから出力されるようだ。どうせならある程度普通の会話ぐらいできるようにしてもらいたかったものだが、うなり声や鳴き声だ

けでデュエルをするよりはよっぽどマシである。

『ワタシのターン、ドロー！ ワタシは《グリズリーマザー》を、攻撃表示！ さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド！』

《グリズリーマザー》ATK／1400

ところどころイントネーションなどに不自然さがあるものの、思ったよりも喋りが流暢で聞き取りやすい。これならば聞き間違える事はあまりないだろう。

「俺のターン、ドロー！」

大山のターンだが、何かを忘れているような気がする。大山のデュエルを見るのはなんだかんだで初めてなのだが、確かアニメでこいつが使っていたデッキはドローと名の付くカードで固められて……あつ。

「俺はカードを1枚伏せ、《ドローラー》を召喚！ そして《ドローラー》の効果発動！

このカードの召喚時に手札を任意の枚数デッキの下に送る事で、攻撃力と守備力はその枚数×500となる。俺は4枚の手札全てをデッキの下に送る！」

《ドローラー》ATK／？→2000

まさか伏せカードを1枚のこして、それ以外全てデッキ送りにするとは……しかも予想が正しければ、あの伏せカードは防御するつもりがないどころか、下手すれば自爆になりかねないものだつたはずだ。

「いくぞ！『ドローラー』で『グリズリーマザー』を攻撃！」

ロードローラーのような体躯のそのモンスターは『グリズリーマザー』までまっすぐローラーを転がして移動し、そのまま『グリズリーマザー』をひき潰した。紙の様に薄くなつた『グリズリーマザー』は空へ舞い上ると、そのままポリゴンとなつて割れてしまつた。

『ドローラー』ATK／2000

『グリズリーマザー』ATK／1400

K M A L P 8 0 0 0 0 → 7 4 0 0

『ドローラー』が戦闘で破壊した攻撃表示モンスターは墓地に送られず、デッキの一一番下へ送られる！』

『グリズリーマザー』には戦闘によつて破壊され墓地に送られた時に、水属性攻撃力1500以下のモンスターをデッキから特殊召喚する効果があるが、『ドローラー』の効果により墓地ではなくデッキに送る事でそれは回避された。

『ワタシのターン、ドロー！　ワタシは『地獄の番熊』を、攻撃表示！』

『地獄の番熊』ATK／1300

『地獄の番熊』の効果は、フィールド上に存在する『万魔殿—悪魔の巣窟—』の破壊を防ぐものだつたはずだ。そんなものを採用しているからには、こちらのK M A のデッキ

は【デーモン】の可能性が高い。

『ワタシは手札から、《野性解放》を発動！ この効果により、《地獄の番熊》の攻撃力は、その守備力である1800ポイント上昇！』

《地獄の番熊》 ATK／1300→3100

…どうやら俺が知っている【デーモン】ではなさそうだ。少なくとも《野性解放》の入った【デーモン】なんて聞いた事が無い。単純に熊繫がりで採用されたのだろうか。『さらにリバースカード、永続罠《野生の咆哮》発動！ 自分フィールド上のモンスターが相手モンスター1体を戦闘により破壊し墓地へ送った時、自分フィールドで表側表示の獣族モンスター1体につき300ポイントのダメージを、相手に与える』

1ターン目のKMAが召喚したのは獣戦士族の《グリズリーマザー》のはずなのに、しつかりと獣族モンスターサポートを伏せているあたり、タツグデュエルができるよう訓練されていたのだろう。厄介この上ない。

『バトル！ 《地獄の番熊》で《ドローラー》に攻撃！ ヘルハウリング！』

《地獄の番熊》のあげる咆哮、その衝撃だけで数百キロはあるであろう《ドローラー》が吹き飛ばされる。悪魔の巣窟を守っているのは伊達ではないということだろうか。

《地獄の番熊》 ATK／3100

《ドローラー》 ATK／2000

大山・葵LP 80000→6900

『さらに、《野生の咆哮》の効果で、3000ポイントのダメージ！』

大山・葵LP 69000→6600

『さらに、リバースカード、《キャトルミュータイレーション》発動！　《地獄の番熊》を手札に戻し、《地獄の番熊》を攻撃表示で特殊召喚！』

《地獄の番熊》 ATK／1300

特殊召喚しなおすことにより、《野性解放》のデメリットであるエンドフェイズでの破壊を回避されてしまった。そしてまだKMAのバトルフェイズは終了しておらず、こちらのフィールドはがら空きである。

『《地獄の番熊》でプレイヤーに直接攻撃！』

こちらががら空きということは、当然直接攻撃されてしまう。どうやらデュエリストアニマルというのは思っていたよりも手強いようだ。あつという間にライフの30%以上がなくなってしまった。

《地獄の番熊》 ATK／1300

大山・葵LP 66000→5300

『ワタシはカードを2枚伏せ、ターンエンド！』

「エンドフェイズに罠カード発動！《奇跡のドロー！》！　自分のドローフェイズの前に

カード名を1つ宣言し、ドローしたカードが宣言したカードならば相手に1000ポイントのダメージを与える!」使うだろうとは思っていたが、せめて大山のターンまで待つてはくれないものだろうか:そんなことを考えながら大山を睨みつけると、素晴らしい笑顔でサムズアップされた。無茶振りにもほどがある。

「俺のターン、ドローするカードは:『デュアル・サモナー』だ。ドロー」

ドローカードは:『巨人ゴーグル』だった。そもそもデッキをハイランダー構成にしているということは、デッキにあるカードの種類が40種はあるということだ。最初の手札の5枚を除いても30種類を越えており、宣言通りにドローする確率は3%程度という酷い数値なのである。

大山・葵 LP5300→4300

『巨人ゴーグル』を召喚してバトル、『地獄の番熊』に攻撃』

『巨人ゴーグル』ATK/1500

『攻撃宣言時、リバースカード、オープン!『幻獣の角』発動!『地獄の番熊』に装備し、攻撃力を800上昇!そしてこのカードを装備したモンスターが相手モンスターを破壊し墓地に送った時、ワタシはカードをドローする!』

『速攻魔法『スペシャル・デュアル・サモン』!これにより『巨人ゴーグル』を再度召

喚状態にし、元々の攻撃力を2100にする!』

『突進』よりも高い上昇値、戦闘破壊したときのドローによるアドバンテージ、これだけでも獣族、獣戦士族サポートとしてかなり高性能である。油断も隙もあつたものではない。

『巨人ゴーグル』ATK／1500→2100

『地獄の番熊』ATK／1300→2100

「カードを2枚伏せ、ターン終了」

幸いなのは『幻獣の角』をダメージステップに発動されなかつたことだろうか。もしダメージステップに発動されてしまつたならば、『スペシャル・デュアル・サモン』で対抗できずにダメージを負つた上にドローまで許してしまうところだつた。

また『野生の咆哮』の効果は相手モンスターが破壊し墓地に送られてから発動するため、自分モンスターが1体の時に相打ちとなつた場合、効果発動時に自分フィールド上に獣族モンスターが不在のため効果が発動できなかつたようだ。

『ワタシのターン、ドロー！　ワタシは『剣闘獣アンダル』を、攻撃表示！』

『剣闘獣アンダル』ATK／1900

「ホアッ！」

思わず変な声が出てしまつた。もちろん原因は『剣闘獣アンダル』である。この鎧を

つけた熊のモンスター単体ならば、高い攻撃力の通常モンスターというだけなので動搖する理由ほどではないのだが、デッキとしての【剣闘獣】はOCGの世界大会で優勝経験があるのでだ。

きっと『地獄の番熊』と同様に熊繫がりで採用されただけだと思うが、強力な力テゴリなだけに心臓に悪い。：もしも熊カードを取り入れただけの【剣闘獣】ならば、こちらの伏せが破壊され尽くすのも時間の問題ではあるのだが。

『バトル！ 『剣闘獣アンダル』で直接攻撃！』

『剣闘獣アンダル』 ATK／1900

大山・葵 LP4300→2400

『ターンエンド！』

「エンドフェイズにリバースカードオープン！『正統なる血統』！ この効果で、墓地から『巨人ゴーグル』を特殊召喚！」

『巨人ゴーグル』 ATK／1500

大山のターンまで待つても良かつたのだが、デュエルディスクの仕様で大山は俺の伏せカードの確認ができない。それならば先に発動して知らせた方が、方策が固まりやすいはずだ。：余計なお世話にならなければいいが。

『俺のターン、『奇跡のドロー！』の効果だ！ 俺がドローするのは『破滅へのクイック・

ドロー》！」

大山はドローしたカードを自分で確認せずにKMAへと突きつける。俺も横を向いて確認すると、見事に《破滅へのクイック・ドロー》を引き入れていた。KMAの後ろにいるモモエとジ Yunコも驚いている。

KMA LP7400→6400

「そして、俺は《巨人ゴーグル》を、なんだつたか、ああ、思い出した！　一度手間…じやなかつた、再度召喚する！」

《巨人ゴーグル》ATK／1500→2100

「まあ！　代田さん以外の方が二度手間召喚をするだなんて！」

「そいつの二度手間召喚には嫌な思い出があるのよね…」

「お前ら、揃いも揃つて二度手間つていうなっ！」

KMAとはデュエル以外の言葉が通じないので断言はできないが、一応モモエとジユンコのためにデュエルをしているのに、何が悲しくて二度手間呼ばわりされなきやなんのだ！

「行くぞ！　《巨人ゴーグル》で《剣闘獣アンダル》に攻撃！」

岩の巨人と鎧を着た熊が真正面から取つ組み合いをする。お互に力自慢なのか、搦め手を使わないまつすぐな力押しである。そしてじりじりと岩の巨人が押し切り、その

まま鎧を着た熊は地に倒れ伏した。

『巨人ゴーグル』ATK／2100

『剣闘獣アンダル』ATK／1900

KMA LP6400→6200

「カードをセットし、ターン終了だ！」

『ワタシのターン、ドロー！　『キラーパンダ』を守備表示！　カードを1枚伏せ、ターンエンド！』

『キラーパンダ』DEF／1000

パンダは中国語では熊猫ということで、やはり【熊デッキ】なのだろう。そんな冗談のようないでっきに対しても劣勢だったということが泣けてくるが、ここからは反撃に移る事が出来るだろう。

「俺のターン、『奇跡のドロー！』の効果で宣言するのは『エヴォルテクター シュバリエ』！　ドロー！」

気合いを入れたのは良いものの、ドローしたカードは『デュアル・ランサー』だつた。この状況で『奇跡のドロー！』がなければ悪い引きではないが、これで残りライフポイントが2000を下回ってしまった。かなり危機的状況である。

大山・葵LP2400→1400

「《デュアル・ランサー》を召喚し、バトル！　《デュアル・ランサー》で《キラーパンダ》に攻撃！」

『攻撃宣言時、リバースカード、オープン！　《猛突進》発動！　《キラーパンダ》を破壊し、《巨人ゴーグル》をデッキに戻す！』

笛を持ったやたらと目つきの悪いパンダが猛烈な勢いで岩の巨人に突撃し、そのままポリゴンとなつて碎けた。突撃された方の巨人はとくに、こちらへと吹き飛んでデッキへと吸い込まれていった。

『そして自分フィールド上の獣族モンスターが破壊され墓地に送られた時、ライフポイントを10000払い、手札より《森の番人グリーン・バブーン》を特殊召喚！』

《森の番人グリーン・バブーン》 ATK／2600

K M A L P 6 2 0 0 → 5 2 0 0

おい、「熊デッキ」じゃなかつたのか。バブーンってヒビじやねえか。クマ科じやないどころか、ネコ目ですらねえぞ。《幻獣の角》といい、このカードといい、なんでもちよい本気の構成なんだよ。たしかに熊カード少ないけど、もう少し頑張ろうぜ？

「カードを2枚伏せ、ターン終了」

少し現実逃避してしまつたが、念のため手札を0枚にしておこう。できればお世話に

なりたくないカードだが、備えはしておくに越した事は無い。

『ワタシのターン、ドロー！ 《本気ギレ・パンダ》を召喚！ バトル！ 《森の番人・グリーン・バブーン》で《デュアル・ランサー》に攻撃！ ハンマークラブデス！』

この攻撃が通ると、《野生の咆哮》の効果を合わせてちょうどライフコントが0となり負けてしまう。追いつめられるのが早過ぎる気がするが、このまま負けるわけにはいかない。

「させるかっ！ リバースカードオープン！ 《ジャステイブレイク》！ 自分フィールド上の表側表示通常モンスターが攻撃宣言を受けた時、表側攻撃表示の通常モンスター以外のモンスターを全て破壊する！」

頭上から雷が降り注ぎ、辺り一面を焼き尽くす。パンダとヒビは雷に打たれて身を焦がしたようだが、《デュアル・ランサー》に落ちる雷だけは当たる寸前で二つに割れ、地面へと避けて行く。

絵面だけならば、天罰という表現が一番しつくりくるかも知れない。

『ターンエンド！』

「ならば俺のターン、ドローするのは《ドローバ》だ！」

そして大山が引いたカードを堂々と公開すると、確かに《ドローバ》だつた。しかし《野生の咆哮》があるこの状況では、攻守共に低く、そして効果もない《ドローバ》は壁

にする事すら危険である。

K M A L P 5 2 0 0 → 4 2 0 0

「《デュアル・ランサー》を：二度、じゃない、再度召喚する！ そしてバトルだ！ 《デュアル・ランサー》で直接攻撃！」

『攻撃宣言時、リバースカード、オープン！ 《闘争本能》発動！ 直接攻撃宣言時、相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、手札からレベル4以下獣族モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！ 《逆ギレパンダ》を特殊召喚！』

《逆ギレパンダ》 ATK 800

『《逆ギレパンダ》は相手モンスターの数×500ポイント、攻撃力上昇！』

《逆ギレパンダ》 ATK 800 → 1300

「ならばっ！ 《デュアル・ランサー》で《逆ギレパンダ》に攻撃！」

《デュアル・ランサー》 ATK / 1800

《逆ギレパンダ》 ATK / 1300

K M A L P 4 2 0 0 → 3 7 0 0

『獣族モンスターが戦闘により破壊され、墓地に送られた時、墓地の獣族モンスター、《本気パンダ》と《逆ギレパンダ》を除外することで、手札から《森の狩人イエロー・バブー》を特殊召喚！』

『森の狩人イエロー・バブーン』ATK／2600

『森の番人グリーン・バブーン』が入っているので、調整版モンスターである『森の狩人イエロー・バブーン』も当然入っているとは思っていたが、またもやこちらの攻勢は潰されたようだ。大山も悔しそうに歯噛みしている。

「くつ、俺はこのままターン終了！」

『ワタシのターン、ドロー！ バトル！ 『森の狩人イエロー・バブーン』で『デュアル・ランサー』に攻撃！ アローシュートデス！』

『森の狩人イエロー・バブーン』ATK／2600
『デュアル・ランサー』ATK／1800

大山・葵LP1400→600

『さらに『野生の咆哮』の効果で、300ポイントのダメージ！』

大山・葵LP600→300

『ワタシはカードを1枚伏せ、ターンエンド！』

『エンドフェイズに、永続罠『破滅へのクイック・ドロー』を発動！ 互いのプレイヤーはドローフェイズ開始時に手札が0枚だったとき、通常のドローに加えてもう1枚、カードをドローすることができる！ ただし、俺たちは自分のエンドフェイズ毎に700のライフポイントを払わなければならず、表側表示のこのカードがフィールドから離

れた時、3000ポイントのダメージを受ける！」

まさしく破滅へ一直線に突き進むカードである。しかもエンドフェイズ毎に払うライフが足りない場合、ライフを0にするというどんでもない効果を持つている。

「葵、後は任せたぞ！」

大山め、勝手な事を言いやがつて：俺たちの残りライフポイントは700を下回つており、《破滅へのクイック・ドロー》を発動したからにはこのターンこそがラストターンである。そもそも《奇跡のドロー！》に失敗してしまえば、その時点でのライフポイントが尽きてしまう。

「俺のターン…」

一息ついて目を閉じ、デッキトップに意識を集中させる。周りの音が徐々に遠ざかっていくが、滝の音だけはむしろはつきりと聞こえていた。絶体絶命の大ピンチにもかかわらず、頭が澄み切っている。

「俺がドローするのは…」

ほんの一瞬、一枚のカードが目の前を横切つた。

「《未来サムライ》！ ドロー！」

ドローしたカードは《未来サムライ》。カードを呼び寄せたというよりも、カードのほうから来てもらつたような感覚だが、これこそが大山の拘るドローということなのだろう

う。たしかに、これは少し癖になる。

K M A L P 3 7 0 0 ↓ 2 7 0 0

「さらに、《破滅へのクイック・ドロー》の効果で、もう一枚ドロー！」

この状況この手札で相手のライフポイントを削りきることができるかと聞かれたとしたら、普段なら無理だと言い切ることのできる手札。それでも何故だか今に限つてはできないはずがないと言えてしまう。

「俺は、《未来サムライ》を召喚！　そしてリバースカード、オープン！　《フォース・リース》！」　この効果により《未来サムライ》は再度召喚状態となる！」

《未来サムライ》ATK／1600

「そして再度召喚された《未来サムライ》の効果発動！　墓地のモンスター1体を除外することとで、表側表示の相手モンスターを1体破壊する！　墓地から《ドローラー》を除外し、《森の狩人イエロー・バブーン》を切り裂け！」　紫電一閃！』

未來的な袴を白く染め上げた侍が、弓を構える狩人に向かつて駆け出す。狩人は次々に矢を飛ばして近づけまいとするが、侍はそのことごとくをかわし、懷に入り込んだ所で一閃。紫の光を残して刀を鞘に納めると同時に、狩人の上半身がずれ、そのまま爆散した。

『自分フィールド上の獣族モンスターが破壊され墓地に送られた時、ライフポイントを

1000 扱い、墓地の『森の番人グリーン・バブーン』を特殊召喚!』

『森の番人グリーン・バブーン』ATK／2600

狩人を切り伏せたと思った途端、墓地から這い上がった番人が目の前に立ちふさがる。最初に出てきたときはこちらを見下ろす番人に威圧感を感じたが、今では弱々しく見える。すぐに墓地へ送り返してやるとしよう。

KMA LP2700↓1700

「手札から速攻魔法『デュアルスパーク』！『未来サムライ』を生け贋にささげ、『森の番人グリーン・バブーン』を破壊する！さらにカードを1枚、ドロー！」

ここでこのターン3枚目のドロー。脳裏に大量のカードが裏向きに流れる光景がよぎり、指先に力がこもる。脳裏を流れるカードの一枚が表側を向いた瞬間、腕を振り抜き、そのまま確認することなくそのカードを発動する。

「俺は手札から、魔法カード『思い出のブランコ』発動！墓地から『デュアル・ランサー』を特殊召喚！」

『デュアル・ランサー』 ATK／1800

「バトル！『デュアル・ランサー』で直接攻撃！」

魚人が両手の三叉槍をKMAに突き立てる。KMAは咆哮をあげ、地面にその身を投げ出した。

『デュアル・ランサー』 ATK／1800

KMA LP1700→0

「やつたな、葵！ 良いドローだつたぞ！」

「ああ、こんなにもドローが気持ちいいなんて初めてだ：もう一度同じ事をやれ、と言わ
れても出来る気がしないけどな」

それとタッグデュエルなのに味方に追いつめられるという経験に関しては、もう二度
としたくない。ラストターンの『破滅へのクイック・ドロー』に至つては、追いつめる
なんてものじやない。一步どころか半歩間違えれば確実に破滅だ。

「さて俺たちが勝つたんだし、一人は返してもらうぞ」

KMA達は言葉を理解しているのか、モモ工達の前から離れて地面に座り込む。二人
は呆然とした様子で動こうとしなかつたため、俺と大山で二人のところまで歩いてい
き、手を差し伸べる。

「お手を貸しましょうか？」

「…ぶつ」

いきなりモモ工が吹き出した。こちらもこの前のリベンジを狙つたとはいえ、なかな
か失礼な話だ。ジュンコは話の流れが分からぬ様で俺とモモ工とをそれぞれ見比べ

ていたが、理解されても恥ずかしいのでひとまず意識の外に置いておく。

「お気持ちは買いますけど、やっぱり代田さんには似合いませんわ」

そう言いながら、俺の手を取つて立ち上がるモモエ。自分でやつた事だが気恥ずかしくなつてしまつたので大山の方を確認すると、ジ Yunコを肩に担ぎ上げていた。ジ Yunコは諦めたのか、抵抗せずにだらりと手足をぶらさげている。色々と台無しだった。

『ところでこの熊達はどうされるのですかな?』

シハーブが疑問を挟んでくるが、そんなもの答えは一つしか無い。それこそ、このデュエルの勝敗以前の話である。K M A達もなんら反応を示さないので、S A L研究所の博士および黒服達の方を向き、はつきりと口に出す。

「それじゃあ研究所のみなさん、俺たちは帰りますので後はご自由に。大山、道案内よろしく」

「え!?

ジ Yunコが大声をあげるが、そもそも研究所で飼育されている実験動物を勝手に逃がすこととは犯罪である。他人のペットを逃がしたら違法であるのは当然だろうし、それが実験動物ともなれば下手をすればバイオハザードだ。

「ではいくぞ! アーアアー!」

「ちよ、まつ、きやああああ…」

ジユンコを担いだまま、枝を蹴り、藪を掴み、雄叫びをあげてまさしくターザンのごとく移動する大山。遠ざかるジユンコの叫び声を残しながら、あつという間に視認できない距離まで行つてしまつた：それだと道案内にならないだろう。

結局SAL研究所の面々が撤収したあとも山ごもり拠点に残り、大山が迎えにくるまで待ち続けたのであつた。ちなみに大山が俺たちを置き去りにした事に気付いたのは、アカデミアに着いてからとのことだつた。

14・道場破りつて いうなつ！

新学期となつて初となる鍊金術の授業は珍しく爆発が無かつた。ほぼ毎回何かしら爆発するような授業というのもどうかと思うが、危険な目にあつてはいるのは大徳寺教諭一人だけなのできつと誰も問題に思つていらないのだろう。

そして十代がチャイムとほぼ同時に目を覚まし、そのまま弁当を食べようとしていた。彼の弁によると、トメさんのお手製弁当をわざわざ用意してもらつたらしい。食堂で販売されている物と違い、彩り豊かで実に美味しいそうだ。

「十代くん、私と一緒に校長室に来て欲しいのにやー」

「十代、これまで長い付き合いだつたな。アカデミアを退学になつても元気でやれよ」

「万丈目くん、あなたも来てください」

サンダーが喜んで別れを突きつけたが、一緒に呼び出される事になり盛大にずつこけている。先ほどのサンダーの言い草ならば、サンダーも一緒に退学になつてしまふのでそのリアクションも分からなくはない。

「それから三沢くん、明日香さん、あと代田くんも」

どうやら俺たちも呼ばれているようだ。ある意味で問題児の十代や、単位危機のサン

ダーはともかくとして、残りのメンバーは退学とは縁のないような顔ぶれである。何事かとお互いに顔を見合わせながら大徳寺教諭の後について教室をでたのであつた。

カイザーとクロノス教諭が校長室前で合流し、現在校長によるありがたいお話を聞いているところである。古今東西、校長先生の話は長いものだと相場が決まっているが、今回の話も長い。これだけ長々喋っているのに、話がまだ終わっていないことも驚きである。

今されている話の要点をかいづまると、デュエルモンスターズには人類が想像だにしないような力を持つ物があり、その一種である三幻魔のカードがこの学園に存在している、といったところである。

「三幻魔のカード？」

聞いた事がない単語に、十代が疑問の声をあげる。三幻魔ということは、アニメでいうところのセブンスターZ編に突入したことだろう。

「そうです。この島に伝わる、古より封印されている三枚のカード」

ペガサスがデュエルモンスターZを製作したのが少なくともここ30年以内の話のはずなのに、古より封印されているカードがあることを突つ込んではいけない。一応古代エジプト文明の儀式がルーツなのだから、そういうこともあるのだろう、きっと。

「え？ この学園つてそんな昔からあつたのか？」

「うるさい、黙つてきけ」

サンダーが十代をたしなめるが、十代の疑問に關して答えるならそんなわけはない。そもそもこの学園のオーナーである海馬社長はまだ成人したかしていない程度の年齢のはずだ。前のオーナーがいるなら話は変わりそうだが、それでもデュエリスト育成学校ということは30年以上の歴史はありえない。

「そもそもこの学園は、そのカードが封印された上に建つてているのです」

「「ええ～!?」」

衝撃の事実に皆がそれぞれに驚きの声を上げる。封印された上に建つてているということは、遺跡の上という意味だつたりするのだろうか。精霊界関連の遺跡である可能性も否定できないが、なんにせよ口マンあふれる話である。

「学園の地下深くに、その三幻魔のカードは眠っています。島の伝説によると、そのカードが地上に放たれる時、世界は魔に包まれ、混沌が全てを覆い、人々に巢食う闇が解放され、やがて世界は破滅し、無へと帰す。それほどの力を秘めたカードだと、伝えられています。」

信じられるか？ これ、カードについて語つてるんだぜ？ 怪しげな魔導書やら魔道具やら化け物でなく、たつた三枚のカードなんだぜ？ …この世界で考えれば似たよう

なものなので、こういった展開には慣れるしか無い。

「よくわかんないけど、なんかすゞ」 そんなカードだな！」

「黙つて聞いているノーネ！」

皆が一様に息をのむ中、十代だけが明るく呑気に発言して案の定クロノス教諭に叱られてしまつた。明るさや前向きさが十代の取り柄ではあるが、こういう場合は神妙に領いておけばトラブルに巻き込まれないだろうに：

「そのカードの封印を解こうと、挑戦しにきた者達が現れたのです」

「いつたい、だれが」

校長の言葉にカイザーが当然の疑問を口に出す。俺はアニメで知っているが、そんな物騒なものをわざわざ解き放つような物好きなんて……この世界のカードコレクターならばありえそうのが怖い。

「七星王、セブンスターズと呼ばれる、七人のデュエリストです。まつたくの謎に包まれた七人ですが、もう既にその一人は、この島に」

「なんですか？」

三沢が驚きの声を上げるが、俺としてはその情報がどこからきたのかが非常に気に入る所である。校長が直に確認したのならばまだいいとして、誰かから聞いた情報ならそいつがセブンスターズについて知っていることは明白だろう。

「でも、どうやつて封印を解こうと……」

「三幻魔のカードは、この学園の地下に封印され、七精門という七つの石柱がそのカードを守っています。その七つの石柱は七つの鍵によつて開かれる。これが、その七つの鍵です」

明日香さんの質問に対し、校長は机の中から箱を取り出した。その箱の中には何やら模様が刻まれ、七つに分けられた板があつた。どうやらパズルのように組み合わせることで、一つの長方形にまとめることができるらしい。

「じゃあセブンスターズは、この鍵を奪いに……」

「そこ」で、あなたたちに、この七つの鍵を守つていただきたい」

校長は三沢の推測に同意するように頷き、そのまま生徒・教師も混じつているが：に無茶ぶりをした。こういったものを守るためにには、保管するなら金庫を買つたり警備員を雇つたりするための財力、自分が持ち歩くなら強奪されない体力、それとどちらにしても注意力も必要だ。体力勝負ならば生徒の方が有利かもしれないが、普通ならば教師の方が確実に守りやすいだろう。

「守る、といつても、いつたいどうやって？」

「もちろん、デュエルです」

サンダーの問い合わせに答えた校長のその言葉に、大徳寺教諭の連れているネコ、ファラオ

を含めて全員が驚愕するが、改めてそれを聞いた俺の感想はこれに尽きる。この世界が相変わらずで安心した。

「七精門の鍵を奪うには、デュエルによつて勝たねばならない。これも古より、この島に伝わる約束事。だからこそ、学園内でも屈指のデュエリストであるあなた方に集まつてもらつたのです。まあ、二名ほど数合わせに呼んだ者もありますが」

そういうつてちらりと教師二人を見る鮫島校長。仮にもエリートデュエリスト養成学校の教師に対し、デュエルの腕を期待していないのはどうなんだろうか。しかもクロノス教諭は実技最高責任者なんだが：

「あなたのことなノーネ」

校長の目線には欠片も気付く様子も無く、笑いながら十代を指差して顔を覗き込むクロノス教諭。非常に大人げない。校長が数合わせといったのはデュエルの腕よりも人格的に不安があるからなのかも知れない。

「この七つの鍵を持つデュエリストに、彼らは挑んできます。あなた方に、セブンスターズと戦う覚悟を持っていただけるなら、どうか、この鍵を受け取つて欲しい」

「おもしれえ、やつてやるぜ」

他の面々が顔を見合わせて互いを伺うなか、十代が一番に鍵を手に取つて首から下げた。十代の戦意を勝つたかのように、鍵がキラリと輝きを見せる。

その十代の様子を見たからか、カイザーが低く笑い声をあげて鍵を手に取った。三沢、明日香さん、サンダーと続していく。俺もせつかく呼ばれたので遠慮なく鍵を手に取ることにした。

「ふふふのヒー、校長、魯かしはいけませんノーネ、要すル一一、学園の看板ーを、道場破りが奪いにくると考えれば良いノーネ」

「まあ、今はそう考えてもらつても結構ですが…」

世界の危機を道場破りと言われてしまい、校長が歯切れ悪く答える。それと校長自身がサイバー流道場の師範であり、道場破りという言葉に対して印象が悪いという理由があるかもしれない。

「じゃあ、私は数合わせなので無しなんだにやー」

「道場破りかー、俺だつたら一番強い奴から行くだろうなー…俺つてか？」

世界の危機と考えるとスケールが大きすぎるためか、十代には道場破りというほうがしつくりきたようだ。それにしても強者との戦いを楽しみにするのはデュエリストの性というものだろうか。

「それは違いますノーネ！ 実力から言えばこのワタクシーめ、もしくは、カイザーことシリヨール丸藤亮ナノーネ。遊城十代、私が密カーニ調査した所によると、あなたは力イザー亮にコテンパンネンに負けているノーネ。そうでーショ？」

「そういうあなたは、十代に負けてるだろ」

クロノス教諭は調べたことを嬉々としてバラし、痛い所を突かれた十代はうめき声をあげた。しかしサンダーに最も言われたくないであろう事実を突きつけられたので、クロノス教諭も一緒になつてうめいている。

「ありがとうございます。この瞬間から、戦いは始まっています。どうかいつでもデュエルのスタンバイをしておいてください。そして必ずや、三幻魔のカードを、七精門の鍵を守りきつて下さい」

鮫島校長は七つの鍵がそれぞれに渡つたことに満足そうな笑みを浮かべ、改めて鍵の警護を依頼した。一切デュエルをしないことで守るという方法もあるかも知れないが、サレンダー扱いにされても困る。ここは直にデュエルディスクを持ち歩く事にしよう。

鍵の警護をすることになつたとはい、当然授業免除といったようなことはない。セブンスターZが授業中に来襲した場合は公欠扱いでそちらに対応するのだろうが、そんなときは授業 자체がなくなりそうなものだ。

そんなわけで普段通り授業に出席して自室に戻ろうとしたところ、高寺に呼び止められた。同じオベリスクブルーとはいえ、彼とはあまり関わりはないはずなのだが、一体

何のようだらうか。

「急に呼び止めて悪かつたね。話つていうのは、学園祭についてなんだよ」

「学園祭？」

学園祭の開催時期は学期末のはずだ。新学期になつて早々にそれについて考へるとは、よほど気合いが入つてゐるのだろうか。高寺は自分の趣味に没頭するタイプだと思つていたのだが、意外とお祭り好きなのだろうか。

「オベリスクブルーでは毎年、喫茶店を出し物にしてるのは知つてゐるよね？」

「どの寮も毎年変わらないらしいということは聞いた事があるな」

島では物品を輸入することが難しいこともあり、毎年やることはほとんど変更される事はない。レツドはコスプレデュエル大会、イエローは縁日のような屋台、ブルーが喫茶店というのが毎年恒例の出し物だ。

「ふつふつふ、そこで今年の出し物をいつもの違う物にしたいと思うんだよ！」

「いつもと違うつて、具体的には何をするつもりなんだ」

「それはもちろん、お化け屋敷さ！」

高寺の好きそうなことではあるが、簡単にはできないだろう。学園祭の出し物というのは色々と必要になる。恒例の出し物ならば必要な物は倉庫にでもしまつてあるのだろうが、新規となると一から用意する必要がある。

「援助金がでたとして、小道具なんかは準備できるのか?」

「まかせてくれ! …とはいえ、僕たち高寺オカルトブラザーズだけじゃ手が足りないんだ」

学園祭の出し物は有志がアカデミアから援助を受けて店を出すのだが、どうしても人手が必要だ。新学期ともなりお互い慣れたとはいえ、一部生徒からは未だによそ者扱いのため喫茶店に参加しなさうな俺を誘おうという訳か。

「いいぞ。他の出し物に参加する予定もないしな」

「本当かい!」

「俺も学園祭を楽しみたいしな」

学園祭は出し物を見てまわるだけでも楽しそうだが、自分たちで準備することこそが醍醐味だと思っている。いざとなつたら三沢辺りに頼み込んで屋台の手伝いをしようかと思つていたので、この提案は渡りに船だつた。

「それじやあ早速お化け屋敷について話し合おうじゃないか! 我らが高寺オカルトブラザーズがいつも集まっている場所まで案内するよ!」

ハイテンションな高寺の先導で教室に案内され、他のオカルトブラザーズの二人を交えてお化け屋敷について話し合つた。高寺オカルトブラザーズの面々は皆活き活きとしており、根からのオカルト好きだということがよくわかる。

予算や当日使うことのできる設備についてはまだ告知されていないため、具体的な見取り図ではなくテーマなどのアイデアを中心とした話し合いになつた。ひとまず先輩などに学園祭について話を聞いたうえで、また話し合う事が決定したのであつた。

ブルー食堂でオカルトブラザーズと一緒に夕食を摂り、それぞれに知り合いの先輩達に話を聞くことになつた。俺にはそういう当てがカイザーかクロノス教諭しかいないので、PDAでカイザーにメールを送る。

カイザーのメール確認頻度は分からぬが、学校からの連絡もPDAに送られることがあるので毎日チェックはしているはずだ。遅くとも一週間以内には返信がくることだろう。

メールを打ち終わつて辺りの様子を確認すると、クロノス教諭が夕食を摂つたところらしくナップキンで口を拭いていた。ちょうどいいので話を聞く為に声をかける。「クロノス教諭、学園祭について伺いたいことがあるのですが、今お時間よろしいですか？」

「どうしたノーネ、シニヨール代田？」

「実は学園祭で出し物に参加しようと思つてゐるのですが、設備の貸し出しリストのようなものはありませんか？」

「リストでしターラ、去年度のものが私の部屋にあるからそれをあげるノーね、あとはそ
うデスー、こちらが用意した設備以外でも事前に申請するなら好きに用意してもいい
でスー、モンラーバス」

何故『モン・ラーバス』なのかはわからないが、去年度のリストでも充分だ。多少設
備が入れ替わる事があつても、おおまかな内容は変わらないだろう。そして事前申請す
れば持ち込みも可能ということか。するかどうかは別だが。

「ありがとうございます」

「それじや今から部屋に行きマーショ、アダージョ」

緩やかな調子で歩くクロノス教諭についていき部屋に入る。クロノス教諭の普段の
言動を考えるに派手な部屋を想像していたのだが、その想像に反して落ち着いた内装
だった。

「オーソレミーヨ、オーソレミーヨ、オーソレミーヨつとつあつたノーネ、これなノーネ」
「ありがとうございます」

学園祭の出し物に関する注意のプリントと設備リストを受け取り、そのまま退室しよ
うとするとクロノス教諭に呼び止められた。
「シニヨール代田、ちょっと待つノーネ」

「なんでしょうか」

「道場破りどもがこのアカデミアにやつてきまスーシ、実技最高責任者であるワターシ
が稽古をつけてあげるノーネ！」

唐突な申し出だが、意図が読めない。ただデュエル指導をしようと思つてくれただけ
なのかも知れないが、いかんせん今までの行動があるので深読みしてしまう。そうは考
えたものの、受ける事でのデメリットはなさそうだ。

「わかりました。よろしくお願ひします」

「それデーハ⋮」

「〔デュエル！〕」

「先攻は譲つてあげるノーネ」

「お言葉に甘えさせてもらいます。ドロー」

先攻をもらつたはいいものの、あまり嬉しい手札でもない。ひとまずは様子見をする
しかないだろう。

『『フェデライザー』を守備表示で召喚、カードを1枚伏せてターンエンドです』

『フェデライザー』 DEF／1100

「ワタシのターン⋮ドローニヨ。まずは永続魔法『古代の機械城』を発ドウ！ このカー
ドは『アンティーカ・ギア』と名の付くモンスターの攻撃力を、300ポイントアップ
させるノーネ」

このカードの効果適用範囲である「“アンティーケ・ギア”と名の付くモンスター」だが、『古代の機械』である必要はない。モンスターでは『古代の歯車』だけだが、『古代の機械』ではない“アンティーケ・ギア”的なカードは何枚か存在している。

「ワタシは手札から『磁力の指輪LV2』を発ドウ！ 手札の『古代の機械砲台』を特殊召カーン！ さらに魔法カード『機械複製術』、これにより『古代の機械砲台』を2体デッキから特殊召喚するノーネ！」

『古代の機械砲台』ATK／500

『古代の機械砲台』ATK／500

ところどころが鋸び付いており、一目で古いと分かるような鈍い光を見せる砲台が次々と現れた。その全てがこちらに向けられているというのはソリッドヴィジョンとはいえ威圧感を感じさせる。

『古代の機械砲台』を生け贅一二、『古代の機械獣』を召喚するノーネ！ そしてモンスターが通常召喚されたノデ、『古代の機械城』にカウンターが一つ乗るノーネ』

『古代の機械獣』ATK／2000→2300

『古代の機械城』カウンター／0→1

砲台が一つ姿を消し、そこから機械仕掛けの獣が現れた。見た感じモデルになつた動

物はサーベルタイガーだろうか。留め具や歯車の軋むような音が鳴き声のように辺りに響いている。

「ワターシは『古代の機械砲台』の効果を発動するノーネ！ このモンスターを生け贊にささげるコトーデ、相手に500ポイントのダメージを与え、さらにこのターンのバトルフェイズ、お互いに罠カードを発動できないノーネ！」

『フェデライザー』や伏せられたカードを無視して砲弾が飛んでくる。どれも俺に直撃することはなく周りに着弾したのだが、床にぶつかりはじけた砲弾の欠片が容赦なく襲ってきた。さらに砲弾の欠片は伏せられたカードにも発動を封じるように突き刺さっている。

葵 LP 4000→3500

「それデーハ、『古代の機械獣』で『フェデライザー』を攻撃するノーネ！」

守りを固めていた『フェデライザー』に機械仕掛けのサーベルタイガーが襲いかかり、鎧のついた牙で肩を突き貫いた。

『古代の機械獣』 ATK／2300

『フェデライザー』 DEF／1100

『フェデライザー』の効果でドローするつもりだつたのでショーガ、『古代の機械獣』が戦闘で破壊したモンスターの効果は無効になるノーネ！ さらに『古代の機械砲台』で

直接攻撃!」

『古代の機械砲台』 ATK／500

葵 LP3500→3000

「そしてメインフェイズ2、『古代の機械砲台』を生け贊ニ、シニヨールに500ポイントのダメージ!」

葵 LP3000→2500

「ワターシはこれでターンエンドデスーノ」

「俺のターン、ドロー。永続魔法『金剛真力』を発動。この効果で『竜影魚レイ・ブロント』を特殊召喚、さらに『サンライズ・ガードナー』を召喚します」

『竜影魚レイ・ブロント』 ATK／1500

『サンライズ・ガードナー』 ATK／1500

『古代の機械城』 カウンター／1→2

「雑魚モンスターを、何体並べたとこローデ、『古代の機械獣』の攻撃力には届かなイーノネ!」

たしかに攻撃力1500では『デュアル・ブースター』で強化したとしても、現在の『古代の機械獣』の攻撃力2300には届かない。もちろん策も無しに2体も攻撃表示で並べたわけではない。

「そして『スペシャル・デュアル・サモン』を発動、この効果で『竜影魚レイ・ブロント』を再度召喚状態にします」

『竜影魚レイ・ブロント』ATK／15000→2300

エイのような見た目の魚の口とおぼしき場所から竜の頭にもみえるものが生えていた。それによつてシエルエットは竜そのものとなつてゐる。

「ノーン！ 攻撃力が『古代の機械獣』と同じ二一！」

「バトル、『竜影魚レイ・ブロント』で『古代の機械獣』に攻撃」

生えてきた器官が機械仕掛けのサーベルタイガーの首根っこに喰らい付き、そのまま遠くへと放り投げた。どうやら捕食器官だつたようだが、さすがに機械を食べる事はできなかつたらしい。

『竜影魚レイ・ブロント』ATK／2300

『古代の機械獣』ATK／2300

「さらに『サンライズ・ガードナー』で直接攻撃」

『サンライズ・ガードナー』ATK／1500

クロノスLP40000→25000

「これでターンエンドします」

「ワタシのターン、ドロー！ 『古代の機械兵士』を召カーン！」

赤い鏃と鈍い光の金属でできた機械仕掛けの兵士が現れた。右腕はリボルバー式の銃になつており、武器を落とすといった事は期待できないだろう。

『古代の機械兵士』ATK／1300→1600

『古代の機械城』カウンター／2→3

「『古代の機械兵士』で『サンライズ・ガードナー』に攻撃するノーネ！」

機械仕掛けの兵士が右腕の銃口から『サンライズ・ガードナー』へと弾を撃つ。撃つた反動で右腕がぶれており、肩からは腕が外れそうな音をたてていたが、気付いていかの様に弾を撃ち続けて『サンライズ・ガードナー』を破壊した。

『古代の機械兵士』ATK／1600

『サンライズ・ガードナー』ATK／1500

葵LP2500→2400

「これでターンエンド一ネ、マリオ一ネ」

「俺のターン、ドロー。『金剛真力』の効果発動、『巨人ゴーグル』を特殊召喚し、再度召喚します」

『巨人ゴーグル』ATK／1500→2100

『古代の機械城』カウンター／3→4

「行きます。『巨人ゴーグル』で『古代の機械兵士』に攻撃、ゴーグルナックル！」

岩の巨人が機械仕掛けの兵士に向けて走り出す。兵士は右腕の銃から弾丸を発射していくが、弾丸はかする事しかしなかった。普通ならばかすつただけでも相当なダメージなのだが、相手は岩でできているため痛覚があるのかどうか怪しいものだ。

接近した岩の巨人はそのまま腕を振りかぶり、人間ならば心臓があると思われる部位に拳を打ちつけた。機械仕掛けの兵士から歯車がこぼれ落ち、そのまま体全体が崩壊して砕け散った。

『巨人ゴーグル』ATK／2100

『古代の機械兵士』ATK／1600

クロノスLP2500→2000

「これでターンエンドです」

「やはりなかなかやりますノーネ、ワタシのターン、ドロー！」

引いたカードをみてクロノス教諭が口角をあげる。まつたくもつて嫌な予感しかしない。

『古代の機械城』の効果発ドウ！　“アンティーケ・ギア”と名の付いたモンスターを生け贅召喚するトーキ、このカードに必要な生け贅の数イジョーのカウンターが乗つていレーバ、このカードを生け贅代わりにすることが出来るノーネ！　このカードを生け贅一二、『古代の機械巨人』を召カーン！』

地鳴りと共に機械仕掛けの城が崩れ、その中から機械仕掛けの巨人がゆっくりと立ち上がる。『巨人ゴーグル』は巨人といつても3m程度であるのに対しても『古代の機械巨人』は高層建築をも見下ろす事の出来る巨体である。

今回は流石に部屋の中に入りきらなかつたようで、ある程度高さは抑えられているが、それでもその巨体でもつてこちらを威圧している。

『古代の機械巨人』の攻撃、アルティメット・パウンド!』

『古代の機械巨人』が岩の巨人：いや、『古代の機械巨人』から見れば岩の小人に拳を振り下ろす。握られた拳だけでも『巨人ゴーグル』の身体を覆うことが出来るほどの大きさである。当然振り下ろされた『巨人ゴーグル』は瓦礫と化した。

『古代の機械巨人』 ATK／3000

『巨人ゴーグル』 ATK／2100

葵LP2400→1500

「ンフフーフ、ワタシはこれでターンエンドーヨ」

「俺のターン、ドロー。『金剛真力』の効果発動！『ダーク・ヴァルキリア』を特殊召喚し、再度召喚！」

『ダーク・ヴァルキリア』 ATK／1800

『ダーク・ヴァルキリア』は『デュナミス・ヴァルキリア』が闇に墮ちた姿である。白

かつた翼は黒く染まり、赤と白の衣装も青と黒の冷たいものとなつてゐる。肌の色も死人を思わせるような青白いものであり、まさしく天使のような整つた顔立ちも相まって薄ら寒い魅力を感じさせてゐる。

「そして再度召喚された『ダーク・ヴァルキリア』の効果を発動！　このカードに魔力カウンターを1つ乗せます。魔力カウンターの乗つたこのモンスターは1つにつき攻撃力が300ポイントアップ！」

『ダーク・ヴァルキリア』魔力カウンター／0→1

『ダーク・ヴァルキリア』ATK／1800→2100

『ダーク・ヴァルキリア』の翼にある宝玉が濁つた光を帯びる。

「攻撃力が300程度があがつたとしテーモ、『古代の機械巨人』にはゼンゼン届かないノーネ！　ただの二度手間だつたノーネ！」

「二度手間つていうなつ！　『ダーク・ヴァルキリア』の更なる効果発動！　このカードに乗つてゐる魔力カウンターを取り除くことで、フィールド上のモンスター1体を破壊する！」

「ナンデストー！」

『古代の機械巨人』を破壊せよ！　ダーク・ジャステイス・フラツシユ！』

『ダーク・ヴァルキリア』魔力カウンター／1→0

『ダーク・ヴァルキリア』ATK／2100→1800

翼の宝玉が光り輝き、『古代の機械巨人』の右足を照らす。光を浴びた足は煙を上げ、重さに耐えられなくなつたかのように潰れた。右足が潰れたことでバランスを崩した『古代の機械巨人』はそのまま倒れ、床にぶつかつた衝撃でバラバラになつた。

「そのまま直接攻撃！ ダーク・ヴァルハラ・アロー！」

『ダーク・ヴァルキリア』が両手を合わせ、弓を引くように半身で腕を引く。『ダーク・ヴァルキリア』の腕の中に黒紫の光の矢が現れ、クロノス教諭に向けてまつすぐに放たれた。

『ダーク・ヴァルキリア』 ATK／1800

クロノス LP 2000→200

「ターンエンド！」

「ホツホツホツ、ワタシのターン、ドロー！ ワタシは『強欲な壺』を発ドウ！ カードを2枚ドロー！」

追いつめられたにもかかわらず、クロノス教諭は愉快そうにカードを引いた。さらに『強欲な壺』で引いた一枚のカードを見て、より一層笑みを深くした。

『ワターシは、『古代の機械工場』を発動するノーネ！ 手札の“アンティイーク・ギア”と名の付いたモンスターのレベルの倍となるヨウに、墓地の“アンティイーク・ギア”モ

ンスターを除外することで、生け贅無しで召喚できるノーネ！ ワタシは墓地の『古代の機械巨人』、『古代の機械獣』、『古代の機械砲台』を除外し、手札の『古代の機械巨人』を召喚！』

『古代の機械巨人』 ATK／3000

「ワタシが2体目の『古代の機械巨人』を出すことになるナンーテ、さすがはオベリスクブルーの生徒ですノーネ。『古代の機械巨人』で『ダーク・ヴァルキリア』に攻撃！ アルテイメント・パウンド！」

『古代の機械巨人』 ATK／3000

『ダーク・ヴァルキリア』 ATK／1800

葵 LP15000→3000

「ワタシはカードを一枚伏せて、ターンエンドですノーネ」

「俺のターン、ドロー！ 『闇の量産工場』発動！ 『ダーク・ヴァルキリア』と『竜影魚レイ・ブロント』を手札に加える。そして『金剛真力』の効果で『ダーク・ヴァルキリア』を特殊召喚し、再度召喚！」

『ダーク・ヴァルキリア』 ATK／1800

「そして『ダーク・ヴァルキリア』の効果でこのカードに魔力カウンターを乗せ、続けて効果発動！ 魔力カウンターを取り除き、『古代の機械巨人』を破壊する！ ダーク・

ジヤステイス・フラツシユ!」

「ノンシリード! 『古代の機械巨人』がー!」

再び『古代の機械巨人』が破壊されてクロノス教諭が悲鳴をあげる。フェイバリットカードを二度も破壊されたことはやはりショックだつたようだ。

「バトル! 『ダーク・ヴァルキリア』で直接攻撃! ダーク・ヴァルハラ・アロー!」
「しかし、詰めが甘いノーネ! 罠発動! 『魔法の筒』! 攻撃を無効にして攻撃力分のダメージを受けてもらうノーネ!」

先ほどのショックを受けた表情から一転、罵にかかった獲物に向けるような笑みを浮かべるクロノス教諭。本当にショックを受けていたように見えていたのだが、攻撃を誘発するための演技だつたのだろうか。だとすれば見事としか言いようがない。

『チエーンして速攻魔法『デュアルスパーク』! 『ダーク・ヴァルキリア』を生け贋に『魔法の筒』を破壊する!』

「うまく逃れたみたいデスーガ、これでバトルフェイズは終わっちゃうノーネ」

「何勘違いしてるんだ:俺のバトルフェイズはまだ終了してないぜ!」

「ヒヨ? どういうことナノーネ?」

『デュアルスパーク』にチエーンしてリバースカードオープン! 『サモンチエーン』!

このカードはチエーン3以降に発動することができ、このターン、俺は3回の通常召

喚を行う事が出来る！ そして『デュアルスパーク』の効果でドローー！」

チエーンしただけなので、追加攻撃をするわけではない。それでもバトルフェイズが終わつていなかつたので、ついついあの名台詞を言つてしまつた。

『狂戦士の魂』を使つたデッキも楽しそうだつたのだが、地味にドローが強制効果であつたため、場合によつては相手のLPが0になつたのにデッキ切れで引き分けるといふなんとも締まらない結果になることもあるのでやめておいた。

「そしてメインフェイズ2、手札の『竜影魚レイ・ブロント』を召喚！」

「しかし『竜影魚レイ・ブロント』を再度召喚してーも、このターンに決着はつかないよね」

この状況でトドメを刺す事が出来るデュアルモンスターは、バーン効果を持つ『灼熱王パイロン』しかいない。しかしながら自分のモンスターだけで戦う必要はまったくないのである。

「三度目の召喚は必要ありません。俺は手札から装備魔法『戦線復活の代償』を発動！」

自分フィールド上の通常モンスターを墓地に送り、自分または相手の墓地に存在するモンスターを特殊召喚し、このカードを装備する！ 俺が特殊召喚するのは『古代の機械砲台』！

『古代の機械砲台』 ATK／500

「オウ、ディーオ！」

『古代の機械砲台』の効果発動！ このカードを生け贋に、相手に500ポイントのダメージ！』

『古代の機械砲台』がクロノス教諭に向けて砲弾を発射し、見事に命中した。クロノス教諭はその衝撃からか、コミカルな動きとともに後方へと倒れた。

クロノス LP 200→0

「ご指導ありがとうございました」

「構わないノーネ。シニヨールのデツキは攻撃力があまり高くないようデスーシ、リクリーターを採用してもいいカモーネ：ああ、属性がバラバラでシターカ、それじやちよつと難しいかもせんノーネ」

「ありがとうございます」

なんだかんだといつてもやはり教師のようで、しっかりと俺のデツキの弱点の一つであるパワー不足を見抜かれていたようだ。下級モンスターでも一部のモンスターは充分な攻撃力を持っているが、ほとんどは元の攻撃力が1500以下でありリクルーターに対応している。

「それデータ、そろそろ部屋に戻ったほうが良いデショウ、おやすみなさいナノーネ、シ

ニヨール代田』

「それでは失礼します。おやすみなさい、クロノス教諭』

クロノス教諭の部屋から自分の部屋に戻った俺は、デュエルで疲れたためか、すぐに眠りについたのであつた。

15. 追跡者と爆発っていうなつ！

校長に鍵の警護を依頼された次の朝、保健室に向かうと十代がベッドに寝かされており、翔が付き添っていた。別のベッドには精悍な顔立ちをした男が眠つており、こちらには明日香さんが付き添っている。

「十代が抱き込まれたと聞いたが、何があつたんだ？」

セブンスターズの一人であるダークネスとの戦闘があつたのだろうが、知らない振りをして翔に事情を話すように促す。

「それが兄貴が明日香さんのお兄さんと闇のデュエルで勝負をしてから、タベ一度目を覚ましたつきりで…」

「つまり明日香さんが付き添つてるのがお兄さんか。しかし闇のデュエルの噂は聞いた事はあるが、敗者には壮絶な罰ゲームがあるんじやなかつたか？」

「それについては私から話すわ」

明日香さんが翔に代わつて続けた説明を聞くと、明日香さんの兄である吹雪にダークネスの魂が乗り移つており、魂を賭けたデュエルによつてダークネスはカードに封印されたということだつた。

「なるほど、それで後は一人が目を覚ますのを待つていいのか」

「そうね」

あまり長居しても邪魔になるだけなので、事情も分かつた所で保健室を出ることにした。明日香さんと翔は付き添いのために今日の授業は休むそうだ。あとでノートを見る事にして、教室へと向かつた。

放課後、鍵を警護しているメンバーが校長室に呼び出された。安静にしなければいけない十代と兄の付き添いをしている明日香さんがいなかつたが、大徳寺教諭が伝えるために校長室に来ていた。

校長が今回呼び出した理由は、学内でそこかしこで話題になつていて吸血鬼の噂のことだつた。そしてその吸血鬼が闇のデュエルに関係している、すなわちセブンスターズではないか、ということだつた。警戒をするように言われて解散となつたのだが：

『尾けられておりますな』

校長室から解散し、自室へ戻つた後にシハーブから聞いた一言により俺は森に来ているのであつた。件の吸血鬼とは関わり合いになりたくない俺としてはこのまま放置していたかつたのだが、デツキの内容ならまだしもその過程で見られたくないカードまで見られてしまう可能性がある。

吸血鬼事件が解決するまでデツキをいじらなければ済む話だろうが、あいにく見られているのを分かっていてそのまま生活ができるほど胆が太いわけではない。そんなわけで捕獲しようと思ったのだが、そもそも場所がわからない。

「シハーブ、相手の場所とか分かるか?」

『方角程度しかわかりませんな』

「森に入ったのは失敗だつたか?」

むしろ部屋に入つてこられないように何らかの処理をしたほうが良かつたかもしれない。何を言つても今更ではあるので、ひとまずはなんとかしてこの状況を打破したい。捕獲が厳しければ撒くべきだろうか。

「…相手の様子は?」

『動きませんな』

撒くことを考えるならばもつと隠れやすい場所を考えるべきであつたか、いやどちらにしても相手は空を飛んでくるので難しいか。そんなことを思つていると、突如爆発音が聞こえてきた。そしてシハーブが何かに気付いたように後ろを向く。

『む、落下しましたな』

『落^ト下つて、尾行してきたのがか?』

『ええ、先ほどの爆音はコウモリには堪えたようですが、おそらく氣絶したのではない

かと』

コウモリならば誰にも気付かれずに部屋まで尾行することは容易いだろう。何せ空を飛べるだけでなく、見つかっても動物なので気にされる事はそうはない。

それにも関わらずシハーブが気付いたのは、そのコウモリから精霊の気配がしたからということだった。それを証明するように、墜落したコウモリは『ヴァンパイア・バツツ』というアニメオリカによく似ている。

「こいつ、実体があるよな」

『本物のコウモリを媒介としているようですな。それとなんだか良く分からぬ力も感じますぞ』

「吸血鬼の能力か、それとも闇のアイテムか」

どちらにしても厄介な話だ。こいつを捕まえても媒介のコウモリを用意すればすぐ次が飛んでくることが考えられる。今日はもう見張られないとは思うのだが、これは撒く事を諦めるべきだろう。

『それにしても…さつきの爆発音はなんなんだ?』
『行つてみますかな?』

「そうだな』

コウモリが霧になつたりしても困るので『デモンズ・チエーン』でぐるぐる巻きにし

て抱え、爆発音のした方へ向かう。それにしても確かこの方向は…いや、深くは考えまい。

爆発音のした方向へ向かうと、そこにいたのはS A L研究所の博士だった。なにやら機材を調整しているようだが、その所々が焦げ付いている。

彼が何故こんな森の中にいるのかというと、ここがS A L研究所のフィールドワーク拠点の一つだからだ。ここは研究施設にもなっており、主にこの島の環境状態を研究するため利用されているらしい。

「おお、代田くんではないかね。どうしたのかね、こんなところで」

博士の話し方が随分とフランクになつていて、K M A騒動で大山に置いてけぼりにされた際に一緒に焼き魚を食べながら話しているうちに仲良くなつたのだ。その縁もあって春休みの間、ドロー力向上の手掛かりになればと思つて研究に協力していたことも理由の一つだろう。

「こつちから爆発音が聞こえたのですが、また何かやらかしたんですか?」

「またとは失敬な。私はF i e l d L i n k O p e r a t o r (フィールドリンク オペレーター) 略してF L O (フーロ) の開発に勤しんでいただけだ」

「今度はどういう装置なんですか?」

「周囲の状況を認識し、それに対応するフィールド魔法を周囲で行われているデュエルに発動させる装置だ。動物による精霊認識実験が一段落したのでな。周辺環境と精霊との関係を探るべく開発をしていたのだ」

そういうながら謎の機械を再び弄り始める博士。なんだか面白そうな発明だが、それでどういうデータを取得できるのかはまったくの謎である。おそらく聞いたたら答えてくれるだろうが、理解できるとは思えない。

「あ、博士。そういえば今アカデミアで噂になっている吸血鬼の話は聞いたことがありますか？」

「吸血鬼？　いや、そんな話は初めて聞くな。そもそもここに来る学生なんぞ、代田くんぐらいのものだしな」

それもそうか。まず山や森といった場所に用事がある生徒なんて非常に稀だと思う。そもそもこの研究所の関係者は滅多な事では外に出でこない。買い物なんかは業者がまとめて搬入しているようだし、それこそ実験動物が脱走することでもないと外には出ないだろう。

「それを踏まえて見てもらいたいのですが、こんなものを捕まえました」
さつき捕まえた『ヴァンパイア・バツツ』（仮）を博士に見せる。引きずり回すわけにもいかなかつたので小脇に抱えていたのだが、博士は機械に夢中で気が付いていなかつ

たようだ。博士は『デモンズ・チエーン』が邪魔そだつたが、鎖を外さずに全体をじつくりと観察して眉間にしわを寄せていた。

「む、コウモリかね？ 確かにこの島では珍しいだろうが：いや、しかし通常のコウモリにはこのような器官は：新種のコウモリか？ それにも…」

手伝いに行つていたときの話を聞く限り、この博士は機械工学だけでなく情報工学や生物学、さらに環境学とデュエル理論についても深い知識を持っているらしい。それでも見ただけで普通のコウモリとの違いを理解するなんて、この人は一体何を専攻していたのだろう。

「シハーブに聞いてみた所、どうやらコウモリを媒介にして『ヴァンパイア・バット』の精靈を顕現させているようです」

「ほほう！ なかなか面白い物を持つてきた物だな！」

どうやら博士が興味を持つてくれたようだ。俺が持つていても邪魔なだけなので色々調べるついでに預かつてもらうようお願いすると、二つ返事で了承してもらえた。

「時に代田くん、私としては今すぐにでもこの精靈について調べ始めたいのだが、協力してもらえるかね」

「寮の門限がありますが、それまでなら全く問題ないです」

「それならば急いで研究所へ行くぞ！ 精密検査はできずとも、大まかな記録ならばこ

この設備でも可能なはずだ」

俺の返事を聞くと素早く機械にシートをかぶせ、風で飛ばないように固定してから急ぎ足で研究室へと歩き出した。やはり未知の探求というものには心が躍るのは研究者の性なのだろう。俺も博士の後を追つて研究所へと急いだ。

「ふむ…」

さすがに『デモンズ・チーン』を外さずにいることは無理があつたので、ケージに入れてから拘束を解いて調査を続行している。鎖を外した際、コウモリは霧になることはなく羽ばたいて逃げようとしたので、飼育するときは普通のケージでも問題なさそうだ。

そして何の実験なのかは分からぬが、現在コウモリ共々研究所のデュエル場にきてる。今からデュエルをするのだろうとは思うが、S A LやK M Aと違つてコウモリにデュエルディスクを装着することはできないだろう。

「ついにこれを使う時がきたようだな」

博士が職員に持つてくるよう要請した機械が届き、それを神妙な顔つきで睨みつけながら作業をしている。ケージから出したコウモリに電極を取り付け、接続された機械を何やら操作しながら独り言の様に呟いた。

「これは簡単に言つてしまえばデュエルシミュレーターだが、デツキ作成方法が特殊なのだ」

かいつまんだ話を聞く限りでは、この機械は取り付けた相手の様々な情報からデツキを作成し、それを用いてデュエルを行うというものらしい。その中に精霊からの干渉があるのではないか、と考えて作られた物なのだとか。

しかしこの機械には一つ欠点がある。デツキ作成を行う際、研究所が把握しているカードのデータベースから参照するのではなく、測定データからカードを生成してデツキを構築するため研究所が把握していないカードが生成されることがあるらしい。

どう言う法則でカードの生成が行われているのか、むしろどうやつてその機械を作り出したのかが非常に気になるが、そこは今は気にしないようとする。

不安定さ故にお蔵入りとなっていたこの機械を使う理由は、『ヴァンパイア・バツツ』の精霊と思われるこのコウモリからは果たしてどのようなデツキが構築され、どのようなデュエルを行うのか。精霊という存在からくる計測外のデータの反映があるのかどうか。そういう點を調べておきたいらしい。

「代田くん、準備はいいかね？」
「いつでも大丈夫です」

『システム起動。デツキ構築プロセス……デツキ構築完了。データ保存』

どうやら準備は整つたようだ。あちらのモニターはデュエル場に接続されていてソリッドヴィジョンとして反映されるので、俺から見ると相手がいないのにモンスターが召喚されたりするようになるようだ。

『デュエルシンミュレーション開始』

「デュエル！」

『ドロー。召喚、《不死のワーウルフ》、攻撃表示』

《不死のワーウルフ》 ATK／1200

白銀の毛並みを持つ二足歩行の狼がファイルドに現れ、遠吠えをあげた。腕には鎖が繋がつており、どこかしらから逃げ出したのであろう。

『カード一枚セット。ターン終了』

「俺のターン、ドロー」

それにしても《不死のワーウルフ》か、こいつも《ヴァンパイア・バツ》と同じくアニメオリジナルカードということは覚えているのだが：破壊された時に攻撃力が上がつてデッキから特殊召喚されるということぐらいしか覚えていない。

『デュアル・ランサー』を召喚してバトル、《不死のワーウルフ》を攻撃

《デュアル・ランサー》は狼男目掛けて三叉槍を振り下ろし、それは避けられる事無く肩を貫いた。狼男は貫かれた肩を押さえながら後退し、遠吠えをあげてからポリゴンと

なつて碎け散つた。

『デュアル・ランサー』 ATK／1800

『不死のワーウルフ』 ATK／1200

コウモリ LP 4000→3400

『不死のワーウルフ』効果発動。被戦闘破壊時、山札内同名カード1体特殊召喚。追加効果、攻撃力500上昇』

『不死のワーウルフ』 ATK／1200→1700

倒したはずのワーウルフが再び現れ、さらにはその身体が一回り大きくなつた。破壊は破壊でも戦闘破壊限定だつたか。とは言つても単体では『デュアル・ランサー』の攻撃力を越える事は無いので、別段気にするほどでもないかも知れない。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

『ドロー。召喚、『ヴァンパイア・バツツ』、攻撃表示』

『ヴァンパイア・バツツ』 ATK／800

機械に繋がれているコウモリとそつくりなコウモリが現れた。見れば見るほどそつくりであり、博士も興味深そうに顎をさすつている。このコウモリは『ヴァンパイア・バツツ』の精霊という考えは間違つていないだろう。

『永続効果、表側アンデット族攻撃力200上昇』

『不死のワーウルフ』ATK／1700→1900

『ヴァンパイア・バツ』ATK／800→1000

『バトル、攻撃宣言 『不死のワーウルフ』、攻撃対象 『デュアル・ランサー』』

先ほどやられた仲間の復讐ということなのか、雄叫びをあげながら 『デュアル・ランサー』へと躍りかかる狼男。突き出された槍を躊躇して間合いに入り、鋭い爪で 『デュアル・ランサー』の肩を貫いた。

『不死のワーウルフ』ATK／1900

『デュアル・ランサー』ATK／1800

葵LP4000→3900

『直接攻撃宣言 『ヴァンパイア・バツ』』

『ヴァンパイア・バツ』が小さな『ヴァンパイア・バツ』に分裂して、俺の周りに集まってきた。そして一斉に激しく羽ばたき、超音波というよりも衝撃波が襲いかかってくる。

『ヴァンパイア・バツ』ATK／1000

葵LP3900→2900

『ターン終了』

「俺のターン、ドロー」

『ヴァンパイア・バツツ』の効果により全体の攻撃力をあげられている以上、早めに潰しておかなければならぬだろう。しかし記憶がただしければ『ヴァンパイア・バツツ』には何らかの破壊耐性効果があつたはずだ。

「『デュアル・サモナー』を攻撃表示で召喚」

『デュアル・サモナー』 ATK／1500

しかし『ヴァンパイア・バツツ』のステータスは高くない。こちらも耐性を持つたモンスターを使って、少しづつダメージを与えて削っていくとしよう。

『バトル、『デュアル・サモナー』で『ヴァンパイア・バツツ』に攻撃』

『デュアル・サモナー』がオレンジ色の光線で『ヴァンパイア・バツツ』を撃ち落とそうとしたが、再び何匹にも分裂して避けられてしまつた。

『デュアル・サモナー』 ATK／1500

『ヴァンパイア・バツツ』 ATK／1000

コウモリ LP 3400→2900

『ヴァンパイア・バツツ』効果発動。被破壊時、山札内同名カード1体代用』

デツキから同名カードを墓地に送る事で破壊を回避するという耐性だつたか。つまりデツキへと戻さない限りは最大で2回の破壊耐性ということになる。それも一ターン辺りでなく、全体を通してだ。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

『ドロー……』

即断即決で行動していたはずのデュエルシミュレーターが動きを止めた。やはりお蔵入りにしていたせいでガタがきているのだろうか。そんなことを考えていたところに、再びシミュレーターから声が鳴り響いた。

『私は手札からフィールド魔法《不死の王国——ヘルヴァニア》発動!』

高らかにそのカードの発動を宣言する声は、先ほどまでの無機質な機械音声とは打つて変わつて楽しげな女性のものだつた。俺はかなり驚いたが、博士は目を輝かせてノートに何か書いている。

「ほうほう! 禁断のカードである《不死の王国——ヘルヴァニア》を使うだけならばともかく、音声にまで影響を与えるか! 素晴らしい! 実に素晴らしい!」

完全にテンションが振り切れてしまつてゐるが、有用なデータが取れてゐるならば何ら問題は無いだろう。博士のハイテンションつぶりを見ているだけで、俺もなんだか楽しくなつてきた。

『不死の王国——ヘルヴァニア』の効果発動! 手札のアンデット族を一枚墓地に送る事で、このターン通常召喚ができなくなるかわり、フィールド上の全てのモンスターを破壊する!』

問答無用の《ブラツク・ホール》効果によつて場を一掃してきた。フィールドのモンスター数もその最高攻撃力もシミユレーターが勝つているのだが、《デュアル・サモナー》の戦闘耐性を破るのが面倒だつたのか、それとも他に考えがあるのか：

『《ヴァンパイア・バツ》の効果発動！ このモンスターが破壊される時、代わりに《デッキから同名モンスターを墓地に送ることができる』

当然破壊は回避してきた。これで俺の場はがら空きになつたのだが、正直なところこれだけならば《不死のワーウルフ》を破壊せずに下級モンスターを並べて《デュアル・サモナー》は戦闘破壊すればいいような気がするのだが…

『手札から《スカル・コンダクター》の効果発動！ このカードを墓地に送る事で、手札から合計攻撃力が2000となるように2体までのモンスターを特殊召喚できる。私は《ヴァンパイア・ロード》を特殊召喚！』

『《ヴァンパイア・ロード》ATK／20000→2200

さらさらの白銀の髪、不健康なまでに白い肌、その口元にはキラリと輝く白い牙。このコウモリマントをはためかせて立つてゐる美男子は見ての通りの吸血鬼らしい。

『いくわよ！ 《ヴァンパイア・バツ》で直接攻撃！ 舞え、《ブラツディ・スペイラル！」

「させるか！ リバースカード、オープン！ 《血の代償》！ ライフを500払うことで

通常召喚の権利を得る！　俺は『デュアル・ソルジャー』を守備表示で召喚し、さらに500ポイント支払い再度召喚する！』

『デュアル・ソルジャー』DEF／300

葵LP2900→1900

『再度召喚だなんて大層な言い方をしてるけど、何も変わつてないじゃないの。ただの二度手間、無駄払いだったんじゃない？』

「二度手間つていうなつ！」

『ヴァンパイア・バツツ』で『デュアル・ソルジャー』を攻撃！　ブラツディ・スペイラル！』

『ヴァンパイア・バツツ』ATK／1000

『デュアル・ソルジャー』DEF／300

「再度召喚された『デュアル・ソルジャー』の効果！　このモンスターは1ターンに一度戦闘では破壊されず、このカードが戦闘を行つた時デッキからレベル4以下デュアルモンスターを特殊召喚する！　俺はデッキから『竜影魚レイ・ブロント』を特殊召喚！」

『竜影魚レイ・ブロント』ATK／1500

「目障りねえ！　『ヴァンパイア・ロード』で『デュアル・サモナー』を攻撃！」

『ヴァンパイア・ロード』ATK／2200

『デュアル・ソルジャー』DEF/300

『デュアル・ソルジャー』の効果により、『巨人ゴーグル』を特殊召喚!』

『巨人ゴーグル』ATK/1500

「さらにリバースカードオープン! 『二重の落とし穴』! 再度召喚されたデュアルモンスターが戦闘で破壊された時、相手モンスターを全て破壊する!」

『なんですか?』

どうやら虚をつく事が出来たようだ。このまま何もしてこないなら返しのターンにまとめて攻撃すれば勝つ事が出来るが、どうにもこのままでは終わってくれそうにない、そんな予感がした。

『生意気ナガキメ! リバースカードオープン、『リビングデッドの呼び声』! 墓地カラ蘇れ、『カース・オブ・ヴァンパイア』!』

『カース・オブ・ヴァンパイア』ATK/2000

喉を締め付けたまま喋っているような苦しそうな声。仮に人が出しているなら、喉の奥から蛇でも出てきそうな声である。それとも口が裂けているのだろうか。なんにせよ耳障りな声だ。

蘇らせた『カース・オブ・ヴァンパイア』だが、恐らく『不死の王国——ヘルヴァニア』の効果コストで墓地に送っていたのだろう。むしろそれ以外で相手がカードを墓地に

送る場面などなかつた。

『行ヶ、《カース・オブ・ヴァンパイア》！　《巨人ゴーグル》に攻撃、ネイルファングブロー！』

「攻撃宣言に対し、《血の代償》の効果発動！　ライフを500ポイント支払つて《巨人ゴーグル》を再度召喚し、元々の攻撃力を2100にして返り討ちだ。ゴーグルナックル！」

腕を構えて走つてきた片翼の吸血鬼に対し、腰を落として正拳突きで反撃する《巨人ゴーグル》。その拳は頬へとまつすぐに突き刺さり、片翼の吸血鬼は錐揉みしながら吹き飛ばされた。

《カース・オブ・ヴァンパイア》 ATK／2000

《巨人ゴーグル》 ATK／1500→2100

コウモリ LP 2900→2800

葵 LP 1900→1400

『《カース・オブ・ヴァンパイア》の効果発動。このカードが戦闘によつて破壊された時、ライフを500支払う事ができる』

元の女性の声に戻つているが、先ほどの声を聞いた後だとかえつて気味が悪い。猫を被つてゐる：というよりも化けの皮を被り直すというほうが表現としては正しいかも

しない。

コウモリLP2800→2300

『私はこれでターンエンド』

「俺のターン、ドロー!」

『この瞬間、《カース・オブ・ヴァンパイア》の効果発動! 戦闘破壊されたときにライフを支払っていたことにより、墓地に眠るこのカードを特殊召喚する! さらにこの効果で《カース・オブ・ヴァンパイア》が蘇った場合、攻撃力が500ポイントアップ!』
《カース・オブ・ヴァンパイア》ATK/2000→2500

地面から黒い霧が立ち上り、人の姿へと集まっていく。現れた片翼の吸血鬼に巨人を襲つたときの鋭い眼光はなく、どこか虚ろで意識があるのか怪しいものだつた。しかし姿は全体的に銳利になつており、呪いというのも頷ける。

『エナジー・ブレイブ』を守備表示で召喚、《巨人ゴーグル》と《竜影魚レイ・ブロント》を守備表示に変更し、カードを1枚セット、ターン終了』

《エナジー・ブレイブ》DEF/1200

《巨人ゴーグル》ATK/2100→DEF/500

《竜影魚レイ・ブロント》ATK/1500→DEF/1000

『不死のヴァンパイアを前では防御を固める事しかできないだなんて、所詮は人間って

ことかしら。私のターン、ドロー』

馬鹿にされているが、今の状況では攻めようとしたところで『カース・オブ・ヴァンパイア』の攻撃力を越える事が出来ない。それならば『不死の王国——ヘルヴァニア』に対して備えた方がいいだろう。

『そしてこのターン、墓地に眠る『ヴァンパイア・ロード』が蘇る!』

『ヴァンパイア・ロード』ATK／2000

辺りからコウモリが飛び出してきて一塊となり、再び散つた。そして中から現れたのは銀髪の吸血鬼である。見下すような目線をこちらに向けてきており、己が不死の貴族であることを誇っているかのようだ。

『本当なら『不死の王国——ヘルヴァニア』の効果でまとめて吹き飛ばしてあげたいところなんだけど、そんなことをしたらせつかくのヴァンパイア達までいなくなってしまうわね』

どうやら俺の防御策は空振りに終わつてしまいそうだ。：残りライフも多くはないので、壁を並べたという事にしておこう。相手は『エナジー・ブレイブ』の効果を知らないだろうから、牽制にはなつていなかつたが。

『ならこうしましょう。『ヴァンパイア・ロード』をゲームから除外し、『ヴァンパイア・ジエネシス』を特殊召喚!』

『ヴァンパイア・ジエネシス』ATK／3000

美形の吸血鬼からどうしてこうなったのか、と疑問に思うような筋骨隆々の吸血鬼が降臨した。肌はシハーブに近い紫色であり、そのせいもあってか恐怖よりも呆れに近い何かが胸をよぎつた。

『そして手札から『貪欲な壺』を発動！ 墓地の『不死のワーウルフ』2体と『ヴァンパイア・バツツ』3体をデッキに戻し、新たに2枚ドロー！ …バトルよ、『カース・オブ・ヴァンパイア』で『竜影魚レイ・ブロント』を攻撃！ シャープスネイルブレイド！』

片翼の吸血鬼は野生の獣のように『竜影魚レイ・ブロント』へと襲いかかる。その速度も『巨人ゴーグル』に攻撃したときとは大違いで、鋭利になつた爪で一閃して『竜影魚レイ・ブロント』を真つ二つにした。

『カース・オブ・ヴァンパイア』ATK／2700

『竜影魚レイ・ブロント』DEF／1000

『そして『ヴァンパイア・ジエネシス』で『巨人ゴーグル』を攻撃！ ヘルビシャス・ブラッド！』

紫男二号こと始祖の吸血鬼が気合いをこめると、身体から赤黒い霧が『巨人ゴーグル』へと向けて放たれた。…血霧かなにかだと思うのだが、シハーブの姿が頭をちらついて香木の煙に見えてしようがない。

『ヴァンパイア・ジエネシス』ATK／3000

『巨人ゴーグル』DEF／500

『うふふ、カードを2枚セットして、私はこれでターンエンド』

「俺のターン、ドロー！」

「俺は『マジック・スライム』を召喚！ そして『血の代償』の効果発動！ ライフを500払い、『マジック・スライム』を再度召喚状態にする！」

『マジック・スライム』ATK／700

葵LP1400→900

召喚された『マジック・スライム』はぐにぐにとイラストの姿からコウモリの姿へと変化した。しかし何か気に喰わなかつたのか、そこからさらに変化を続け、ドレスを纏つた長い髪の女へと姿を変えた。

これはもしや、精霊のつながりからカミューラの姿に変化したとかそういうことなのだろうか。このコウモリは眷属というだけでカミューラそのものではないと思つていたのだが、もしかすると力の一部ということなのかも知れない。

「いくぞ、『マジック・スライム』で『ヴァンパイア・ジエネシス』に攻撃！」

『攻撃力の劣るモンスターで攻撃イ？ 犯められたものね、迎撃なさい！ ヘルビシャス・ブラッド！』

「それはどうかな。再度召喚された《マジック・スライム》が戦闘する時、俺の受けるダメージは相手が受ける。マジカル・リフレクト！」

『チツ、リバースカードオープン！《収縮》！《ヴァンパイア・ジエネシス》の元々の攻撃力を半分にする！』

咄嗟に発動された《収縮》により縮んでいく紫男二号。それでも《マジック・スライム》が変化したドレスの女性よりは大きく、放たれた赤黒い霧が《マジック・スライム》を包んで破壊した。

《マジック・スライム》ATK／700

《ヴァンパイア・ジエネシス》ATK／3000→1500

コウモリLP2300→1500

『残念ダツタワネエ、コレデ起死回生ノモンスター墓地デオネンネヨ！』

「まだまだあ！リバースカードオープン、《正統なる血統》！墓地で通常モンスターとして扱われている《マジック・スライム》を特殊召喚！」

《マジック・スライム》ATK／700

「さらに、手札から速攻魔法《スペシャル・デュアル・サモン》を発動！これで《マジック・スライム》を再度召喚状態にし、バトルだ。《カース・オブ・ヴァンパイア》に攻撃

！」

『ゾンナ事デ勝トウナンテ、考工ガ甘インジヤナクテ？
イクロン』！ 破壊スルノハ当然、《正統なる血統》！
モ才終イヨ！ アーハツハツハ！』

『サイクロン』によつて『正統なる血統』が破壊され、それにより蘇生された『マジック・スライム』も破壊の危機である。そうなれば俺のフィールドにモンスターはいなくなり、手札も無いこの状況では詰みとなるだろう：本来ならば。「機械だかコウモリだかの癖に二回も二度手間いいやがつて、だが残念だったな。『エナジー・ブレイブ』がフィールド上に表側表示で存在する限り、再度召喚されたデュアルモンスターは効果によつては破壊されない！」

蘇生に対するチエーンに対しては無力だが、一度再度召喚状態にしてしまえばこちらのものだ。まさか『不死の王国——ヘルヴニア』に備えて召喚した『エナジー・ブレイブ』が活きるとは思わなかつたが……

「行け！
マジカルリフレクト！」

『マジック・スライム』 ATK／700

『カルス・オブ・ヴァンパイア』 ATK／2500

コウモリ LP1500↓0

その後シミュレーターが女性の声に変わる事はなく、実験は淡々と進められた。今は博士が何かの考えに没頭してしまったため、一時中断している。

鞄からPDAの着信音が鳴り響いていたので時間を見ると、すっかり寮の門限を過ぎてしまっていた。門限どころか夕飯の時間すら過ぎてしまつており、寮に戻つたとして食事は残されていなかもしれない。さすがに夢中になりすぎたようだ。

しかし発信者はクロノス教諭やブルー寮の管理人ではなく、三沢だった。こんな時間帯にメールではなく電話をしてくるとは珍しい。そう思いながらもとりあえず電話にでる。

「三沢か、どうしたんだ?」

「クロノス教諭が闇のデュエルに敗れた」

「?:状況を聞かせてくれ」

三沢の話では、カミユーラと名乗る吸血鬼がクロノス教諭と闇のデュエルを行い、その結果クロノス教諭が人形に魂を封印されてしまったとのことだつた。

今は俺以外の鍵の守護者は保健室にあつまつてゐるらしい。

「こつちはその吸血鬼が放つたと見られるコウモリを捕まえて、調査を行つてゐるところだ。それで分かつたのだが、恐らくデツキが覗かれてゐるぞ」

シミュレーターで発現したデツキのなかに、デュアルモンスターを使ったデツキが登場したのだ。それも実験中に俺が召喚していないモンスターが使われており、いつの間にかデツキが覗かれていたようである。

尤も、これはアニメでもあつた展開なのでさほど驚きはしていないのだが。

「なんだつて！」

「クロノス教諭の手が透けていた理由としては納得がいくだろう。デツキを弄るときやデュエル中はコウモリに気をつけてくれ」

アニメでは手札までは覗いていなかつたが、念を入れるにこした事は無い。デツキだけならともかく、手札がバレると取れる選択肢を全て握られたに等しいからだ。

「分かつた」

「今日は研究所に籠つて博士を手伝うから、ブルー寮に帰れないことを伝えてくれ。すぐさま結果が出るとは思えないが、何か分かつたら連絡する」

そういつて通話を切り、PDAを鞄にしまつたところで博士の中で何か結論がでたらしい。実験続行を言い渡されたため、こちらも寮に帰る必要がなくなつたことを伝えれる。

その後も仮眠や食事を挟みながら実験は続いていつたが目新しい発見もなく、日付が変わり再び夜の帳が降りた後、三沢からの連絡でカイザーが敗れた事を知つた。

16. 吸血鬼と闇のゲームっていうなっ！

カイザー敗北の報告があつてからさうに次の夜、俺は湖の上に敷かれたレッドカーペットの上を歩いていた。：：どのような仕組みなのかは分からぬが、絨毯は水がしみ込むこともなく硬い石の上に敷かれたかのような感触が返ってくる。

後ろを付き従うシハーブも無駄口を叩く事無く、俺の足音だけが辺りに響いている。他の鍵の守護者は部屋でデツキの調整をしているのだろう。少なくとも湖の近くには誰もいなかつた。

だがその方が俺としては都合がいい。カミユーラの使う魔法カード『幻魔の扉』は『サンダーボルト』と『死者蘇生』を足した効果を持つインチキ効果にも程があるカードなのだが、このカードを使って負けると幻魔に魂を持つていかれるという恐ろしいものなのだ。

しかしカイザーとの戦いではこれを逆手に取り、翔を盾にして勝ちを譲らせるという手段にてたのだ。これではもはやデュエルが成り立たない。そのため俺一人：それと『ランプの魔人』のシハーブ：：だけならば人質に取られる事もないでのその心配がない。カミユーラによって湖の中心近くに突如として出現した城、学園祭のお化け屋敷にそ

のまま使いたいぐらいには雰囲気満点である。カメラでも持つてくれば良かつた、と意図的に呑気なことを考えながら中に入る。

城の中は湖の真上に立つてゐるというのに湿度を感じさせず、まるでこの城だけが別空間に建てられているかのようだつた。

ひやりとした廊下をまっすぐに進み、大きな広間に到着した。吹き抜けになつており、二階部分が突き出る形になつてゐる。

「あら、お客様かしら。でも変ねえ、あなたは招待した覚えが無いわ」

広間の奥から紅いドレスを身にまとつた長髪の女性が優雅な足取りで歩いてきた。気品あふれる佇まいはまさしく貴族と呼ばれるにふさわしいものであり、どこか非現実的な艶やかさも醸し出している。

「いえいえ、翼のついた使いの方からご招待頂きましたよ。使いの方はお帰りになつていないのでご存知ないかもしませんが」

相手の雰囲気に気圧されないよう、あえて挑発をしてみる。眷属とはいえコウモリを盾に出来るのは思つていながら、まともなデュエルが出来るのならばそれで問題はない。

「…あの子が帰つてこないと思つたら、連れ去つたのはお前か」

「連れて去るだなんてとんでもない。ただこちらで預かっているだけですとも」

カミユーラの眼光が怒りをあらわすように鋭く輝き、こちらを撃ち抜かんばかりに睨みつけてくる。俺もクロノス教諭やカイザーへの仕打ちに対してもう少し怒りは覚えているので負けじと睨み返す。

「それでは本題を。鍵の守護者の一人として仇討ちをさせてもらうぞ、吸血鬼」「ならば闇のデュエルでお前の鍵を奪つて、あの子も返してもらうわ！」

互いに宣戦布告をした後、二階へとあがり吹き抜け部分に向けてデュエルディスクを構える。闇のデュエルは初めてだが、こちらも闇のアイテムまがいの物を持っている。一方的に影響を及ぼされるということはないはずだ。：本体は中のカードらしいので、あれがただのランプである可能性は否定できないのが心配だが。

「『デュエル！』

「先攻はもらつた、ドロー！　俺は魔法カード《コストダウン》を発動する。手札を1枚捨て、手札の《灼熱王バイロン》のレベルを2つ下げる」

《灼熱王バイロン》レベル5→3

上級モンスター中心ではないとはいっても、素直に生け贅召喚をしていると召喚権が足りなくなってしまう。：割にあつているかどうかは別問題だが、蘇生や不死をテーマにするカミユーラ相手に持久力で競うつもりはさらさらない。

「そして《灼熱王バイロン》を通常召喚し、さらに装備魔法《スーパールヴィス》を装備！

「これで『灼熱王パイロン』は再度召喚状態となる！」

《灼熱王パイロン》ATK／1500

「わざわざレベルを手札を三枚も使つてすることが、たかが攻撃力1500のモンスターを召喚するだけ？ 二度手間、いやそれ以上に手間をかけた割に大したことないわね」

「二度手間つていうなつ！ 『灼熱王パイロン』の効果発動！ 相手ライフに1000ポイントのダメージを与える！ 燃やせ、パイロボール！」

灼熱王の名に恥じない熱が更に膨れ上がる。これはソリッドヴィジョンだが、実際の炎ならば乾いたこの城はさぞ盛大に燃えてくれる事だろう。実体化させてしまうと人形にされたカイザーも一緒に燃やしてしまいかねない。

カミューラ LP 4000→3000

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「このつ…私のターン、ドロー！ 私は永続魔法『ミイラの呼び声』を発動、私の場にモンスターが存在しない場合、手札からアンデット族モンスターを1体特殊召喚できる。私は『ヴァンパイア・ロード』を特殊召喚！ さらに『ヴァンパイア・ロード』をゲムから除外し、『ヴァンパイア・ジェネシス』を特殊召喚！」

《ヴァンパイア・ジェネシス》ATK／3000

『ミイラの呼び声』はレベルの制限がなく条件も緩い。元々墓地蘇生を得意とするアンドレット族ならば展開力に困る事はそうそうないが、どこからでも特殊召喚されるというのにはやはり厄介だ。

「そして永続魔法『ジエネシス・クライシス』を発動！ 1ターンに1度、デッキからアンドレット族モンスター1体を手札に加えることができる。私が手札に加えるのは『ヴァンパイア・レディ』！」

そしてこれによつて毎ターン『ヴァンパイア・ジエネシス』の効果コストが確保される事になつた。ついでにモンスターが全滅したとしても、あらかじめ確保したモンスターは『ミイラの呼び声』で特殊召喚可能という抜け目の無さだ。

「そして『ヴァンパイア・レディ』を召喚してバトル！ 『灼熱王パイロン』を攻撃！」

緑の髪に鈍い紫のドレスの女吸血鬼が現れた。髪の色やドレスを見る限りカミユラとは何らかの関係があるのだろうとは思うが、あまり似てはいないので本人というわけではないだろう。

その吸血鬼が灼熱王めがけて眷属たるコウモリを放ち、その身を吹き飛ばそうとする。灼熱王はコウモリ達を焼き払おうとするが、超音波に押されてそのまま散り散りに吹き飛ばされてしまった。

『ヴァンパイア・レディ』ATK／1550

『灼熱王バイロン』 ATK／1500

葵LP4000→3950

たかが50のダメージであるため、痛みもほとんど感じる事は無かつた。闇のデュエルならば体感システムよりも強烈な痛みが襲つてきそうなのだが、この程度のダメージ量では無いも同然ということなのだろうか。

「『ヴァンパイア・レディ』が相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度、相手は私が宣言した種類のカードをデッキから1枚墓地へ送る。私が宣言するのは魔法カード！」

ここでモンスターカードと説いてくれればむしろ大喜びだつたのだが、アンデット族使いだからか墓地アドバンテージの重要性はしつかりと認識されているらしい。俺のデッキが蘇生をある程度得意としていることがバレているわけではないと信じたい。

「俺は『戦線復活の代償』を墓地に送る。しかし『スペルヴィス』の効果発動！ 俺は墓地から『フェニックス・ギア・フリード』を特殊召喚！」

『フェニックス・ギア・フリード』 ATK／2800

「あら、強そうなモンスターね。でも吸血鬼の恐ろしさに比べれば、人間の戦士なんて脆弱なオモチャに過ぎないわ！ 『ヴァンパイア・ジエネシス』で『フェニックス・ギア・フリード』に攻撃！ ブラツディ・スパイナル！」

「だが化け物を殺すのはいつだって人間と相場は決まっているんだよ。リバースカード

オープン『デュアル・ブースター』！ これにより『フェニックス・ギア・フリード』の攻撃力は700ポイント上昇する。返り討ちにしろ、フェニックス・スラッシュ！

これでカミユーラのデッキの最高攻撃力である『ヴァンパイア・ジエネシス』の攻撃力を上回った。始祖の吸血鬼は騎士に襲いかかろうとしたが、炎を纏つた剣で斬りつけられ、浄化されるように全身に火が回つて燃え尽きた。

『ヴァンパイア・ジエネシス』 ATK／3000

『フェニックス・ギア・フリード』 ATK／2800→3500

カミューラ LP 3000→2500

「そして『ヴァンパイア・ジエネシス』が破壊されたことにより、『ジエネシス・クライシス』は自壊する」

「このつ！ カードを1枚伏せてターンエンドよ」

「俺のターン、ドロー！ 『エヴォルテクター シュバリエ』を召喚」

『エヴォルテクター シュバリエ』 ATK／1900

「バトル、『フェニックス・ギア・フリード』で『ヴァンパイア・レディ』を攻撃！」

「罠発動！ 『妖かしの紅月』！ 手札のアンデット族モンスターを墓地に捨て、攻撃を無効にしてその攻撃力分ライフを回復するわ。そしてこのバトルフェイズは終了になるわよ」

『フェニックス・ギア・フリード』 ATK／3500

カミューラ LP2500→6000

「ならばカードを一枚伏せてターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！」

カミューラのターンになり、引いたカードを見て何か思案顔で止まっていたが、不意にこちらへ向けて走るような足音が聞こえてくる。カミューラ以外のセブンスターZがここまで来るとも思えないし、つまりこの足音は……

「葵！」

やはり十代だった。そこまで時間はかけていないはずなのだが、十代の首元に鍵以外に飾りが二つぶら下がっているということは湖岸でのやり取りの後なのだろう。もちろん十代だけでなく鍵の守護者が全員来ており、ほとんどが俺がいることに驚いている。

「葵、なんでお前がここに！」

「言つてる場合か！」

正直などころ、三沢と問答している時間も惜しい。デュエルの音に気付いては知つてきたのだろうが、俺としては状況が悪化している。せつかくカミューラをここまで追いつめているのに、これでは人質に取られかねない。

「ちようどいい所に来たわね！ 魔法カード『幻魔の扉』発動！ このカードはお前のフィールド上に存在する全てのモンスターを破壊し、その後このデュエル中に召喚されたモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚できるわ。でもね、このカードを発動したプレイヤーが負けると、魂を幻魔に捧げなくっちゃいけなかつたのよね』

悩んでいると思つたらやはりそのカードを引いていたのか：他の手札がないせいで使わなければ劣勢を覆せないが、使つてしまえば敗北が死と直結するため使うに使えなかつたというところだろう。

「でもやつぱり闇のゲームなんだし、またアンタ達を利用させてもらおうかしらね！」

扉からの光を背に、どういう仕組みかカミユーラが二人に増えた。増えた方のカミユーラが空を飛び、狙っているのは：誰だつたとしても放つておくわけにはいかない。

「シハーブ、取り押さえろ！」

『御意！』

シハーブがカミユーラを止めようと追いかけるが、このままでは間に合わないだろう。俺はポケットに忍ばせていた物をカミユーラ本体に向けて投げつけた。投擲すると同時に、念のため耳を塞いでおく。

「ギャッ！」

カミユーラが短く叫び声をあげて耳を塞ぐ。俺が投げつけたのは博士謹製音響弾である。条件を変えて実験を重ねるうち、特定の周波数の音が発生させるとデュエルタクティクスが著しく下がることがわかつたのだ。

しかしある程度の音量が必要ということがわかり、研究所に置いてあつた防犯用スタングレネードを改造して作つたのだそうだ。尤もスタングレネードが炸裂したら普通の人間でもデュエルに支障があるとは思うのだが……

この音響弾は分裂したカミユーラにもダメージはあつたようで、シハーブが取り押さえる事に成功していた。そしてタイミング良く十代が首から下げていた闇のアイテムも完成して十代達を守るようにバリアが発生した。

人質を取ろうなんてデュエリストの風上にも置けない、と言いたい所だがデュエルに兵器を持ち出した人間の台詞ではないだろう。

卑劣な手段を取られたからと言つて仕返しをしてもいいとは思つていないが、こればっかりは命に関わる。正々堂々のデュエルで負けて自分が命を落とすのならいざ知らず、直接襲われたり負けを強要されて命を落とすのはあまりにも馬鹿馬鹿しい。

「コノ、糞ガキイ！」

カミユーラの口が裂け、長い舌がぬるりと出てくる。この不快な声は聞いた事がある。コウモリとのデュエル実験で最初の一度だけ発生した現象、端的な機会音声がまる

で誰かが乗り移つたように流暢かつ饒舌に喋つたときに聞いた声だ。

俺に対してはピンポイントな対策をしてはいないので本当に乗り移つたわけではなかつたのだろうが、こちらが本性であり今までの艶やかな美女の顔は誘蛾灯のようなものだと考へててしまう。

いや、今はそんなことはいい。せつからく他の皆を守れたというのに、このまま何もしらないと俺が『幻魔の扉』の餌食にされてしまう。この策が上手くいくとすればいいのだが…

『幻魔の扉』にチエーンしてリバースカード、オープン！ 速攻魔法『デュアルスパーク』！ 俺は『エヴォルテクター シュバリエ』を生け贋に捧げ、『フェニックス・ギア・フリード』を破壊する！ そしてカードを一枚ドロー！

「何だあ!?」

「自分のモンスターを破壊だと！」

「ライフがほぼ初期値とはいえ、これでモンスターを蘇生させられればひとたまりもないはずなのにどういうことかしら…」

「ドロー目的だったとしても、自分のモンスターを破壊するぐらいなら『ヴァンパイア・レディ』の破壊をした方が…いや、まさか！」

放つておいても全滅するモンスター達を自ら一掃し、場をがら空きにした俺に対しても

鍵の守護者一同が疑念の声を漏らす。流石にイエロー主席こと三沢は気付いたようだが、さて答え合わせの時間だ。

「これで効果解決時に俺のモンスターが存在しないことにより『幻魔の扉』は不発となり、特殊召喚効果は使用できない。そして効果は不発になつたとはいえ発動自体は無効となつていないため、負ければその魂を捧げるという誓約効果には従つてもらおう」

少々分かりにくいかもしれないが、一連の効果処理を行う時、最初の効果が処理できない場合、一部の例外を除けばそれ以降の効果も処理することができない。『幻魔の扉』はOCGには無いカードのため、その一部例外である可能性もあつたがそうでなくて安心だ。

今回の場合、破壊した後で蘇生を行ふところまでが一連の効果だが、俺のフィールド上にモンスターがいなければ破壊することができない。そしてモンスターを破壊することができなければ蘇生することもできないということになる。

しかし誓約効果はあくまでカードの発動に対するものであるため、今回のようにカード効果が不発になつたとしても発動を無効にされていない場合ならばその誓約は有効になるのだ。

「小賢しい真似を！　『ヴァンパイア・レディ』で直接攻撃！」

眷属のコウモリによる攻撃を仕掛けてくるのかと思つたが、『ヴァンパイア・レディ』

は俺に接近すると鋭く尖った爪を勢いよく振り下ろした。とつさに両腕をクロスして防御体勢を取つたせいか、腕にわずかな痛みが走る。

『ヴァンパイア・レディ』 ATK／1550

葵 LP3950→2400

「…ん？」

数値上は『灼熱王パイルン』が破壊された余波の実に31倍のダメージである。それに腕を切り裂かれたのだから大きな痛みが走りそうなものだが、せいぜいデュエルディスクの体感システムと同じかむしろそれよりも痛みが少ない気がする。

それに先ほどはかすり傷のようなものだつたせいか気がつかなかつたが、傷つけられたはずの場所から痛みが引くのが早過ぎる。…痛みに快楽を覚えるような人種ではないので、ひとまず考えるのは後にするか。

『ヴァンパイア・レディ』の効果でデッキから魔法カードを墓地に送つてもらうわ！」

「それならば、俺は『闇の量産工場』を墓地に送る」

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー：墓地の通常モンスターが3体のみの場合、そのうちの2体を除外することとで『紅蓮魔闘士』を手札から特殊召喚することができる！さらに『紅蓮魔闘士』は1ターンに1度、墓地からレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚することが

できる！《エヴァルテクター シュバリエ》を特殊召喚！」

《紅蓮魔闘士》ATK／2100

《エヴァルテクター シュバリエ》ATK1900

蒼鎧の戦士と赤甲冑の騎士が並び立ち、戦士は猛々しい動きで大剣を担ぎ、騎士は整然とした動きで長剣を構える。見事に対となるような動きを見せてくれるのはありがたいが、片方には今からコストになつてもらわなければいけない。

「そして魔法カード《馬の骨の対価》を発動、俺は場の《エヴァルテクター シュバリエ》を墓地に送り、カードを2枚ドロー！」

《ヴァンパイア・レディ》でちまちま魔法カードを墓地に送っていたが、上手い具合にカードが来てくれた。今引いた他にも魔法カードは入っているが、およそ組み合わせとしてこれ以上は望めないだろう。

「俺は《アームズ・ホール》を発動！ デッキトップを墓地に送り、墓地の《スーパールヴィス》を手札に加える。ただしこのターン俺は通常召喚を行うことはできない」

「確かにそのカードは厄介だけどねえ、追撃の可能性を捨ててまで手札に加えたかったのかしら？」

「追撃？ 何を言つている。お前はこのターンで終わりだ」

「面白い事ヲ言ウジヤナイ！」

「俺は手札から『思い出のブランコ』を発動し、『エヴォルテクター シュバリエ』を特殊召喚!」

『エヴォルテクター シュバリエ』 ATK／1900

赤甲冑の騎士は再び現れると同時に剣を抜き、払うように振るつた後『ヴァンパイア・レディ』に向けてその切つ先を突きつけた。：次の行動は考えているが、それにしてもこの行動はそれが分かっているようにも感じられる。

「そして、『スペルヴィス』を『エヴォルテクター シュバリエ』に装備し、再度召喚状態にする」

赤甲冑の騎士が炎を纏い、長剣を一度鞘に納める。そして腰を深く落として居合いの構えをとる。：以前も思つたのだが、切腹をしたり居合いの構えを取つたりと中身は侍のつもりなのかもしれない。

「再度召喚状態の『エヴォルテクター シュバリエ』の効果発動！ 自分フィールド上の装備カードを1枚墓地に送る事で、相手フィールド上のカードを破壊できる！『スペルヴィス』を墓地に送り、『ヴァンパイア・レディ』を破壊だ！」

俺が効果の発動宣言をするやいなや、重装甲からは思いも寄らない速度で『ヴァンパイア・レディ』に駆け寄り、鞘から剣を素早く抜き放つて炎の斬撃を浴びせた。さらにその余波がカミユーラに襲いかかるうとしたが、ライフダメージがないせいかカミュー

ラに届く前に炎は消えてしまった。

「そして墓地に送られた『スペルヴィス』の効果！ このカードが墓地に送られた時、墓地の通常モンスターを1体特殊召喚する。『ヘルカイザー・ドラゴン』を特殊召喚！」

『ヘルカイザー・ドラゴン』 ATK／2400

『アームズ・ホール』のコストとして墓地に送られていた『ヘルカイザー・ドラゴン』を墓地から蘇らせると、青い鱗の雄々しい竜は咆哮をあげてカミューラを睨みつけるよう見下ろしていた。口の端からは煙が漏れており、すでに臨戦態勢のようである。

「何イ！」

「行くぞ、『エヴァルテクター シュバリエ』で直接攻撃！」

赤甲冑の騎士は長剣を白く煌めかせ、カミューラの左肩から斜めに斬り下ろした。普通ならば派手にドレスが切り裂かれてあられもない姿になりそうなものだが、流石に服が切られている事は無かつた。：残念だなんて思つてはいない。

『エヴァルテクター シュバリエ』 ATK／1900

カミューラ LP 6000→4100

「続いて、『紅蓮魔闘士』で直接攻撃！」

蒼鎧の戦士は赤甲冑の騎士とは違い、斬るのではなく叩き潰すというようにカミューラの右肩へと大剣を打ち下ろした。吸血鬼とはいえ闇のゲームの前では平等なのか、カ

ミユーラが苦悶の声をあげる。

：俺が直接攻撃が受けたときにほぼダメージを感じなかつたということは、俺が吸血鬼よりもまかり間違つた何かということなのかもしない。体感システムだと普通にダメージは受けていたので、闇のゲームであることが関係しているのは確実だろう。

『紅蓮魔闘士』ATK／2100

カミューラ LP4100→2000

「トドメだ！『ヘルカイザー・ドラゴン』で直接攻撃！ヘルカイザー・バースト！」

竜の顎が大きく開かれ、その口から白色に近い熱光線が放たれ、カミューラの全身を覆い隠した。光線が止んでから目に映つたのは、苦しそうに膝をつくカミューラの姿だつた。

『ヘルカイザー・ドラゴン』ATK／2400

カミューラ LP2000→0

そのとき、カミューラの背後に再び『幻魔の扉』が現れた。そして扉が開かれ、中から現れたモヤが手のような形となる。その手はカミューラの首を掴み、カミューラの中にあつたナニカを扉に引き込むと扉は閉まり、消え去つた。

カミューラは魂を奪われたのであろう。カミューラがいた場所にはカミューラの着

ていた服とチョーカー、そして成れの果てともいえる灰だけが残っていた。

なお、カイザーは別室に置かれたままであつたらしい。俺が一階へと階段を降りる間に広間へと走つてやつてきた。一同がカイザーの無事な姿に喜びの声をあげている。

そしてクロノス教諭はサンダーのポケットから元に戻つたようで、サンダーを下敷きにしたままキヨロキヨロと辺りを見回している。一応人形の間の記憶はあるそなうだが、現実感のない状態だつたようだ。

二人が無事に元に戻つたことにホツとしたが、そんな安堵を打ち壊すように地鳴りが鳴り響いた。そういうえばこの城は湖の上に支えも無く浮いており、そしてその不可思議を起こしていたのはこの城の主であるカミユーラに間違はないはずだ。つまりそれは：

「城が崩れるわ！」

明日香さんが叫び声をあげると全員大急ぎで出口へと走る。さすがに崩れる城を固定したままでいられるような効果をもつカードは思い当たらないし、思い当たつたとしても今手元に無いのであれば意味は無い。

城を脱出し湖のほとりに到着すると、城は倒壊して湖の底へと沈んでしまつた。先に道が崩れたりしなくて本当に良かった。城の崩壊に巻き込まれたら助かりそうにないし、水中水泳とは言わぬが泳ぐにはまだまだ気温も水温も低い。

『ダークシー・レスキュー』を使うことも考えられたが、そうすると何故か水死体になるまで放置されるような気がした。機械族だから変な所で融通が聞かない気がするんだよな：一度確かめておくべきだな。

「葵、勝ったから良い物の、どうして一人で行つたんだ」

現実逃避のためにとりとめの無い事を考えてはみたが、現実からは逃げられないようだ。身体の前で腕を組んだ三沢は今までにないほどお冠の様子である。

助けを求めるようと明日香さんの方を：目をそらされた。サンダーは：追い払うようなジェスチャーをされた。十代は：気付きもしねえ。カイザーとクロノス教諭は：お疲れの様子でこちらも気付かない。

「葵、聞いているのか！」

「聞いている、聞いていないはずがない、だから落ち着いてくれ」

ものすごい剣幕で三沢に怒鳴られ、思わず後ろへと退いてしまう。『幻魔の扉』のことはカイザー敗北の報せと共に聞いていたとはい、その時に一人で突出しないように釘を刺されていたので言い訳にはならないだろう。

正直に話したところでさらに怒鳴られるのは目に見えているし、かといって嘘をついた所ですぐさま気付かれて火に油を注ぐだけになる。ドロー修行の副産物ともいえる脚力に任せて逃げたとしても、後日余計に怒鳴られるに決まっている。

どうやつてこの怒れる友人を宥めるか、昇り始めた太陽に問い合わせても返つてくるのは呑気に輝く夜明けの光だけであつた。

17. 貧乏学生っていうなつ！

幾何学的な模様の描かれたタペストリー、見た事も無い文字が羅列された古びた本、暗がり故に本物の人間を使つたかのようにも見える人体標本、そんな怪しげな物ばかりが置かれた部屋をロウソクの灯りだけが照らしている。

部屋の中に確認できる人影は三つ。どれもフードを被つており、その表情を窺い知る事は出来ない。しかしそれぞれが発する雰囲気からは焦燥感のようなものが感じ取れる事が出来る。

机を囲むように座つている影の一つが同席者達を見渡し、重々しい口調で言葉を発した。

「予算が足りない」

その言葉を待つていたように、電灯が点いて部屋が明るくなる。薄明かりの中ではよく見えなかつた机の上は、お菓子や紙が乱雑におかれており雰囲気が色々と台無しであつた。

「よし、それじゃあ話し合いを始めようか」

先ほどの重たい口調とは打つて変わつて明るい声が飛んでくる。この声の主こそ、高

寺オカルトブラザーズのまとめ役である高寺その人である。

「いやー、雰囲気作りのためとはいえスイッチの前で待機してくれてありがとう」

「それはいいんだが、予算が足りないってどういうことだ？」

「予算が足りないような状況ということは、もしかしてアカデミアから援助が受けられなかつたのか？ それならばそもそも出店許可自体が出ていないということになるから別な言い方になりそうなものだが…」

「いやあそれがね、お化け屋敷をするために見積もりと一緒に教室の使用願を出したんだけど…他に教室を使うグループがないから、外にテントを建ててやることになつてね。そうしたら教室にある机と展示用投影機を使えないから、全然予算が足りないんだよ」

非常に切ない理由だった。教室を却下したのは教務の都合なんだしある程度は融通を効かせてもらいたいところだが、あの机は固定されている。教室内で使うならば外した分をどこかに置いて、それ以外で順路のようにするつもりだったのだが…さすがにあの机を外に持ち出すのは骨が折れる。

それだけならまだしも、セットしたカードのソリッドヴィジョンを再生しつづける投影機が使えないといソリッドヴィジョンを使つた演出がままならない。演出にデュエルディスクを使うと、ただでさえ人が足りないのに常駐する人数を増やさないといけなく

なるんだよな…

「…今のところ予算を使う先つて骨格標本とかがメインだし、そこを削るしかないんじやないか?」

「それでも投影機は無理だよ…」

「だよなあ…」

正直、かなりカツカツな予算設定をしていたのだ。しかもテントは教室よりも広いらしい。教室を却下した分の補填かもしけなかつたが、こうなると逆に迷惑である。

「一応僕たちが個人的に物を買って使うのはいいらしいけど、そんなお金はもつてないし…」

アカデミア内では通常の日本円はほぼ使われないため、ほとんどの生徒は金銭をこちらに置く事は無い。代わりにD.P.(デュエルポイント)と呼ばれるアカデミア内通貨が使われるのだが、それで購入できるのはカード以外は、ドローパン等の食品や学校で使う文房具ぐらいなものである。

「バイトをすれば…それでも現物かD.P.で支給されるしなあ。そもそも手が出る値段だと思えない」

稀に購買などでバイトが募集されるが、それでも日本円は手に入らない。そもそも日本円を手に入れても使い道がほとんど無いからだ。一応定期便がくる前に代金と共に

注文書を教務に渡せば取り寄せもしてくれるのはいえ、手間が勝ちすぎてそこまでする生徒は滅多にいない。

：例え博士に何か使えそうな機械がないか聞いてみたところで、投影機があるかも分からぬし、貸し出しができたとしてもあんなものを研究所から運ぶなんてできないしなあ。とりあえずダメ元で聞いてみるか。

今回の話し合いで、デュエルディスクで演出する場合に必要な人数の概算をとり、足りない人数をどうやって確保するか話し合った後解散した。：それでもお化け屋敷でデュエルをしないという結論にならないあたり、流石デュエルアカデミアということだろうか。

「…というわけなんですが、どうしたもんですかね」

明くる日、新しい機械のテストということでS A L 研究所に呼び出されたので、ついでとばかりに先日高寺オカルトブラザーズと話し合つた件について博士に意見を求めてみた。もちろんこれで機械を貸し出してもらえないか、という打算もある。

もはや勝手知つたるなんとやらで、インスタントコーヒーを博士に渡して俺の分も淹れる。当たり前のようにマイカップとかマイデスクとかがある時点で、もはやここに就職してしまつているかもしれない。

「ふむ…そういうことなら協力できなくもないだろうな。代田くんには色々世話になつとるし、何か考えてみよう」

「ありがとうございます。しかし世話になつていてるだなんて、こちらこそ博士のお世話になりっぱなしですよ。先日のコウモリの件だつてこちらから色々お願ひしたというのに」

「はつはつは、あれこそ良い実験材料の提供だつたじやないか。ほとんど普通のコウモリになつてしまつたとはい、まだ研究室で調査は続けておるぞ」

カミューラの魂が幻魔に捧げられたことで、『ヴァンパイアバツ』もどきは精霊の気配がないただのコウモリとなつてゐる。見た目からして変化があつたようで、その瞬間を納めたフィルムが擦り切れるほど検証したとは博士の弁だ。フィルムカメラで撮影したわけではないので、擦り切れるというのはもちろん比喩なのだが。

「む、もうこんな時間か。それでは動作試験の続きといこうじやないか」

一人してコーヒーを一気に飲み干し、実験場に戻る。

扉を開けた途端、眩しさに思わず目を覆う。環境認識式フィールド形成装置ことF.L.O.の動作試験のため、実験室を鏡張りにして起動するといふ何が間違えていないか非常に不安になる試験だ。

！」

「了解」

実験場にいる人間達が一斉にデュエルディスクを展開し、目の前の相手とデュエルをする構えをとる。ちなみに俺以外の人間は黒服さんたちで、話してみると結構気さくな人たちである。

「私の相手は代田くんか、お手柔らかに頼むよ」

「こちらこそ」

「F.L.O起動！ 周辺環境認識プロセス：完了、フィールド形成プロセスに移行：完了、周囲のデュエルシステムとの同期：完了、それでは試験開始！」

「デュエル！」

「先攻はもらうよ、ドロー！」

黒服さんの先攻でスタートしたが、スクリーンを見る限り今回設定されたフィールドは『銀幕の鏡壁』ということで攻撃モンスターの攻撃力が半分になる。お互いに半分だから守備表示でない限り関係ない、と思うかもしれないがそうではない。

このカードの効果は“攻撃表示モンスター”ではなく“攻撃モンスター”に適用されるのだ。つまり攻撃しない限りは効果を発揮しない。しかし一度攻撃すれば攻撃力

は半分になつたままである。

「《スクリーチ》を攻撃表示で召喚してターン終了だ」

《スクリーチ》ATK／1500

いかんとも形容し難いモンスターが現れた。全体的に薄緑色の皮膚に覆われており、敢えて表現するならナマコにトカゲの足だけくつつけて尻尾を生やしたような生物だ。あとキイキイと耳障りな鳴き声を発している。

二足歩行だが腕はない。口はあるのだがただ穴が空いているようなものであり、あれが頭なのかは分からぬ。そして尻尾のようにも見えるが用途がわからない器官が生えている。間違いなく地上には存在しないだろう。もし見かけたらいくらか正気を失いそうだ。

「俺のターン、ドロー…」

さて《スクリーチ》を突破するには最低でも30000の攻撃力が必要となるが、正直かなり無理がある。ここはひとまず守りを固めて出方をうかがうしかないだろう。

「《デュアル・ランサー》を攻撃表示で召喚しカードを1枚伏せて、ターン終了です」

《デュアル・ランサー》ATK／1800

《スクリーチ》の効果は、戦闘破壊されたときにデツキの水属性モンスターを2体墓地に送るというものだ。それを嫌うなら守備表示で召喚すべきなのだろうが、状況が変化

しないことにはどうしようもないで敢えて攻撃を誘つてみる。

「そうか、じゃあドローするよ」

しかし相手もこの状況は嬉しくないらしく、少し考え込んでいる。《スクリーチ》の効果が発動できるチャンスだが、手札が揃っていないのか、それとも何か別の懸念があるのか。

「バトル！《スクリーチ》で《デュアル・ランサー》に攻撃だ！」

「《デュアル・ランサー》、迎撃しろ！」

結局攻撃する事に決めたらしい。《スクリーチ》がバタバタと《デュアル・ランサー》に向けて走り出す。そこに突如間に鏡の壁が立ちはだかり、それにぶつかつた《スクリーチ》は鏡の奥から現れた《デュアル・ランサー》の槍による一撃で身体を散らせた。

《スクリーチ》ATK1500→750

《デュアル・ランサー》ATK／1800

黒服LP4000→2950

「《スクリーチ》の効果により、デッキから水属性モンスターを2体墓地に遅らせてもらうよ」

ここで何を落としたのか、こちらのデュエルでは確認する事が出来ないのは非常に痛い。しかし水属性で落とすであろうカードは《黄泉ガエル》か《悪魂邪苦止》ぐらいし

か思い浮かばないな。後は禁止カードの『キラースネーク』だが、これはないはずだ。そ
うでないなら『サルベージ』で回収するか、除外コストの可能性が高い。…まさか『瀑
征竜—タイダル』とかいわないよな？

「墓地に送ったのは『素早いアンコウ』2体だ、それぞれの効果を発動し、デッキから『素
早いアンコウ』以外の“素早い”と名の付いたレベル3以下のモンスターを合わせて4
体特殊召喚するよ！『素早いマンタ』、『素早いマンボウ』、『素早いモモンガ』、『素早い
ムササビ』を特殊召喚！」

『素早いマンタ』ATK／800

『素早いマンボウ』ATK／1000

『素早いモモンガ』ATK／800

『素早いムササビ』ATK／1000

『素早い』か、そりや苦い顔にもなるだろう。『素早いムササビ』を効果でこちらに送
りつけようと思つても、それによつて受けるダメージが割にあわない。『素早いモモン
ガ』ですら回復が追いつかないし、他の“素早い”モンスターを含めて一斉攻撃したと
してもダメージが小さい。

「手札から速攻魔法『死者への供物』だ！『デュアル・ランサー』を破壊して一斉攻撃！」
『デュアル・ランサー』が除去されてまったくの無防備となつてしまふ。普通ならば総

攻撃力2800の直接攻撃だが、『銀幕の鏡壁』があるせいで総攻撃力1400というリクルーターレベル程度のダメージである。元のライフが少ないのでそれでも結構痛いのだが。

『素早いマンタ』 ATK／800↓400

『素早いマンボウ』 ATK／1000↓500

『素早いモモンガ』 ATK／800↓400

『素早いムササビ』 ATK／1000↓500

葵 LP 4000→2600

「さらにカードを2枚セットしてターン終了だよ」

「ドロー！」

正直なところシンクロやエクシーズが存在していたなら非常にまずいことになりそうだったのだが、この時代にそんなものはない。それでも『スバルタクアの呪術師』や『ジャンク・アタック』を併用されるとまずい展開にはなるが、まだ手札には無いようだ。『シャドウ・ダイバー』を守備表示で召喚します

『シャドウ・ダイバー』 DEF／500

本当なら攻撃表示で召喚しておきたいが、それでサンドバッグ……この場合殴り倒すのは『シャドウ・ダイバー』のほうが：にされてもかなわない。守備力が低いとはいえ、

攻撃力の半減した“素早い”モンスターでは突破することができないのでひとまず壁になつてもらう。

「さらにカードを2枚伏せてターン終了します」

「さて、このターンは《死者への供物》の効果でドローはできないから…手札から魔法カード《強制転移》を発動しよう。さあ《素早いムササビ》と《シャドウ・ダイバー》を交換してもらおうか」

さすがに転移ギミックぐらいは搭載されているか。これが成功したとしても、攻撃力が半減した《素早いムササビ》は一体目だけなので通してもこのターンは問題はなさそうだが、次のターンに《シャドウ・ダイバー》が攻撃可能になる。ここは止めておくか。「リバースカードオープン」、《ヴィクトイム・カウンター》！《シャドウ・ダイバー》を裏側守備表示にして《強制転移》を無効にして破壊します

「それでも押し通させてもらうよ、リバースカードオープン、《盗賊の七つ道具》だ。1000ライフ支払って、《ヴィクトイム・カウンター》は無効だね」

どうしてもやりたいことのようなので、通さざるを得ない。しかし予想できるダメージだとまだ決着はつかない。やはり1ターン待つてから仕掛けてくるのだろうか。

「バトルだね。《素早いマンボウ》で《素早いムササビ》を攻撃！」

黒服LP2950→1950

なお、一度半減効果が適用されたカードに対しても《銀幕の鏡壁》の効果は発動しない。そのため《素早いマンボウ》を返り討ち、という現象は発生しないのだ。

《素早いマンボウ》ATK500

《素早いムササビ》ATK500

「バトルで破壊された《素早いムササビ》と《素早いマンボウ》の効果発動！《素早いムササビ》の効果で代田くんに500点のダメージ、特殊召喚効果は使わないよ。そして《素早いマンボウ》の効果でデッキから魚族モンスター1体を墓地に送つて《素早いマンボウ》を特殊召喚だ。そして墓地に送られた《素早いアンコウ》の効果でデッキから《素早いムササビ》を特殊召喚するよ」

葵LP2600→2100

《素早いマンボウ》ATK／1000

《素早いムササビ》ATK／1000

「よし、一斉攻撃の前にリバースカードオーブン、《天使のサイコロ》！自分フィールド場のモンスターはエンドフェイズまでダイスの出た目の100倍攻撃力と守備力がアップする！ダイスロール！」

なるほど、さつきの伏せはこれだつたのか。なぜ前のターンに使わなかつたのは気になるが、カウンターでも狙つていたのだろうか。ソリッドヴィジョンにサイコロが現

れ、コロコロと転がっていく。出た目は…6、最大値だと!

「ダイスの目は6! よつて全モンスターの攻守は600ポイントアップだ!」

《素早いマンタ》ATK／4000↓1000

《素早いマンボウ》ATK／1000↓1600

《素早いモモンガ》ATK／4000↓1000

《素早いムササビ》ATK／1000↓1600

《シャドウ・ダイバー》DEF／5000↓1100

「ここから《素早いマンボウ》と《素早いムササビ》は《銀幕の鏡壁》で半減するから、総計2800の攻撃か。さすがにこれを喰らえばひとたまりもないな。」

「リバースカードオープン、《正統なる血統》! この効果で《デュアル・ランサー》を攻撃表示で特殊召喚します」

《デュアル・ランサー》ATK／1800

「む、さすがにそれじゃあ手出しできないなあ。あまり意味はないだろうけど《シャドウ・ダイバー》を再度召喚させてもらつて、ターン終了かな」

《素早いマンタ》ATK／4000↓1000

《素早いマンボウ》ATK／1600↓1000

《素早いモモンガ》ATK／1000↓400

《素早いムササビ》 ATK／1600→1000

《シャドウ・ダイバー》 DEF／1100→500

「俺のターン、ドロー！」

大量展開されたままで除去カードを引かれてしまうと、今度こそ押しつぶされる。一回だけではすぐに並べ直されてしまいそうだが、ここは無理矢理にでも相手を一掃してしまうことにしよう。

「手札から装備魔法《スープルヴァイス》発動！ このカードを装備したモンスターは再度召喚された状態になり、また表側表示のこのカードが墓地に送られた時、墓地の通常モンスターを特殊召喚することができる。俺はこのカードを《シャドウ・ダイバー》に装備する！」

「おいおい、《シャドウ・ダイバー》はもう再度召喚したじゃないか、二度手間つて奴かな？」 きっと蘇生目的だろうけどね

「二度手間つていうなっ！ つて、こつちの狙い分かつてるんじゃないですか！」

ノリツツコミのようになつてしまつたが、黒服さんは朗らかに笑っていた。黒服さんからの微笑ましいものを見るような目に、なにやらむず痒いものを感じる。：気のせいか、周りでデュエルしている他の黒服さん達からも似たような視線を感じる。

「あー…いきます！ 《デュアル・ランサー》を再度召喚して貫通効果を与えます！ バト

ル！『デュアル・ランサー』で『シャドウ・ダイバー』を攻撃！』

『デュアル・ランサー』ATK／1800→900

『シャドウ・ダイバー』DEF／500

黒服LP1950→1450

「そして再度召喚された状態のデュアルモンスターが戦闘によつて破壊されたため、『二重の落とし穴』を発動！ 相手モンスターを全て破壊します！」

『二重の落とし穴』の発動条件は“再度召喚した状態のデュアルモンスターが戦闘によつて破壊されたとき”なので、相手のデュアルモンスターでも構わないのだ。そのためミラーマッチだと、お互いにこのカードで一掃しにくることがある。

「ならば『素早いマンタ』の効果を発動だ。このカードが効果にとり破壊されたとき、デッキから『素早いマンタ』を好きなだけ特殊召喚することができる。この効果で2体特殊召喚しよう」

『素早いマンタ』ATK／800

『素早いマンタ』ATK／800

『スペルヴィス』の効果により、『シャドウ・ダイバー』を特殊召喚！』

『シャドウ・ダイバー』ATK／1500

「ターン終了です」

「よし、ドロー！　⋮それじやあ切り札を使わせてもらうおうか！　《素早いマンタ》2体を生け贋に、《超古深海王シーラカンス》を召喚！」

《超古深海王シーラカンス》ATK／2800

二匹のマンタが光と消えたあと、地鳴りとともに地面が揺れる感覚に襲われる。さすがにこここの体感システムは優秀である。半ば感心しながら震源のあるであろう場所を見ると、地面から巨大なシーラカンスが勢いよく浮上してきた。

サファイアの様に輝く瞳、全身に複雑な紋様が描かれており、頭には王冠のようなものを持せており。まさに深海の王にふさわしい風格である。⋮なお、他にも深海王やら海王やらがいるのは気にしてはいけない。

「そして《超古深海王シーラカンス》のモンスター効果！　手札を1枚捨てることで、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する！　来い、《素早いアンコウ》、《素早いマンボウ》、《メタボ・シャーク》、《オイスター・マイスター》！」

《超古深海王シーラカンス》が天に向けて咆哮をあげると、地面から次々と魚達が飛び出してきた。⋮オイスターは牡蠣だが、魚族なので魚ということにしておく。

《素早いアンコウ》ATK／600

《素早いマンボウ》ATK／1000

《メタボ・シャーク》ATK／1800

『オイスター・マイスター』ATK／1600

「と並べてみたは良いけど、効果は無効になつてゐるし、攻撃もできないんだよね」

『銀幕の鏡壁』も対象にとる効果ではないので、『超古深海王シーラカンス』の効果じや無効にできませんしね」

『超古深海王シーラカンス』にはカードの対象となつた時、自身以外の魚族モンスターを生け贋に捧げる事でその効果を無効にして破壊するという強力な効果をもつ。つまりこのモンスターには全体除去か対象をとらない効果でない限り、効果による破壊を考えるのは無謀だろう。何せデッキに魚族がいる限り、手札を捨てれば呼び出し続けられるのだ。息切れするのは間違いなく除去する側だろう。

「おや、知つていたのか。まあいい、バトルだ。『超古深海王シーラカンス』で『デュアル・ランサー』に攻撃！ エンシエント・ウェーブ！」

『超古深海王シーラカンス』の瞳が輝き、地面に潜つていった。『デュアル・ランサー』は目の前から失せた相手を探して周囲を見渡しているが、代わりに現れたのは波であつた。一部は鏡に跳ね返されたようだが、それでも本来海に暮らしているのであろう『デュアル・ランサー』を飲み込み、逆らうことすら許さずに押し流した。

『デュアル・ランサー』ATK／900
『超古深海王シーラカンス』ATK／2800→1400

葵LP2100→1600

「カードを1枚伏せてターン終了だ」

「俺のターン、ドロー！」

さすがに《超古深海王シーラカンス》を正面から突破するのは現実的じやない。今は半減しているとはいえ、こちらも結局半減するのならば2800の攻撃力を用意してやつと相打ち、それでも壁の魚達は残つたままで相手ヘダメージが通る事は無いだろう。

「俺は手札から《インフィニティ・ダーク》を召喚！　さらに魔法カード《思い出のブランコ》発動！　この効果により、墓地の《デュアル・ランサー》を攻撃表示で特殊召喚！」

《インフィニティ・ダーク》ATK／1500
《デュアル・ランサー》ATK／1800

「そして、手札から速攻魔法《フォース・リリース》を発動！　これにより俺の場にいる全てのデュアルモンスターは再度召喚された状態となる！　そして再度召喚された《シャドウ・ダイバー》の効果発動！　闇属性レベル4以下のモンスター1体はこのターン直接攻撃することができる！　俺は《シャドウ・ダイバー》自身を選択！」

「おっと、それじゃありバースカードを使わせてもらうよ。《悪魔のサイコロ》！　相手

フィールド場のモンスターはエンドフェイズまでダイスの出た目の100倍攻撃力と守備力がダウンする！ ダイスロール！

うつ、こんなときに全体弱化か…試算したときにはギリギリだつたし、あまり大きい目どころか2か3ですらトドメを刺しきれないかも知れない。そうすれば返しのターンに《超古深海王シーラカンス》に叩きのめされるだろう。はらはらしながらサイコロの行方を見守り、出た目は…1！

《インフィニティ・ダーク》 ATK／1500→1400

《シャドウ・ダイバー》 ATK／1500→1400

《デュアル・ランサー》 ATK／1800→1700

「バトル！ 《シャドウ・ダイバー》で直接攻撃！ リツピング・フロム・シャドウ！」

《銀幕の鏡壁》による半減効果は“元々の攻撃力”ではなく“攻撃力”を参照する。つまり強化された状態で攻撃しても強化分もろとも半減されてしまうことだが、弱体化した状態ならその減数分も半分になつて“元々の攻撃力”を参照するよりも最終的な攻撃力変動は小さくなるのだ。

《シャドウ・ダイバー》 ATK／1400→700

黒服 LP1450→750

「そして《インフィニティ・ダーク》で《素早いアンコウ》に攻撃！ 再度召喚された

『インフィニティ・ダーク』の効果発動！ 攻撃宣言時に相手モンスター1体の表示形式を変更する！ 『素早いマンボウ』を守備表示に変更！』

漆黒のヒーローは身体の紋様を白く光らせながら鏡の壁にむけて飛び込み、割れた鏡の破片を一身に受けながらも『素早いマンボウ』の側面に飛び出す。そして『素早いマンボウ』を蹴つて『素早いアンコウ』へと方向転換し、宙返りを披露したあと跳落として『素早いアンコウ』を蹴り落とした。

『素早いマンボウ』 ATK／1000→DEF／100

『インフィニティ・ダーク』 ATK／1400→700

『素早いアンコウ』 ATK／600

黒服 LP 750→650

「ラスト！ 『デュアル・ランサー』で『素早いマンボウ』に攻撃！」

『デュアル・ランサー』 ATK／1700→850

『素早いマンボウ』 DEF／100

黒服 LP 650→0

どうやら俺たちは比較的早くにデュエルが終了したようで、他のところが終わるまで黒服さんと今回のデュエルの反省会をしてみることにした。

「しかし『銀幕の鏡壁』は厄介だつたね」

「本来なら維持コストがかかるので長持ちしなかつたのですが、今回は破壊する事すらできなかつたですからね…」

本来ならば毎ターン2000という莫大なライフコストによつて維持されるものが最初からずつと適応されつぱなしだつたのである。片側だけに適応されていたら一方的な展開が容易に想像でき、ライフコストをかけられるだけはあると頷くしか無い。

「それにしても、なんで『天使のサイコロ』を伏せたんですか？　こちらは無防備でしたし、普通に攻めてきても良さそうでしたが」

「ああ、あれか。もしかしたらあと1体召喚できるかな、って思つたんだよ。いやあ、欲張つちやだめだね」

4体で使うのがもつたいたいなかつたのか…普通のデッキでは4体並ぶのも一苦労だというのに、なかなか贅沢な話である。あのデッキならば大量展開が可能なので、他にも全体強化カードは何枚か採用しているそうだ。

「ところで代田くんも、『死者への供物』を『ヴィクトイム・カウンター』で無効にしても良かつたように思うんだが、どうなんだい？」

「ああ、あれか：俺も発動しようかどうか悩んだが、後にもつと面倒なカードを発動されたくなかったんだよなあ。とくに『ジャンク・アタック』が来ると延々と自爆特攻を

されてバーン効果によつて負けそだつたし。

「手札に他のモンスターもいましたし、警戒していたカードもありましたからね。ひとまず見逃したんですよ」

『強制転移』に発動したのは、『シャドウ・ダイバー』を渡してしまふと直接攻撃でこちらの壁を無視される可能性があつたからである。『銀幕の鏡壁』で半減されるとはいへ、大ダメージの望めない状況では750というのはやはり痛い。

「そういうことか」

などと話している間に他のところのデュエルも終わつたようだ。実験室から退室するように促す放送が聞こえてきた。どうやら次の環境をつくるようだ。次はどんなフィールドになるのか：あまり変なフィールドにならないことを祈りながら、待機室に戻つたのであつた。

18. 労働修行つていうなつ！

今日のドロー修行は海での素潜りドローだ。日の昇るギリギリの時間から水着に着替え、ドローの動きで海藻を引きちぎっては籠に入れている。同行している大山は恐るべき身体能力で魚を何匹かドローすることに成功している。…そこまでいくとドローダけじやない何かが手に入つていそうだ。

「アン・ドウ・ドロー！ アン・ドウ・ドロー！」

岸にあがると早朝だというのに、三沢、そして十代と愉快な仲間達がカードを延々とドローするという修行を行つていた。三沢はやる気満々な声だが、十代達は面倒くさそうだ。

「三沢、お前もドロー修行か？」

そう言いながらあらかじめ準備しておいた簡易的な竈に火をつけ、持参した鍋に海藻を突つ込んで出汁をとる。流石に朝から素潜りをすると身体が冷えて仕方がないので、早く温かいスープを飲みたい。

「ああ、今はセブンスターズも動きを見せていないが、既に七精門の鍵は二つ開けられて

いる。万全を期すべきだろう」

三沢がこちらに気をそらした隙に、十代や翔は休憩とばかりに何か喋っている。アイドルカードがどうこう言っているが、好きなカードをデッキに組みこむ事はよくある事だ。俺の場合は『デュアルモンスター』全てがアイドルカードと言つても過言ではない。「まつたく、軟弱な…真剣にデッキを組んでいたら、あのような不純なカードは一枚も入らないはずだろう」

「いや、『白魔導士ピケル』を使つたお前が言うのか?」

「最低でも初期ライフの一割を毎ターン回復できるんだ。『ハイドロゲドン』のように展開力のあるカードと並べれば、持久戦にはちようどいいじゃないか」

どうやら学園対抗デュエルの予選でお目見えした『白魔導士ピケル』が入っていたのは不純な目的ではなかつたようだ。そうだよな。あの後、幼女趣味なのではないかという噂が流れても、そんな奴ではないと否定する奴が必ず出るぐらいに堅物だと信じられている三沢である。

否定する奴がやけにガタイの良い男ばかりで、その後決まつて三沢は女には興味がないに違いない、そんなことより俺の筋肉を見てくれ、と強く主張していたがそれは関係ないか。

「でも、こういうカードがあると、ピンチの時に癒されるんだよ」

「喝！」

翔が言い訳のようなことを言つて三沢に怒鳴り返されていた。ピンチの時に『雷電娘々』を手札に持つた来たとして、【ビークロイド】だと邪魔になるんじやなかろうか：「あ、そうだ三沢。今日はちょっとした用事で授業にでれそうにないんだ。すまないが連絡を頼まれてくれないか」

「また研究所か？ わかつた、伝えておこう」

今回は研究所関連じゃないんだが、訂正する間もなく三沢はドロー修行へと戻つてしまつた。まあいいか、ちょうど大山の採つた魚も煮えた頃合いだ。スープを飲んだら今日も森に向かうことにしよう。

そこにはいる男達は照りつける日差しの中、滴る汗には目もくれず、前だけむいて石を運び、決められた通りに積んでいく。まるで奴隸にでもなつたかのように、ただただ愚直に作業を続ける。

見張りなのか、大きな虎が俺の近くを通り過ぎる。あれに襲われれば人間なんてひとつまりもないだろう。目に余るほどの休憩を取ろうとする男には容赦なくその牙を見せ、作業の再開を促している。

しかし現代に産まれ、近代的な暮らしをしてきた学生たちにとつては過酷な重労働で

ある。高寺を見ると息があがり、今にも倒れそうである。ドロー修行のために心身共に鍛えている俺ですら、なんだ挫けそうになつたか分からない。いや、大山を見る。あの男は汗をかいてはいるものの、その目は輝き、歩みはまつたく鈍っていない。

森で虎に連れられた先にあるこの場所で作業に精を出す男達。しかし誰一人文句を言うこと無く作業を続け、ようやく終わりが見えてきた。あともうひと頑張り、そのひと頑張りで俺たちは…

「なんだここは…」

聞き覚えのある声がしたが、そんなことよりこの石材で客席を完成させてしまわねば。あらかじめ加工されているおかげで設置するだけなのはありがたいが、万が一にも落として欠けさせると見栄えが悪くなる。

…よし、これで客席部分は完成したか？ 石材は俺が運んだもので最後のはずなので、置き間違えが無いかを念入りに確認する。座席よし、階段よし、石柱よし、問題ないな。それに歪みもなさそうである。

「この通りコロシアムは完成した。者ども、感謝するぞ！」

褐色の肌、筋骨隆々とした肉体、群れを統べる者の霸氣とも言える物を纏う我らが雇い主兼現場監督の声が響き、作業員一同から歓声が上がる。疲れのあまり座り込む者や大の字になる者もいるが、一様に満足げな表情である。かれこれ一週間程だつたが、空

きコマや放課後遅くまで作業した甲斐があつたというものだ。

どうやらボスこと雇い主のペツトの虎が気を利かせて森に来た人間を誰彼構わず引つ張つてきいたらしく、おかげで完成までの時間が非常に短縮された。：クロノス教諭が来た時は何があつたのかと思つたが。

「皆さうん、ありがとうね、協力してくれて。おかげで立派なコロシアムができたわ。これはほんの気持ち、ありがとね、お疲れさん、今日はゆつくり休んでね」

座つていた奴や寝転んでいた奴をコロシアムのステージに引つ張つて、雇い主の前で整列すると猫なで声で給料袋を渡された。：クロノス教諭がボスに追いかけられコロシアムから逃げ出したが、そんなに怖がらなくともボスは気のいい虎なので、まずいことをやらかさない限り危害を加えられることはない。

クロノス教諭を目で追つていると、十代達がいるのに気付いた。一瞬彼らも作業員だつたかと思つてしまつたが、恐らく今日授業を休んでもまで作業に参加した奴が多すぎて捜索に来ていたのだろう。そうでなくとも…

「私はタニヤ。偉大なるアマゾネス一族の末裔にして長。そしてセブンスターズの人。このコロシアムで七精門の鍵をかけた聖なる戦いを行う！」

この通り、雇い主がセブンスターズの一人なのだ。鍵の守護者が全員集まつてくるといふものだろう。そしてアマゾネスというのは世界のどこかに存在するという女性だ

けで構成された一族であり、このタニヤも当然女性だ。

「でもね、アタシと戦うことができるのは男の中の男だけ」

「何よそれ！」

先ほどまでの堂々たる口調と打つて変わつて媚びるような声だが、作業員一同はこれが演技でも何でも無いと知つてゐるので動搖するような者はいない。というよりも全員さっさと帰つてしまつてゐる。俺は鍵の守護者という立場上、十代達のところにいるのだが。

「我こそは男だと言う者、出てこい！」

十代、三沢、万丈目が次々に名乗りを上げる。なお鍵の守護者以外で一緒に來ていた大特集教諭はいつの間にか離れた場所で隠れており、翔と隼人も名乗り出るつもりはないようだ。俺も今回はパスさせてもらう。

「あら、葵は立候補しないのね」

「俺はまだまだ修行中だからな」

正直なところ、コロシアム建設の筋肉痛と疲れでデュエルディスクを構えるのが辛い。ドロー修行に励んで入学時とは比べるまでもないようなたくましい身体になつたとはいえ、まだまだ修行が足りないようだ。

「面構えは皆悪くないけど…Y o u！」

三沢が指差され、選ばれなかつた二人が残念そうに戻つてくる。明日香さんは除け者扱いにへそを曲げてゐるようで、軽く頬を膨らませてプライとそっぽを向いてしまつた。

「お前、名前は」

「俺は三沢大地。この日のためにずっと準備をしてきた。俺は絶対に勝つ！」

三沢は意氣込み十分である。選抜基準が男の中の男ということで、余計に張り切つているのかもしない。

「（こ）に、お前の明暗をわける二つのデツキがある。一つは知恵のデツキ、一つは勇気のデツキ。お前に自分の運命を選択させてやろう」

「もちろん、知恵のデツキと勝負だ。俺は動かざること地の如し、地のデツキで相手をしよう」

タニヤが手に乗せた二つのデツキ、そして三沢がジャケットに仕込んだ六つのデツキ。偶然にも複数デツキを持ち歩く者同士の対戦である。それぞれの相性などもあるだろうが、三沢は当然のように知恵のデツキを指名し、そして自分は【地属性】を選択した。【アマゾネス】が地属性戦士族であることに対抗したのかもしれない。

「いいだろう。言い忘れていたが、このデュエルは闇のゲームではない」

鍵の守護者一同に動搖が走る。今までの刺客達は勝つためには人質をとる等の手段をいとわず、なおかつ敗者は魂を奪われる闇のゲームを行つてきたのだ。それが今回は

闇のゲームではない真っ当なデュエルだという。

「魂なんていらぬい、私はお前自身が欲しいの！　つまり、私が勝つたらお前自身を婿として連れて帰る！」

「む、婿!?　訳の分からんことを、それなら俺が勝つたらどうする！」

「そしたら私、三沢つちのお嫁さんになつてあげる！」

魂を奪つた所で活用する方法なんてものがそうそうあるわけでもないだろうし、ましてやアマゾネスの長としては婿をとることで一族を繁栄させることの方が重要なのだろう。魂の抜け殻なんて荷物にしかならないだろうしな。

しかしタニヤは三沢をいたく気に入つてゐるようで、負けたら嫁入りするつもりのようだ。：そんなにあつさり一族を放り出してもいいものなのだろうか。さすがにアマゾネスの社会事情なんてものは知つたことではないので、長が良いというならば良いのだろう。

「このデュエル…なんか羨ましいかも」

翔が呑気なことを言つており、万丈目や隼人も嫁や婿という単語に反応して羨ましそうにしている。：お前ら頼むから、ただでさえ機嫌の悪い明日香さんの冷たい目線に気付いてくれ。気は進まないが一応フォローしておくか…

「デュエルで比喩でなく墓場行きにされるのと、比喩的に墓場行きにされるのはどつち

が幸せなんだろうな

「どうでもいいわよ」

滑つた、盛大に滑つた……！ 嫉妬とかそういうもののじやなく、何故この状況でそんな能天気な事言つてるのかという冷たい目線に背筋がゾクゾクする。とある性癖を持つ人物にはご褒美かもしけないが、若干殺氣を感じるので俺としては遠慮したい。

「お前など嫁にするつもりは毛頭無いが、このデュエルには絶対勝つ！」

羨ましそうな翔、顔を赤らめぼんやりする隼人、うつとりして口の端から少しよだれが出始めたサンダー、自分に関係なさそうなので安心している大徳寺教諭、なんだか良く分からぬいけどデュエルの気配にワクワクしている十代、男どもに呆れて見ない事にしあじめた明日香さん。そんな混沌とした外野の様子は放置して、当事者二人はデュエルを開始するようだ。

「いくぞ！」

「デュエル！」

デュエルが終わると、邪魔者は帰れと言わんばかりにコロシアムから追い出されてしまつた。三沢は負けて婿入りすることとなつたが、相手がセブンスターズとはいえ両思いなら別にいいんじゃないかな：

そう思つていたのだが、一日もしないうちにコロシアムから三沢が出てきた。話を聞く限りどうやら振られたようで、三沢の全デツキを持つてしてもまったく敵わなかつたということだった。

その日はとりあえず肉体的には全員無事に帰つてきたので、それぞれの寮へと戻つて翌日また集まる事になつた。しかし集まつたところで聞いた限り、三沢は酷い有様だつたようだ。

何故かレッド寮食堂で食事をしているかと思えば、オムライスにイチゴジャムをかける、ソースやタバスコを飲む、授業中や休み時間も終始心ここにあらずといった具合だ。仕方が無いので俺がデュエルを挑む流れとなつた。デュエル場に三沢を呼び出し、鍵の守護者全員で待ち構える。そこに三沢がふらふらとした足取りでこちらへと歩いてきた。

「俺とデュエルしないか？」

「…無理だ、俺にはできない」

三沢は静かに首を振り、力なく答えた。そういう気分でないのか、はたまたそれ以外の要因でデュエルをすることに抵抗があるのか。：両方かもしれない。

「なんでだよ！ びびつちまつたのか？」

「びびつてる？ 俺が？」

十代の問い合わせに對し、三沢は自嘲するように笑つた。そこには己の理論と計算からくる自信に満ちあふれたいつもの三沢の姿はなく、燃え尽きたような姿には霸氣の欠片も無い。

「そうじやない、わからなくなつてしまつたんだ」

「女がか？」

「馬鹿な、デュエルが、だ」

むしろ元から女の事なんて、この中では明日香さん以外は誰一人ろくに分かつていな
いと思われる。もちろん俺もわかつていな

「あのタニヤという女は、闇のデュエリストでありながら、その潔い戦いに姑息さはなく、まつすぐに向かつてくるあの姿には尊敬の念さえ覚えている。彼女に会いたい！
そして再びデツキを交えたい！」

言葉にするうちに自分の感情の方向が定まつてきたようで、話すにつれて三沢の語調
は熱くなり、その瞳には確固たる意志が宿る。

「デツキとデツキを交えた者のみが感じられる絆のようなものか」

「だが、今の俺の実力ではタニヤを満足させられるようなデュエルができない。それが
情けなくて、悔しくて……」

三沢の言葉は無力な己を責めるようで、それを否定しようにもその材料が見当たら

ず、ただただ後ろ向きな物だつた。

「よかつたな、三沢。そんなデュエリストに出会えて」

「え」

十代の言葉に三沢はあつけにとられたような声を出す。たしかに尊敬できる対戦相手に出会えた事は純粹に喜ぶべき事である。十代は「ちやごちや考えるずに前向きに捉えているようだ。何も考へてないともいうが、下手な慰めよりもよっぽど効果的である。

「俺ますますやつてみたくなつたぜ、あのタニヤつて奴と！ 羨ましいぜ、三沢つち！」

最後に十代が茶化すように言い、その場は解散となつた。今俺が三沢に声をかけても傷心をどうにかすることもできないし、大人しく部屋に戻ろう。

そして夕方、三沢からPDAに連絡が届いた。相談があるということだつたが、恋愛的なアドバイスなんか出来そうにない。兎にも角にも呼ばれた場所までいくことにした。

「シハーブ、お前恋愛相談なんかはできるのか？」

『ふむ、そうですな。《エンジェル・魔女》殿から魔女的天使な女性の口説き方というものなら』教授頂いたことがありますぞ』

シハーブは自慢げな顔でそう言つてきたが、魔女の天使ってなんだよ。すくなくともタニヤは魔女の天使というよりは野性的女王であるため、今回の相談がタニヤ関係なら使えるかどうか微妙な所だ。

「いつそＫＭＡ達に相談した方が良いかもな…」

よくわからない魔女の天使な女性よりは、大山に恋いこがれる雌熊のほうが相談相手に適しているような気がする。喋れるわけではないがこちらの言葉はある程度理解している節があり、写真や図を使って質問をすれば返答のようなものをもらえる。

：俺と大山と博士の写真を貼ったカカシを置いてどれが魅力的かと質問したら、俺のカカシと博士のカカシを投げ捨てて大山のカカシの足下で丸くなつたしな。さらにどのぐらい魅力的かという質問にはカカシへのベアハッグと頬擦りが返ってきた。他二人のカカシは投げ捨てられたまま放置である。興味が無いらしい。

「さて、指定の場所はここだが…」

指定された教室で、三沢がデュエルディスクを展開して待っていた。なるほど、そういう相談方法か。ならばわかりもしない女性心理を考える必要も、雌熊への相談の仕方を考える必要もない。デュエルディスクを展開して構える。

「怒ってるか？」

「むしろ嬉しいぐらいだ」

主語が色々足りないが、通じるならば問題は無い。こういう相談は初めてだが、十代曰くデュエルをすれば相手の事が分かるらしいのできつと大丈夫だろう。：今更かもしれないがこんな思考になるあたり、俺もデュエル脳だなあ。

「『デュエル！』」

「ドロー！　俺は『磁石の戦士Σ+』を召喚してカード一枚伏せる。ターンエンドだ』
『磁石の戦士Σ+』 ATK／1800

「俺のターン、ドロー。俺は永続魔法『金剛真力』を発動、この効果で手札からレベル4以下の『デュアルモンスター』、『幸運の笛吹き』を攻撃表示で特殊召喚。さらに『水面のアレサ』を攻撃表示で召喚し、カードを2枚伏せてターンエンド』

『幸運の笛吹き』 ATK／1500

『水面のアレサ』 ATK／1500

「ドロー、俺は『磁石の戦士Ω－』を召喚してバトルだ！　『磁石の戦士Ω－』で『水面のアレサ』を攻撃！」

『磁石の戦士Ω－』 ATK／1900

「リバースカードオーブン、『ジャスティ・ブレイク』！　通常モンスターが攻撃されたとき、表側攻撃表示の通常モンスター以外の全てのモンスターを破壊する」

こんなあからさまな罠に突っ込んでくるとは、まだ失恋のショックで冷静さを欠いて

いるのだろうか。対策カードがなかつたならば別だが、三沢の様子だと攻めに焦つているようにしか見えない。

「速攻魔法『我が身を盾に』！ ライフを1500払い、相手のフィールド上のモンスターを破壊する効果を持つカードの発動を無効にし、破壊する！」

三沢 LP 4000→2500

「ならば更なるリバースカードオーブン、『ヴィクトイム・カウンター』！ デュアルモンスターを一体裏側守備表示に変更し、相手の魔法カードを無効にして破壊するカウンター罠だ。俺は『幸運の笛吹き』を裏側守備表示にして『我が身を盾に』の発動を無効にする」

一応対策はあつたようだが、その先までは見てなかつたようだ。いつもの三沢ならばカウンターを予期してもおかしくないのだが、やはり本調子ではないらしい。こちらも『幸運の笛吹き』を破壊することになつたとはい、被害の度合いは三沢の方が上だろう。

「くつ、俺はカードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー。『インフィニティ・ダーク』を攻撃表示で召喚し、バトルだ『インフィニティ・ダーク』で直接攻撃」

『インフィニティ・ダーク』 ATK／1500

このまま全モンスターによる直接攻撃が決まつてしまえば俺の勝ちである。伏せカードもあるのでそう簡単にいくとは思っていないが、簡単にいつてしまうのならばそこまでである。

「罠発動、《リビングデッドの呼び声》！ 蘇れ《磁石の戦士Ω》！」

「チエーンして速攻魔法《デュアルスパーク》を発動。《インフィニティ・ダーク》を生け贅に、《リビングデッドの呼び声》を破壊し、カードを一枚ドローする」

永続罠は発動にチエーンして破壊された場合、効果は不発となる。そうでなくとも《リビングデッドの呼び声》が破壊されれば蘇生モンスターも道連れとなるのだが。

『水面のアレサ』で直接攻撃』

青く丈の短い着物を着た乙女が手に持つ花を振るとその足下に波紋が広がり、三沢に当たつた途端に水柱が立ち上つて三沢を包み込んだ。

『水面のアレサ』 ATK／1500

三沢 LP 2500 → 1000

「カードを一枚伏せてターンエンドだ」

攻めに焦つている三沢の動きを一つ一つ潰してきたわけだが、相談したいことがなんとなく伝わってきたような気がする。具体的な言葉として表せないが、三沢の心中というか感情の動きがデュエルを通して伝わってくる。

「俺のターン、ドロー！…俺は手札から魔法カード『マグネット・コンダクター・プラス』を発動、墓地から“+”と名の付いたモンスターを手札に戻す。俺が手札に戻すのは『磁石の戦士Σ+』だ。そのまま『磁石の戦士Σ+』を召喚する」

『磁石の戦士Σ+』 ATK／1800

手札にモンスターがないせいか、それとも何か策があるのか。面白そうな予感にワクワクしてしまるのはデュエリストの性なのか。不意に伝わってくる感情が変わった三沢の相談にも全力で乗ろうではないか。

「さらに魔法カード『モンスター・スロット』を発動する！自分の場に存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同レベルのカードを墓地から除外する。そしてカードを一枚ドローして互いに確認し、そのカードが選択したカードと同じレベルのモンスターならば特殊召喚する事が出来る！」

『モンスター・スロット』ときたか。三沢が博打に走るとは考え辛いので、恐らく狙いは特殊召喚ではないだろう。ドローなのか、除外なのか。それとも両方か。

「俺は『磁石の戦士Σ+』を選択する。『磁石の戦士Σ+』のレベルは4！そして墓地の『磁石の戦士Ω-』もレベルは4だ。『磁石の戦士Ω-』を除外し、ドロー！」

『ドローカードは…『磁石の戦士Σ-』、レベル4モンスターだ。

『磁石の戦士Σ-』を攻撃表示で特殊召喚！…さらに伏せてあつた永続罠『化石岩の解

放》を発動！ 除外されている岩石族モンスター1体を特殊召喚する！ 《磁石の戦士Ω→》を特殊召喚！」

《磁石の戦士Σ→》 ATK／1500
《磁石の戦士Ω→》 ATK／1900

「さらに、手札もしくはフィールド上の“+”と“-”のモンスターを1体ずつ生け贋にささげて《電導戦士リニア・マグナム士》は手札から特殊召喚できる！ 《磁石の戦士Σ+》と《磁石の戦士Σ→》をそれぞれ生け贋に、《電導戦士リニア・マグナム士》を特殊召喚！」

《電導戦士リニア・マグナム士》 ATK／2700

「バトルだ！ 《電導戦士リニア・マグナム士》で《水面のアレサ》に攻撃！」

《電導戦士リニア・マグナム》 ATK／2700
《水面のアレサ》 ATK／1500

葵 LP4000→2800

「《磁石の戦士Ω→》で直接攻撃！」

《磁石の戦士Ω→》 ATK／1900

葵 LP2800→900

「俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。《金剛真力》の効果により、手札の《炎妖蝶ウイルプス》を特殊召喚し、再度召喚して効果を発動。墓地のデュアルモンスター1体を再度召喚状態で特殊召喚する。《幸運の笛吹き》を特殊召喚」

《幸運の笛吹き》 ATK／1500

墓地には上級モンスターはおろか、攻撃力の上昇効果やモンスター破壊効果をもつモンスターすらないない。しかも墓地のモンスターの攻撃力は全て同じである。となれば《幸運の笛吹き》を選んだのにはもちろん理由がある。

「リバースカードオープン《デュアル・ブースター》だ。《幸運の笛吹き》に装備し、攻撃力を700上昇させる。バトル、《幸運の笛吹き》で《磁石の戦士Ω→》に攻撃、招風の旋律！」

《幸運の笛吹き》 ATK／1500→2200

《磁石の戦士Ω→》 ATK／1900

三沢 LP1000→700

「そして《幸運の笛吹き》の効果発動。このモンスターが相手モンスターを戦闘によつて破壊したとき、カードを1枚ドローすることができます」

引いたカードは…なるほどな。さて、ここで三沢はどうでるか。無謀に突つ込んでくるならそれまでだが、見越した上で押すか引くかそれとも回り込んでくるのか。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

「俺は墓地の地属性モンスター《磁石の戦士Σ》を除外し、手札から《ギガンテス》を特殊召喚だ！」

《ギガンテス》 ATK／1900

「いくぞ、《ギガンテス》で《幸運の笛吹き》を攻撃！」

「迎撃しろ《幸運の笛吹き》！」

一つ目の巨人が棍棒を振り回しながら《幸運の笛吹き》に迫る。しかしフルートから溢れ出た緑色の五線譜にまとわりつかれ、そのまま締め上げられて爆散した。

《ギガンテス》 ATK／1900

《幸運の笛吹き》 ATK／2200

三沢 LP 700→400

「《ギガンテス》の効果発動！ このモンスターが戦闘によつて破壊されたとき、フィールド上の全ての魔法・罠を破壊する！」

「くつ、だが俺は《幸運の笛吹き》の効果でカードをドローする」

《幸運の笛吹き》 ATK／2200→1500

この効果で破壊されたこちらのカードは《金剛真力》、《デュアル・ブースター》、そし

て伏せてあつた『二重の落とし穴』だ。ドローしたカードも『クリボー』のようなダメージ無効効果や『オネスト』のようなパンプアップ効果はない。

『電導戦士リニア・マグナム』で『幸運の笛吹き』に攻撃!』

『幸運の笛吹き』ATK／1500
葵LP900→0

「葵:」

三沢が遠慮がちに声をかけてくる。なんとなく言いたい事はわかっているので、首から提げていた七精門の鍵を三沢に投げ渡す。三沢が驚いたようにこちらを見てくるが、これで違つていたら恥ずかしい。

「タニヤとデュエルをするなら少なくともそれがいるだろう? ついでにこれはお守りだ」

そしてカードを一枚デッキから抜いて投げ渡す。この世界のカードは不思議なことに回転をかけて投げてもまっすぐ無回転で飛んで行く。しかも途中で落下どころか減速すらしない。いつたいどうなつているんだ。

「俺の身体の一部みたいなものなんだ。なくしてくれるなよ?」

「そうだな、出来るだけ早く鍵と一緒に返しにこよう」

流石秀才だけあって、言外に放つた意味も理解したようだ。とは言つても身体の一部
ということがある意味比喩じやない、ということまでは理解していないだろう。

「ああ、そうしてくれ。もう夕飯の時間だし俺はブルー寮に戻るとしよう」

「そうだな、俺も戦いの前に腹ごしらえだ」

慣れない方面に頭を使つたせいか、いつもよりも空腹になつた気がする。これは今日
の食事が一層美味しくなりそうだ。楽しみのあまり足取りが軽やかになるのを感じな
がら、寮へと戻つた。